

# 繫V遺跡

- 繫小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査報告書 -

2013.3

盛岡市教育委員会

# 序

盛岡市は、東北地方の東部を南北に縦断する北上川と、その支流である零石川・中津川が合流する地点に中心市街地が形成され、北に雄大な岩手山と姫神山を望む、岩手県の県庁所在地です。その骨格は、約400年前に南部氏により築城された盛岡城を中心とした城下町であり、藩政そして県政の中心として、また交通の要衝として栄えてきました。近年の盛岡市は、平成4年4月に南に隣接する都南村と、平成18年1月に北に隣接する玉山村と合併し、人口約30万人、面積約886平方キロメートルという北東北の拠点都市となるとともに、平成20年4月には中核市へ移行しました。

繋地区は、その新生盛岡市の西部、御所ダムの南湖畔に位置し、「盛岡の奥座敷」と呼ばれる岩手県内有数の温泉地です。その地名は八幡伝説に由来し、縄文時代から近世に至るまで各時代にわたる遺跡が数多くあります。近年は、観光振興と防災対策のため道路整備等が実施され、それら市公共事業に伴う発掘調査や、個人住宅建築に伴う緊急発掘調査を盛岡市教育委員会が行っており、地域の歴史を知る上で貴重な資料が数多く発見されています。

そのような重要な遺跡群の中心部に位置するのが市立繋小学校であり、昭和26年の校庭整地工事の際には、完形の縄文土器7個体が出土、昭和63年に日本を代表する美しい縄文中期の土器として国重要文化財に指定され、現在は市遺跡の学び館に所蔵・展示されています。

盛岡市教育委員会では、老朽化した繋小学校校舎・体育館の増改築工事を計画し、貴重な遺跡をできるだけ保存することを目的に平成14年度に敷地内の試掘確認調査を実施。その結果、残存する竪穴住居跡等の遺構量の最も少ない既存校舎・体育館の場所に改築をおこなうことと決定し、工事の進捗に応じて発掘調査を平成16・18～22年度の計6次にわたり実施しました。この間、市民・地域住民の方々、繋小学校の児童を対象とした現地説明会を実施して多数の参加をいただき、また平成22年3月には発掘調査概報を刊行、市遺跡の学び館で展示会を行なうなど、その成果の公開・普及を図ってきたところであります。

本報告書は、その繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査の詳細な調査成果をまとめたものであり、市民の皆様をはじめ、各学校や教育機関・研究者等の方々に、当該地域の歴史を知るためにご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なるご協力やご指導を賜りました文化庁文化財部記念物課ならびに岩手県教育委員会生涯学習文化課に対し深く感謝申し述べると共に、発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一

## 例　　言

1. 本書は、盛岡市繁字館市地内に所在する繁V遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、繁小学校校舎等増改築工事事業に伴い実施した平成16・19～22年度の調査成果の報告書である。
3. 本書は遺構および遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集は神原雄一郎、佐々木紀子が担当し千田和文、室野秀文、津嶋知弘、花井正香、佐々木亮二、三品花菜子が協力した。
4. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系を座標変換した調査座標で表示した。

調査座標原点	X - 36.000.000	=	R X ± 0.000
	Y + 16.000.000	=	R Y ± 0.000
5. 高さは標高値をそのまま使用している。
6. 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』(1994 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業㈱発行)を参考にした。
7. 遺構記号は次のとおりである。なお、縄文・弥生時代の遺構番号は001～、奈良・平安時代の遺構番号は0501～、中世及び近世の遺構番号は1001～としている。

	遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号	番号
記号	竪穴住居跡	R A	土坑	R D	配石・集石	R H	縄文・弥生 001～
	建物跡	R B	竪穴	R E	井戸跡	R I	古代（竪穴住居跡）0501～
	柱列跡	R C	溝跡	R G	遺物集中区	R P	古代（土坑）0501～
	その他	R X					中世・近世 1001～

8. 土器の区分は、縄文土器・弥生土器・統縄文土器・土師器・須恵器・あかやき土器にわけた。
9. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会で保管してある。
10. 本遺跡関係で盛岡市教育委員会刊行の報告書は次のとおりである。
  - 「繁遺跡－昭和58年度発掘調査概報－」(1984)
  - 「繁遺跡－昭和60年度発掘調査概報－」(1986)
  - 「繁遺跡－平成5・6年度発掘調査概報－」(1995)
  - 「繁遺跡－平成7年度発掘調査概報－」(1996)
  - 「繁遺跡－平成9年度発掘調査概報－」(1998)
  - 「盛岡市内遺跡群 繁IV遺跡－平成14年度発掘調査概報－」(2003)
  - 「繁V遺跡－繁小学校校舎等増改築工事事業に伴う緊急発掘調査概要報告書－」(2010)
  - 「盛岡市内遺跡群 繁V遺跡－平成20・21年度発掘調査報告書－」(2011)

## 11. 調査体制

[調査主体]	盛岡市教育委員会
教育長	千葉 仁一
教育部長	佐藤 義見
教育次長	柴田 道明
[調査総括]	歴史文化課 遺跡の学び館
参事・館長事務取扱	田山 浩充
主幹兼館長補佐	千田 和文
[調査]	文化財主査 室野 秀文 文化財主査 津嶋 知弘 文化財主査 神原 雄一郎 ※調査・資料整理 文化財主任 花井 正香 文化財主任 佐々木 亮二 文化財調査員 佐々木 紀子 ※調査・資料整理 文化財調査員 三品 花菜子 文化財調査員 鈴木 賢治 文化財調査員 木幡 里美
[管理・学芸]	主査 吉田 尚 主任 江本 敦史 学芸調査員 山岸 佳澄 学芸調査員 山野 友海

<発掘調査・室内整理> 阿部正幸、伊藤敬子、長内理恵、及川京子、嘉林和男、工藤則子、小林勢子、小松愛子、細野志保子、齊藤静子、佐藤和子、佐野光代、白岩千佳、千葉留里子、日野杉節子、谷藤貴子、田村祐一、袴田英治、原田敦子、福田香乃、藤田友子、細田幸美、桜木絵理、宮田輝彦、村田麗子、女鹿麗子

<業務委託> タックエンジニアリング株式会社（石器実測 173 点）

<御指導・御協力>

<関係機関> 岩手県教育委員会、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、滝沢村教育委員会、八戸市教育委員会、盛岡広域障害者就業・生活支援センター

<個人> 井上雅孝（滝沢村教育委員会）、市川健夫（八戸市教育委員会）、小保内裕之（八戸市教育委員会）、鎌田勉（岩手県教育委員会）、菅野智則（東北大学）、日下和寿（白石市教育委員会）、菅原哲文（財団法人山形県埋蔵文化財センター）、武田良夫（日本考古学協会）、中村良幸（花巻市教育委員会）、星雅之（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

# 目 次

例 言  
目 次  
表 目 次  
挿 図 目 次  
写 真 図 版

I. 遺跡の概要	
1. 遺跡の環境	..... 1
2. 過去の調査	..... 2
II. 調査内容	
1. 調査経過	..... 12
2. 遺跡の基本層位と遺構検出状況	..... 13
3. 検出された遺構と遺物	
(1) 縄文時代の竪穴住居跡	..... 14
(2) 縄文時代の土坑	..... 48
(3) 縄文時代の埋設土器	..... 53
(4) 縄文時代のピット群	..... 55
(5) 縄文時代の遺物包含層	..... 56
(6) 平安時代の竪穴住居跡	..... 61
III. 総括	..... 62

## 表 目 次

第1～3表 縄文時代土坑計測表	..... 50～52
-----------------	-------------

## 挿図目次

第1図 繫遺跡位置図(1:100,000) .....	1
第2図 繫遺跡全体図(1:2,500) .....	3・4
第3図 繫V遺跡第29・36・37次発掘調査全体図 .....	7・8
第4図 繫V遺跡第33・34次発掘調査全体図 .....	11
第5図 繫V遺跡第29・33・34・36・37次発掘調査区位置図 .....	12
第6図 R A 221堅穴住居跡、R D465～469土坑 .....	69
第7図 R A 222堅穴住居跡、R D512土坑 .....	70
第8図 R A 223・227堅穴住居跡、R D504・505・507土坑 .....	71
第9図 R A 224堅穴住居跡、R D513・518土坑 .....	72
第10図 R A 225・232堅穴住居跡、R A 226・228年跡、R D509～511土坑 .....	73
第11図 R A 229～231堅穴住居跡、R D514土坑 .....	74
第12図 R A 233Ⅰ期・Ⅱ期堅穴住居跡、R D522土坑 .....	75
第13図 R A 234・257堅穴住居跡、R A 235炉跡 .....	76
第14・15図 R A 236・263堅穴住居跡(1)・(2) .....	77・78
第16図 R A 237堅穴住居跡、R A 267・272・282炉跡 .....	79
第17図 R A 242・243・249堅穴住居跡、R A 239・241・245炉跡(1) .....	80
第18図 R A 243(2)・248・249(2)堅穴住居跡、R A 239・241・245炉跡(2) .....	81
第19図 R A 244・251堅穴住居跡、R D521土坑(1) .....	82
第20図 R A 238・244(2)・246・251(2)堅穴住居跡、R D521(2)・525土坑 .....	83
第21図 R A 252堅穴住居跡(1) .....	84
第22図 R A 252(2)・266堅穴住居跡 .....	85
第23図 R A 253堅穴住居跡 .....	86
第24図 R A 258Ⅰ期・Ⅱ期堅穴住居跡 .....	87
第25図 R A 258Ⅲ期・Ⅳ期・VI期堅穴住居跡 .....	88
第26図 R A 258Ⅴ期堅穴住居跡 .....	89
第27図 R A 259堅穴住居跡、R D519土坑(1) .....	90
第28図 R A 259堅穴住居跡、R D519土坑(2)、R E 260堅穴跡 .....	91
第29図 R A 261・264堅穴住居跡 .....	92
第30図 R A 262・268堅穴住居跡 .....	93
第31図 R A 265・270・271堅穴住居跡 .....	94
第32図 R A 269Ⅰ期・Ⅱ期堅穴住居跡 .....	95
第33図 R A 273・279・288堅穴住居跡 .....	96
第34図 R A 274Ⅰ期堅穴住居跡、R D527土坑 .....	97
第35図 R A 274Ⅱ期堅穴住居跡 .....	98
第36図 R A 275・276堅穴住居跡、R D523土坑 .....	99

第37図	R A 277堅穴住居跡、R D520土坑(1)	100
第38図	R A 277(2)・281堅穴住居跡、R D520土坑(2)	101
第39図	R A 283・285・286堅穴住居跡	102
第40図	R A 287・289・290堅穴住居跡、R E 291堅穴跡、R D 517・529・530土坑	103
第41図	R A 292・0501堅穴住居跡、R A 0501堅穴住居跡出土遺物	104
第42図	R E 293堅穴跡、R D 377～403土坑	105
第43図	R D 404～464土坑	106
第44図	R D 470～493土坑	107
第45図	R D 494～503・506・508土坑	108
第46図	R D 515・516・524・526・528・531～549土坑	109
第47図	R E 293堅穴跡、R D 377～420・423土坑断面	110
第48図	R D 421・422・424～464・470～479土坑断面	111
第49図	R D 480～503・506・508・515・516・524・526・528・531～539土坑断面	112
第50図	R D 540～549土坑断面、R P 001～007埋設土器	113
第51図	R A 221堅穴住居跡出土遺物	117
第52～54図	R A 222堅穴住居跡出土遺物(1)～(3)	118～120
第55～57図	R A 223堅穴住居跡出土遺物(1)～(3)	121～123
第58図	R A 224堅穴住居跡出土遺物	124
第59～62図	R A 225堅穴住居跡出土遺物(1)～(4)	125～128
第63図	R A 225(5)・226堅穴住居跡出土遺物	129
第64図	R A 227・229(1)堅穴住居跡出土遺物	130
第65図	R A 229堅穴住居跡出土遺物(2)	131
第66図	R A 229(3)・230・232堅穴住居跡出土遺物	132
第67～70図	R A 233Ⅰ期堅穴住居跡出土遺物(1)～(4)	133～136
第71図	R A 233Ⅰ期(5)・233Ⅱ期・234堅穴住居跡出土遺物	137
第72図	R A 235・236(1)堅穴住居跡出土遺物	138
第73・74図	R A 236堅穴住居跡出土遺物(2)・(3)	139・140
第75図	R A 237堅穴住居跡出土遺物	141
第76～78図	R A 238堅穴住居跡出土遺物(1)～(3)	142～144
第79図	R A 239・241堅穴住居跡出土遺物	145
第80・81図	R A 242堅穴住居跡出土遺物(1)・(2)	146・147
第82図	R A 243堅穴住居跡出土遺物	148
第83～85図	R A 244堅穴住居跡出土遺物(1)～(3)	149～151
第86図	R A 244(4)・245・246(1)堅穴住居跡出土遺物	152
第87図	R A 246堅穴住居跡出土遺物(2)	153
第88図	R A 248・251堅穴住居跡出土遺物	154
第89～94図	R A 252堅穴住居跡出土遺物(1)～(6)	155～160
第95・96図	R A 253堅穴住居跡出土遺物(1)・(2)	161・162

第97図 R A 257・258 I期堅穴住居跡出土遺物	163
第98・99図 R A 258 II期堅穴住居跡出土遺物(1)・(2)	164・165
第100図 R A 258 III期・V期・VI期堅穴住居跡出土遺物	166
第101・102図 R A 259堅穴住居跡出土遺物(1)・(2)	167・168
第103図 R A 261堅穴住居跡出土遺物(I)	169
第104図 R A 261(2)・262堅穴住居跡出土遺物	170
第105図 R A 263・264・266～268堅穴住居跡出土遺物	171
第106図 R A 265堅穴住居跡出土遺物	172
第107図 R A 269 I期・II期堅穴住居跡出土遺物	173
第108図 R A 271～273・275堅穴住居跡出土遺物	174
第109～114図 R A 274 I期堅穴住居跡出土遺物(1)～(6)	175～180
第115図 R A 274 II期堅穴住居跡出土遺物	181
第116図 R A 277・282・285・289・290堅穴住居跡・R E 293堅穴跡出土遺物	182
第117～125図 R A 281堅穴住居跡出土遺物(1)～(9)	183～191
第126図 R D 377・379・381・383・384・393・398・399・413土坑出土遺物	192
第127図 R D 423土坑出土遺物	193
第128図 R D 390・408・414・437・451・473・478・480・489・491土坑出土遺物	194
第129図 R D 487・514・517・523・528・541・543・546・549土坑出土遺物	195
第130図 R P 001～004埋設土器	196
第131図 R P 005～007埋設土器	197
第132図 ピット出土遺物	198
第133～150図 遺物包含層・遺構外出土遺物(1)～(18)	199～216

# 写 真 図 版

- 第1図版 繫V遺跡遠景、盛岡市立繫小学校全景
- 第2図版 第34次発掘調査区全景、第36次発掘調査区遠景
- 第3図版 第36次発掘調査区全景、第36次発掘調査区南東部土層堆積状況
- 第4図版 R A222堅穴住居跡全景、R A224堅穴住居跡全景、伏甕出土状況
- 第5図版 R A233 I期堅穴住居跡全景、伏甕出土状況1・2
- 第6図版 R A236堅穴住居跡全景、伏甕出土状況
- 第7図版 R A238・246堅穴住居跡全景、R A238堅穴住居跡検出段階遺物出土状況・床面石冠出土状況
- 第8図版 R A244堅穴住居跡全景、伏甕出土状況
- 第9図版 R A252堅穴住居跡全景、石圓炉、A層遺物出土状況
- 第10図版 R A253堅穴住居跡全景、伏甕出土状況、複式炉
- 第11図版 R A259堅穴住居跡全景、伏甕出土状況
- 第12図版 R A265堅穴住居跡全景、複式炉、R A269 I期・II期堅穴住居跡全景
- 第13図版 R A274 I期・274 II期・277堅穴住居跡全景
- 第14図版 R A274 I期堅穴住居跡土層堆積状況・B層遺物出土状況、II期堅穴住居跡石棒埋設状況
- 第15図版 R A277堅穴住居跡および周辺部遭構検出状況、全景
- 第16図版 R A281堅穴住居跡全景、土層堆積状況、検出状況、検出段階遺物出土状況
- 第17図版 土器展開写真 R A236・253堅穴住居跡伏甕
- 第18図版 R A224・233 I期・263堅穴住居跡伏甕
- 第19図版 R A244堅穴住居跡伏甕
- 第20図版 R A258 II期・259堅穴住居跡伏甕
- 第21図版 R A223・233 I期・234～236・252堅穴住居跡出土土器
- 第22図版 R A258 II期・261・262・265・269 II期・274 I期・281堅穴住居跡出土土器
- 第23図版 第36次発掘調査区出土土偶・土製品、蛇紋岩製磨製石斧、第34次発掘調査区出土垂飾品
- 第24図版 R A222・223・233 I期・238・246・253・281堅穴住居跡、遺物包含層出土石製品

### 《遺物の表現について》

#### 1. 土器

- a. 土器及び陶器類は1/3スケールとしたが、60cm以上の土器については1/4スケールとした。
- b. 挿図の土器配列については、出土層位を重視しさらに器種・モチーフでまとめた。
- c. 縄文・弥生時代の土器で隆線・沈線の表現は上端・下端の実線・破線で表し、陰影は表現していない。

#### 2. 石器

- a. 剥片石器の実測図は1/2とし、礫石器は1/3とした。
- b. 石器の展開順序は、基本的には左に表面（本文では背面とする）、中央に右側縁、右に裏面（本文中では腹面とする－主要剥離面）を並べ、必要に応じて側縁および縦断面下に横断面を付け加えた。
- c. 剥片石器の摩滅痕は網目スクリーントーンで示し、礫石器の自然面はドットで示した。

☆挿図中の記号・番号は、出土遺物の出土地点および層位を表す。

（例） I 4 - A 1 — A 1

↓      ↓      ↓  
※1    ※2    ※3

※1 調査座標原点RX±0 RY±0を起点として、X・Y両軸を50m毎に区切る大グリッドを設定し、X軸線上を西から東へA・B・C…W・X・Y、Y軸線上を北から南へ1・2・3…23・24・25と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組合せを、大グリッドと呼称した（第3・4図）。

※2 大グリッドを2m毎に細分割し、小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって、大グリッド－小グリッドという組合せで、遺物の平面出土地点を2mごとに表示した。

（例） I 4 - A 1 は RX - 150 RY - 100 を北西隅とする2mグリッドからの出土を示す。

※3 遺物の出土層位を表す。

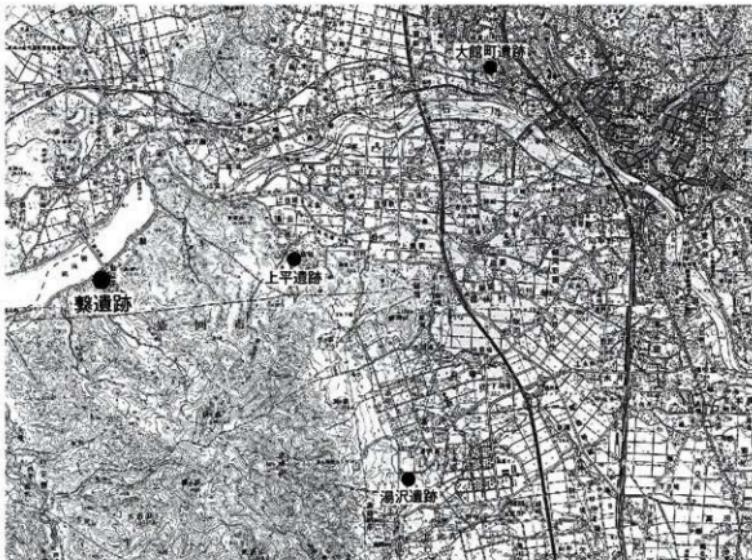
# I. 遺跡の概要

## 1 遺跡の環境

遺跡の位置 繫V遺跡は盛岡市街地から西に約10kmの盛岡市繫字館市地内に所在する。

地形・地質 繫地区は、奥羽山脈から東流する零石川により形成された零石盆地東端、箱ヶ森（865m）、南昌山（848m）が連なる篠木・東根山山地の北麓に位置し、北辺には零石川が流れる。周辺の地形は零石川の北岸と南岸で大きく相違し、北岸では火碎流堆積物（小岩井泥流）を基盤とした台地が発達し、南岸では前述した東根山山地が迫り、北岸で見られるような広い平坦面は発達していない。

篠木・東根山山地は主に新第三紀中新世の飯岡層・男助層・舛沢層より構成され、飯岡層は輝石安山岩・緑色凝灰角礫岩、男助・舛沢層は古零石湖に堆積した緑色凝灰角礫岩や砂岩・泥岩等によって構成される。これらの岩石は零石川河床に転石として見られ、繫V遺跡を含め零石川流域の縄文時代遺跡では石器の石材として利用されている。なお、繫小中学校より南東約2kmの箱ヶ森北西斜面に露出する凝灰岩帶には、地元で「かざあな」と呼ばれる洞穴が位置する。



第1図 繫遺跡位置図 (1 : 100,000)

## 2 過去の調査

繫遺跡は古くから土器や石器の出土があったが、一般にひろく知られるようになったのは、昭和 26 年（1951）8 月、繫小中学校（当時 岩手郡御所村大字繫字館市、御所中学校繫分校）校舎増築に伴う敷地造成工事の際に、縄文時代中期の底部穿孔土器が 7 個体出土したことによる。倒立した状態で発見されたと云われ、発見した 7 個体の土器の内 3 個体は装飾性に富む文様が器面全体に広がり、その美しさから東北地方を代表する縄文土器の一つに数えられている。これらの土器は昭和 63 年に国重要文化財に指定されている。

**昭和 32 年の調査** 昭和 32 年（1957）10 月、校庭拡張に際して初の発掘調査が実施された。発掘調査は盛岡市教育委員会と岩手大学によって行われ、縄文時代中期の堅穴住居跡 7 棟と縄文時代中期から後期にかけての遺物が多量に出土した（昭和 35 年 草間俊一・吉田義昭「岩手県盛岡市繫遺跡」盛岡市公民館）。

**昭和 39 年の調査** 昭和 39 年（1964）4 月、岩手大学の学術調査として実施された。詳細は不明であるが、縄文時代の堅穴住居跡が数棟検出されたようである。

**御所ダム建設** 昭和 48 年（1973）から昭和 55 年（1980）に至る 8 年間に御所ダム建設に伴う事前の緊急発掘調査が実施されたが、これに先立つ分布調査によって、盛岡市から零石町にまたがる 700ha の用地内に 37 遺跡が確認された。整地区においても新たに 7 遺跡（繫 I ~ V 遺跡、南ノ又遺跡）の所在が確認され、これまでの「繫遺跡」は「繫 V 遺跡」と変更されることとなった。

御所ダム建設に伴う繫 V 遺跡の発掘調査は昭和 48 年 8 月に行われ、縄文時代中期の堅穴住居跡 11 棟、土坑 58 基が検出された。出土遺物は縄文時代中期から晩期にかけての土器・石器が多量に出土しており、特に中期初頭から中葉にかけての遺物が主体的であった。

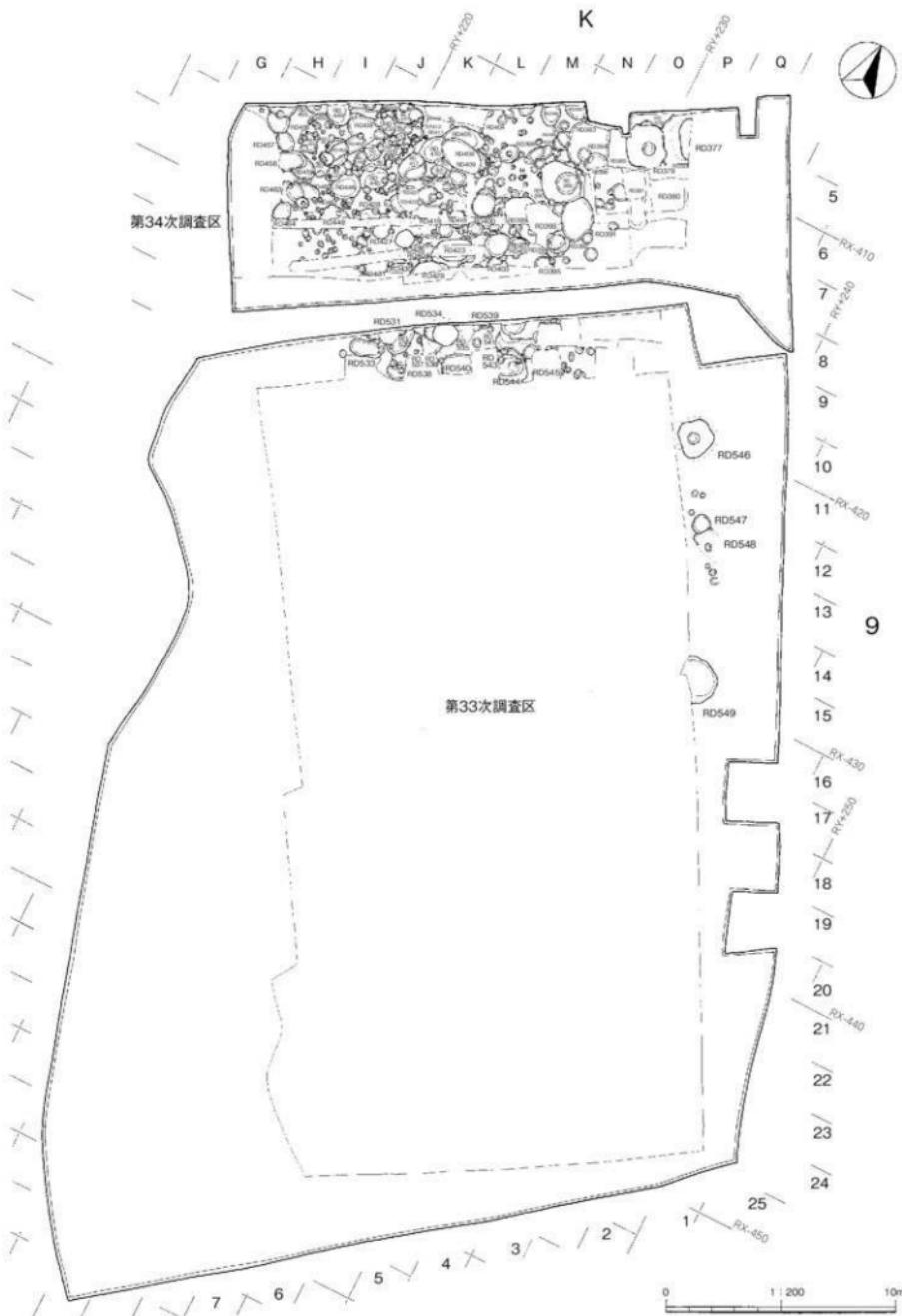
**第 1 ~ 37 次調査** 昭和 58 年（1983）より個人住宅など各種開発に伴う事前の緊急発掘調査が盛岡市教育委員会で行われ、繫遺跡群（繫 I ~ V 遺跡）全体で平成 22 年度までに 37 次に及ぶ緊急発掘調査が実施されている。発掘調査は主に遺跡南東部の住宅地で行われ、縄文時代中期から後期の堅穴住居跡、土坑が確認されている。特に平成 4 ~ 6 年度の第 13・15 次発掘調査、平成 8 年度の第 21 次発掘調査では繫 V 遺跡の集落を知る上で重要な成果が得られた。第 13・15 次発掘調査では縄文時代中期中葉から末葉、後期初頭の堅穴住居跡が重複した状態で 72 棟検出されたことから長期間集落が継続していたことが明らかになり、約 46,000m<sup>2</sup> の台地全体が縄文時代中期の大規模集落であることが確認された。遺跡の北東段丘縁辺に調査区がある第 21 次発掘調査では、第 13・15 次調査区と近接しているが様相が異なり、縄文時代中期の土坑が 134 基確認された。土坑の多くは梢円形を呈し、内部よりヒスイ製玉類など、特殊な遺物が出土したことから土坑墓であることが考えられる。また、第 34 次調査区においても第 21 次調査と同様に土坑墓と考えられる土坑が 88 基検出されたことから、第 13・15 次調査区より北西に位置する第 21 次調査区付近から第 34 次調査区付近にかけての北東段丘縁辺に墓域が拡がることが明らかにされた。堅穴住居は昭和 48 年度調査区北東部、第 12・13・15・36 次調査区の堅穴住居跡検出状況を見る限り、墓域を中心とした扇状の住居域が展開していることが確認されつつある。



第2図 繫遺跡全体図 (1:2,500)



第3図 整V遺跡第29・36・37次発掘調査全体図



第4図 繁V遺跡第33・34次発掘調査全体図

## II. 調査内容

### 1. 調査経過

**試掘調査** 平成 14 年 9 月、盛岡市教育委員会において繫小学校増改築工事に関する事前協議が持たれた。協議を受け現地の状況を観察した結果、過去の繫小中学校建設で破壊された箇所もあるが、地下に縄文時代の遺構・遺物が破壊を免れて存在していると考えられ、平成 14 年 11 月 11 ~ 13 日にかけて繫小学校校舎周辺を試掘調査した結果、敷地内より縄文時代の遺構・遺物が多數検出されたことから工事着手前の緊急発掘調査が必要とされた。

**発掘調査** 本調査は工事の進捗状況に応じ、工事予定面積 10,629m<sup>2</sup> の内 4,219.1m<sup>2</sup> を下記の日程で調査した。平成 16 年 9 月 7 日 ~ 10 月 20 日（第 29 次 調査面積 16.9m<sup>2</sup>）、平成 18 年 10 月 2 日 ~ 10 月 31 日（第 33 次 調査面積 2,144m<sup>2</sup>）、平成 19 年 9 月 18 日 ~ 11 月 30 日（第 34 次 調査面積 288m<sup>2</sup>）、平成 20 年 10 月 1 日 ~ 平成 21 年 12 月 24 日（第 36 次 調査面積 1,752m<sup>2</sup>）、平成 22 年 7 月 5 日 ~ 7 月 13 日（第 37 次 調査面積 18.2m<sup>2</sup>）。



第 5 図 繫 V 遺跡第 29・33・34・36・37 次発掘調査区位置図

各調査区における検出遺構は下記のとおりである。

- 第 29 次調査 - 縄文時代 堪穴住居跡 2 棟・堪穴 1 基・土坑 2 基・ピット 18 口
  - 第 33 次調査 - 縄文時代 土坑 19 基・ピット 44 口
  - 第 34 次調査 - 縄文時代 堪穴 1 基・土坑 88 基・ピット 284 口
  - 第 36 次調査 - 縄文時代 堪穴住居跡 66 棟（うち炉跡 9 基）・堪穴 1 基・土坑 64 基・埋設土器 7 基・ピット 388 口
  - 平安時代 堪穴住居跡 1 棟
  - 第 37 次調査 - 縄文時代 堪穴住居跡 1 棟・ピット 1 口
- 出土遺物の時代・時期は、縄文時代中期初頭から中期末葉にかけての土器・石器が主体的で、前期初頭・後期初頭の遺物が少量出土している。遺物総数は収納コンテナ（54cm × 35cm × 15cm）467 箱分である。

## 2. 遺跡の基本層位と遺構検出状況

繁 V 遺跡第 29・33・34・36・37 次調査区は、北西に向かって緩やかに傾斜する段丘斜面部に位置する。第 36 次調査区西壁付近以外は旧校舎の基礎等による擾乱が著しく、第 II 層については第 36 次調査区西側で部分的に確認されたのみである。縄文時代中期初頭の遺構掘込面は II 層中と思われるが、前述した要因から掘込面が明確なのは RA 274・281 堪穴住居跡のみである。

**基本層序** 上位より現代の盛土、色調・混入物の違いによって I ~ IV 層に大別される。盛土は旧繁小学校建築に伴う盛土で、層厚は一定しないが第 36 次調査区北東部では約 60cm の盛土であった。I 層は a・b 層に細分され、I a 層は黒褐色土を主体に、暗褐色土・褐色土が混入する混合土（旧耕作土？）。I b 層は黒褐色土を主体に、スコリア粒を含む暗褐色土が粒・塊状に混入する。層内には弥生時代の土器片・縄文時代前期から晩期の土器・石器が含まれる。II 層は a・b・c の 3 層に細分され、II a 層には粒状の黄褐色土・褐色土と微細な炭化物が含まれ、縄文時代中期後葉（大木 10 式）以前の土器が多量に出土する。II b 層は暗褐色土を主体に、塊状の黒褐色土・褐色土・焼土粒・炭化物片を多量に含む混合土で縄文時代中期中葉以前（大木 7a ~ 8a 式）の土器を主体的に含む。II c 層は II b 層に比べ黒褐色土が多く含まれ、包含される遺物は縄文時代中期初頭から前葉頃（大木 7a・b 式）の遺物が主体的になる。III 層は赤褐色・黄褐色のスコリア粒を含む黒褐色土層で、局的に硬く締まる。層の上部より縄文時代前期初頭から中期初頭にかけての土器が出土する。IV 層は粘質のシルト質明黄褐色土を主体に安山岩・凝灰岩の小角礫（1mm ~ 5cm）を含み、量は少ないが、玉隨や水晶も混入する層。今回報告する調査箇所においては確認されなかつたが、遺跡南東部の第 15 次調査区付近では本報告における IV 層上にスコリア粒を多量に含む暗褐色土層が形成されており、縄文時代早期の遺物が含まれることが確認されている。

**検出状況** 第 36 次調査区南西部以外は過去の学校建設時に削平されており、大部分は基本土層 IV 層に相当する面で検出作業が行われた。しかし、第 36 次調査では堪穴住居跡の重複が激しく、部分的に IV 層が確認できる面まで掘り下げ、個々の遺構検出を行った。

**検出遺構** 繁小学校増改築事業に伴う発掘調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡70棟（R A 221～239・241～249・251～253・257～259・261～277・279・281～283・285～290・292、うち炉跡9基）、竪穴跡3棟（R E 260・291・293）土坑173基（R D 377～549）、埋設土器7基（R P 001～007）、ピット735口（第29・33・34・37次347口、第36次388口）、平安時代の竪穴住居跡1棟（R A 0501）である。

### 3. 検出された遺構と遺物

#### (1) 縄文時代の竪穴住居跡（第6～42図）

縄文時代の竪穴住居跡が70棟検出されている。竪穴住居跡が集中するのは第36・37次調査区で、繁V遺跡全体でみると遺跡南西縁部にある。検出された竪穴住居跡の多くは重複しており、完全な平面形を見ることが出来る竪穴住居跡は少ない。

検出された竪穴住居跡70棟のうち、67棟が縄文時代中期初頭から末葉にかけての竪穴住居跡で、3棟のみ後期初頭の竪穴住居跡（R A 221・225・227）であった。

##### R A 221 竪穴住居跡（第6図）

時期 後期初頭 位置 J 9-Y 13 区 平面形 不明  
規模 長軸 7.75 m 以上・短軸 4.35 m 以上 重複遺構 R D 469  
掘込面 削平 床面の状態 掘乱により凹凸が激しいがほぼ平坦  
土器埋設炉 口縁部・底部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第51図1）  
ピット P 1～24 が検出されている  
埋土 A～F層に大別され、A～C層は炉埋土、D～F層はピット埋土である。  
**出土遺物（第51図1～13）** 1は炉に埋設された深鉢である（土器埋設炉）。体部上半・下半を欠くもので、器面には継位の単節縄文が施される。2は口縁部に刺突列が並行する隆帯をL字状に施す深鉢で、隆帯下には沈線によるJ字状の文様が施される。3は押引文が並行する鱗状の隆線が施される深鉢体部片で、地文には継位の撚糸文が施される。4は継位の撚糸文が施される深鉢体部片である。5は沈線による区画文が見られる深鉢体部片で、文様区画内には複節縄文が充填施文される。6は土器片を剥離加工した土製円盤である。7は未完成の石窓、8は両面に刃部加工が施される削器と思われるものである。9・10は腹面に一次剥離面を残す石錐である。9は両面機能部、10は背面全周縁に入念な押圧剥離が施され、10の腹面左側縁には刃部調整剥離が施される。11は扁平な円錐を素材とした敲打痕のある磨石で、一辺に磨面を持つ。12・13は敲打による凹みがある敲石である。

##### R A 222 竪穴住居跡（第7図）

時期 中期末葉 位置 J 9-N 18 区 平面形 不整梢円形  
規模 長軸 5.10 m 以上・短軸 3.42 m 以上、深さ 0.38 m

<b>重複遺構</b>	R A 223 ~ 225 · 229 · 230	<b>掘込面</b>	削平	<b>床面の状態</b>	平坦
<b>石囲炉</b>	中央部付近より東寄りに構築され、石組部は砲弾形を呈する				
<b>ピット</b>	P 1 ~ 18 が検出され、壁に沿って周溝が巡る				
<b>埋土</b>	A ~ E 層に大別され、A · B 層は竪穴 · 炉埋土、C ~ E 層はピット埋土である。A ~ B <sub>3</sub> 層は住居埋土、B <sub>4</sub> ~ E 層はピット · 炉など付属遺構埋土である。A 層は 2 層に細分され、暗褐色土を主体とする。B 層は暗褐色土を主体に粒 ~ 塊状の黄褐色土を含む。石囲炉埋土上部は B <sub>1</sub> 層が流入したもので、下部には赤褐色を呈した焼土 (J 層) が認められる。				

**遺物の出土状況** 床面より第 52 図 1 · 4 ~ 6 の土器が出土している。

**出土遺物 (第 52 図 1 ~ 第 54 図 31)** 1 は石囲炉西端部より潰れた状態で出土した深鉢で、器面には単節縄文が縱位に施される。2 ~ 4 は沈線による逆 U 字状文と梢円文が施される深鉢で、2 · 3 は小形のキャリバー状を呈し、文様区画内には単節縄文が充填施文される。5 は隆線による蕨手状の文様が施される浅鉢で口縁部を欠く。文様区画内には単節縄文が充填施文される。6 は沈線による C 字状の文様が施される深鉢片で、文様区画内には単節縄文が充填施文される。7 · 8 · 10 · 15 は逆 U 字状もしくは梢円状の区画文が施された深鉢体部片である。9 は口縁部に列点文が並行する横位の平行沈線が施される深鉢口縁部片である。11 は波状突起を持つ深鉢口縁部片で、突起下に鍵状の区画文が施される。区画内には単節縄文が充填施文される。12 は隆沈線による梢円状の区画文内に刺突を充填して施す深鉢体部片である。13 · 14 は沈線による区画文内に刺突を施した深鉢体部片である。16 は体部下半に最大径を持つ無文のミニチュア土器である。17 は土器片を剥離加工した土製円盤である。

18 は炉石に転用された敲打磨石で、断面形状は三角形を呈する。19 は頁岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。側面下部には円 · 鍵状を呈する陽刻が施され、底辺には台形状を呈した陰刻が施される。20 は背面下側縁に微細剥離を施す削器である。21 · 22 は剥片の両極に打面を持つ楔形石器である。23 は全周縁に粗い剥離を施す搔器である。24 は先端部 · 片脚部を欠く石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。基部にはアスファルトが付着する。25 は腹面に一次剥離面を残す石錐で、背面全周縁および腹面端部に入念な押圧剥離が施される。26 は基部のみ抉りを施す縱刃の石匙である。27 は磨製石斧で刃部欠損後、楔として再利用された可能性がある。28 ~ 30 は敲石で、28 は敲打による凹みを持つ。29 は両端に敲打による剥離が生じたもので、30 は一端に敲打痕を残す。31 は砂岩製の円盤形石製品で、平坦面に円形と見られる陰刻が見られる。

#### R A 223 竪穴住居跡 (第 8 図)

<b>時期</b>	中期後葉	<b>位置</b>	J 9 - L 19 区	<b>平面形</b>	不整梢円形
<b>規模</b>	長軸 5.22 m · 短軸 3.02 m 以上、深さ 0.36 m				
<b>重複遺構</b>	R A 222 · 224 · 229 · 231	<b>掘込面</b>	削平	<b>床面の状態</b>	ほぼ平坦
<b>石囲炉</b>	残存する石組部は不整円形を呈する	<b>ピット</b>	P 1 ~ 14 が検出されている		
<b>埋土</b>	A ~ H 層に大別され、A ~ C 層は竪穴 · 炉埋土、D ~ H 層はピット埋土である。				
<b>伏堀</b>	炉の東延長上より第 55 図 1 の伏堀が検出されている。全体の約 70% は過去における駒小学校建設により失われている。伏堀を埋設したピットは黄褐色シルトによって人為的に埋				

められる。

**埋設土器** 中央部北西寄りの床面下に正立して埋設される（第55図2）。

**出土遺物（第55図1～第57図36）** 1は住居床面下に倒立させて埋設した伏甕で、全体の約70%は過去の搅乱により失われている。口縁部は4単位の有孔突起を持つ波状を呈していたものと思われ、波頂下には隆沈線による懸垂文・楕円文・小渦巻文が施される。地文には継位の單節縄文が施される。2は住居床面下に埋設された小形深鉢で、口縁部を欠くラッパ形を呈する。器面には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文を施し、地文には斜位の複節縄文が施文される。3～5は波状口縁を持つラッパ形を呈する小形深鉢片で、器面には隆沈線による小渦巻文が施される。地文には3・4に継位の複節縄文、5に単節縄文が施され、5の口唇部下には補修孔が認められる。6は隆沈線による懸垂文が施される深鉢底部で、地文には継位の複節縄文が施される。7・8は同一個体の小形深鉢口縁部片で、口縁下に沈線による小渦巻文を描き、描いた小渦巻文より沈線を垂下させるものである。9～11はラッパ形を呈する深鉢片で、器面には沈線による渦巻文・懸垂文が描かれる。9の渦巻文には有輪がみられ、地文には継位の複節縄文が施される。12は底部欠損の浅鉢で、体部は無文となる。口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文・楕円文が横位に施され、区画内には横位の複節縄文が充填施文される。

13・14は削器で、13の先端部には入念な調整剥離が施される。15は搔器で、剥片打面部を刃部としたものである。16は石錐未製品、17は両面に押圧剥離を施す有脚の石錐である。18～20は一次剥離面を残す石錐で、機能部には押圧剥離が施される。21は黒曜石製の石匙で、両面全周縁から入念な押圧剥離が施される。22～26は削器で、両端部には調整剥離が施される。27・28は石箇で、両面全周縁から剥離整形が施される。29・30は磨削石斧で、29は刃部、30は刃部欠損の小形のものである。31は砂岩製の有溝砥石、32～34は斧状を呈した砂岩製の石製品である。35はシルト岩製の匙状石製品で、基部に貫通孔が穿たれる。36はアスファルトが付着する土器片で、アスファルト痕は条痕状に残ることから、バレットとして土器片を利用していたことが考えられる。

#### R A 2 2 4 竪穴住居跡（第9図）

時 期	中期後葉	位 置	J 9 - M 20 区	平 面 形	楕円形
規 模	長軸 6.85 m 以上・短軸 5.81 m、深さ 0.45 m				
重複遺構	R A 222・223・225・R D 513・518	掘 込 面	削 平	床面の状態	ほぼ平坦
石 囲 炉	中央部付近より東寄りに構築され、石組部は楕円形を呈する				
ビ ッ ト	P 1～41 が検出されている				
埋 土	A～E層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C～E層はビット埋土である。				
伏 甕	床面下より3基の伏甕（第58図1・3・4）が検出された。全てのビットは小角礫を含む黄褐色シルトで埋められる。伏甕内部には黒褐色・暗褐色土の混合土が流入する。				

**出土遺物（第58図1～16）** 1・3・4は伏甕に転用された深鉢である。1は4単位の有孔突起を持つキヤリバー形深鉢で、口縁下には隆沈線による小渦巻文が施され、小渦巻文間の楕円区画内には大粒の刺突が充填施文される。頸部は無文帶となり、体部には沈線による渦巻文と懸垂

文が施される。地文には縦位の複節縄文が施され、底部には外部からの穿孔が施される。2は1の伏甕内部より出土した砂岩製斧状石製品で刃部を欠く。3はラッパ形の深鉢で、口縁部の大波状部と底部は人為的に破壊されている。口縁部には無文帶が設けられ、下位の体部文様帯との間には刺突列が巡る。体部には大渦巻文を中心に隆沈線で連結された小渦巻文が施され、地文には縦位の撫糸文が施される。4は口縁部・底部欠損のキャリバー形深鉢で、器面には隆沈線による小渦巻文と文様間を連結する隆沈線が施される。地文には縦位の複節縄文が施される。5はラッパ形を呈した口縁部を欠く小形深鉢で、体部には隆沈線による小渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の複節縄文が施される。6は底部欠損のミニチュア土器で、単節縄文が縦位に施される。

7・11は有脚の石獣である。7は一次洞離面を残すもので、11の両面には入念な押圧剥離が施される。8は板状、9・12は棒状を呈する石錐で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。10・13・15は削器で、10は腹面全周縁に剥離が施される。13は背面2側縁、15は横長洞片下側縁に刃部調整が施される。14は石匙基部で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。16は石核である。17は砂岩製の長方形を呈する石製品で、用途は不明である。

#### R A 2 2 5 穴住居跡（第10図）

時 期	後期初頭	位 置	J 9 - O 19 区	平 面 形	梢円形
規 模	長軸 3.8 m以上・短軸 3.12 m、深さ 0.37 m				
重複遺構	R A 222・224・226・228・232・R D 511				
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦	炉	不明
ビ ッ ト	P 1 ~ 11	が検出されている			
埋 土	A ~ D層に大別され、A・B層は堅穴・周溝埋土、C・D層はビット埋土である。				
出土遺物（第59図1～第63図36）	1～3は床面より出土した深鉢片である。1は口縁部が外反し、口縁下に1条の横位平行沈線を巡らす深鉢片で、沈線下には縦位の撫糸文が施される。2はJ字状？の沈線文を施す深鉢口縁部片で、文様間には単節縄文が充填施文される。3は波状口縁を持つ深鉢片である。波頂部下にはC字状の沈線による文様が施され、文様区画内には単節縄文が充填施文される。4は隆線によるJ字状・梢円状の文様が施される深鉢片で、口縁下・梢円状文の縁には列点文が施される。5は口縁部が内湾し鱗状突起が施される深鉢口縁部片で、方形に区画する文様内には刺突が充填施文される。6・7はJ字状の沈線文が施される深鉢口縁部片で、文様間には縦位の撫糸文が施される。8は沈線による梢円状文が施される深鉢体部片で、文様間には単節縄文が充填施文される。9は口縁部が外反する深鉢口縁部片で、口縁下には1条の横位平行沈線、下位には無節縄文が縦位に施される。10・11は沈線による文様区画内に単節縄文が充填施文される深鉢片である。12は沈線によるJ字状の文様が施された深鉢で体部上半を欠く。文様区画外には複節縄文が縦位に施される。13は単節縄文が縦位に施された深鉢底部である。14は体部から底部にかけての深鉢で、縦位の単節縄文が施される。15は土偶で、右胸部から腕部にかけての部位である。胸の貼付痕が認められ、側面および裏面には沈線文が体形に沿って施される。				

16は整形された石球状の敲石である。17は縦刃の石匙で、つまみ部および両面機能部には入念な押圧剥離が施される。18・20・21は板状を呈する石錐で、機能部には押圧剥離が施される。19は先端部を欠く有脚の石錐で、両面には入念な押圧剥離が施される。22～26は頁岩製の石核である。22は多角形を呈し、25・26の縁部には敲打痕・擦痕がみられる。27～33は接合する頁岩製の石核及び洞片である。34は欠損した磨製石斧を使用した楔状の石器で、石器両端には衝撃による敲打痕が観察される。35は完形の打製石斧で、両面端部から整形剥離が施される。36は溶岩質安山岩を利用した石皿で脚部が1対残る。

#### R A 226 炉跡（第10図）

時 期 不明 位 置 J 9 - O 18 区 平 面 形 不明 規 模 不明  
重複遺構 R A 225・232 挖 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
石 囲 炉 石組部は梢円形を呈する ピット なし 埋 土 A層は炉埋土である  
出土遺物（第63図37・38） 37は板状の石錐で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。38は縦刃の石器で、背面両側縁には調整剥離が施される。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文・円文が施される深鉢片などが出土している。

#### R A 227 竪穴住居跡（第8図）

時 期 後期初頭 位 置 J 9 - R 15 区 平 面 形 梢円形  
規 模 長軸 2.06 m以上・短軸 1.02 m、深さ 0.30 m 重複遺構 なし  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
土器埋設炉 中央部付近に体部上半を人為的に欠いた深鉢が正立して埋設される（第64図1）。  
ピット P 1・2が検出されている  
埋 土 A～D層に大別され、C・D層はピット埋土である。  
出土遺物（第64図1～6） 1は炉内に埋設された深鉢で、地文には継位の単節縄文が施される。2は縦位の単節縄文が施される深鉢底部である。3は中空の橋状突起を持つ深鉢口縁部片である。4・5は削器で、4の背面右側縁および腹面先端部には調整剥離が施される。6は打製石斧基部で、両面端部から剥離整形が施される。

#### R A 228 炉跡（第10図）

時 期 不明 位 置 J 9 - O 17 区 平 面 形 不明 規 模 不明  
重複遺構 不明 挖 込 面 削平 床面の状態 不明  
石 囲 炉 石組部は不整梢円形を呈する 埋 土 A層は炉埋土である  
出土遺物 図示していないが、沈線による逆U字状文が施される鉢形土器口縁部片や頁岩の剥片などが出土している。

#### R A 229 竪穴住居跡（第11図）

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - M 17 区 平 面 形 隅丸方形  
規 模 長軸 4.20 m・短軸 2.20 m以上、深さ 0.46 m 重複遺構 R A 222・223・230・231

**掘込面** 削平 **床面の状態** ほぼ平坦 **炉** 不明

**ピット** P 1~9が検出されている

**埋土** A~C層に大別され、A・B層は堅穴埋土、C層はピット埋土である。

**出土遺物** (第64図7~第66図31) 7は隆線による懸垂文が施される小形深鉢部片で、地文には縦位の複節繩文が施される。8は斜位の単節繩文が施される深鉢底部で、内面には炭化した付着物が認められる。9はキャリバー形を呈する深鉢で、口縁部には隆線による楕円形文、渦巻文が施され、地文には縦位・横位の複節繩文が施される。10は円形の孔のある口縁部突起を持つ深鉢口縁部片で、下位には隆沈線による渦巻文が施される。11は隆沈線による懸垂文が施される深鉢底部で、内面には朱が付着する。12・13はキャリバー形深鉢部で、原体圧痕が並行する隆線による区画文が施される。14は口縁下に短沈線・波状文を横位に施す深鉢口縁部片である。15は浅鉢口縁部片で、口縁下に小突起を持ち、突起下に隆沈線による波状文、渦巻文が施される。16は口縁部が外反する深鉢口縁部片で、突起部には隆線による渦巻文が施される。

18・19は打製石斧である。18は剥離整形後に敲打整形を施したものである。20は有脚の石鑿、21・22は棒状を呈する石錐で、両面に入念な押圧剥離が施される。23・26は楔形石器、24・25は削器で、端部には調整剥離が施される。27はシルト岩製の石冠である。断面形状は三角形を呈し、底面には滴形の窪みがあり端部には孔が穿れる。28は磨製石斧刃部で、破損後に刃部を再利用したものである。29はシルト岩製の環状石製品で、平坦面には形状に沿った陰刻が施される。30は両端に敲打痕を持つ棒状の礫石器である。31はアスファルト塊で、表面は凹凸が激しく、部分的に掘られたような痕跡が残る。

#### R A 230 堅穴住居跡 (第11図)

**時期** 中期中葉 **位置** J 9-N 17区 **平面形** 円形

**規模** 長軸 2.54 m以上・短軸 2.34 m以上・深さ 0.35 m **重複遺構** R A 228・229

**掘込面** 削平 **床面の状態** ほぼ平坦

**石圓炉** 中央部付近に構築され、石組部は楕円形を呈する

**ピット** P 1~10が検出されている

**埋土** A~E層に大別され、A~C層は堅穴埋土、D・E層はピット埋土である。

**出土遺物** (第66図32~36) 32はC字状突起を持つキャリバー形深鉢で、体部には沈線による渦巻文・懸垂文を連続させて施文する。地文には縦位の複節繩文が施される。33は橋状把手を持つ楕形土器口縁部片で、隆線による渦巻文が把手下に施される。34・35は土器片を剥離加工した土製円盤である。36は敲打による剥離が全周に見られる扁平な敲石である。

#### R A 231 堅穴住居跡 (第11図)

**時期** 中期中葉? **位置** J 9-K 18区 **平面形** 不明

**規模** 長軸 1.62 m以上・短軸 1.08 m以上・深さ 0.14 m

**重複遺構** R A 222・223・229・R D 514

**掘込面** 削平 **床面の状態** ほぼ平坦 **炉** 不明

**ビット** P 1 ~ 6 が検出されている

**埋土** A・B層に大別され、A層は竪穴埋土、B層はビット埋土である。

**出土遺物** 図示していないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢片や磨石などが出土している。

#### R A 232 竪穴住居跡（第 10 図）

**時期** 不明 **位 置** J 9 - O 15 区 **平面形** 不明 **規 模** 不明

**重複遺構** R A 222・225・226・228

**掘込面** 削平 **床面の状態** ほぼ平坦 **炉** 不明

**ビット** P 1 ~ 8 が検出されている

**埋土** A・B層に大別され、B層はさらに2層に細別される。

**出土遺物（第 66 図 37）** 37 は磨製石斧であるが、両極に衝撃による剥離と敲打痕がある。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢片などが出土している。

#### R A 233 I 期竪穴住居跡（第 12 図）

**時期** 中期中葉 **位 置** J 9 - H 22 区 **平面形** 隅丸方形

**規 模** 長軸 4.06 m 以上・短軸 4.02 m 以上、深さ 0.52 m **重複遺構** R A 253・273・275

**掘込面** 削平 **床面の状態** ほぼ平坦

**石囲炉** 中央部付近に構築され、石組部は梢円形を呈する

**ビット** P 1 ~ 30 が検出されている

**埋 土** A ~ D 層に大別され、A・B 層は竪穴埋土、C・D 層はビット埋土である。

**伏 蔡** 石圓炉の延長上、住居の中軸線上より第 67 図 1 の伏蔡が出土している。伏蔡が埋設されていたビット上面からは土器片が出土しているが、伏蔡との関係は不明である。

**出土遺物（第 67 図 1 ~ 第 71 図 41）** 1 は伏蔡に転用された底部穿孔のキャリバー形深鉢である。口縁部文様帶には隆線による山形文と付加する渦巻文・弧状文が描かれ、文様の転換部には原体圧痕が施される。地文には継位・横位の複節縄文が施される。2 ~ 4 は床面より出土した土器である。2 は渦巻文を施す把手を持つ浅鉢で、地文には継位の複節縄文が施される。3 は体部下半から底部欠損のキャリバー形深鉢である。口縁部文様帶には隆線による波状文が施され、波状文内には沈線による渦巻文、棘のある区画文が施される。地文には継位・横位の複節縄文が施される。4 は口縁部文様帶に隆線による山形文と弧状文、棘のある幾何学文、原体圧痕による渦巻文を施すキャリバー形深鉢である。地文には継位・横位の単節縄文が施される。5・6 は口縁下に隆線による波状文を施す深鉢口縁部片で、器面には沈線による棘手状文・連弧文などが施される。7 は渦巻文を施す小突起を持つ深鉢口縁部片で、口唇部には刻目文が施される。口縁部下には梢円形の区画文が巡り、下位に隆線による曲線的モチーフが描かれる。8 は S 字状突起、9 ~ 11・14 ~ 17 は孔のある弁状突起を持つ深鉢口縁部片で、下位には隆線・沈線による渦巻文・山形文・波状文などが施される。12 は横位平行沈線と渦巻文が施される深鉢体部片である。13 は口縁部が外反する深鉢口縁部片で、口唇部下には継位の原体圧痕が並列して巡る。下位には横位の平行沈線と懸垂文が施される。18 は口縁部が大きく内湾する深鉢片で、口縁下には隆線による渦巻文が施される。19 は連鎖する

橋状の把手状突起を持つ深鉢口縁部片で、口唇部には半截竹管による刻目文を施す。口縁下には隆線による縫のある区画文が施される。20は隆線による縫位方向の文様が、横位に延びる鍵状の文様によって連結される深鉢体部片である。21は口縁部に渦巻文を施す突起を持つキャリバー形深鉢口縁部片で、突起下には隆沈線による山形文と渦巻文が施される。22は舟形状を呈する浅鉢口縁部片で、頂部となる先端部には隆線による菱形文と垂下する波状文が後に沿って施される。23は単節繩文を縫位に施す深鉢底部である。24は無文のミニチュア土器底部である。

25は部分的に敲打痕を残す敲石で、床面から出土したものである。26は両面に剥離調整を施す両面加工石器である。27は全周縁に押圧剥離による調整を施す搔器である。28・29は剥離整形痕を残す石斧で、29は使用によって刃部が丸く潰れる。30・31は石錐と思われる石器、32・33は石鎌で、両面に入念な押圧剥離が施される。34～36は削器で、34・35は背面右側縁、36は下端にも調整剥離が施される。37は未完成品と思われる打製石斧である。38は磨製石斧基部であるが、破損部に剥離痕が見られることから再利用されたものと思われる。39は半月形を呈し、一辺に磨り面を持つ敲打磨石である。40は両側縁が鋸歯状を呈する砂岩製の石製品で、41は同じく砂岩製の方形を呈した石製品である。

#### R A 2 3 3 II期竪穴住居跡（第12図）

時 期	中期中葉	位 置	J 9 - I 22 区	平 面 形	円形?
規 模	長軸 2.28 m 以上・短軸 1.34 m 以上、深さ 0.36 m				
重複遺構	R A 253・269 I期・269 II期・273				
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦	炉	不明
ピ ット	P 1～8	が検出されている			
埋 土	A～E層に大別され、A～C層は竪穴埋土、D・E層はピット埋土である。				
出土遺物（第71図42～44）	42は板状土偶頭部で、眼帯と鼻を表現する隆線が貼付される。表裏には平行沈線が形状に沿って施される。43は無文のミニチュア土器で、底部を欠く。44は底面欠損のシルト岩製の石冠である。このほか図示していないが、弁状突起・原体圧痕が施される深鉢口縁部片や土製円盤、複数の砥石などが出土している。				

#### R A 2 3 4 竪穴住居跡（第13図）

時 期	中期後葉	位 置	J 10 - P 5 区	平 面 形	梢円形?
規 模	長軸 3.68 m 以上・短軸 3.86 m 以上、深さ 0.17 m	重複遺構	R A 235・263		
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦		
複 式 炉	中央部付近より北東寄りに構築されるが、石圓部・前庭部ともに大きく削平される。				
ピ ット	P 1～11	が検出されている			
埋 土	A～D層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C・D層はピット埋土である。				
埋設土器	中央部南西寄りの床面下に正立して埋設される（第71図45）。				
出土遺物（第71図45～51）	45は住居床面下に埋設された小形深鉢で、底部を欠く。口縁部がラバ状に開き、4単位の波状口縁を呈する。口唇部には孔のある小突起があり、体部文様帶と				

の間には無文帯が設けられる。体部には隆沈線による大・小渦巻文と懸垂文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。46～48は体部上半に屈曲部を持つ、ラッパ状を呈する小形深鉢である。器面には隆沈線ないし沈線による大・小渦巻文と懸垂文が連結して施され、地文には46に複節縄文、47・48に単節縄文が縦位に施文される。49は腹面に一次剥離面を残す石槍で、全周縁に押圧剥離による調整が施される。50は片脚部を欠く石鎌で、両面に入念な押圧剥離が施される。51はつまみ部が明瞭ではないが、基部に入念な調整剥離を施す石匙である。

#### R A 235 炉跡（第13図）

時 期 中期後葉 位 置 J 10 - O 4 区 平 面 形 不明 規 模 不明  
重複遺構 R A 234・236・263 掘 農 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
ピット なし 炉 石組部は円形を呈する 埋 土 A層は炉埋土である  
出土遺物（第72図1～4） 1は口縁部が「く」字状に屈曲し、4個の突起を持つ小形深鉢である。器面には隆沈線による小渦巻文と有棘懸垂文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。2は把手のある小形深鉢で、器面には沈線による逆U字状文が施される。底部欠損で、地文には縦位の複節縄文が施文される。3は腹面左側縁に刃部を持つ削器である。4は先端部に衝撃剥離と思われる剥離がある石鎌で、基部にアスファルトが付着する。このほか図示していないが、土製円盤が出土している。

#### R A 236 穫穴住居跡（第14・15図）

時 期 中期後葉 位 置 J 10 - M 4 平 面 形 多角形  
規 模 長軸 6.76 m 以上・短軸 6.22 m、深さ 0.28 m 重複遺構 R A 235・263  
掘 農 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
複式炉 中央部付近より北東寄りに構築される。長半円状の石圓部と前庭部で構成され、前庭部の壁寄りは浅く掘り込まれる。前庭部東縁には30cm×40cmの範囲に土器片を敷き詰めた箇所がある。  
ピット P 1～46が検出されている  
埋 土 A～G層に大別され、A・B層は竪穴・炉埋土、C層は周溝埋土、D～G層はピット埋土である。  
伏 墓 炉延長上、住居跡の中央を通る中軸線上より第72図5の伏堀が出土している。床面下に倒立した状態で埋設され、土器底部には穿孔が施される。内部はほぼ空洞であった。  
出土遺物（第72図5～第74図28） 5は伏堀に転用された深鉢で、口縁部は緩やかなカーブを描いて内湾する。器面には隆沈線による大渦巻文と連結する有棘のある小渦巻文と稍円文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。6は隆沈線による懸垂文が施される深鉢底部で、地文には縦位の複節縄文が施文される。7は底部欠損のキャリバー形深鉢である。中空の把手状突起と入組文を口縁下に巡らし、突起部には渦巻文、突起間に刺突が施される。体部には隆沈線による大渦巻文と連結する小渦巻文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。8は口縁部欠損の1対の吊手状突起を持つ樽形土器である。体部上半には隆沈線

による渦巻文が施される。9～14は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部片、15は沈線による円文と逆U字状文が施される深鉢口縁部片である。

16・17は棒状、19は基部幅広形を呈する石錐で、16・17の両面全周縁、19の背面全周縁には入念な押圧剥離が施される。18は灰石に転用された敲打磨石である。一辺に磨面を持ち、両面に敲打痕が認められる。20・25・26は石核で、20は同じ側縁に交互剥離を施す頁岩製の石核石器である。21・27・28は削器で、21は先端が鋭く尖り、背面全周縁に剥離が施される。27・28は背面両側縁に刃部調整を施すものである。22は石斧で、剥離整形後に敲打による整形を施すものである。23・24は刃部欠損の磨製石斧で、23は刃部欠損後に再利用したようである。

このほか図示していないが、複数の土製円盤や板状石製品などが出土している。

#### R A 237 竪穴住居跡（第16図）

時期 中期中葉 位置 J 9 - F 24 区 平面形 長楕円形？

規模 長軸 6.80 m・短軸 3.68 m以上、深さ 0.32 m

重複遺構 R A 238・244・266・268・273・275・R D 523・525

掘込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦

石囲炉 中央部付近より北東寄りに構築され、石組部は方形を呈する

ピット P 1～19が検出されている

埋土 A～D層に大別され、A・B層は竪穴・炉埋土、C・D層はピット埋土である。

**出土遺物（第75図1～10）** 1はキャリバー形深鉢体部片で、隆沈線による小渦巻文が施される。2は孔のあるC字状突起を持つ深鉢口縁部片である。3は有茎の石錐で、両面全周縁に入念な押圧剥離が施される。4・5は切出状の刃部を持つ削器である。6は床面から出土した大形の打製石斧である。両面全周縁に整形剥離が施され、側縁は敲打によって整形される。7は基部が欠損する打製石斧で、両面全周縁に整形剥離が施される。8は基部欠損の斧状石製品である。9は基部が欠損する磨製石斧で、両側縁に敲打痕と衝撃剥離が認められる。10は一辺に磨面を持つ敲打磨石で、縁辺には敲打による剥離痕が認められる。

#### R A 238 竪穴住居跡（第20図）

時期 中期中葉 位置 J 9 - E 25 区 平面形 不整楕円形？

規模 長軸 4.05 m以上・短軸 3.01 m、深さ 0.41 m 掘込面 削平

重複遺構 R A 237・246・266・R D 525 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明

ピット 不明 埋土 A～C層に大別され、ともに竪穴埋土である。

**出土遺物（第76図1～第78図27）** 1は弁状突起を持つキャリバー形深鉢の口縁部から体部上半で、隆沈線による波状文と波状文内に横位に延びる蕨手状の文様が施される。地文には継位の単節縄文が施される。2は口縁部を仄く小形のキャリバー形深鉢で、沈線によるクランク状の文様が施される。地文には継位の単節縄文が施される。3は口唇部に渦巻文を施す突起を配した小形のキャリバー形深鉢で、口縁部下には渦巻文と連絡する隆線による区画が巡る。地文には継位・横位の単節縄文が施される。4は隆線によるS字状の文様を持つ深鉢口縁部

片である。5は口縁部が緩やかに膨らむ小形のキャリバー形深鉢で、体部下半から底部を欠く。地文には継位の単節縄文が施される。6は隆沈線による波状文と波状内に幾何学文が施されるキャリバー形深鉢部片である。7は中空の把手状突起を持つキャリバー形深鉢口縁部片で、隆線による渦巻状の装飾が施される。8は口縁部が外反する深鉢部片で、隆線によるクランク状の文様が施される。9は渦巻文を施す突起を持つキャリバー形深鉢口縁部片である。10は孔のある弁状突起を持つキャリバー形深鉢口縁部片で、沈線による波状文が施される。11は地文のみが施されるキャリバー形深鉢口縁部片である。

12・13・19は有脚の石鏡、20は有茎の石鏡または石錐、21は木葉形の石鏡または削器である。12・13・19・20の両面機能部には入念な押圧剥離が施され、21は綫長剥片全周縁に整形剥離を施す。14は腹面端部に刃部調整剥離が施される削器である。15-16は磨製石斧で、16は剥離整形痕を残すものである。15は基部欠損で、両極に敲打による剥離痕が認められる。17は礫皮面を残す頁岩製の石核である。18は背面全周縁に調整剥離が施される搔器である。22は梢円形を呈する石箋で、両面全周縁より押圧剥離を施して整形する。23は一辺に磨面を持つ敲打磨石で、縁辺には敲打痕と敲打による剥離痕が見られる。24～26は床面から出土した軟質のシルト岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。24は側縁底部に魚眼状の陰刻が施され、底面に滴形の凹部を持つ。25は陰刻等がないものである。26は側面に擦痕状の陰刻、端に十字状の陰刻を持ち、底面には長梢円状の凹部が施される。27は椀状を呈した有孔土製品である。このほか図示していないが、半月形状や棒状の石製品などが出土している。

#### R A 239 炉跡（第17図）

時 期	中期後葉	位 置	J 10 - I 2 区	平 面 形	不 明	規 模	不 明
重複遺構	R A 241・242・243・249	掘 込 面	前 平	床 面 の 状 態	ほぼ平坦		
石 囲 炉	残存する石組部は梢円形を呈する。しかし、中央部付近で角度を変える炉石があることから2基の石圍炉が重複していることも考えられる。						
ビ ッ ト	なし	埋 土	A層は炉埋土である				
出土遺物（第79図1～3）	1は窪みのある突起を持つ深鉢口縁部片で、隆沈線による小渦巻文が施される。2は沈線による多重の横位平行線、曲線を描く深鉢体部片である。3は基部に剥離整形痕を残す磨製石斧である。このほか図示していないが、頁岩製の石核や削器などが出土している。						

#### R A 241 炉跡（第17図）

時 期	中期中葉	位 置	J 10 - I 2 区	平 面 形	不 明		
規 模	不 明	重複遺構	R A 239・242・243・245・249				
掘 込 面	前 平	床 面 の 状 態	ほぼ平坦	石 囲 炉	残存する石組部は梢円形を呈する		
ビ ッ ト	なし	埋 土	A層は炉埋土である				
出土遺物（第79図4・5）	4は床面から出土した口唇部に刻目を持つ深鉢で、器面には継位の単節縄文が施される。5は一辺に磨面を持つ断面三角形を呈する敲打磨石である。このほか図示し						

ていないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢口縁部片や削器などが出土している。

#### R A 2 4 2 穹穴住居跡（第 17 図）

時 期	中期後葉	位 置	J 10 - H 3 区	平 面 形	円形？
規 模	長軸 4.97 m・短軸 3.44 m 以上、深さ 0.12 m				
重複遺構	R A 239・241・243・245・248・249・277				
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦		
石 囲 炉	中央部付近より東寄りに構築され、残存する石組部は梢円形を呈する				
ビ ッ ト	P 1 ~ 11 が検出されている				
埋 土	A ~ C 層に大別され、A 層は穹穴埋土、B・C 層はビット埋土である。				
埋設土器	中央部北西寄りの床面下に正立して埋設される（第 80 図 1）。				
出土遺物	（第 80 図 1 ~ 第 81 図 26） 1 は住居床面下に埋設されていた口縁部がラッパ状を呈する深鉢で、体部下半から底部を欠く。体部には沈線による有棘渦巻文が施され、地文には継位の複節縄文が施文される。2 は床面から出土したキャリバー形を呈する深鉢で、隆線による波状文と波頂下に渦巻文・連結文を施すものである。地文には継位・横位の単節縄文が施文される。3 はラッパ状を呈する深鉢片で、体部には隆沈線による大渦巻文と小渦巻文が施される。4 はキャリバー形深鉢頭部から体部上半にかけての部位で、継位の単節縄文が施される。5 はキャリバー形深鉢口縁部片で、口縁部文様帶には隆沈線による有棘渦巻文が施される。体部には沈線による横位平行線、継位の平行線が描かれる。7 はミニチュア土器底部で、継位の複節縄文が施される。8 は人面が表現される小形土器体部片で、顔面の輪郭と目・鼻が表現される。9 は側縁に敲打痕が残される打製石斧である。10・11 は床面から出土した石器である。10 は窪みのある敲石で、11 は剥離整形痕のある磨製石斧である。12 は背面全周縁から押圧剥離を施す円形搔器である。13 ~ 15・17・18 は有脚の石鏡、16・19 は有茎の石鏡で、両面に入念な押圧剥離が施される。20・21 は切出状の刃部を持つ削器、22 は両面全周縁から剥離整形を施した梢円形を呈する石範である。23 は礫皮面を残す頁岩製の石核である。24 は腹面端部に刃部調整剥離が施される搔器である。25 は扁平な円礫に抉りを入れた石錐である。26 は一辺に磨面を持つ敲打磨石で、粗い剥離により半円状に整形される。				
	このほか図示していないが、板状土偶胸部や石冠の未製品などが出土している。				

#### R A 2 4 3 穹穴住居跡（第 17 図）

時 期	中期後葉	位 置	J 10 - I 3 区	平 面 形	不整梢円形？
規 模	長軸 2.72 m 以上・短軸 4.86 m・深さ 0.08 m				
重複遺構	R A 239・241・242・245・248・249・277				
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦		
石 囲 炉	中央部付近に構築される。残存する石組部は梢円形を呈し、西辺は土器片によって開部を形成する（第 82 図 1）。				
ビ ッ ト	P 12 ~ 29 が検出されている				

**埋 土** A～C層に大別され、B・C層はピット埋土である。

**出土遺物** (第 82 図 1～10) 1 は炉の周部に転用された深鉢である。口縁部には隆線による渦巻文が施され、体部には単節縄文が縦位に施文される。2 はラッパ状を呈する深鉢片で、口縁部の無文帯下には刺突列が巡る。体部には隆沈線による「の」字状・逆U字状の文様が施され、地文には斜位の複節縄文が施文される。3 は口縁部に渦巻文を施す突起を持つ深鉢口縁部片である。4・5 は隆沈線による小渦巻文が施される深鉢体部片である。6・10 は石錐で、6 は両面に入念な押圧剥離が施される。10 は機能部のみ入念に造り出したものである。7 は基部欠損、8 は刃部欠損の磨製石斧で、衝撃剥離が認められる。9 は両極に打面を持つ削器である。このほか図示していないが、土製円盤や磨石などが出土している。

#### R A 2 4 4 堅穴住居跡 (第 19・20 図)

時 期	中期後葉	位 置	J 9 - I 25 区	平 面 形	不整円形
規 模	長軸 6.1 m・短軸 5.22 m・深さ 0.16 m				
重複遺構	R A 237・251・253・259・268・273・275・288				R D 521
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦		
石 囲 炉	中央部付近より東寄りに構築され、石組部はアーチ状を呈する				
ピ ット	P 1～28	が検出されている			
埋 土	A～E層に大別され、B～C層はピット埋土である。				
伏 墓	堅穴住居内より 3 個体の伏堀が検出された (第 83 図 1・第 84 図 2・第 85 図 10)。炉の中心をとおる長軸線上からは伏堀 3 が、伏堀 2 は長軸線上より南、伏堀 1 は北に外れた地点より検出されている。				

**出土遺物** (第 83 図 1～第 86 図 23) 1・2・10 は伏堀に転用された深鉢である。1 は底部中央に 7cm 程の孔を穿つ伏堀で、口唇部は平坦に調整される。口縁部下に隆線による波状文を施し、体部には単節縄文が縦位に施される。2 は底部を全て欠いた伏堀で、口唇部は平坦に調整される。口縁部が内湾し、体部には単節縄文を縦位に施すものである。3・9 は 2 の伏堀内部より出土した遺物である。3 は縦位の単節縄文が施されるミニチュア土器底部である。9 は全周縁より剥離整形が施される石箆である。10 は口縁部と底部を欠いた伏堀で、体部には複節縄文が縦位に施される。4 は床面から出土したラッパ状を呈する小形深鉢で、波状口縁を呈する。体部には沈線による Y 字状の文様と小渦巻文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。5 は沈線による渦巻文を施すミニチュア土器で、底部を欠くものである。地文には斜位の複節縄文が施される。6 は 4 つの孔のある器台で、下端に 1 条の沈線が巡る。7 は体部が大きく膨らむ深鉢体部で、隆沈線による渦巻文と逆 U 字状文が施される。地文には縦位の複節縄文が施文される。8 は台を持つ小形深鉢で、孔を持つ 2 単位の波状口縁を呈する。隆沈線による大渦巻文と連続する小渦巻文が施され、地文には斜位の複節縄文が施文される。11 は口縁部が外反する深鉢で、口縁部は波状を呈し、口唇下には隆沈線による 3 条の横位平行線文が施される。体部には隆沈線による懸垂文と有棘渦巻文が施され、地文には斜位の複節縄文が施文される。

12 は大形の石錐状の両面加工石器である。13 は木葉形を呈した石槍で、両面全周縁より

剥離が施される。14は有脚の石鎚、15は腹面に一次剥離面を残す有茎の石鎚で、両面に押圧剥離が施される。16は機能部に入念な剥離調整が施される石錐である。17・18・20は削器で、18は腹面右側縁、20は両面一侧縁に刃部調整を施す。19は機能部が欠損する石匙で、背面端部には押圧剥離が施される。21は縁辺に敲打痕と敲打による剥離痕が認められる打製石斧である。22は完形の磨製石斧で、剥離調整痕が認められる。23は孔のある斧状土製品で基部のみ残存する。地文には単節・複節縄文が施される。このほか図示していないが、複数の土製円盤や砥石、基部欠損の石棒などが出土している。

#### R A 245 炉跡（第17図）

時 期	中期中葉	位 置	J 10 - I 2 区	平 面 形	不 明	規 模	不 明
重複遺構	R A 239・241～243・249	掘込面	削平	床面の状態	ほぼ平坦		
石 囲 炉	炉石は抜き取られており、石抜痕から楕円形を呈していたものと考えられる。						
ピット	なし	埋 土	A層は熱浸透層で赤褐色を呈する				
出土遺物	(第86図24)	24は口縁部に隆線による平行線文を施す深鉢口縁部片で、口縁部は外反する。					
		このほか図示していないが、頁岩の剥片などが出土している。					

#### R A 246 竪穴住居跡（第20図）

時 期	中期中葉	位 置	J 10 - E 1 区	平 面 形	梢円形?		
規 模	長軸 3.90 m 以上・短軸 3.97 m、深さ 0.34 m						
重複遺構	R A 237・238・266・267・268・R D 525・528						
掘込面	削平	床面の状態	ほぼ平坦				
石 囲 炉	中央部付近に構築され、石組部は方形を呈する						
ピット	P 1～10 が検出されている						
埋 土	A～D層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C・D層はピット埋土である。						

出土遺物 (第86図25～第87図42) 25は浅鉢で、隆線による小渦巻文を中心とした弧状文が施される。地文には縱位・横位の単節縄文が施文される。26は小突起を施す複合口縁を呈し、口縁部が大きく外反する深鉢片である。体部には単節縄文が横位に施される。27は口縁部が内湾する、キャリバー形を呈する深鉢である。口縁部には隆線による波状文が施され、波頂下には渦巻文が施される。地文には縱位・横位の単節縄文が施文される。28は口縁部が直立気味にやや外反する、キャリバー形を呈する深鉢である。口縁部には沈線による波状文が描かれ、部分的に前述した文様に沿うように原体压痕が施される。地文には縱位・横位の複節縄文が施文される。

29～31・35・36は有脚の石鎚で、両面に入念な押圧剥離が施される。32はつまみ部が欠損する石匙または削器で、背面全周縁に調整剥離が施される。33・34は削器で、33は背面一侧縁に刃部調整が施される。37は横刃の石匙で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。38は両面下端に押圧剥離による調整が施される搔器である。39は断面形が梢円状を呈する両面加工された石器である。40は基部が欠損する小形の磨製石斧である。41は土偶の下半部で、胴部より上部は失われている。貼付文により臍が表現され、表裏およ

び側面には沈線文が体形に沿って左右対称に施される。42は石冠で、底面に方形の溝みと孔を穿つ。側面下には帯状のレリーフに入組状の線刻が施される。石材はシルト岩を用いたものである。このほか図示していないが、板状土偶胸部や複数の砥石、円柱状を呈する小形の石製品などが出土している。

#### R A 248 竪穴住居跡（第 18 図）

時 期 中期中葉 位 置 J 10 - J 4 平 面 形 不明  
規 模 長軸 3.24 m 以上・短軸 1.25 m 以上、深さ 0.06 m  
重複遺構 R A 242・243・249・277 挖込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
石 囲 炉 残存する石組部は方形を呈する ピット P 1~7 が検出されている  
埋 土 A~C 層に大別され、A 層は竪穴埋土、B・C 層はピット埋土である。  
埋設土器 中央部北東寄りの床面下に正立して埋設される（第 88 図 1）。  
出土遺物（第 88 図 1~7） 1 は住居床面下に埋設された口縁部と底部を欠いたキャリバー形深鉢である。僅かに隆沈線による文様がみられ、地文には継位の羽状縄文が施される。2 は渦巻文を施す弁状突起を持つキャリバー形深鉢口縁部片で、口縁部には隆沈線による波状文が施される。3 は床面から出土した小形深鉢で、器壁が直線的に外傾する。口唇部には 4 単位の小突起を持ち、口唇下には継位の原体圧痕が横位に並列して施される。口縁部文様帶下には沈線による弧状文が描かれ、地文には斜位の単節縄文が施される。4 はキャリバー形深鉢頸部片で、隆沈線による文様が施される。5 は有脚の石鏡で、両面に入念な押圧剥離が施される。6 は横刃の石匙で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。7 は基部を欠く搔器で、背面端部に機能部を持つ。このほか図示していないが、板状土偶胸部や砥石、環状石製品などが出土している。

#### R A 249 竪穴住居跡（第 17 図）

時 期 不明 位 置 J 10 - J 4 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸・短軸不明、深さ 0.12 m 重複遺構 R A 239・241~243・245・248・277  
掘込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明  
ピット なし 埋 土 A 層は炉埋土である  
出土遺物 図示していないが、地文のみを施す深鉢体部片や頁岩の削器・剥片などが出土している。

#### R A 251 竪穴住居跡（第 19・20 図）

時 期 中期中葉 位 置 J 10 - G 1 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸不明・短軸 3.81 m 以上、深さ 0.14 m 重複遺構 R A 244・259・R D 521  
掘込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
石 囲 炉 中央部付近より南西寄りに構築され、残存する石組部は方形を呈する  
ピット P 1~4 が検出されている  
埋 土 A~C 層に大別され、A 層はさらに 5 層に細別される。  
出土遺物（第 88 図 8~12） 8 は口唇部に原体圧痕による刻目が施される深鉢口縁部片である。口唇

下には2条の押引文に挟まれた原体末端押压列が施され、体部には浅く単節縄文が施される。9は浅鉢口縁部片で、原体圧痕による波状文が施される。10は縦位多条の平行沈線が施される深鉢口縁部片である。11は半截竹管を連続施文した深鉢体部片である。12は断面形状が正方形を呈した小形の磨製石斧である。このほか図示していないが、頁岩製の石核や板状を呈する石製品などが出土している。

#### R A 2 5 2 穴住居跡（第21・22図）

時 期	中期後葉	位 置	J 10 - M 8 区	平 面 形	長楕円形
規 模	長軸 9.25 m・短軸 4.12 m 以上、深さ 0.24 m			重複遺構	R A 283・R P 005
掘 込 面	前平	床面の状態	ほぼ平坦		
複 式 炉	中央部付近に構築される。石開部はI・IIの2段あり、石開部IIには個体の異なる土器片が平坦に敷き詰められる（第89図1）。				
ビ ッ ト	P 1～23が検出されている				
埋 土	A～E層に大別され、A・B層は竪穴・周溝埋土、C層は炉埋土、D・E層はビット埋土である。				

**出土遺物（第89図1～第94図46）** 1は石開部II内に敷き詰められた短胴のキャリバー形深鉢で、口縁部は大きく内湾し、隆沈線による文様が施される。体部には沈線による有縫渦巻文が描かれ、地文には縦位の単節縄文が施される。2は床面から出土した小形深鉢で、口縁部は波状を呈しやや外反する。頭部には横位平行沈線が3条、体部には3条の懸垂文が描かれる。地文は縦位の単節縄文が口唇下より施され、口唇付近のみ磨消される。3は3単位の大波状突起を持つ小形深鉢で、口縁は頭部より直線的に外反する。器面には隆沈線による大渦巻文と懸垂文が施され、地文は口唇下より縦位の単節縄文が施される。4は平縁の口縁部が頭部より直線的に外反する小形深鉢片で、沈線による横位平行沈線、大小の渦巻文が施される。地文は口唇下より縦位の単節縄文が施される。5は体部に膨らみを持つ小形深鉢体部で、沈線による有縫渦巻文・懸垂文が描かれる。6は口縁部が外反し、頭部に括れを持つ小形深鉢で底部を欠く。頭部には列点文が巡り、体部には沈線による有縫渦巻文が施される。地文には縦位の複節縄文が施される。7は4単位の突起を持つキャリバー形深鉢で、口縁部文様帶には隆沈線による渦巻文を起点にした文様を横位に展開施文する。体部上半から底部にかけては沈線による有縫渦巻文と懸垂文が描かれ、地文には縦位の単節縄文が施される。8は波頭部に隆沈線による渦巻文が施されるキャリバー形深鉢で、体部下半から底部を欠く。体部上半から下半にかけて沈線による有縫渦巻文と懸垂文が描かれ、地文には縦位・横位の複節縄文が施される。9は体部下半から底部欠損の波状口縁を持つ深鉢である。器面には沈線による横位平行線、大きな弧文が描かれ、地文には縦位の単節縄文が施される。10は口縁部が外反するラッパ形の小形深鉢で、器面には沈線による横位平行線・有縫渦巻文・懸垂文が描かれる。地文には縦位の無節縄文が施される。11は対となる波状突起を持つ小形深鉢で、器面には沈線による横位平行線、渦巻文と懸垂文が描かれる。地文には縦位の単節縄文が施される。12は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部が外反し、器面には縦位の複節縄文が施される。13は深鉢体部下半から底部にかけての部位の深鉢で、器面には沈線

による有棘渦巻文と半円状の文様を付加する懸垂文が描かれる。地文には縦位の複節縄文が施される。14は口縁部に膨らみを持ち、頭部に無文帯を持つ深鉢体部片である。口縁部文様帶には隆沈線による渦巻文と梢円区画文が施され、体部には隆沈線による有棘渦巻文と懸垂文が施される。15は頭部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢で、体部下半から底部を欠く。体部には隆沈線によって連結される有棘を持つ小渦巻文が施され、地文には附加条縄文が縦位に施される。16・17は頭部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢片で、隆沈線による有棘渦巻文と懸垂文が施される。地文には16は複節縄文、17は単節縄文が縦位に施される。18は体部下半から底部にかけて残存する深鉢で、器面には沈線による渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の複節縄文が施される。19は体部下半が窄まる深鉢で底部を欠く。器面には単節縄文が縦位に施される。20は深鉢体部片で、沈線による有棘渦巻文が施される。21は隆沈線による大渦巻文と小渦巻文を連結させて施文する深鉢体部片である。22は波状口縁を呈する深鉢口縁部片で、隆沈線による渦巻文が施される。23は頭部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢片で、体部には隆沈線によって連結される小渦巻文が施される。24はキャリパー形深鉢の口縁部片で、口縁部文様帶には隆沈線による梢円区画文・円文・有棘文が施される。25・26は頭部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢口縁部片で、25の体部には隆沈線による渦巻文、26には有棘円文が施される。27は口縁部を欠く小形深鉢で、器面には沈線による渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の単節縄文が施文される。28は口縁部が外反する小形深鉢で、体部には沈線による有棘渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の単節縄文が施文される。29は波状口縁頂部に渦巻文を施し、口唇部に沈線を巡らすラッパ形の小形深鉢で体部下半から底部を欠く。体部には沈線による有棘渦巻文と懸垂文が描かれ、地文には縦位の複節縄文が施される。30は器高のある浅鉢で、口縁部には隆沈線による渦巻文と梢円区画文が施される。地文には口縁部文様帶のみに横位の単節縄文が施される。31は把手付の椎形土器片である。把手部は中空となり、体部には単節縄文が縦位に施される。32・33は同一個体の深鉢体部片で、沈線による文様区画帯に列状に刺突が施される。

34・42は敲打磨石である。34は2辺に磨面を持ち、断面形状は三角形を呈する。42は一辺に磨面を持ち、両面全周縁に剥離がみられる。35は両面両側縁に刃部加工を施す削器である。36・37は有脚、38は有柄の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。39は背面の刃部が粗い剥離によって整形される石鏃である。40は刃部欠損の横刃の石匙で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。41は基部に再加工したものと思われる剥離痕がみられる磨製石斧である。43・44はミニチュア土器で、43の器面には縦位の沈線文が並列して巡る。44は口唇部に小突起を持ち、地文には縦位の無節縄文が施される。45は基部に孔のある斧状土製品で、先端部は欠損する。地文には縦位の無節縄文が施される。46は石製の円盤である。このほか図示していないが、複数の土製円盤や砾石器、石冠の未製品などが出土している。

#### R A 2 5 3 穫穴住居跡（第23図）

時 期 中期後葉 位 置 J 9 - J 24 区 平 面 形 不整梢円形

規 模	長軸 7.16 m・短軸 5.38 m・深さ 0.45 m
重複遺構	R A 233 I 期・233 II 期・244・259・261・262・269 I 期・273・275・279・288
掘込面	削平 床面の状態 ほぼ平坦
複式炉	中央部付近より東寄りに構築される。アーチ状の石圓部に接して浅い掘り込みがあり、壁寄りにピットが掘り込まれる。
ピット	P 1～19 が検出されている
埋 土	A～F層に大別され、A・B層は堅穴埋土、C～F層はピット埋土である。
伏 墓	炉の中央線を通る住居の長軸線上より、体部下半から底部を欠く伏壺が検出されている（第95図1）。伏壺が出土した箇所は平安時代のR A 0501堅穴住居跡が重複しており、その際に破損したものと考えられる。
出土遺物 (第95図1～第96図20)	1は伏壺に転用された大形深鉢で、体部下半から底部を欠いたものである。口縁は平縁で、器面には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文が連結して施される。地文には斜位の複節縄文が施される。2～4・6は小形深鉢で、2・4は体部下半から底部にかけての部位が残り、3は底部を欠くものである。2～4の器面には隆沈線による小渦巻文・懸垂文、6には沈線による横位平行線・渦巻文・懸垂文が施される。地文には2・4・6は単節縄文、3は複節縄文が縦位に施される。5は口縁部欠損のミニチュア土器で、沈線による渦巻文・懸垂文が連結して施される。地文には縦位の単節縄文が施される。
	7・14・16は削器である。7は横刃を呈し、両面全周縁に調整剥離が施される。14・16は切出状の刃部を呈し、14は基部を欠くものである。8・12・17は縦刃の石匙で、8のつまみ部および背面全周縁には丁寧な整形剥離が施される。12はつまみ部欠損で、両面全周縁より押圧剥離を施すものである。17のつまみ部の抉れは浅く、両面機能部には刃部調整剥離が施される。9・15は抉りが深い有脚の石蹴、11は平基の石蹴で、両面に入念な押圧剥離が施される。10は頁岩製の石核で、全体的に礫皮面を残すものである。13は刃部幅広形の石箆で、基部のみ両面両側縁より整形剥離が施される。18は刃部を再加工した磨製石斧である。19は環状、20は棒状を呈する石製品で線刻が施される。
	このほか図示していないが、土製円盤や複数の敲打磨石、石皿などが出土している。

#### R A 257堅穴住居跡 (第13図)

時 期	中期中葉	位 置 J 10 - H 3 区	平 面 形 隅丸方形
規 模	長軸 2.54 m・短軸 1.95 m・深さ 0.22 m	重複遺構	R A 239・242
掘込面	削平 床面の状態 ほぼ平坦		
土器埋設炉	中央部付近に構築される。残存する石組部は不整長方形を呈し、口縁部・底部を欠いた深鉢が埋設される（正位）。		
ピット	P 1～9 が検出されている		
埋 土	A～C層に大別され、A層は堅穴埋土、B・C層はピット埋土である。		
出土遺物 (第97図1～8)	1は口縁部を欠く深鉢で、器面には単節縄文が縦位に施される。2は抉りの浅い有脚の石蹴で、両面に入念な押圧剥離が施される。3は一次剥離面を残す石箆で、刃部と基部に調整剥離が施される。4・5は削器で、4の削片先端部には調整剥離、5の背面両		

側縁には刃部調整が施される。6は横刃の石匙で、つまみの部分は再加工される。7は破損した磨製石斧を再利用した楔形石器である。8・9は完形の磨製石斧で、9は小形のものである。このほか図示していないが、隆沈線による区画文・波状文が施されるキャリバー形深鉢体部片や砾石器などが出土している。

#### R A 258 I 期竪穴住居跡（第24図）

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - L 25 区 平 面 形 不整円形  
規 模 長軸 3.68 m・短軸 3.54 m・深さ 0.23 m 重複遺構 R A 258 II～VI期・262・286  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
土器埋設炉 中央部付近に構築され、口縁部・底部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第97図10）。  
石周部は梢円形を呈し、一部深鉢口縁部片が転用される。  
ピット P 1～11 が検出されている  
埋 土 A～E層に大別され、A～C層は竪穴埋土、D層はピット埋土である。  
**出土遺物（第97図10～14）** 10は石周炉内に埋設されたキャリバー形深鉢で、口縁部から体部上半部にかけて残る。口縁部文様帶には隆沈線による渦巻文を付加した波状文が施され、地文には縦位・横位の単節縄文が施される。11は口唇部に小突起を持つ無文の小形深鉢である。12は口縁部が外反するミニチュア土器で、地文には縦位の単節縄文が施される。13は炉石に転用された打製石斧である。基部に疊皮面を残し、両面端部には整形剥離が施される。14は刃部に使用による剥離が見られる磨製石斧である。このほか図示していないが、弁状突起・原体圧痕が施される深鉢片や砥石、敲打磨石などが出土している。

#### R A 258 II 期竪穴住居跡（第24図）

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - M 25 区 平 面 形 不整方形  
規 模 長軸 4.03 m・短軸 3.61 m以上、深さ 0.05 m  
重複遺構 R A 258 I期・258 III～VI期・262・265・286  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明  
ピット P 1～15 が検出されている  
埋 土 A～D層に大別され、A層はさらに3層に細別される。  
伏 窒 住居北西壁付近より2基検出されている（第98図1・2）。  
埋設土器 住居の長軸線上の床面下に2基正立して埋設される（第99図3・4）。  
**出土遺物（第98図1～第99図9）** 1・2は伏窓に転用された深鉢である。1の口縁部は人為的に打ち欠かれ、底部には外部からの穿孔が施される。器面には単節縄文が縦位に施される。2は底部を欠く伏窓で、口縁部には原体圧痕による格子状の文様が施され、下位には単節縄文が縦位に施される。3・4は住居床面下に埋設された深鉢である。3は体部下半から底部を欠く深鉢で、口縁部にはS字状貼付文と刻目を施す波状の隆線文が連結して巡る。体部には隆線による平行線文から蕨手状文・波状文が連結して垂下し、地文には複節縄文が縦位に施される。4は口縁部と底部を欠くキャリバー形深鉢で、口縁部文様帶には隆線及び隆沈線による波状文が施される。地文には縦位・横位の単節縄文が施される。5は床面から出土し

た大小の突起があるキャリバー形深鉢である。口縁部文様帶には隆沈線による波状文が横位に展開し、地文には縦位の単節繩文が施される。6は有柄、7は抉りの浅い有脚の石鑓で、両面に入念な押圧剥離が施される。8は横刃の石匙で、刃部端部が尖る。9は整形剥離痕がみえる磨製石斧である。このほか図示していないが、敲打磨石や砥石などが出土している。

#### R A 258 III期竪穴住居跡（第25図）

時 期	中期中葉	位 置	J 9 - N 25 区	平 面 形	梢円形
規 模	長軸 4.21 m・短軸 3.72 m・深さ 0.12 m				
重複遺構	R A 258 I 期・258 II 期・258 IV～VI 期・262・265・286・289				
掘 込 面	前平	床面の状態	ほぼ平坦	炉	不明
ビ ッ ト	P 1～18	が検出されている			
埋 土	A～C層に大別され、A層は堅穴埋土、B・C層はビット埋土である。				
出土遺物	（第100図1）	1は装飾把手のあるキャリバー形深鉢口縁部片で、口縁部文様帶には原体圧痕が縦位に施される。頭部より下位には沈線による横位平行線と弧状文が描かれ、地文には縦位の単節繩文が施される。このほか図示していないが、隆沈線による山形文が施されるキャリバー形深鉢口縁部片や土製円盤、礫石器などが出土している。			

#### R A 258 IV期竪穴住居跡（第25図）

時 期	中期中葉	位 置	J 9 - N 25 区	平 面 形	不明
規 模	長軸・短軸不明・深さ 0.05 m	重複遺構	R A 258 I・III・V・VI 期		
掘 込 面	前平	床面の状態	ほぼ平坦	炉	不明
ビ ッ ト	P 1	が検出されている			
埋 土	A層は2層に細別され、堅穴・ビット埋土である	出土遺物	なし		

#### R A 258 V期竪穴住居跡（第26図）

時 期	中期中葉	位 置	J 10 - M 1 区	平 面 形	不整長梢円形？
規 模	長軸 6.19 m 以上・短軸 4.53 m				
重複遺構	R A 258 I～IV 期・258 VI 期・262・286				
掘 込 面	前平	床面の状態	ほぼ平坦	炉	不明
ビ ッ ト	P 1～36	が検出されている			
埋 土	A～C層に大別され、ともにビット埋土である				
出土遺物	（第100図2～5）	2・3は粘板岩製の打製石斧で、両面端部には整形剥離が施される。4は両側縁に敲打痕を残す敲石である。5は砂質凝灰岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。底面には整形痕と思われる敲打痕が見られる。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文・山形文が施されるキャリバー形深鉢口縁部片や砥石、擦痕状の陰刻が認められる石製品などが出土している。			

#### R A 258 VI期竪穴住居跡（第25図）

時 期 中期中葉 位 置 J 10 - M 2 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸 3.53 m 以上・短軸 1.09 m 以上 重複遺構 R A 258 I ~ V期・262・286  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほほ平坦 炉 不明  
ピ ット P 1 ~ 9 が検出されている  
埋 土 A・B層に大別され、ともにピット埋土である

出土遺物（第100図6）6は背面全周縁に整形剥離、腹面の打瘤除去が施された搔器である。このほか図示していないが、渦巻文・山形文が施される深鉢片や凹石などが出土している。

#### R A 259 竪穴住居跡（第27・28図）

時 期 中期中葉 位 置 J 10 - J 1 区 平 面 形 隅丸長方形  
規 模 長軸 5.82 m・短軸 3.86 m・深さ 0.20 m  
重複遺構 R A 244・251・253・262・273・286・288・R D 519  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほほ平坦  
石 囲 炉 中央部付近に構築され、石組部は長方形を呈する  
ピ ット P 1 ~ 40 が検出されている  
埋 土 A ~ H層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C ~ H層はピット埋土である。  
伏 焼 石圍炉の延長上に伏焼が2基縦列して検出された（第101図1・2）。口縁部の膨らみがなく、直線的な形状であることから、大木8a式期でも古い段階であることが考えられる。

出土遺物（第101図1～第102図15）1・2は伏焼に転用されたキャリバー形深鉢である。1の口縁部には対をなす小突起が施され、口縁部文様帶には隆線による弧状文・渦巻文が施される。頭部には2条の横位平行の隆線が貼付され、下位方向にY字状を呈する懸垂文が施される。底部欠損で、地文には縦位・横位の単節縄文が施文される。2は口縁部が直線的に外反する器形のキャリバー形深鉢で、口縁部文様帶には隆沈線・沈線による波状文と渦巻文が施される。地文には縦位の単節縄文が施文され、底部には外部からの穿孔が施される。3は床面から出土した弁状突起を持つ深鉢で、器面には隆沈線による弧状文が横位に施される。地文には単節縄文が縦位に施される。4は口縁部が外反しながら、口唇部付近で膨らみを持たせるキャリバー形深鉢である。口縁部文様帶には隆沈線による波状文と渦巻文が、頭部より下位には隆線・沈線による懸垂文が施される。体部下半から底部欠損で、地文には縦位の複節縄文が施される。5は竪穴住居埋土上部から出土した小形のキャリバー形深鉢で、上記した土器よりも口縁部が膨らむ。口唇部には小突起を持ち、口縁部文様帶には沈線による曲線的モチーフが描かれる。地文には単節縄文が施される。

6は礫皮面を残す剥片を加工した石錐で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。7は抉りの深い有脚の石錐で、両面に入念な押圧剥離が施される。8～12は石箒で、8～10は刃部が狭く丸みを帯びる。8・11の背面全周縁および腹面端部、9・10・12の両面全周縁には剥離整形が施される。13は腹面端部に押圧剥離を施す搔器である。14は小形の磨製石斧で整形剥離痕が残る。15は軟質のシルト岩製の石冠である。底面に方形の凹部があり、

一端に孔を穿ち端部の凹部にある孔と繋がるものである。このほか図示していないが、複数の削器や砥石、打製石斧などが出土している。

#### R E 260 竪穴住居跡（第 28 図）

時 期	中期後葉	位 置	J 9 - M 22 区	平 面 形	不整円形？
規 模	長軸 2.10 m 以上・短軸 2.24 m、深さ 0.22 m	重複遺構	R A 265・289		
掘 込 面	削平	床面の状態	はぼ平坦	ピ ッ ト	P 1・2 が検出されている
埋 土	A～C層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C層はピット埋土である。				
出土遺物	図示していないが、沈線による逆U字状文が施される深鉢口縁部片や斧状土製品、貝岩の剥片などが出土している。				

#### R A 261 竪穴住居跡（第 29 図）

時 期	中期中葉	位 置	J 9 - K 23 区	平 面 形	不整円形？
規 模	長軸 5.11 m 以上・短軸 3.88 m、深さ 0.28 m				
重複遺構	R A 233 II 期・253・269 I 期・270・273・279・288				
掘 込 面	削平	床面の状態	はぼ平坦		
石 囲 炉	中央部付近に構築され、石組部は方形を呈する				
ピ ッ ト	P 1～26 が検出されている				
埋 土	A～D層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C・D層はピット埋土である。				
埋設土器	中央部北東寄りの床面下に正立して埋設される（第 103 図 1）。				

出土遺物（第 103 図 1～第 104 図 10） 1 は住居床面下に埋設された浅鉢で、口縁部文様帶には隆線による横長の方形区画文が施される。地文には単節縄文を縱位・横位に施す。2 はキャリバー形深鉢で、口縁部文様帶には隆沈線による波状文が施される。底部欠損で、地文には縱位・横位の複節縄文が施される。3 は底部欠損の口縁部に突起を持つ浅鉢で、突起下には隆沈線による渦巻文が施され、稍円状の区画文と連結して横位に展開する。体部の地文には横位の単節縄文が施される。4 は背面先端部に刃部調整がみられる搔器である。5 は腹面両側縁に刃部調整剥離が施される削器である。6 は両面に一次剥離面を残す有脚の石錐である。7 は両面全周縁に押圧剥離がみられる小形の両面加工石器で、石錐の未完成品である可能性が考えられるものである。8 は先端部欠損のつまみ部を持つ錐状の石器で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。9 は整形剥離痕・敲打痕を残す打製石斧と考えられる。10 は蝶皮面を残す貝岩製の石核である。このほか図示していないが、耳栓や船形状を呈する土製品、石冠などが出土している。

#### R A 262 竪穴住居跡（第 30 図）

時 期	中期中葉	位 置	J 10 - K 1 区	平 面 形	梢円形？
規 模	長軸 5.14 m 以上・短軸 2.65 m 以上、深さ 0.21 m				
重複遺構	R A 253・258 I ～ VI 期・259・286・R D 519				
掘 込 面	削平	床面の状態	はぼ平坦		

**土器埋設炉** 中央部付近より北西寄りに構築される。残存する石組部は方形を呈し、深鉢が正立して埋設される（第104図11）。

**ピット** P 1～19が検出されている

**埋 土** A～C層に大別され、A層は竪穴・炉埋土、B・C層はピット埋土である。

**出土遺物** (第104図11～17) 11は石開炉内に埋設されていた小形の輪形土器である。口縁部は直立し、体部が緩やかに膨らむ。頭部には把手状の装飾が施され、体部には隆線による懸垂文と鈎状の文様が施される。12は孔のある斧状土製品の基部で、器面には縦位の複節縄文が施される。13～15は床面から出土した石器である。13は再調整が加えられた磨製石斧、14・15は全周縁に整形剥離が施される打製石斧である。16は有柄の石鎌で、両面に入念な押圧剥離が施される。基部を欠くが、基部付近にはアスファルトが付着する。17は背面3側縁、腹面1側縁に整形剥離が施される削器と考えられる石器である。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文・山形文が施されるキャリバー形深鉢口縁部片や砥石、炉石に転用された敲石などが出土している。

#### R A 263 竪穴住居跡（第14・15図）

時 期 中期後葉 位 置 J 10-O 4 区 平 面 形 円形?  
規 模 長軸 5.65 m以上・短軸 1.86 m以上、深さ 0.08 m 重複遺構 R A 234・235・236

掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明

ピット P 47～69が検出されている

埋 土 A～C層に大別され、さらにA層は3層、B・C層は2層に細別される。

伏 貝 伏壳が1基検出されている（第105図1）。R A 263 竪穴住居跡内より検出されているが、検出面に貼床等が確認できなかったことから、別住居の伏壳である可能性がある。

**出土遺物** (第105図1) 1は伏壳に転用された深鉢で、口唇下に刻目のある隆帶を貼付し、体部には複節縄文を横位・縦位に施す。底部穿孔は外面から施され、内面が放射状に剥離する。このほか図示していないが、渦巻文や平行線文が施される深鉢部片などが出土している。

#### R A 264 竪穴住居跡（第29図）

時 期 中期中葉 位 置 J 10-K 7 区 平 面 形 不明 規 模 不明

重複遺構 R A 252 掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦

**土器埋設炉** 石組部はアーチ状を呈し、深鉢が正立して埋設される（第105図2）。

**ピット** P 1～7が検出されている

**埋 土** A～C層に大別され、A層はさらに2層に細別される。

**出土遺物** (第105図2) 2は石開炉中央に埋設されていたキャリバー形深鉢で、口縁部・底部を欠く。口縁部文様帶には隆線、原体圧痕による波状文が施され、地文には単節縄文が縦位・斜位に施される。このほか図示していないが、複合口縁を呈する深鉢口縁部片や頁岩の剥片などが出土している。

### R A 265 穫穴住居跡（第31図）

時 期 中期後葉 位 置 J 9 - M 23 区 平 面 形 不整梢円形?  
規 模 長軸 2.93 m 以上・短軸 2.85 m 以上、深さ 0.27 m  
重複遺構 R A 258 II 期・258 III 期・271・289・R E 260  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
複 式 炉 中央部付近より北東寄りに構築され、石圓による燃焼部 I・II と袖状の石列を配する前庭部によって構成される。  
ピ ット P 1~7 が検出されている  
埋 土 A~C層に大別され、A層は竪穴埋土、B・C層はピット埋土である。  
出土遺物（第106図1~6） 1・3・4は床面から出土した土器である。1は口縁部が外反し、体部下半に膨らみを持たせる小形深鉢である。器面には沈線による逆U字状文が描かれ、文様外の地文は磨り消される。3は口縁部が直立し、体部上半に最大径を持たせる深鉢で底部を欠く。器面には沈線による逆U字状文と鈎状の文様が描かれ、文様外の地文は磨り消される。4は体部上半から底部にかけての部位を残す深鉢で、器面には複節縄文が縦位に施される。2は口縁部が緩やかな波状を呈するキャリバー形深鉢である。器面には沈線による逆U字状文と円文が描かれ、文様外の地文は磨り消される。5は半月状を呈した敲打磨石である。一辺に磨面を持ち、縁辺には敲打痕が認められる。6は棒状を呈する石錐で、両面全周縁に押圧剥離が施される。このほか図示していないが、土製円盤や頁岩製の石核、棒状石製品などが出土している。

### R A 266 穫穴住居跡（第22図）

時 期 不明 位 置 J 9 - E 25 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸 6.25 m 以上・短軸 3.66 m 以上、深さ 0.34 m  
重複遺構 R A 237・238・244・246・268・273・275・R D 523・525・528  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
石 團 炉 石組部は方形を呈する ピ ット P 1~15 が検出されている  
埋 土 A~E層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C層は周溝埋土、D・E層はピット埋土である。  
出土遺物（第105図3） 3は刃部にのみ入念な押圧剥離が施される石鏃である。このほか図示していないが、山形文・肋骨文が施される深鉢体部片や磨製石斧、敲打痕が認められる水晶などが出土している。

### R A 267 炉跡（第16図）

時 期 中期前葉 位 置 J 10 - F 1 区 平 面 形 不明 規 模 不明  
重複遺構 R A 237・246・266 掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦  
地 床 炉 体部下半を人為的に欠いた深鉢が正立して埋設される（第105図4）  
ピ ット なし 埋 土 A層は炉埋土である  
出土遺物（第105図4） 4は地床炉中央に埋設されていた深鉢である。体部中央付近から底部を欠き、

複合口縁を呈する。口縁部は体部と段で区画され、器面には単節縄文のみが横位に施される。このほか図示していないが、表裏に半截竹管による沈線文・押引文が施される板状土偶胴部が出土している。

#### R A 268 堪穴住居跡（第30図）

時 期	不明	位 置	J 9 - F 25 区	平 面 形	不 明
規 模	長軸・短軸不明、深さ 0.28 m				
重複遺構	R A 237・238・244・246・266・R D 525				
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦	炉	不明
ピット	P 1 ~ 16	が検出されている			
埋 土	A ~ E 層に大別され、A・B 層は堪穴埋土、C ~ E 層はピット埋土である。				
出土遺物	(第105図5・6)	5は横刃の石匙である。つまみ部が入念な押圧剥離により作り出され、両面端部には刃部調整剥離が施される。6は両面両側縁からの整形剥離痕を残す磨製石斧である。このほか図示していないが、渦巻文・山形文が施されるキャリバー形深鉢口縁部片や複数の石核、砥石などが出土している。			

#### R A 269 I 期堪穴住居跡（第32図）

時 期	中期中葉	位 置	J 9 - K 22 区	平 面 形	不整梢円形?
規 模	長軸 3.09 m 以上・短軸 4.71 m 以上、深さ 0.43 m				
重複遺構	R A 223・233 I 期・233 II 期・253・261・269 II 期・270・271・279				
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦		
石 囲 炉	中央部付近に構築され、残存する石組部は方形を呈する				
ピット	P 1 ~ 34	が検出されている			
埋 土	A ~ D 層に大別され、A・B 層は堪穴埋土、C・D 層はピット埋土である。				
出土遺物	(第107図1 ~ 4)	1は石箒で、背面刃部には再調整と考えられる大きな剥離がみられる。2は先端部が尖る削器で、背面両側縁に細かい剥離痕がみられる。3・4は磨製石斧で、4は小形のものである。3の基部には衝撃痕と思われる剥離痕がある。このほか図示していないが、渦巻文・波状文が施されるキャリバー形深鉢口縁部片や敲石などが出土している。			

#### R A 269 II 期堪穴住居跡（第32図）

時 期	中期中葉	位 置	J 9 - J 21 区	平 面 形	不 明
規 模	長軸・短軸不明、深さ 0.34 m				
重複遺構	R A 233 I 期・233 II 期・269 I 期・R D 515				
掘 込 面	削平	床面の状態	ほぼ平坦	炉	不明
ピット	P 35 ~ 48	が検出されている			
埋 土	A ~ D 層に大別され、A 層は周溝埋土、B ~ D 層はピット埋土である。				
出土遺物	(第107図5 ~ 8)	5は緩やかなカーブを描く深鉢である。口唇下には隆帯で連結する隆線による渦巻文が巡り、体部には複節縄文が縦位に施される。6は把手状の装飾を持つ無文の			

鉢形土器片である。7は背面全周縁、腹面一側縁に刃部調整剥離を施す削器であるが、端部が錐状に尖り、錐としての機能を持たせていたことも考えられる。8は側縁に敲打痕を残す打製石斧で、刃部を欠くものである。このほか図示していないが、弁状突起・原体圧痕文が施されるキャリバー形深鉢口縁部片や砥石、土製円盤などが出土している。

#### R A 270 竪穴住居跡（第31図）

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - K 22 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸・短軸不明、深さ 0.12 m 重複遺構 R A 253・261・269 I 期・271・279  
掘 込 面 前平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明  
ピ ット なし 埋 土 A層は竪穴埋土である  
出土遺物 図示していないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢片や頁岩の剥片が出土している。

#### R A 271 竪穴住居跡（第31図）

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - L 22 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸・短軸不明、深さ 0.17 m 重複遺構 R A 261・265・269 I 期・270  
掘 込 面 前平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明  
ピ ット P 1~11 が検出されている  
埋 土 A~D層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C・D層はピット埋土である。  
出土遺物（第108図1）1は刃部幅広形を呈する石鎧で、背面全周縁および腹面両側縁に剥離整形が施される。このほか図示していないが、隆沈線による区画文が施される深鉢体部片などが出土している。

#### R A 272 炉跡（第16図）

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - G 23 区 平 面 形 不明 規 模 不明  
重複遺構 R A 233 I 期・253・244・273・275 掘 込 面 前平 床面の状態 ほぼ平坦  
土器埋設炉 残存する石組部は方形を呈し、口縁部・底部を大きく欠いた深鉢が正立して埋設される（第108図2）。  
ピ ット なし 埋 土 A層は炉埋土である  
出土遺物（第108図2）2は石開炉内に埋設された深鉢体部片で、縦位の単節縄文が施される。このほか図示していないが、削器・砥石・棒状石製品などが出土している。

#### R A 273 竪穴住居跡（第33図）

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - H 24 区 平 面 形 楕円形?  
規 模 長軸 5.19 m 以上・短軸 3.74 m 以上、深さ 0.23 m  
重複遺構 R A 233 I 期・233 II 期・237・244・251・253・259・266・275・288・R D 523  
掘 込 面 前平 床面の状態 ほぼ平坦  
土器埋設炉 中央部付近より南東寄りに構築される。残存する石組部は方形を呈し、口縁部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第108図3）。

**ピット** P 1～25が検出されている

**埋土** A～E層に大別され、A・B層は堅穴埋土、C～E層はピット埋土である。

**出土遺物（第108図3～7）** 3は石窯炉内に埋設された深鉢で、縦位の単節繩文が施される。4は口縁部および底部欠損の深鉢で、縦位の単節繩文が施される。5は刃部欠損の磨製石斧で、表面にはくっきりした稜線が認められる。6は錐部幅広形を呈する石錐で、背面右側縁および腹面全周縁に調整剥離が施される。7は梢円形を呈する石対で、両面端部に剥離整形が施される。このほか図示していないが、弁状突起・渦巻文・連弧文が施される深鉢片などが出士している。

#### R A 274 I期堅穴住居跡（第34図）

**時期** 中期前葉 **位置** J 10-G 7区 **平面形** 隅丸長方形

**規模** 長軸 6.41 m・短軸 4.79 m・深さ 0.40 m

**重複遺構** R A 274 II期・276・277・R D 527 **掘込面** 削平 **床面の状態** ほぼ平坦

**土器埋設炉** 中央部付近に構築される。石組部は多角形を呈し、口縁部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第109図1）。

**ピット** P 1～17が検出されている

**埋土** A～F層に大別され、A～C層は堅穴・周溝埋土、D～F層はピット埋土である。

**出土遺物（第109図1～第114図38）** 1は石窯炉内に埋設された深鉢である。体部上半には原体圧痕が並行するクランク状の隆線文が横位に展開し、地文には単節繩文が横位に施される。2は床面から出土した深鉢で、口縁部を欠く。体部上半には原体圧痕による平行線文が巡り、地文には縦位の無節繩文が施される。3～6は弁状突起を持つ深鉢で、4単位の波状口縁を呈する。3は波頂部に刻みを持ち、口縁部文様帶には原体圧痕を施す隆線による区画文が展開する。体部の地文には横位の単節繩文が施される。4は複合口縁を呈し、波頂部下には梢円状文と隆線が連結して垂下する。口縁部文様帶は体部と段で区画され、原体圧痕による平行線文・連弧文が充填施文される。地文には縦位の単節繩文が施される。5は波状文に加飾された複合口縁を呈し、波頂部下には孔が穿たれる。口縁部文様帶はボタン状貼付文・押引文が充填施文される平行線文で体部と区画され、菱形状文・押引文が横位に展開する。体部の地文には縦位の単節繩文が施される。6の口縁部文様帶には隆線による山形状の区画が横位に展開し、区画内には原体圧痕による平行線文・鋸歯状文が充填施文される。地文には単節繩文が施される。7・8は浅鉢で、口縁部文様帶には原体圧痕による平行線文・波状文・鋸歯状文・渦巻文が懸垂文と連結して横位に展開する。7の体部には横位の無節繩文が施される。9・10は舟形を呈した浅鉢である。9は長軸方向の口唇部に波状文を施す複合口縁を呈し、地文には斜位の単節繩文が施される。10は2単位の大波状口縁を呈し、口唇部には4単位の小突起が施される。小突起間の対する2辺のみが小波状口縁を呈し、波頂部下には原体圧痕を施す隆線が垂下する。口唇部下には隆線が巡り体部と区画され、地文には結束を持つ単節繩文が縦位・横位に施される。11は原体圧痕を施す波状文に加飾された複合口縁を呈する深鉢片で、口縁部下には原体圧痕が並行する隆線による区画文が描かれる。12は口縁部および底部欠損の深鉢で、体部上半には多条の平行沈線が巡る。地文には結束を持

つ単節縄文が横位に施される。13は口唇部に二山突起を持つ深鉢片で、口唇部下には原体圧痕文が巡る。地文には横位の単節縄文が施される。14は2個1対で4単位の波状口縁を呈する深鉢で、屈曲を持つ頸部は押引文を施す隆線で体部と区画される。口縁部文様帶には押引文を施す隆線による渦巻文と半截竹管による波状文・平行線文が連結して展開する。体部には結束を持つ無節縄文が縱位に施される。15は2単位の大波状口縁を呈する深鉢で、口唇部には2個1対の小突起が4単位施され補修孔を持つ。口縁部文様帶は沈線による波状文で体部と区画され、原体圧痕による曲線的モチーフが横位に展開する。体部には縱位の単節縄文が施される。16は口縁部にかけて内湾する深鉢片で、口唇部には二山突起を持つ。口縁部文様帶は原体圧痕が並行する隆線で体部と区画され、区画内には原体圧痕による連弧文が充填施文される。地文には横位の単節縄文が施される。17は波状口縁を呈する深鉢片である。波頂部下には隆線が垂下し、口唇部下には原体圧痕に加飾された隆線による区画文が巡る。地文には横位の単節縄文が施される。18は体部上半に屈曲を持つ深鉢片である。口縁部文様帶には隆線による楕円状の区画文が展開し、区画内には多条の原体圧痕が充填施文される。体部には縱位の単節縄文が施される。19は体部下半から底部欠損の深鉢で、屈曲を持つ頸部は原体圧痕が並行する隆線により体部と区画される。口縁部文様帶には貼付文に加飾された隆線による山形文が展開し、区画内には原体圧痕による連弧文・平行線文が充填施文される。体部の地文には結束を持つ縱位の単節縄文が施される。20は体部上半欠損の深鉢で、縱位の単節縄文が施される。底部には網代痕が認められる。21は板状土偶上半部である。表面には貼付文・貫通孔により胸が表現され、表裏には沈線文が体形に沿って左右対称に施される。22は口唇部に二山突起を持つミニチュア土器で、口唇部下には原体圧痕による平行線文・懸垂文が施される。地文には縱位の無節縄文が施される。

23は床面から出土した安山岩製の石皿である。24・30・31・33は石匙で、24・30・33は縱刃、31は横刃を呈する。つまみ部および30の背面機能部には入念な押圧剥離が施され、24・33の両面端部、30の腹面下端、31の背面下端には刃部調整剥離が施される。25・26・32・34は石鏡で、25・34は楕円形、32は刃部幅広形を呈する。25・26は両面全周縁、32・34は背面全周縁および腹面端部に剥離整形が施される。27・28は平基の石鏡で、28は一次剥離面を残すが両面に入念な押圧剥離が施される。29は両面に入念な押圧剥離が施される石錐である。35・36は敲石である。35の両面には敲打痕、35の下端、36の両極には衝撃剥離が認められる。37は礫皮面を残す流紋岩製の石核である。38は軟質のシルト岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。側面には整形時における剥離や鼠歯状の痕跡、底面には擦痕が認められる。

このほか図示していないが、複数の土偶や石冠の未製品、基部欠損の石棒などが出土している。

#### R A 274 II期竪穴住居跡（第35図）

時 期	中期前葉	位 置	J 10 - H 6 区	平 面 形	隅丸多角形
規 模	長軸 6.63 m・短軸 5.25 m以上、深さ 0.40 m				
重複遺構	R A 274 I 期・276・277	掘 込 面	削 平	床面の状態	ほぼ平坦

**土器埋設炉** 中央部付近に構築される。残存する石組部は方形を呈し、口縁部・底部を大きく欠いた深鉢が正立して埋設される（第115図1）。

**ピット** P 1～31が検出されている

**埋土** A～F層に大別され、A～C層は竪穴・周溝埋土、D～F層はピット埋土である。

**埋設土器** 南西壁寄りの床面下に正立して埋設される（第115図2）。

**出土状況** 北壁付近に石棒が直立した状態で埋設されており、全長は45cmのうち約14cmが床面下であった。屋内において祭祀的な空間が設けられていた可能性がある。

**出土遺物（第115図1～12）** 1は石窯炉内に埋設された深鉢で、結束を持つ縱位の無節縄文が施される。2は住居床面下に埋設された深鉢で、2個1対で4単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帶は体部と段で区画され、原体圧痕による区画文が展開する。地文には斜位の単節縄文が施される。3は口縁部が直線的に外反し、口縁下に膨らみを持たせるキャリバー形深鉢で、体部下半を欠くが直線的に底部に至るものと考えられる。口唇部には小突起が施され、隆帯が垂下する。屈曲部はそれぞれ段で区画され、地文には単節縄文が横位に施される。4は基部欠損の石槍で、両面全周縁より入念な押圧剥離が施される。5・7・9は石匙で、5は縱刃、7・9は横刃を呈する。つまみ部が入念な押圧剥離により作り出され、5は背面全周縁および腹面機能部、7・9は両面端部に刃部調整剥離が施される。6は基部に抉りのある石鎌で、両面に入念な押圧剥離が施される。8・11は両面端部には剥離整形が施される石鎌である。10は背面全周縁および腹面側縁に押圧剥離による調整が施される搔器である。12は基部欠損の磨製石斧で、敲打痕と衝撃剥離が認められる。このほか図示していないが、板状土偶や石冠の未製品、複数の石棒などが出土している。

#### R A 275 竪穴住居跡（第36図）

時期 中期中葉 位置 J 9-G 23区 平面形 不明

規模 長軸・短軸不明、深さ0.17m

重複遺構 R A 233 I期・237・266・272・273・R D 523

掘込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 なし

ピット P 1～13が検出されている

**埋土** A～D層に大別され、A層は竪穴埋土、B・C層はピット埋土、D層は周溝埋土である。

**出土遺物（第108図8～10）** 8は床面から出土したキャリバー形深鉢で、体部下半から底部欠損を欠く。口唇部は平坦に調整され、口唇部下には4単位の小突起を持つ。口縁部文様帶は体部と段で区画され、原体圧痕が並行する隆線による区画文が横位に展開する。地文には縱位の単節縄文が施される。9は蛇紋岩製の打製石斧で、両面端部には整形剥離が施される。10は両面側縁に調整剥離が施される削器である。

#### R A 276 竪穴住居跡（第36図）

時期 中期中葉 位置 J 10-I 7区 平面形 不明

規模 不明 重複遺構 R A 264・274 I期・274 II期・277・R D 520

掘込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦

**石囲炉** 一部石組みが残存するが形状不明 **ピット** P 1~9 が検出されている  
**埋土** A・B層に大別され、ともにピット埋土である  
**出土遺物** 図示していないが、隆沈線による有縫溝巻文が施されるキャリバー形深鉢口縁部片や敲打磨石などが出土している。

#### R A 277 竪穴住居跡（第37・38図）

**時期** 中期中葉 **位置** J 10 - I 5 区 **平面形** 不明  
**規模** 長軸 7.01 m 以上、短軸 5.41 m 以上、深さ 0.31 m  
**重複遺構** R A 242・243・248・249・274 I 期・274 II 期・276・R D 520  
**掘込面** 前平 **床面の状態** ほぼ平坦  
**土器埋設炉** 中央部付近に構築される。石組部は長方形を呈し、口縁部・底部を大きく欠いた深鉢が正立して埋設される（第116図1）。  
**ピット** P 1~47 が検出されている  
**埋土** A~H層に大別され、A~C層は竪穴・炉埋土、D層は周溝埋土、E~H層はピット埋土である。  
**出土遺物（第116図1~8）** 1は石開炉内に埋設された深鉢で、地文には単節繩文が縦位に施される。2は両面全周縁から剥離整形が施される石槍である。3は背面端部に押圧剥離が施される円形搔器である。4は疊皮面を残す流紋岩製の石核である。5は横刃の石匙で、機能部を欠くが両面全周縁に入念な調整剥離が施される。6は平基の石鎌、7は石錐で、両面に入念な押圧剥離が施される。8は機能部欠損の石鎌で、両面全周縁から剥離整形が施される。  
このほか図示していないが、石棒などが出土している。

#### R A 279 竪穴住居跡（第33図）

**時期** 中期中葉 **位置** J 9 - J 23 区 **平面形** 不明  
**規模** 長軸・短軸不明、深さ 0.16 m  
**重複遺構** R A 233 I 期・233 II 期・253・261・269 I 期・269 II 期・270・273・288  
**掘込面** 前平 **床面の状態** ほぼ平坦 **炉** 不明  
**ピット** P 1・2 が検出されている  
**埋土** A・B層に大別され、A層は竪穴埋土、B層はピット埋土である。  
**出土遺物** 図示していないが、原体圧痕が施される小形深鉢口縁部片、頁岩製の石核や剥片などが出土している。

#### R A 281 竪穴住居跡（第38図）

**時期** 中期初頭 **位置** J 10 - I 10 区 **平面形** 圓丸長方形  
**規模** 長軸 4.17 m・短軸 3.05 m、深さ 0.35 m **重複遺構** なし  
**掘込面** 前平 **床面の状態** ほぼ平坦  
**地床炉** 中央部付近に認められる **ピット** P 1~3 が検出されている  
**埋土** A~D層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C層は周溝埋土、D層はピット埋土である。

**出土遺物（第 117 図 1～第 125 図 54）** 1～5 は弁状突起を持つ深鉢で 4 単位の波状口縁を呈する。1 は口縁部文様帶にボタン状貼付文に加飾された半截竹管による押引文・菱形文・波状文が連結して展開し、体部には弧状文と結束を持つ縦位の単節繩文が施される。2 は隆線と半截竹管文による三角形の区画文が全面に展開し、地文には単節繩文が施される。3 は体部下半から底部欠損で、口縁部文様帶は刻目文・原体圧痕に加飾された隆線により体部と区画される。体部には結束を持つ縦位の単節繩文が施される。4 は口唇部下にボタン状貼付文に加飾された隆線と 2 条 1 組の原体圧痕が施され、波頂部からは Y 字状の隆線が垂下する。体部には単節繩文が横位に施される。5 は口縁部文様帶に原体圧痕が平行する隆線による区画文が展開し、波頂部下には波状文が垂下する麻手状文が施される。地文には単節繩文が横位に施される。6・7 は 2 個 1 対で 4 単位の波状口縁を呈する深鉢である。6 は口縁部文様帶に隆線による麻手状・菱形状の区画文が展開し、文様区画内には原体圧痕による多条の平行線文・弧状文が施される。体部には結束を持つ単節繩文が横位に施される。7 は原体圧痕が並行する複合口縁を呈し、波頂部からは Y 字状の隆線が垂下する。口縁部文様帶は体部と段で区画され、地文には単節繩文が横位に施される。8 は屈曲する頭部から Y 字状に垂下する隆線に沿って原体圧痕による連弧文が施される深鉢部片である。地文には羽状繩文が縦位に施される。9～11 は口縁部に小突起を持つ深鉢である。9 の小突起はボタン状貼付文に加飾され、口縁部文様帶は原体圧痕が並行する隆線により体部と区画される。地文には単節繩文が巡る。10 はボタン状貼付文に加飾された小突起から隆線が垂下し、口唇部下には 2 条の原体圧痕が施される。地文には単節繩文が縦位に施され、底部に木葉痕が認められる。11 は二山突起を持つ口唇部下に多条の原体圧痕が巡り、体部には口縁部文様帶から垂下する逆 T 字状の原体圧痕が施される。地文には単節繩文が横位に施される。12～18 は口唇部が平坦に調整される深鉢で、口縁部文様帶には原体圧痕を主体とする文様が展開する。12 は口唇部より垂下する波状文と原体圧痕が並行する隆線による区画が展開し、地文には結束を持つ単節繩文が縦位に施される。13 は逆 Y 字状の懸垂文と隆線による区画文内に連弧文が施され、体部には単節繩文が斜位に施文される。14 は体部下半から底部欠損で、貼付文に加飾される矢羽状の原体圧痕が横位に展開する。15～17 は口唇部下に 2 条の原体圧痕が巡り、地文には単節繩文が横位に施される。18 はキャリバー形深鉢で、口縁部文様帶には原体圧痕による 2 条の平行線文・楕円状文・弧状文が横位に展開する。19・20 は舟形状を呈した土器である。19 は小波状口縁を呈し、体部は無文となる。20 は 2 個 1 対で 2 単位の大波状口縁を呈し、口縁部にかけて大きく聞く大形の器形のものである。波頂部下には隆線による V 字状文が垂下する。口唇部下には原体圧痕による 2 条の平行線文が巡り、地文には単節繩文が横位に施される。21～25 は浅鉢である。21 は口縁部下に狭い無文帯が設けられ、刻目文を施す隆線により体部と区画される。地文には横位の単節繩文が施される。22 は口唇部下に原体圧痕が並行する隆線が巡り、小渦巻文・連弧文が垂下する。地文には結束を持つ縦位の単節繩文が施される。23 は口唇部下に 2 条の原体圧痕が巡り、地文には横位の単節繩文が施される。24・25 は無文の浅鉢である。26～28 は体部に地文のみが施される深鉢である。26 は口縁部下に 4 つの小突起を持ち、地文には単節繩文が縦位に施される。27 は屈曲する頭部に段を持ち下半と区画され、地文には横位の無節繩文が施される。28 は

体部上半欠損で、地文には縦位の単節繩文が施される。29・30・32はミニチュア土器である。29は口縁部欠損で、地文に縦位の複節繩文が施される。30は器面全体に矢羽状の沈線文が不規則に施される。32は指頭押圧による整形痕が残る鉢状を呈したミニチュア土器である。31は内部にアスファルト状のものが付着する小形深鉢底部で、底部には貫通孔が認められる。

33～38は石鏃で、33～37は基部に抉りのある石鏃、38は有茎の石鏃である。33・34は一次剥離面を残すが、一様に両面に入念な押圧剥離が施される。39は石錐で、機能部には入念な調整剥離が施される。40～45は石匙で、40・45は横刃、41～44は縦刃を呈する。41は黒曜石製で、40～45のつまみ部は入念な押圧剥離により作り出され、40・42～45の両面端部には刃部調整剥離が施される。46は背面端部に刃部調整剥離が施される搔器である。47・48は梢円形、49は刃部の両端が突出する三角形状を呈する石箒で、両面全周縁から剥離整形が施される。50は頁岩製の石核である。51～53は敲打磨石で、52・53は一辺に磨面を持ち、51・52の縁辺には敲打痕と敲打による剥離痕が見られる。54は靴形状を呈する砂岩製の石製品である。扁平な砂岩を素材としたもので、基部には貫通孔が穿たれる。

このほか図示していないが、耳栓や複数の土製円盤、石棒などが出土している。

#### R A 282 炉跡（第 16 図）

時 期	不明	位 置	J 10 - J 9 区	平 面 形	不 明	規 模	不 明
重複遺構	R A 283	掘 込 面	削 平	床 面 の 状 態	ほぼ平坦		
石 圈 炉	残存する石組部は長方形を呈する	埋 土	A 層は炉埋土である				
出土遺物（第 116 図 9）	9 は床面から出土した礫皮面を残す珪岩製の石核で、縁部には擦痕が認められる。このほか図示していないが、複合口縁や刻目文、短沈線などが施される深鉢土器片が出土している。						

#### R A 283 竪穴住居跡（第 39 図）

時 期	中期前葉	位 置	J 10 - K 9 区	平 面 形	不 明		
規 模	長軸 4.83 m 以上・短軸 3.97 m 以上	重複遺構	R A 252・282・285				
掘 込 面	削 平	床 面 の 状 態	ほぼ平坦	ビ ッ ト	P 1～8 が検出されている		
石 圈 炉	中央部付近に構築され、残存する石組部は梢円形を呈する						
埋 土	A～C 層に大別され、A 層は炉埋土、B・C 層はビット埋土である。						
出土遺物	図示していないが、半截竹管文が施される深鉢口縁部片や頁岩の剥片が出土している。						

#### R A 285 竪穴住居跡（第 39 図）

時 期	中期前葉	位 置	J 10 - K 10 区	平 面 形	不整方形？		
規 模	長軸 2.97 m 以上・短軸 1.46 m、深さ 0.21 m	重複遺構	R A 282・283				
掘 込 面	削 平	床 面 の 状 態	ほぼ平坦	炉	不明		
ビ ッ ト	なし	埋 土	A 層は竪穴埋土である				
出土遺物（第 116 図 10）	10 は背面両側縁に刃部調整剥離が施される削器である。このほか図示して						

いないが、原体圧痕が施される深鉢口縁部片などが出土している。

#### R A 286 竪穴住居跡（第39図）

時 期	中期前葉	位 置	J 9 - K 25 区	平 面 形	不 明
規 模	長軸 3.32 m 以上・短軸 1.02 m 以上、深さ 0.09 m				
重複遺構	R A 253・258 I～III期・258 V期・259・262				
掘 込 面	削平	床面の状態	はは平坦	炉	不明
ピット	P 1～21	が検出されている			
埋 土	A・B層に大別され、A層はさらに3層に細別される。				
出土遺物	図示していないが、原体圧痕が施される深鉢口縁部片や礫石器などが出土している。				

#### R A 287 竪穴住居跡（第40図）

時 期	中期中葉	位 置	J 9 - O 21 区	平 面 形	不 明
規 模	長軸・短軸不明、深さ 0.34 m	重複遺構	R A 224・290・R D 517		
掘 込 面	削平	床面の状態	はは平坦	炉	なし
ピット	なし	埋 土	A層は竪穴埋土である		
出土遺物	図示していないが、沈線による区画文が施される深鉢片と頁岩の剥片が出土している。				

#### R A 288 竪穴住居跡（第33図）

時 期	不明	位 置	J 9 - J 24 区	平 面 形	不 明
規 模	長軸・短軸不明、深さ 0.09 m				
重複遺構	R A 244・251・253・259・261・273				
掘 込 面	削平	床面の状態	はは平坦	炉	不明
埋 土	A・B層に大別され、ともに竪穴埋土である。			出土遺物	なし

#### R A 289 竪穴住居跡（第40図）

時 期	中期後葉	位 置	J 9 - N 23 区	平 面 形	不整円形?
規 模	長軸 2.81 m・短軸 2.87 m 以上、深さ 0.27 m				
重複遺構	R A 258 III期・265・290・R E 260・291				
掘 込 面	削平	床面の状態	はは平坦		
石 囲 炉	中央部付近より北東寄りに構築され、残存する石組部は楕円形を呈する				
ピット	P 1～18	が検出されている			
埋 土	A～F層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C～F層はピット埋土である。				
出土遺物（第116図 11・12）	11は口縁部にかけて直線的に外傾する深鉢口縁部片で、口唇部は平坦に調整される。口唇部の無文帶下には単節縄文が縱位に施される。12は沈線による逆U字状または楕円状の文様が施される深鉢体部片である。地文には複節縄文が施されるが、文様区画外の地文は磨り消される。このほか図示していないが、渦巻文・短沈線が施される深鉢土器片や敲石などが出土している。				

#### R A 290 竪穴住居跡（第40図）

時 期 中期後葉 位 置 J 9 - N 22 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸・短軸不明、深さ 0.35 m 重複遺構 R A 224・287・289  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明  
ピ ット P 19～25 が検出されている  
埋 土 A～E層に大別され、A層は竪穴埋土、B～E層はピット埋土である。  
出土遺物（第116図 13～15） 13～15は沈線による逆U字状または楕円状の文様が施される深鉢体部片で、文様区画外の地文は磨り消される。このほか図示していないが、同一母岩の頁岩の剥片が多量に出土している。

#### R E 291 竪穴住居跡（第40図）

時 期 不明 位 置 J 9 - O 24 区 平 面 形 円形?  
規 模 長軸 1.89 m・短軸 1.17 m以上、深さ 0.13 m 重複遺構 R A 289  
掘 込 面 削平 床面の状態 凹凸が激しい ピ ット P 26～28 が検出されている  
埋 土 A・B層に大別され、A層は竪穴埋土、B層はピット埋土である。  
出土遺物 図示していないが、沈線による連弧文が施される深鉢片と頁岩の剥片が出土している。

#### R A 292 竪穴住居跡（第41図）

時 期 不明 位 置 J 9 - H 21 区 平 面 形 不明  
規 模 長軸 3.82 m・短軸 0.72 m以上、深さ 0.08 m 重複遺構 なし  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦 炉 不明  
ピ ット P 1・2 が検出されている  
埋 土 A層はピット埋土である 出土遺物 なし

#### R E 293 竪穴住居跡（第42図）

時 期 中期前葉 位 置 K 9 - P 5 区 平 面 形 不整円形?  
規 模 長軸 2.14 m以上・短軸 0.88 m以上、深さ 0.08 m 重複遺構 R D 377・379  
掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦 ピ ット なし  
埋 土 A層は竪穴埋土である  
出土遺物（第116図 16） 16は口唇部が平坦に調整され、口縁部にかけて内湾する浅鉢の口縁部片である。口唇部下には狭い無文帯が設けられ、交互刺突を施す陸線により体部と区画される。地文には継位の単節縄文が施される。このほか図示していないが、頁岩の剥片などが出土している。

## (2) 繩文時代の土坑（第42～50図）

縄文時代の土坑は調査区全域で検出されているが、その多くは第36次調査区北東部、第33・34次調査区において集中的に検出される。土坑は形状から大きく3形状（円形・楕円形・溝状）に分類される。本報告書では概要を記し、規模等については第1～3表にまとめた。

**円形土坑** 平面形が円形を呈する土坑は遺跡全域より検出されているが、特に第36次調査区北東部に集中する。

検出された円形土坑は、断面形状がフ拉斯コ形を呈するもの（RD 377・379・390・399・403・415・417・423・426・427・429・433・434・453・461・473・498・515・517・520・521・535・539・542・544・546）と、壁が外傾するもの（RD 378・381～389・392・394・395・400～402・410～413・419・421・425・436・446・448～450・455・456・464～466・470・472・473・475・476・478～483・486～490・492・494・495・505・509・510・512・513・516・518・527・529・547・549）に分けられる。

**楕円形土坑** 平面形が楕円形を呈する土坑は、第33・34次調査区より数多く検出された（RD 391・393・396～398・405・407～409・414・420・422・428・431・432・437～443・445・447・451・452・454・457～460・462・463・467・469・471・474・477・484・485・491・493・496・497・499・501～504・506～508・511・519・522～526・528・531～533・536～538・540・541・543・548）。

楕円形土坑からはヒスイ垂飾品（RD 451土坑、第128図8）が出土するなど、土坑墓である可能性がある。楕円形土坑が集中して発見された第34次発掘調査区では、ヒスイ・蛇紋岩製の玉類が出土しており（第150図109・110）、特別な区域であることが考えられよう。このことから、第33・34次調査区を含めた周辺地区は縄文中期の墓域である可能性が考えられる。その地域は段丘北東端にあたり、墓域の外側には層状に堅穴住居城が展開していることが確認されつつある。

**出土遺物（第126図1～14）** 1は体部上半に沈線によるアルファベット状の区画文が横位に展開する深鉢口縁部片で、区画文内には単節縄文が充填施文される。2は両面端部に調整剥離が施される削器である。3～5は口唇部が平坦に調整され、口縁部文様帯が刻目文を施す隆線により体部と区画される深鉢である。3は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部の区画内には斜位の短沈線が充填施文される。体部の地文には結束を持つ単節縄文が綴位に施される。4は体部下半から底部欠損の頭部に屈曲を持つ深鉢で、口縁部下には多条の平行沈線が施される。体部の地文には結束を持つ羽状縄文が綴位に施される。6は無文のミニチュア土器である。7は削器または両面加工石器で、両面に入念な調整剥離が施される。8・9は石錐で、8は背面機能部に調整剥離が施される。9は礫皮面を残す石錐で、腹面端部には調整剥離が施される。10は平行沈線による波状文と渦巻文が連結して施される深鉢口縁部片である。11は砂岩製の棒状石製品で、端部に3つの孔が穿たれる。12は地文に綴位の単節縄文が施される深鉢底部である。13は一次剥離面を残す搔器で、両面端部には調整剥離が施される。14は断面形状が三角形を呈する棒状の石錐で、機能部には入念な調整剥離が施される。

(第127図1～7) 1・3・4は弁状突起を持つ土器片で、3は浅鉢、4はキャリバー形深鉢である。口縁部文様帶には原体圧痕が平行する隆線による山形状・弧状の区画文が展開し、4の文様区画内には原体圧痕による渦巻文・連弧文が連結して施される。2は継位の単節縄文が施される深鉢体部である。5・6は同一個体のキャリバー形深鉢片で、口唇部は平坦に調整される。口縁部文様帶には原体圧痕が平行する隆線による渦巻文・連弧文が連結して展開する。7は扁平な円碟に抉りを入れた石鍤である。

(第128図1～13) 1は複合口縁を呈する深鉢口縁部片で、口唇部の小突起からは渦巻文と隆線が連結して垂下する。口縁部文様帶は体部と段で区画され、地文には単節縄文が継位・横位に施される。2は削器または両面加工石器で、両面に調整剥離が施される。3は下端に抉りを持つ両面加工石器である。4～6は深鉢の土器片を剥離加工した土製円盤である。7は打製石斧で、剥離整形後に敲打による整形を施すものである。8は鰐節形のヒスイ製大珠である。片面には2方向からの擦切痕がみられることから、素材からの切り離しが擦切技法によるものであることがわかる。9は石核様土器で、腹面には擦痕が認められる。10は敲石で、粗い剥離により半円状に整形される。11は側面に貫通孔を持つ土偶脚部で、体形に沿って円形刺突列が施される。12は口縁部にかけて窄まる一輪押し状の小形土器体部片で、内外面に朱痕が認められる。体部上半には沈線による区画文が横位に展開し、地文には単節縄文が施される。13は刃部欠損の斧状土器品で、基部に孔を持つ。地文には継位の単節縄文が施される。

(第129図1～13) 1は板状土偶脚部で、両面に沈線による平行沈線・渦巻文・円形刺突列が施される。2は有茎、10・12は基部に抉りのある石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。3・11は楕円状を呈する石鎧で、両面周縁より剥離整形が施される。4は削器で、両面に調整剥離が施される。5は内外面に漆膜が認められる小形深鉢体部片である。体部上半には隆沈線による区画文が展開し、区画内には単節縄文が充填施文される。6は衝撃剥離が認められる磨製石斧である。7は軟質のシルト岩製の石冠である。断面は三角形状を呈し、側面に擦痕状の陰刻と敲打痕が認められる。8は背面全周縁に刃部調整剥離が施される搔器である。9は粒状の貼付文に加飾された複合口縁を呈する深鉢で、口唇部は平坦に調整される。地文には単節縄文が体部上半のみに施される。13は体部下半から底部欠損の深鉢で、口唇部は平坦に調整された複合口縁を呈し頭部に屈曲を持つ。口縁部文様帶は刻目文を施す隆線により体部と区画され、区画内には継位の原体圧痕が充填施文される。地文には結束を持つ単節縄文が継位に施される。このほか図示していないが、両端を欠く石棒（RD 520 土坑）や土玉（RD 535 土坑）などが出土している。

遺構番号	平面形	規模		深さ(m)	時期	備考
		上端(m)	下端(m)			
RD377	不明(フラスコ)	1.90	1.80	0.40	後期初頭	第37-121図
RD378	円形	0.72	0.61	0.31	中期初頭	第37図
RD379	円形(フラスコ)	1.99	1.87	0.49	中期初頭	第37-121図
RD380	方形?	—	1.49	0.14	中期初頭	第37図
RD381	円形	0.71	0.63	0.62	中期初頭	第37-121図
RD382	円形	0.81	0.76	0.11	中期初頭	第37図
RD383	円形	2.09	1.97	0.19	中期初頭	第37-121図
RD384	円形	0.56	0.44	0.27	中期初頭	第37-121図
RD385	円形	0.95	0.84	0.23	中期初頭	第37図
RD386	円形	0.64	0.47	0.17	中期初頭	第37図
RD387	不整円形	0.64	0.51	0.22	中期初頭	第37図
RD388	円形	0.64	0.54	0.20	中期初頭	第37図
RD389	円形	0.98	0.84	0.45	中期初頭	第37図
RD390	横円形(フラスコ)	1.82 × 1.73	2.01 × 1.80	0.30	中期初頭	第37-123図
RD391	横円形	1.95 × 1.89	1.77 × 1.30	0.35	中期初頭	第37図
RD392	不整円形	0.97	0.71	0.40	中期初頭	第37図
RD393	横円形	0.76 × 0.61	0.69 × 0.48	0.47	中期初頭	第37-121図
RD394	円形?	0.46	0.40	0.09		第37図
RD395	円形	0.80	0.69	0.11	中期初頭	第37図
RD396	横円形	0.89 × 0.82	0.71 × 0.62	0.37	中期初頭	第37図
RD397	不整横円形	0.69 × 0.43	0.59 × 0.35	0.11	中期初頭	第37図
RD398	横円形	0.79 × 0.48	0.64 × 0.35	0.17	中期初頭	第37-121図
RD399	不整円形(フラスコ)	1.29	1.65	0.60	中期初頭	第37-121図
RD400	円形	1.05	0.97	0.59	中期初頭	第37図
RD401	不整円形	0.87	0.62	0.40	中期初頭	第37図
RD402	不整円形	1.03	0.89	0.63	中期初頭	第37図
RD403	横円形(フラスコ)	0.61 × 0.33	0.53 × 0.35	0.31	中期初頭	第37図
RD404	不明	0.68	0.64	0.21		第38図
RD405	不整横円形	1.50 × 0.97	1.20 × 0.71	0.41	中期初頭	第38図
RD406	不明	0.71	0.61	0.17	中期初頭	第38図
RD407	横円形?	1.14	0.91	0.06	中期初頭	第38図
RD408	横円形	1.94 × 1.19	1.97 × 1.07	0.50	中期初頭	第38-123図
RD409	横円形?	0.74	—	0.23	中期初頭	第38図
RD410	不整円形	1.15	0.98	0.39	中期初頭	第38図
RD411	円形?	0.74	0.68	0.08	中期初頭	第38図
RD412	円形	0.68	0.58	0.16	中期初頭	第38図
RD413	円形	0.85	0.68	0.38	中期初頭	第38-121図
RD414	横円形	0.89 × 0.50	0.85 × 0.46	0.62	中期初頭	第38-123図
RD415	円形?(フラスコ)	0.36	0.25	0.62		第38図
RD416	不明	0.81	0.68	0.36	中期初頭	第38図
RD417	不整円形(フラスコ)	1.27	1.23	0.46	後期初頭	第38図
RD418	円形(フラスコ)	0.88	0.82	0.47	中期初頭	第38図
RD419	円形	0.76	0.54	0.29	中期初頭	第38図
RD420	横円形	0.80 × 0.77	0.71 × 0.62	0.24	中期初頭	第38図
RD421	円形	0.53	0.46	0.17		第38図
RD422	横円形	0.88 × 0.34	0.72 × 0.24	0.22		第38図
RD423	横円形(フラスコ)	1.54 × 1.01	2.41 × 2.10	1.21	中期中葉	第38-122図
RD424	不明	1.42	—	0.42	中期初頭	第38図
RD425	円形?	0.56	0.37	0.56	中期初頭	第38図
RD426	円形(フラスコ)	0.85	1.57	0.79	中期後葉	第38図
RD427	不整円形(フラスコ)	0.82	1.22	1.09	中期初頭	第38図
RD428	横円形?	0.93 × 0.42～	0.88 × 0.38～	0.29	中期初頭	第38図
RD429	不明(フラスコ)	1.74	1.50	0.73	中期初頭	第38図
RD430	不明	1.30	1.00	0.34		第38図
RD431	横円形?	0.97	0.93	0.26	中期初頭	第38図
RD432	横円形	0.77 × 0.60	0.61 × 0.47	0.15		第38図
RD433	不明(フラスコ)	1.32	1.10	0.30	中期中葉	第38図
RD434	円形?(フラスコ)	0.95	0.80	0.68	中期初頭	第38図

第1表 繩文時代土坑計測表

遺構番号	平面形	規模		深さ (m)	時期	備考
		上端 (m)	下端 (m)			
RD435	不明	0.60	0.46	0.14	中期初頭	第38図
RD436	円形?	0.52	0.38	0.16	中期初頭	第38図
RD437	楕円形?	0.88 × 0.61	0.80 × 0.58	0.21	中期初頭	第38・123図
RD438	楕円形	1.52 × 0.98	1.34 × 0.85	0.34	中期初頭	第38図
RD439	楕円形	0.66 × 0.52	0.52 × 0.35	0.11	中期初頭	第38図
RD440	不整楕円形	1.06 × 0.77	0.84 × 0.54	0.15	中期初頭	第38図
RD441	楕円形?	0.74 × 0.51	0.64 × 0.50	0.07	中期初頭	第38図
RD442	楕円形	1.05 × 0.61	0.91 × 0.49	0.29	中期初頭	第38図
RD443	楕円形	0.81 × 0.50	0.76 × 0.39	0.09		第38図
RD444	不明	0.49	0.37	0.24		第38図
RD445	楕円形	1.23 × 0.88	0.92 × 0.57	0.33	中期初頭	第38図
RD446	円形	1.28	0.99	0.32	中期初頭	第38図
RD447	楕円形	1.02 × 0.64	0.88 × 0.55	0.15	中期初頭	第38図
RD448	円形	1.26	1.18	0.21		第38図
RD449	円形	0.91	0.82	0.48	中期初頭	第38図
RD450	不整円形?	0.90	0.84	0.23	中期初頭	第38図
RD451	楕円形	1.22 × 0.94	1.07 × 0.67	0.19	中期初頭	第38・123図
RD452	不整楕円形	0.71 × 0.58	0.68 × 0.52	0.21	中期初頭	第38図
RD453	楕円形(フラスコ)	0.70 × 0.50	0.68 × 0.56	0.65	中期初頭	第38図
RD454	楕円形	0.92 × 0.63	0.80 × 0.56	0.08	中期初頭	第38図
RD455	不整円形?	1.29	1.09	0.21	中期初頭	第38図
RD456	不整円形	1.06	0.92	0.24	中期初頭	第38図
RD457	楕円形	0.91 × 0.64	0.81 × 0.52	0.17	中期初頭	第38図
RD458	楕円形	1.26～× 0.83	1.09～× 0.67	0.33	中期初頭	第38図
RD459	楕円形	0.92～× 0.91	0.82～× 0.83	0.20	中期初頭	第38図
RD460	楕円形	0.99 × 0.54～	0.80 × 0.53～	0.13	中期初頭	第38図
RD461	楕円形(フラスコ)	0.50 × 0.47	0.69 × 0.66	0.50	中期初頭	第38図
RD462	楕円形	0.78 × 0.66	0.73 × 0.48	0.58		第38図
RD463	楕円形	1.05 × 0.78	0.96 × 0.67	0.14		第38図
RD464	不整円形	0.92	0.78	0.15	中期初頭	第38図
RD465	円形	1.26	1.09	0.25	中期後葉	第1図
RD466	円形?	1.06	0.92	0.17		第1図
RD467	楕円形?	1.42 × 0.56～	1.23 × 0.48～	0.44		第1図
RD468	不明	0.74	0.65	0.20	中期中葉	第1図
RD469	楕円形	1.04～× 0.75	0.96～× 0.44	0.31		第1図
RD470	不整円形	0.97	0.69	0.30		第39図
RD471	楕円形	0.75 × 0.62	0.62 × 0.47	0.23	中期末葉	第39図
RD472	円形	0.65	0.39	0.42	中期末葉	第39図
RD473	円形(フラスコ)	0.60	0.48	0.83	中期末葉	第39・123図
RD474	楕円形	0.84 × 0.58	0.34 × 0.27	0.57		第39図
RD475	円形	0.92	0.80	0.40		第39図
RD476	円形	0.84	0.58	0.57	中期後葉	第39図
RD477	楕円形	1.02 × 0.71	0.78 × 0.36	0.50	中期末葉	第39図
RD478	円形	1.61	1.32	0.31	中期後葉	第39・123図
RD479	円形	0.72	0.53	0.47		第39図
RD480	円形	0.85	0.55	0.46	中期後葉	第39・123図
RD481	円形	0.71	0.48	0.36	中期末葉	第39図
RD482	円形	0.94	0.46	0.94	中期末葉?	第39図
RD483	不整円形	0.95	0.59	0.33	中期初頭	第39図
RD484	楕円形	1.14 × 0.85	0.75 × 0.68	0.44		第39図
RD485	不整楕円形	0.81 × 0.64	0.71 × 0.53	0.54		第39図
RD486	円形	0.82	0.49	0.50	中期後葉	第39図
RD487	円形	1.62	1.56	0.45	中期末葉	第39・124図
RD488	円形	0.84	0.62	0.53	中期末葉	第39図
RD489	円形?	0.66	0.42	0.44	中期後葉	第39・123図
RD490	円形	0.80	0.48	0.48	中期後葉	第39図
RD491	楕円形	0.78 × 0.66	0.40 × 0.40	0.55	中期後葉	第39・123図
RD492	円形	0.71	0.51	0.63	中期後葉	第39図

第2表 繩文時代土坑計測表

遺構番号	平面形	規模		深さ (m)	時期	備考
		上端 (m)	下端 (m)			
RD493	不整橢円形	0.81 × 0.66	0.67 × 0.46	0.41	中期末葉	第39図
RD494	円形	1.23	0.95	0.41	中期初頭	第40図
RD495	不整円形	0.95	0.62	0.18	中期末葉	第40図
RD496	橢円形	0.81 × 0.60	0.32 × 0.28	0.55		第40図
RD497	不整橢円形	0.85 × 0.62	0.65 × 0.48	0.35		第40図
RD498	橢円形(フラスコ)	1.55 × 1.20	1.52 × 1.26	0.92	中期末葉	第40図
RD499	橢円形	0.81 × 0.64	0.44 × 0.31	0.64		第40図
RD500	不明	1.15	0.34	0.37	中期末葉	第40図
RD501	不整橢円形	1.05 × 0.93	0.73 × 0.70	0.27	中期末葉	第40図
RD502	橢円形	0.94 × 0.75	0.56 × 0.54	0.58		第40図
RD503	橢円形	0.91 × 0.69	0.47 × 0.45	0.64		第40図
RD504	橢円形	0.60 × 0.30～	0.31 × 0.26～	0.84		第3図
RD505	円形	0.77	0.48	0.75	中期後葉	第3図
RD506	橢円形	0.66 × 0.33～	0.26 × 0.25～	0.38		第40図
RD507	橢円形	0.82 × 0.75	0.76 × 0.50	0.29		第3図
RD508	橢円形	1.16 × 0.92	0.84 × 0.54	0.42	中期中葉	第40図
RD509	円形	0.91	0.80	0.25	中期中葉	第5図
RD510	円形	0.92	0.56	0.39	後期初頭	第5図
RD511	橢円形	0.93 × 0.72	0.78 × 0.51	0.16		第5図
RD512	不整円形	0.86	0.52	0.33		第2図
RD513	円形	0.74	0.62	0.10		第4図
RD514	不明	0.88	0.63	0.27	中期後葉	第6-124図
RD515	円形(フラスコ)	1.12	1.22	0.34	中期後葉	第41図
RD516	円形	1.11	0.84	0.11		第41図
RD517	円形(フラスコ)	1.08	1.40	1.19	中期後葉	第35-124図
RD518	不整円形	1.02	0.72	0.24	中期後葉	第4図
RD519	橢円形	1.29 × 0.82	0.90 × 0.35	0.74	中期初頭	第22-23図
RD520	円形(フラスコ)	1.16	1.12	0.59	中期後葉	第32-33図
RD521	円形(フラスコ)	1.30	1.22	0.68	中期初頭	第14-15図
RD522	橢円形	0.56～× 0.51	0.41～× 0.32	0.22		第7図
RD523	不整橢円形	1.86 × 1.47	1.39 × 1.17	0.26	中期初頭	第31-124図
RD524	橢円形	1.17 × 0.84	0.80 × 0.37	0.65	中期後葉	第44図
RD525	橢円形	1.78 × 0.98	1.40 × 0.39	0.43	中期中葉	第15図
RD526	橢円形	2.02 × 1.62	1.79 × 1.45	0.18	中期初頭	第44図
RD527	円形	0.92	0.72	0.64		第29図
RD528	橢円形	2.10 × 1.56	1.90 × 1.33	0.20	中期初頭	第44-124図
RD529	円形	0.62	0.52	0.14		第35図
RD530	不明	0.56	0.36	0.12		第35図
RD531	橢円形？	1.73 × 0.28～	1.55 × 0.24～	0.38	中期中葉	第44図
RD532	橢円形	1.20～× 0.79～	1.07～× 0.69～	0.30	中期中葉	第44図
RD533	橢円形	1.43 × 0.66	1.11 × 0.52	0.21	中期中葉	第44図
RD534	不明	0.58	0.43	0.25		第44図
RD535	円形(フラスコ)	1.16	1.56	1.27	中期中葉	第44図
RD536	不整橢円形	0.92～× 0.59	0.72～× 0.59	0.16	中期中葉	第44図
RD537	不整橢円形	1.50 × 1.20	1.29 × 1.11	0.23	中期中葉	第44図
RD538	橢円形	0.84～× 0.65～	0.76～× 0.57～	0.17	中期中葉	第44図
RD539	円形？(フラスコ)	0.65	0.60	0.29	中期中葉	第44図
RD540	橢円形？	1.34～× 0.94～	1.31～× 0.86～	0.28		第45図
RD541	橢円形？	1.28～× 0.72～	1.14～× 0.70～	0.34	中期中葉	第45-124図
RD542	不明(フラスコ)	1.73	1.72	0.49	中期初頭	第45図
RD543	橢円形	1.11～× 0.92	0.97～× 0.71	0.44	中期中葉	第45-124図
RD544	円形？(フラスコ)	1.70	1.74	0.83	中期中葉	第45図
RD545	不明	0.85	0.78	0.27		第45図
RD546	不整円形(フラスコ)	1.62	1.92	0.85	中期初頭	第45-124図
RD547	円形	0.84	0.73	0.08		第45図
RD548	不整橢円形	—× 0.83	1.41～× 0.72	0.10	中期中葉	第45図
RD549	円形？	2.06	1.51	0.29	中期初頭	第45-124図

第3表 繩文時代土坑計測表

### (3) 繩文時代の埋設土器 (第50図)

#### R P O O 1 埋設土器 (第50図)

時 期 中期中葉 位 置 J 9 - V 14 区  
規 模 掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.21 m・下端 0.18 m、深さ 0.10 m をはかる。  
埋 土 内部には暗褐色土が堆積する。  
出土状況 深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。  
土 器 (第130図1) 1は地文に単節縄文が縦位に施される深鉢で、体部上半および底部は人為的に大きく壊される。

#### R P O O 2 埋設土器 (第50図)

時 期 中期中葉 位 置 J 10 - H 1 区  
規 模 掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.26 m・下端 0.22 m、深さ 0.25 m をはかる。  
埋 土 内部には暗褐色土が堆積しており、堆積土中には多量の炭化物・骨片が含まれる。  
出土状況 深鉢は正立の状態で埋設され、本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。  
土 器 (第130図2) 2は地文に単節縄文が縦位に施される深鉢で、体部上半および底部は人為的に壊される。

#### R P O O 3 埋設土器 (第50図)

時 期 中期前葉 位 置 J 10 - G 5 区  
規 模 掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.32 m・下端 0.10 m、深さ 0.32 m をはかる。  
埋 土 内部には暗褐色土が堆積する。  
出土状況 深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。  
土 器 (第130図3) 3は頭部に段が施され、緩やかに屈曲する深鉢である。口縁部は複合口縁を呈し、地文には単節縄文が横位に施される。

#### R P O O 4 埋設土器 (第50図)

時 期 中期前葉 位 置 J 10 - E 7 区  
規 模 掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.24 m・下端 0.17 m、深さ 0.20 m をはかる。  
埋 土 内部には黒褐色土が堆積する。  
出土状況 深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。  
土 器 (第130図4) 4は地文に単節縄文が斜位に施される深鉢で、口縁部から体部上半は人為的に壊される。

#### R P O O 5 埋設土器 (第50図)

時 期 中期前葉 位 置 J 10 - K 9 区 (R A 252 内)

- 規 模** 挖方は円形を呈し、掘方上端直径 0.27 m・下端 0.14 m、深さ 0.28 mをはかる。
- 埋 土** 内部には暗褐色土が堆積する。
- 出土状況** 深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。
- 土 器 (第 131 図 5)** 5は地文に複節縄文が斜位に施される深鉢で、口縁部から体部上半は人為的に壊される。

#### R P O O 6 埋設土器 (第 50 図)

- 時 期** 中期中葉 **位 置** J 9 - K 24 区
- 規 模** 挖方は不正円形を呈し、掘方上端直径 0.41 m・下端 0.26 m、深さ 0.24 mをはかる。
- 埋 土** 内部には暗褐色土が堆積する。
- 出土状況** 深鉢は正立の状態で埋設され、本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。
- 土 器 (第 131 図 6)** 6はキャリバー形深鉢で、口縁部および体部下半は人為的に壊される。口唇部は小突起を持ち、口唇部下の区画文内には刺突列が充填施文される。口縁部文様帯には隆沈線による波状文・蕨手状文が連結して横位に展開し、地文には複節縄文が縦位・横位に施される。

#### R P O O 7 埋設土器 (第 50 図)

- 時 期** 中期後葉 **位 置** J 9 - K 24 区
- 規 模** 挖方は不正円形を呈し、掘方上端直径 0.31 m・下端 0.16 m、深さ 0.19 mをはかる。
- 埋 土** 内部には黒褐色土が堆積する。
- 出土状況** 深鉢は正立の状態で埋設され、本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。
- 土 器 (第 131 図 7)** 7は地文に単節縄文が縦位に施される深鉢で、体部上半および底部は人為的に壊される。

#### (4) 繩文時代のピット群（第3・4図）

**出土遺物（第132図1～9）** 1は口縁部を欠く小形深鉢で、器面には平行沈線文が施される。地文には単節縄文が継位に施される。2は平基の石蹴で、両面に入念な押圧剥離が施される。3は継位の櫛目文が施されるミニチュア土器である。4は内面にアスファルトが付着する深鉢体部片である。アスファルトは条痕状に残ることから、バレットとして利用していたことが考えられる。5は体部下半から底部欠損の深鉢で、平坦に調整された口唇部下には無文帯を設ける。地文には体部上半に撚糸文、下半に単節縄文が施される。6は砂岩を利用した脚付石皿の一部である。7は体部上半を欠く深鉢で、羽状縄文が継位に施される。8は板状の石錐で、機能部欠損後に削器として再利用された可能性がある。9は深鉢の土器片を剥離加工した土製円盤である。このほか図示していないが、両端を欠く石棒（P 293）や石冠（P 682）などが出土している。

## (5) 繩文時代の遺物包含層（第 133～150 図）

**遺物包含層** 繩文遺跡第 29・33・34・36・37 次調査では、縩文時代前期から弥生時代、平安時代の遺物が確認された。主体となるのは縩文時代中期の遺物群で、第 36 次調査区南西部では中期初頭から前葉にかけての遺物包含層が確認されている。（第 3 図）。

上位より現代の盛土、色調・混入物の違いによって I～IV 層に大別される。盛土は旧弊小学校建築に伴う盛土で、層厚は一定しないが第 36 次調査区北東部では約 60cm の盛土であった。

I 層は a・b 層に細分され、I a 層は黒褐色土を主体に、暗褐色土・褐色土が混入する混合土（旧耕作土？）。I b 層は黒褐色土を主体に、スコリア粒を含む暗褐色土が粒～塊状に混入する。層内には図示していないが、弥生時代の土器片、縩文時代前期から晩期の土器・石器が含まれる。

II 層は a・b・c の 3 層に細分され、II a 層には粒状の黄褐色土・褐色土と微細な炭化物が含まれ、縩文時代中期後葉（大木 10 式）以前の土器が多量に出土する。II b 層は暗褐色土を主体に、塊状の黒褐色土・褐色土・焼土粒・炭化物片を多量に含む混合土で縩文時代中期中葉以前（大木 7a～8a 式）の土器を主体的に含む。II c 層は II b 層に比べ黒褐色土が多く含まれ、包含される遺物は縩文時代中期初頭から前葉頃（大木 7a・b 式）の遺物が主体的になる。

III 層は赤褐色・黄褐色のスコリア粒を含む黒褐色土層で、局地的に硬く締まる。層の上部より縩文時代前期初頭から中期初頭にかけての土器が出土する。

IV 層は粘質のシルト質明黄褐色土を主体に安山岩・凝灰岩の小角礫（1mm～5cm）を含み、量は少ないが、玉隨や水晶も混入する層。

今回報告する調査箇所においては確認されなかったが、遺跡南東部の第 15 次調査区付近では本報告における IV 層上にスコリア粒を多量に含む暗褐色土層が形成されており、縩文時代早期の遺物が含まれることが確認されている。

**縩文時代前期（第 133 図 1～第 134 図 46）** 1～46 は縩文時代前期初頭の土器片で、胎土には纖維を多量に含む。1 は口唇部下に不整撚糸文が横位に施される。2 は口唇部に刺突列、3～5 には原体压痕が施され、1～5・7～9 の地文には条と筋が整然と表出する所謂「びっちり縩文」が施される。6 は口唇部下に狭い無文帶を設け、地文には羽状縩文が縦位に施される。

10～12 は口唇部に小突起を持ち、波状口縁を呈する。口唇部下には刻目文が施され、11・12・16～18 の地文には結束を持つ単節縩文、13・19～20 には羽状縩文が横位に施される。14・15・24 は口唇部下に刻目文が施され、24～37 の体部には横位の S 字状連鎖撚糸文が施される。

38 は半截竹管による菱形文内に刺突文が充填施文され、地文には結束を持つ単節縩文が縦位に施される。39 は複合口縁を呈し、器面には半截竹管の押引による長楕円状文が横位に描かれる。

40 は口唇部下に半截竹管による平行線文・鋸歯縩文が横位に施される。41 は口唇部下に

押引文に加飾された隆線が巡る。42は口唇部に押引文に加飾されたボタン状の小突起を持ち、器面には半截竹管による斜位の平行線文が充填施文された区画文が展開する。43は口唇部下に刻目文が施される。44の体部には羽状縄文が横位に施される。45・46は口唇部下に狭い無文帯を持つ。

**縄文時代中期（第134図47～第141図78）** 47は体部下半から底部欠損の深鉢で、4単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帶は押引文を施す隆線により区画され。区画文内には半截竹管による多条の平行線文が充填施文される。体部の地文には結束を持つ無節縄文が縦位に施される。48は口縁部が直線的に外反し、口縁下に膨らみを持たせるキャリバー形深鉢で、体部は直線的に底部に至るものである。複合口縁の波状口縁を呈し、口縁部文様帶には刻目文を施す隆線による山形文・渦巻文が連結して横位に展開する。体部の地文には結束を持つ羽状縄文が縦位に施される。

49は底部欠損の深鉢で、4単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帶は段で体部と区画され、波頂部から垂下する隆帶と半截竹管文が連結して横位に展開する。体部には半截竹管による懸垂文が巡り、区画内には単節縄文が縦位に充填施文される。50は複合口縁を呈する口縁下に膨らみを持たせるキャリバー形深鉢で、体部下半から底部をくぐる直線的に底部に至るものと考えられる。口唇部に小突起を持ち、単節縄文のみが横位に施される。51は体部下半から底部欠損の深鉢で4単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帶にはボタン状貼付文・原体圧痕・半截竹管による押引文に加飾された隆線による区画が横位に展開する。体部にはボタン状貼付文に加飾されたY字状の隆線が上部文様帶より垂下し、地文には結束を持つ羽状縄文が縦位に施される。52は口唇部に小突起を持ち、口縁が直線的に外反する壺形を呈する深鉢で、屈曲する頸部は段で体部と区画される。小突起下には橈状把手様の貼付文が施され、器面には沈線による曲線的モチーフが描かれる。地文には横位の単節縄文が施される。53はボタン状貼付文、55は多条の原体圧痕文に加飾される複合口縁を呈する深鉢で、口唇部下には4単位の隆線による矢印状貼付文が施される。53の地文には体部上半に横位の無節縄文、下半に縦位の柳目文が施される。54は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部文様帶は体部と段で区画される。口縁部および体部文様帶には交互刺突文が施される隆線が垂下し、地文には単節縄文が縦位・横位に施される。56は口唇部に4単位の小突起を持つ深鉢で波状口縁を呈する。複合口縁を呈し、波頂部からは隆線による渦巻文と刻目を施す隆帶が垂下する。地文には単節縄文が施される。57は4単位の波状口縁を呈する小形深鉢で、屈曲する頸部は段で体部と区画される。波頂部からは隆線が垂下し、地文には単節縄文が横位に施される。

58・59は口唇部に二山突起を持つ小形深鉢である。58はキャリバー形を呈し、隆線により区画される口縁部文様帶には縦位の原体圧痕が並列して充填施文される。上部文様帶からは隆線が垂下し、地文には単節縄文が縦位に施される。59は口唇部下に狭い無文帯が設けられ、屈曲部の平行沈線により下位の体部文様帶と区画される。体部には沈線による連弧文・円文・懸垂文が連結して展開し、地文には単節縄文が施される。

60は緩やかな屈曲部を持つ橈形状を呈する無文の深鉢である。複合口縁を呈し、体部上半には貼付文に加飾された隆沈線が巡り下半と区画される。61～63・66・67は弁状突起を

持つ土器で4単位の波状口縁を呈し、61・62の波頂部には刻みが施される。61は体部下半から底部欠損のキャリバー形深鉢で、口縁部文様帶にはボタン状貼付文・原体圧痕に加飾された隆線による山形状の区画文が展開する。頭部には原体圧痕による連弧文が巡り、体部の地文には結束を持つ單節縄文が施される。62は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部文様帶は貼付文に加飾された隆沈線により体部と区画される。地文には区画内に横位の羽状縄文が充填施文され、体部には単節縄文が縱位・横位に施される。63は複合口縁を呈する深鉢で、口縁部文様帶には原体圧痕を施す隆線による区画文が横位に展開する。体部の地文には羽状縄文が縱位に施される。64・66は口唇部下に原体圧痕による鋸歯状の区画文が巡る浅鉢である。64の口唇部は平坦に調整され、体部の地文には64が横位、66が縱位の単節縄文が施される。65は渦巻文を施す4単位の把手を持つ浅鉢で、把手下には原体圧痕による蕨手状文が垂下する。口唇部下には原体圧痕が並行する隆線による区画文が横位に展開し、地文には単節縄文が縱位に施される。67は複合口縁を呈する浅鉢で、口縁部文様帶には原体圧痕を施す隆線による弧状の区画文・懸垂文が横位に展開する。区画内には原体圧痕による連弧文が充填施文され、地文には単節縄文が横位に施される。68は複合口縁を呈する無文の浅鉢である。

69・70は口唇部下に隆線による波状文を施す深鉢で、地文には縱位・横位の単節縄文が施される。69は複合口縁を呈し、体部上半には原体圧痕を施す隆線による弧状文・山形文の区画が連結して展開する。70は波頂部に孔が施されるキャリバー形深鉢で底部を欠く。口縁部文様帶には波頂部下に隆線による弧状文が垂下し、原体圧痕による刺突列・連弧文が展開する。71は渦巻文を施す4単位の把手を持つ浅鉢で、把手下には沈線によるクランク状の文様が垂下する。口唇部下には隆線による弧状の区画文が横位に展開し、区画内には原体圧痕が充填施文される。体部の地文には縱位・横位の複節縄文が施される。72は複合口縁を呈する浅鉢で、地文には単節縄文が縱位に施される。73は底部欠損のキャリバー形深鉢である。4単位の波状口縁を呈し、波頂部にはC字状突起が施される。口縁部文様帶には隆線による弦状文と付加する渦巻文が展開し、地文には単節縄文が縱位に施される。74は口縁部が内湾する器形の深鉢で、体部下半から底部を欠く。口唇部は平坦に調整され、口唇部下には刻目文・原体圧痕を施す隆帶が巡る。地文には単節縄文が施される。

75は体部下半から底部欠損のキャリバー形深鉢で、多条の平行線文により各部位が区画される。口唇部は平坦に調整され、口縁部および頭部には波状文が横位に展開し、体部には沈線による渦巻文・懸垂文が連結して描かれる。地文には縱位・横位の単節縄文が施される。76は頭部に無文帯を設けるキャリバー形深鉢である。口唇部は平坦に調整され、口縁部文様帶には隆沈線による有棘渦巻文と懸垂文が連結して描かれる。体部には横位の平行沈線文から垂下する波状文が巡り、地文には縱位・横位の単節縄文が施される。77・78は口縁部がラッパ状に聞く器形の小形深鉢で、口唇部下には無文帯が設けられる。77は2単位の大波状口縁を呈し、体部上半が大きく屈曲する。器面には隆沈線による渦巻文・円文・懸垂文が連結して展開し、地文には複節縄文が斜位に施される。78は体部に隆沈線による有棘渦巻文・懸垂文が連結して描かれ、地文には単節縄文が縱位に施される。

土製品(第141図79～第142図93・第150図113) 79～81はミニチュア土器である。79は鉢形を

呈する無文の土器片で、口唇部下には貫通孔が認められる。80は底部片で、地文には縦位の無節縄文が施される。81は無文土器で、内面に付着物が認められる。82～84は深鉢の土器片を剥離加工した土製円盤である。85は楕状を呈する無文の有孔土製品である。86は石冠状の土製品で、断面形状はアーチ状を呈する。側面には孔が穿たれ、下端に帯状の隆線が巡る。

87は腕部欠損の土偶上半部である。頭部は楕円形の皿状を呈し、貼付文により眉・胸が表現される。頭部および胸部には2対の貫通孔が施され、表裏には半截竹管による曲線的モチーフが左右対称に描かれる。88は腕部および体部下半欠損の板状土偶である。隆線により眉・貫通孔により目・指頭押圧により口が表現される。表面には多条沈線文が縦位に施され、裏面には鋸歯文が左右対称に描かれる。89は体部上半欠損の板状土偶である。胴部には脇の貼付痕が認められ、下端には抉りで脚が表現される。表裏には沈線文が体形に沿って左右対称に施される。90は頭部欠損の板状土偶である。表面には貼付文と貫通孔により胸・筋が表現され、裏面には刻目文が施される隆線が背中心に認められる。91・92は無文の土偶上半部で、貼付文と貫通孔により胸が表現される。92は楕円形で皿状の頭部を呈し、両腕部を欠損する。93は土偶下半部で、側面には2対の刺突が認められる。表裏には半截竹管による刺突列が左右対称に描かれる。

113は内面にアスファルトが付着する深鉢部片である。アスファルトは条痕状に残ることから、パレットとして土器片を利用していたことが考えられる。

このほか図示していないが、斧状土製品や土製円盤（39点）、土偶（14点）などが出土している。

**石器（第143図1～第149図102）** 1は有柄の石槍で、両面全周縁より入念な押圧剥離が施される。

2～39は石鎌で、2～8・10～32は有脚、9・35～38は有茎、33・34は平基、39は木葉形を呈する。5・22は黒曜石製で、3・36の基部にはアスファルトが付着する。6・9・11・15・23・31・33・34・38・39には一次剥離面が残っているが、一様に両面に入念な押圧剥離が施される。

40～58は石剣で、40～48は縦刃、49～56は横刃を呈する。41・44～46・49～53・55はつまみ部および背面機能部、54・56は両面全周縁に入念な押圧剥離が施され、41・46・50～53の腹面端部には刃部調整剥離が施される。40は背面全周縁および腹面右側縁、42は両面側縁、43・47はつまみ部、48は背面機能部に調整剥離が施される。57・58は異形石器である。

59～61は搔器である。59は両面全周縁、61は両面端部に押圧剥離による調整が施される。60は縁辺に敲打痕と敲打による剥離痕が認められる。

62～82は石鎧で、62・63・65・68・69・74・78・80・82は楕円形、64・70・73・76は刃部幅広形を呈する。62・65・66・69・71～75・79～82は両面全周縁、63・64・67・70・76・77は背面全周縁および腹面側縁、78は背面全周縁に剥離整形が施される。

83～87は削器である。83は屈曲をもつ削器で、腹面全周縁に入念な調整剥離が施される。84は縦長剥片の両側縁に刃部加工が施される。85は腹面左側縁、86・87は横長剥片の背面下端に刃部調整剥離が施される。

88～94は磨製石斧である。88は基部欠損で、刃部に擦痕が認められる。89は両極に敲打痕と衝撃剥離が見られる。92は擦切磨製石斧である。93は刃部欠損後、楔として転用したものか。95・96は打製石斧で、両面端部には整形剥離が施される。97～101は敲打磨石である。97・98・101は一辺に磨面を持ち、97～101の縁辺には敲打痕と敲打による剥離痕が認められる。102は安山岩製の石皿である。

**石製品（第150図103～112）** 103は砂岩製の小形の石皿で、表面縁部には溝状の条痕が認められる。

104・105は軟質のシルト岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。104の側面および底面には滴形の窪みが設けられ、端部に孔が穿れる。105の側面には擦痕状の陰刻と敲打痕が認められ、底面には細長い台形状を呈する陰刻が施される。106は蛇紋岩製の垂飾品である。107は鼻形状を呈する粘板岩製の石製品である。108は溶岩質安山岩製の環状石製品である。109は逆三角形を呈する蛇紋岩製垂玉である。110は基部に孔を持つ三角形を呈するヒスイ製小珠である。111は渦巻状の線刻が施されるシルト岩製の石製品である。112は放射状の彩色が施される粘板岩製の環状石製品である。このほか図示していないが、円盤状や斧状を呈する石製品、石棒（4点）などが出土している。

## (6) 平安時代の竪穴住居跡（第41図）

### R A 0 5 0 1 竪穴住居跡（第41図）

位 置	J 9 - I 23 区	平 面 形	西側に張り出し部を持つ方形	主軸方向	S 25° E
規 模	南 - 北上端 2.57 m・下端 2.21 m、東 - 西上端 2.85 m 以上・下端 2.48 m、深さ 0.36 m				
重複遺構	R A 233 I 期・244・253・273・288	掘 込 面	削平		
検出面	IV層上面	埋 土	A ~ E 層に大別され、ともに竪穴埋土である。		
壁の状態	外傾して立ち上がる	床面の状態	ほぼ平坦		
カマド	カマドは南東壁中央に位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部や煙出部より一段高い構造になっている。規模は南東壁から煙出し先端までの長さ 0.78 m・幅 0.49 m・深さ 0.50 m をはかる。燃焼部は角礫・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・黄褐色粘質土・白色粘土の混合土で石組部を補強する。規模は焚口 - 煙道基部 0.45 m・基底部幅 0.40 m・高さ 0.26 m（カマド残存部）をはかる。				
出土遺物（第41図1）	1 はロクロ成形による須恵器坏である。内面には火捺が観察され、底部切り離しは回転糸切無調整である。このほか図示していないが、土師器坏や須恵器長頸瓶の小片、環状石製品などが出土している。				

### III. 総括

#### 1. 縄文時代

繫V遺跡第29・33・34・36・37次発掘調査の結果、縄文時代中期初頭から末葉にかけての堅穴住居域と土坑域が確認された。検出された遺構数は縄文時代の堅穴住居跡70棟（RA 221～239・241～249・251～253・257～259・261～277・279・281～283・285～290・292、うち炉跡9基）、堅穴跡3棟（RE 260・291・293）、土坑173基（RD 377～549）、埋設土器7基（RP 001～007）、ピット735口である。

**堅穴住居跡** 堅穴住居は繫V遺跡が立地する段丘南西縁に沿うように集中して検出された。中期初頭から前葉にかけては縁辺部の緩い斜面部に、中期中葉以降になると段丘上の平坦部まで住居域が拡大する。特に、傾斜面から平坦部にかかる地形を選択するようで、時期を問わず堅穴住居が構築される。

**中期初頭～前葉** 堅穴住居のうち8棟（RA 267・274Ⅰ期・Ⅱ期・281・283・285・286・RE 293）は、出土した土器の特徴から中期初頭から前葉（大木7a～7b式）にかけて構築された堅穴住居跡と思われる。RA 281堅穴住居跡以外は平面形が長方形を呈し、長方形の石囲炉が伴う。RA 274堅穴住居跡は増改築があったものと思われ（Ⅰ・Ⅱ期）、Ⅰ期は北西～南東方向に長軸を持ち、Ⅱ期では北～南に長軸を変える。しかし、建替であった場合、Ⅰ期の北西端・南東端が窪みとなるため窪みを埋める必要性が考えられるが、調査においては人為的な埋土は確認できなかった。このため、RA 274Ⅱ期堅穴住居跡はRA 274Ⅰ期堅穴住居跡の埋没が進行した段階で、新たに構築された時期の近い堅穴住居跡とも考えることができる。また、RA 274Ⅱ期堅穴住居跡北東壁際より石棒を直立させた遺構が検出されている。祭祀的な意味を持つものと思われるが、用途については不明である。

**中期中葉** 今回の調査で最も多く検出された堅穴住居は、中期中葉（大木8a式）段階の堅穴住居（RA 229～231・233Ⅰ期・233Ⅱ期・237・238・241・245・246・248・251・258Ⅰ～VI期・259・261・262・264・269Ⅰ期・269Ⅱ期・270～273・275～277・279・287）である。重複により破壊され、全体形が残されているものは少ないが、RA 259堅穴住居跡のように長方形を呈するものが多いと思われる。また、RA 259堅穴住居跡では住居の長軸線、石囲炉の延長上で2基の伏甕が検出された。伏甕に転用された土器はキヤリバー形を呈するもので、大木8a式に特徴的な土器である。これまで盛岡市内では、大木8b式から大木9式前葉にかけての伏甕が検出されていたが、大木8a式期の伏甕検出例は少ない。盛岡市内では繫V遺跡第15次調査（盛岡市教委1995「繫遺跡-平成5・6年度発掘調査概報」）、川目C遺跡（未報告）より各遺跡1例検出されているに過ぎない。今回の調査では、RA 233Ⅰ期（1基）・258Ⅱ期（2基）・259（2基）堅穴住居跡の3棟より5個体出土するなど、検出例の少ない初期の伏甕埋設を知る上で重要な成果が得られた。

**中期後葉** 大木8b式期の堅穴住居が8棟（RA 234・239・242～244・252・253・263）、9式期の堅穴住居が9棟（RA 223・224・226・235・236・265・280・290・RE 260）検出された。

平面形は不整梢円形（R A 223・253）、多角形（R A 236）、長梢円形（R A 252）など多様である。大木9式期でも古段階に、燃焼部と前庭部をもつ所謂「複式炉」を持つ住居（R A 236・253）が構築される。住居内からは渦巻文を特徴とする深鉢が出土するため、大木8b式期のものとも思われるが、口唇部の装飾が退化、小渦巻文を起点とした梢円文の発達、大木8b式では有練であった文様が他文様との連続部に変化するなど、文様が変化する過程にある土器と思われる。そして、逆U字状文のみを描く土器も存在することから大木9式の範疇で考えても良い土器と思われる。このことから繫V遺跡における複式炉の出現は大木9式期以降と考えたい。

**中期末葉～後期初頭 繫V遺跡において住居が減少する時期である。大木10式期の堅穴住居が1棟（R A 222）。後期初頭の觀音堂式併行期の堅穴住居が3棟（R A 221・225・227）検出された。R A 225 堅穴住居跡以外は壁等が搅乱によって失われており、炉や部分的な壁の有無により確認されたものである。**

**土 坑** 縄文時代の土坑は調査区全域より検出されているが、第36次調査区北東部、第33・34次調査区において集中的に検出されている。特に第33・34次調査区には梢円形を呈した土坑が多い。R D 451 土坑内からはヒスイ製の大珠（第126図8）、土坑域の搅乱層からはヒスイ製小珠・蛇紋岩製垂玉（第150図109・110）など特殊な装飾品が出土している。

**出土遺物** 繫V遺跡ではこれまでの調査により縄文時代早期から晩期、弥生時代前期から後期、古墳時代（続縄文）、平安時代の遺物が出土している。今回の調査では縄文時代前期初頭から後期初頭にかけての土器が出土し、特に中期初頭（大木7a式）から中期後葉（大木9式）にかけての土器が主体的であった。また、各時期を通して石器の出土量が多いことも特徴的である。これは、繫遺跡群の立地する地域によるもので、遺跡背後の東根山山地からは頁岩・玉髓・凝灰岩・砂岩・水晶等が産出し、眼下の零石川でも円礫となった頁岩を容易に採集することができる。そのため、石器製作が盛んに行われており、今回の調査では13,000点（洞片を含む）を超える石器が出土している。また、付近で採取することができる砂岩等の軟質な石材を加工した石製品も多い。特に目を引くのが断面三角形を呈した所謂「石冠」で、出土総数22点（第53図19・第66図27・第71図44・第78図24～26・第87図42・第100図5・第102図15・第114図38・第129図7・第150図104、実測外10点）を数え、未完成品や破損品もあることから集落内で加工していたことが考えられる。

#### 土器について

**縄文時代前期** 遺構に伴うものはないが、調査区全域より土器破片が出土している（第133図1～第134図46）。千鶴II式に類似する繊維を多量に含む縄文土器（第133図1～9）、口縁部に突起を持ち、口唇部に刻目を持つ大木1～2b式併行と思われる土器群（第133図10～13）、大木2b式併行と思われる「S字状連鎖撚糸文」を特徴とする土器群が出土している（第133図14～第134図37）。盛岡市内において大木2b式に類似する土器の出土例は少なく、主な出土遺跡として向館・畑・薬師社脇・西黒石野・繫III遺跡があげられる。畑・西黒石野遺跡では隅丸長方形を呈した堅穴住居跡も検出されている（西黒石野遺跡については平成24年度に報告予定）。

**縄文時代中期** 中期初頭の大木7a式から中期末葉の大木10式に類似する土器、円筒上層c-

d式に類似する土器が出土している。

**大木7a式** 大木7a式に併行するものと思われる土器（第134図47～第135図52）は遺物包含層・遺構外より出土しているが、当該期の土器が伴う遺構はR D 379土坑（第42図）のみである。この段階の土器は、直線的な体部から大きく口縁部が外反するキャリバー形深鉢（第134図48）に強い特徴をみることが出来、主体となる文様に縦位・横位・斜位の沈線を充填する。個々の詳細な特徴は述べないが、全体的な様相から関東地方の五領ヶ台式との関連性を思わせる。

**大木7b式** 上記した大木7a式の土器よりも新しい段階と思われる大木7b式土器が多量に出土している。代表的なのはRA 281堅穴住居跡A層より出土した土器群で、上記した特徴的なキャリバー形深鉢や文様がみられなく、大ぶりな弁状突起を有するキャリバー形深鉢（第117図1）、半截竹管による押引文が施される土器（第118図2）、原体圧痕による文様を主体とする土器（第118図3～第122図20）が出土している。第119図5の口縁部文様帶には原体圧痕で縁取りされた隆線による波状文が施され、波頂部には渦巻文が施される。

RA 281堅穴住居跡出土土器とほぼ同時期と思われる土器は、RA 274I期堅穴住居跡からも出土している。RA 274I期堅穴住居跡では大木7b式土器以外に円筒上層c式（第110図5）が出土しているほか、円筒上層式の影響と思われる波状の粘土紐を口唇下に貼付する深鉢（第111図11）も出土している。

**大木8a式** RA 281堅穴住居跡出土土器群に後続する土器群として、RA 259堅穴住居跡出土の土器が考えられる。RA 259堅穴住居跡から出土したキャリバー形深鉢の口縁部は直線的に外反し、口縁部の概観はRA 274I期堅穴住居跡出土のキャリバー形深鉢（第109図4）に近似する。しかし、文様的には主文様に沿う原体圧痕が少くなり、かわって沈線によって隆線が縁取られ、文様が浮彫りのように表現されるようになる。一方でRA 233I期堅穴住居跡出土のキャリバー形深鉢（第67図1・3・4）の口縁部形状は全体的に内湾し、直線的な形状はみられない。口縁部形状が内湾するキャリバー形深鉢は中期後葉の大木8b・9式段階までみられることから、RA 233I期堅穴住居跡出土の土器は新しい傾向にある土器と考えることができる。

なお、RA 259堅穴住居跡床面からは円筒上層d式に近似する深鉢が出土している（第101図3）。しかし、地文となる縄文の回転方向が縦位であるほか、体部には隆線による懸垂文が施されるなど大木式の特徴も併せ持つ資料である。

**大木8b式** RA 224・236・242・244・252・253堅穴住居跡よりまとまった量の土器が出土している。注目されるのはRA 236堅穴住居跡から出土した伏甕に転用された深鉢（第72図5）である。特徴は口縁部が平縁、体部には隆沈線による大渦巻・小渦巻文・懸垂文が短い隆沈線で連結されることである。大木8b式段階では、主要文様が棘のある大渦巻文・小渦巻文が主体的であったのが、RA 236堅穴住居跡出土深鉢は有棘部が懸垂文や他の文様との連結に多用され、連結部間が長楕円文・楕円文となる。また小渦巻文の渦巻部が省略され、円文になるものもある。概要のみ説明したが、これらの諸特徴は後続する大木9式前葉の文様に特徴的なものであり、大木8b式から9式への移行期の土器とみていいであろう。同様の土器は大館町遺跡・上米内遺跡・柿ノ木平遺跡・堀根遺跡・山王山遺跡・猪去館遺跡・

川目遺跡など盛岡市内に所在する縄文時代中期の遺跡でも確認されており、特に柿ノ木平遺跡では該期の竪穴住居跡と土器が多数検出され、比較検討する上で好資料となるであろう。

	繁V遺跡	柿ノ木平遺跡
大木8b式 (末葉)	1  2 	5  6 
大木9式 (前葉)	3  4 	7  8 

繁V・柿ノ木平遺跡出土大木8b・9式土器

**後期** 今回の調査では出土量が少なかったことから、出土した事実のみ記述するが、第36次調査区の北（繁小中学校校庭）では試掘調査の際、多量の後期初頭の土器を含む遺物包含層が確認されている。このことから、後期初頭における遺跡中心部は段丘北部を中心には抜がっていることが考えられる。

## 2. 平安時代

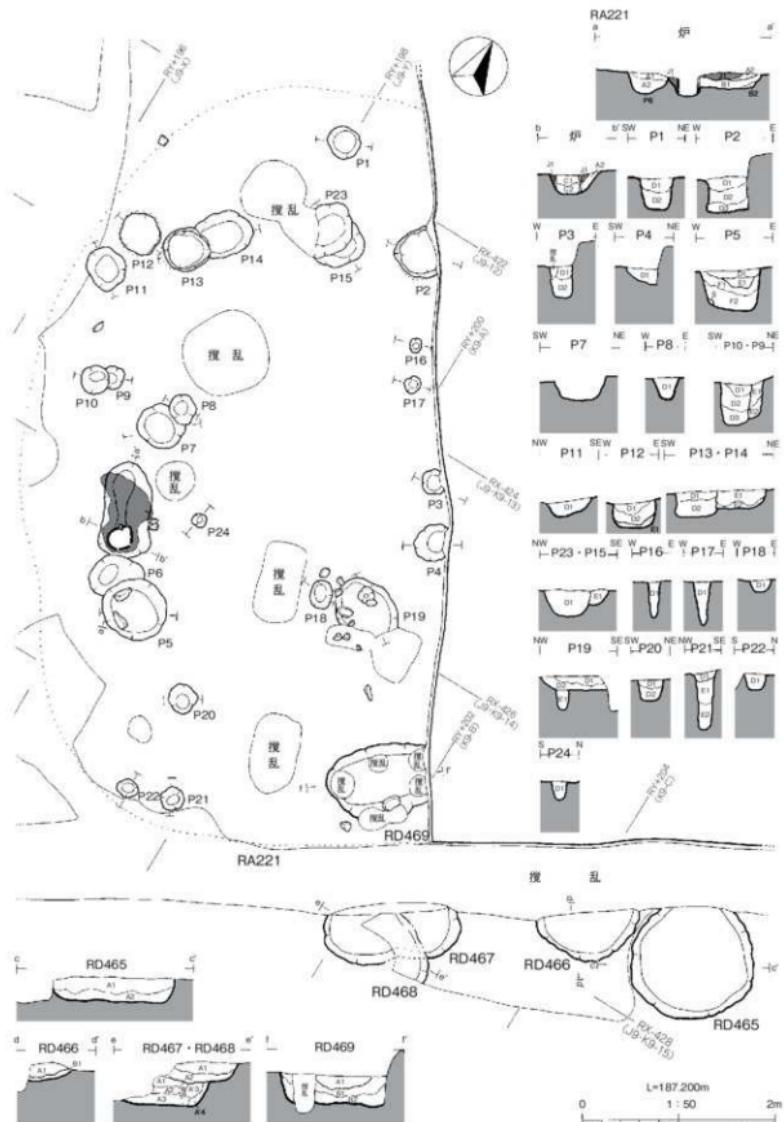
繁V遺跡における過去の調査では、昭和32年の校舎増築に伴う発掘調査の際に土師器甕破片の出土が報告されているのみである。今回の調査では1棟の竪穴住居跡（RA0501）が確認され、平安時代の集落の存在が明らかにされた。竪穴住居跡埋土には十和田a火山灰が堆積することから、構築されたのは西暦915年以前と考えられる。

## 3. 結語

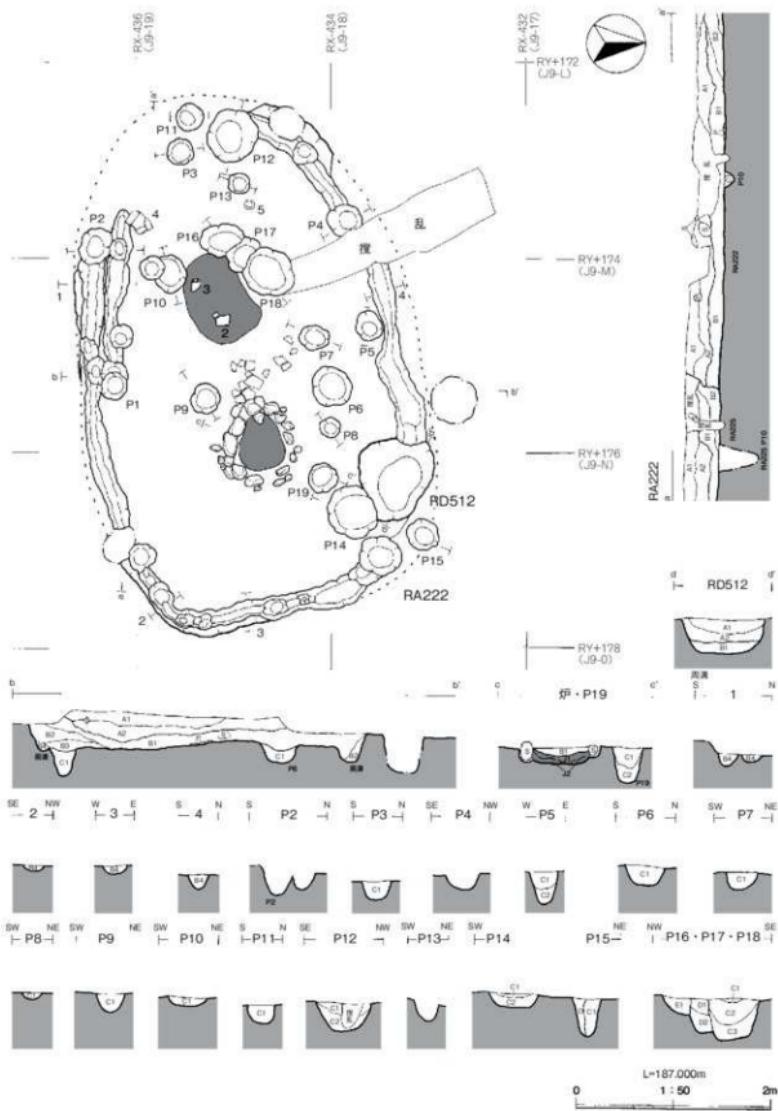
以上のように、第29・33・34・36・37次発掘調査の結果、今回の調査区及び周辺は縄文時代中期初頭から末葉にかけての集落を中心とする地区であることが確認された。また、縄文時代の竪穴住居跡内外より多量の石器類が出土したことから石器製作・石材供給の拠点遺跡であった可能性が高まった。

（神原 雄一郎、佐々木 紀子）

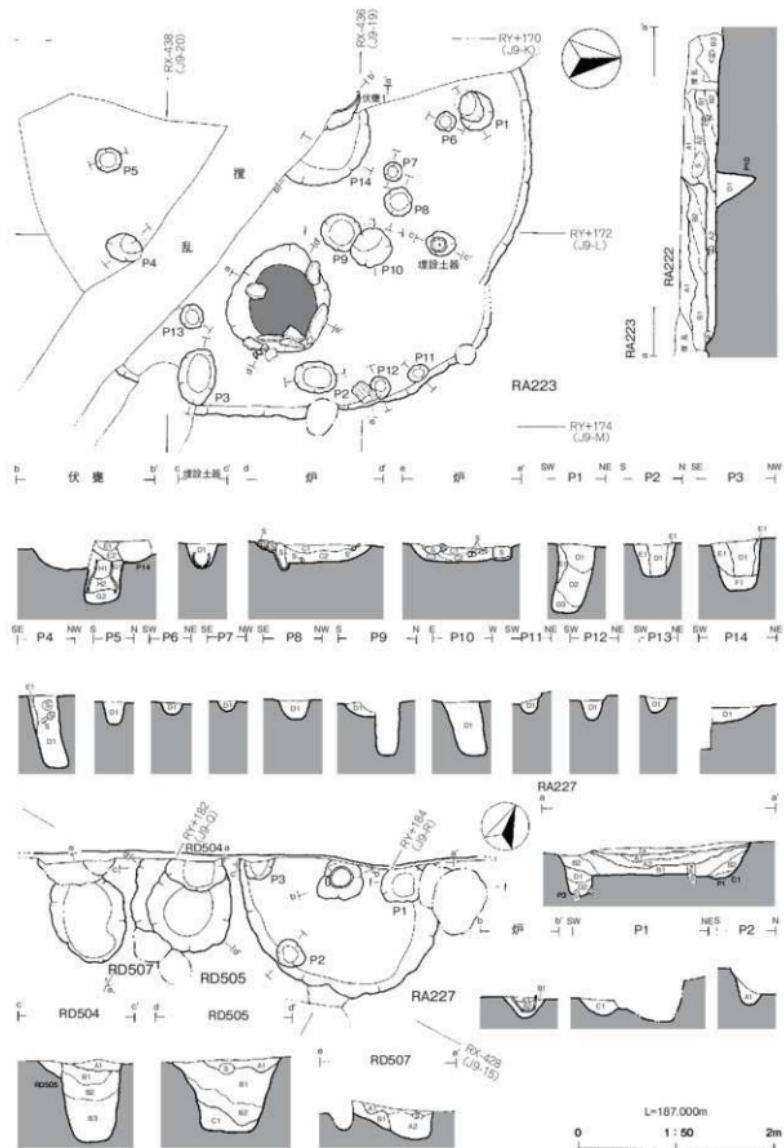
# 遺構図版



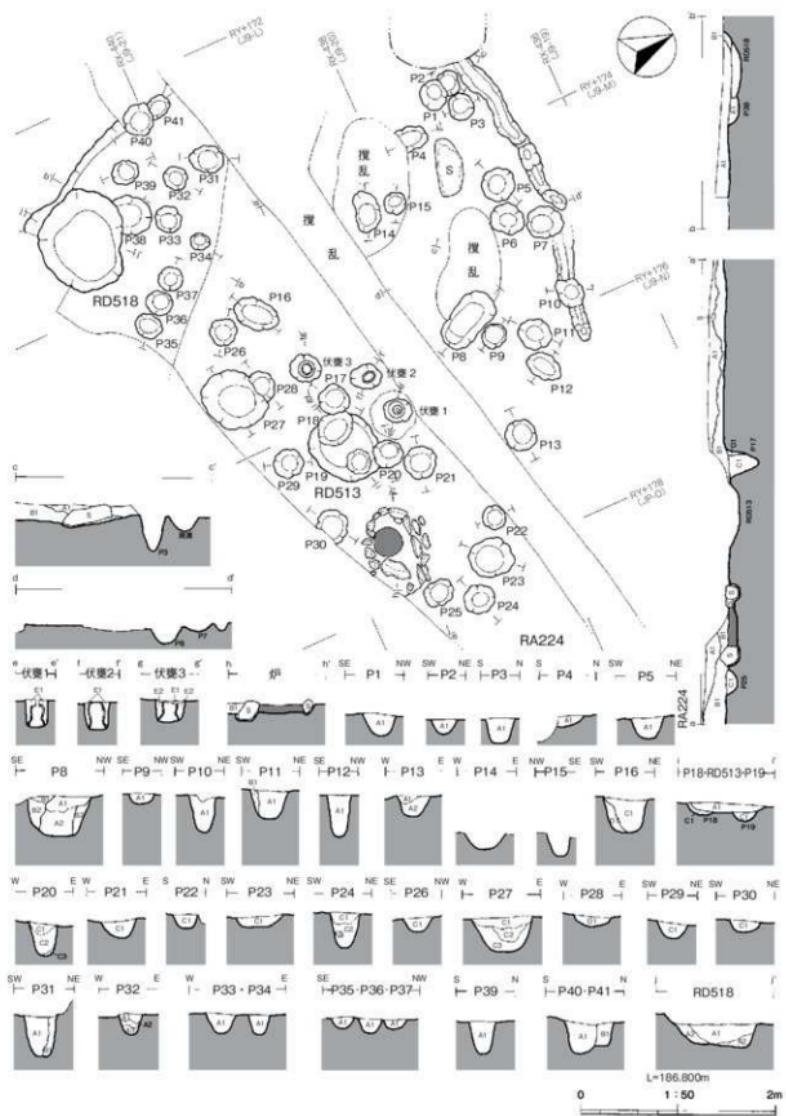
第6図 RA221 竪穴住跡、RD465～469 土坑



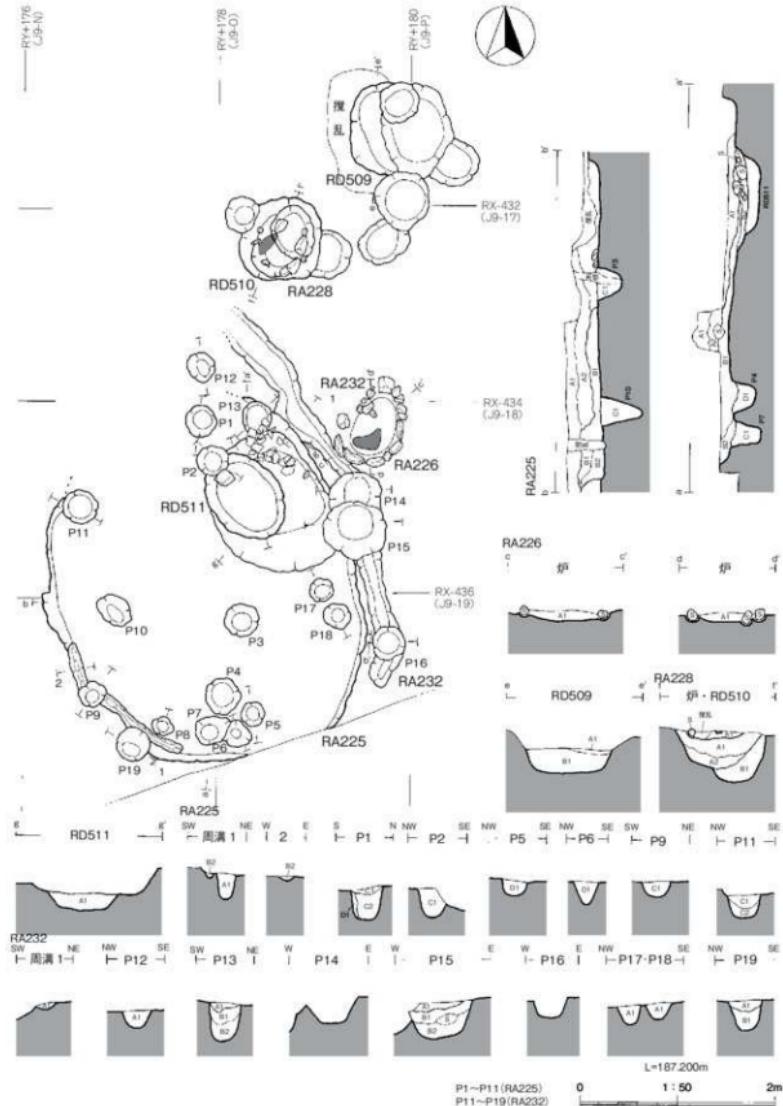
第7図 RA222 竪穴住居跡、RD512 土坑



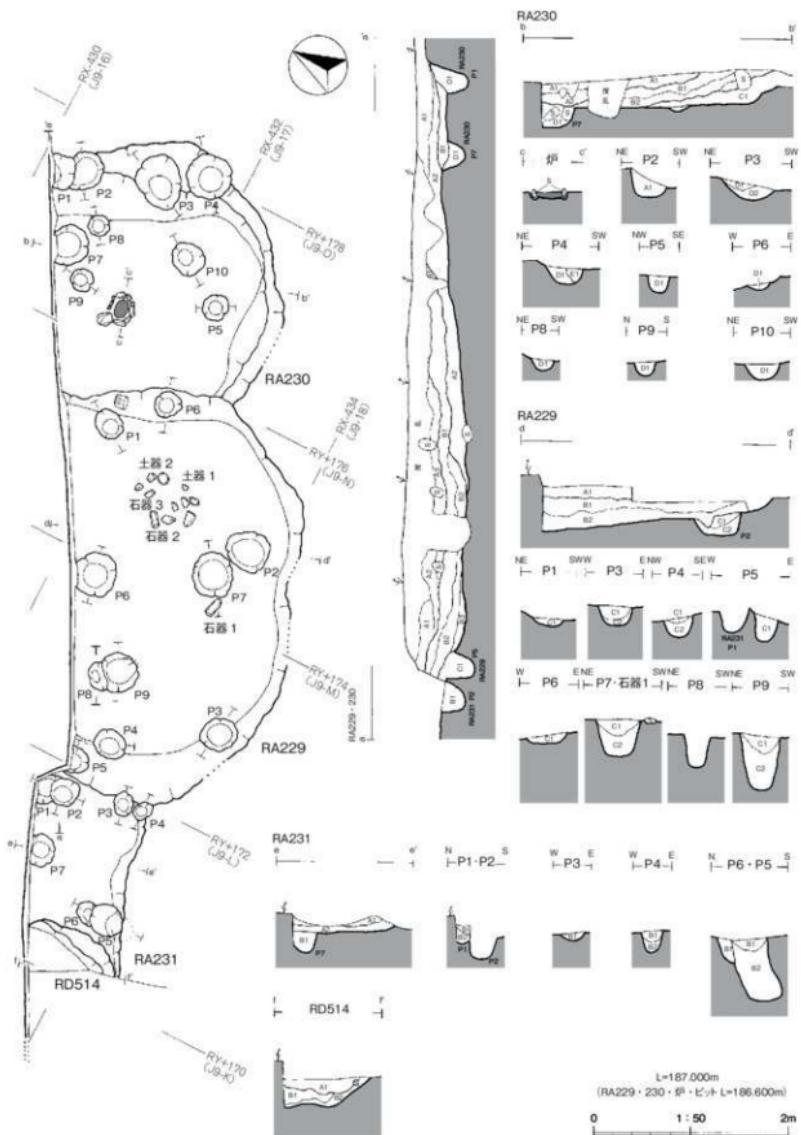
第8図 RA223・227 竪穴住居跡、RD504・505・507 土坑



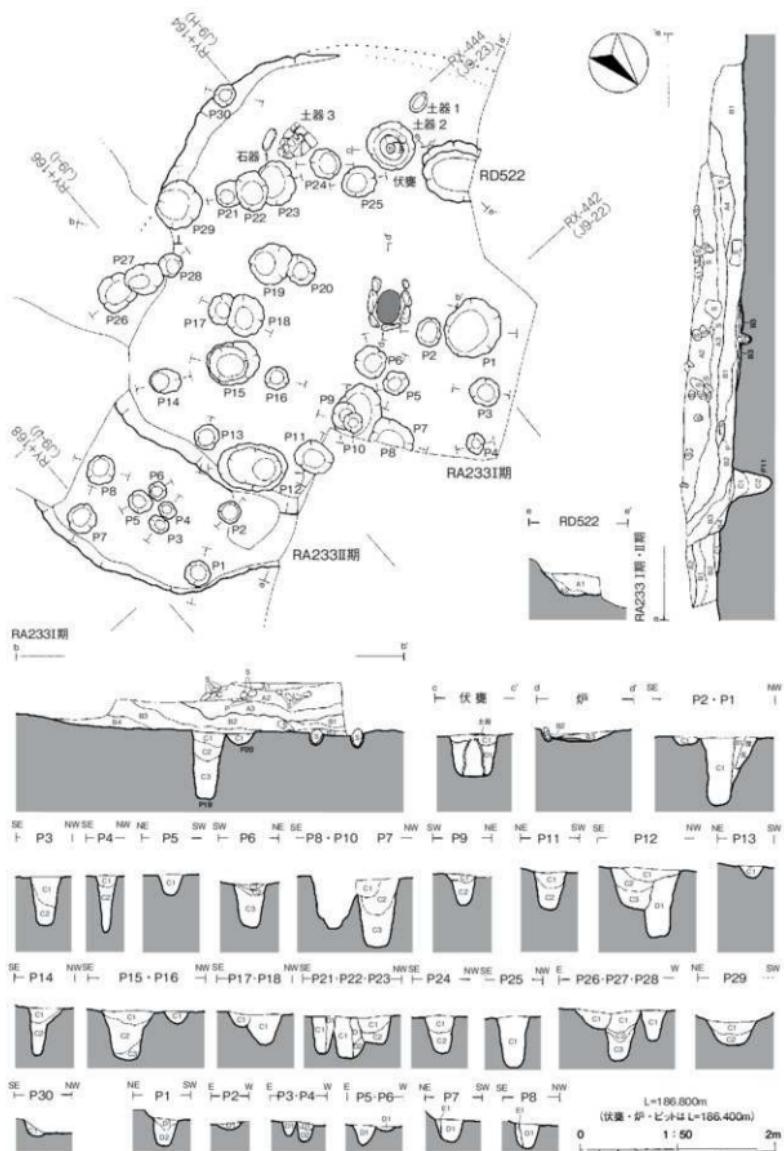
第9図 RA224 竪穴住居跡、RD513・518 土坑



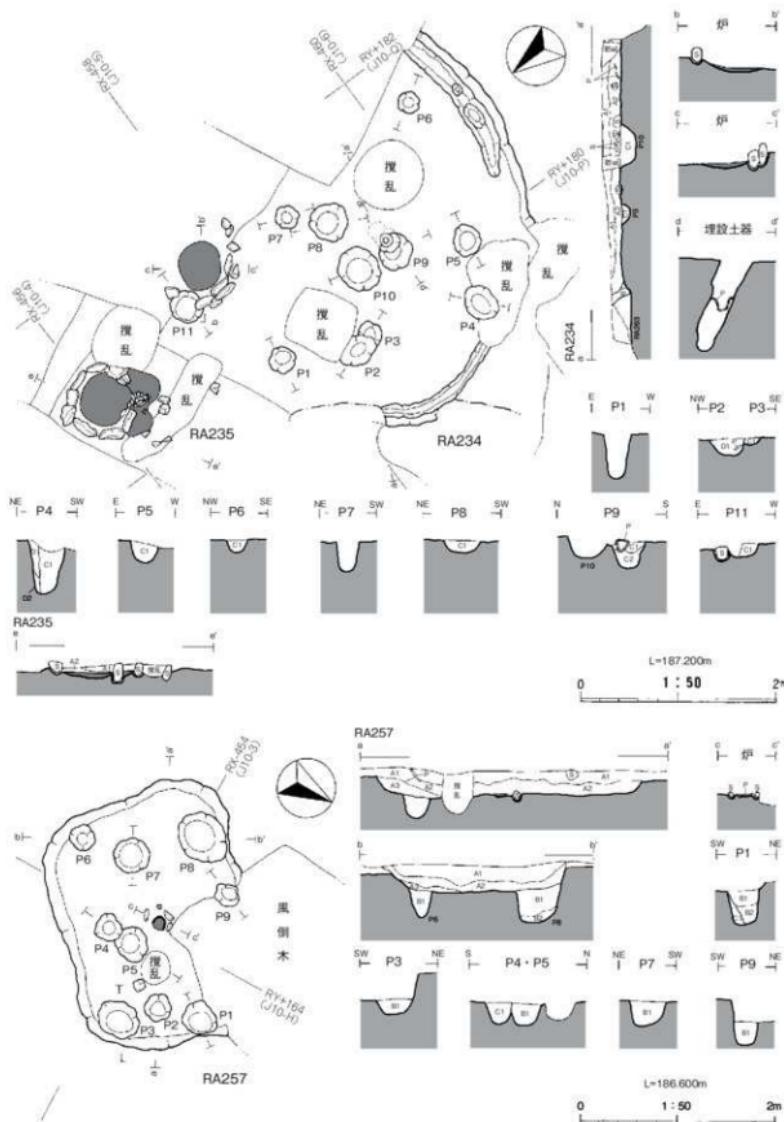
第10図 RA225・232 竪穴住居跡、RA226・228 炉跡、RD509～511 土坑



第11図 RA229～231 竪穴住居跡、RD514 土坑



第12図 RA233 I期・II期竪穴住居跡、RD522土坑



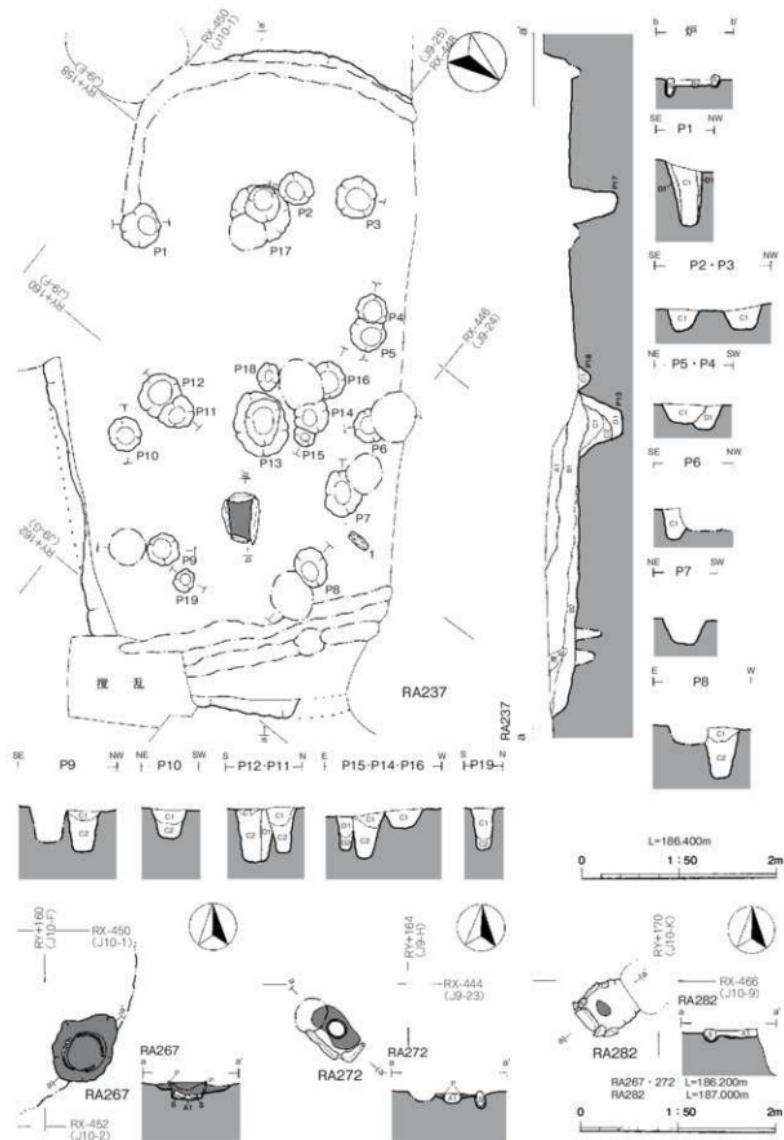
第13図 RA234・257 窓穴住居跡、RA235 炉跡



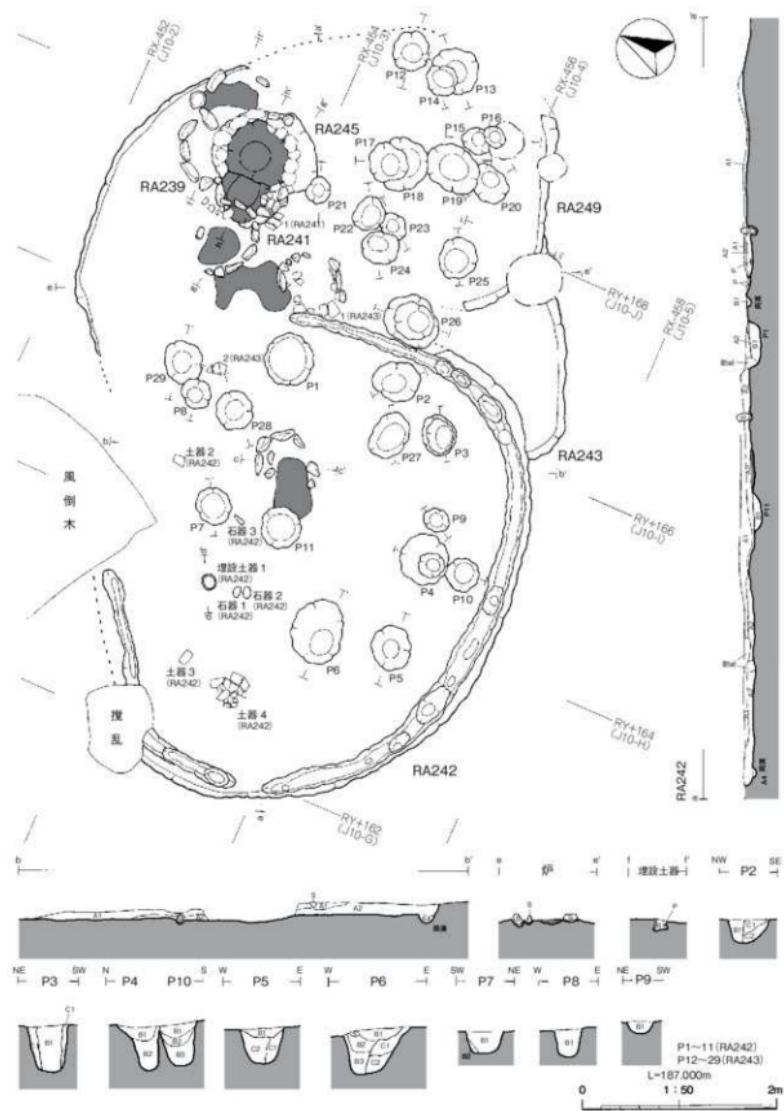
第14図 RA236・263 窒穴住居跡（1）

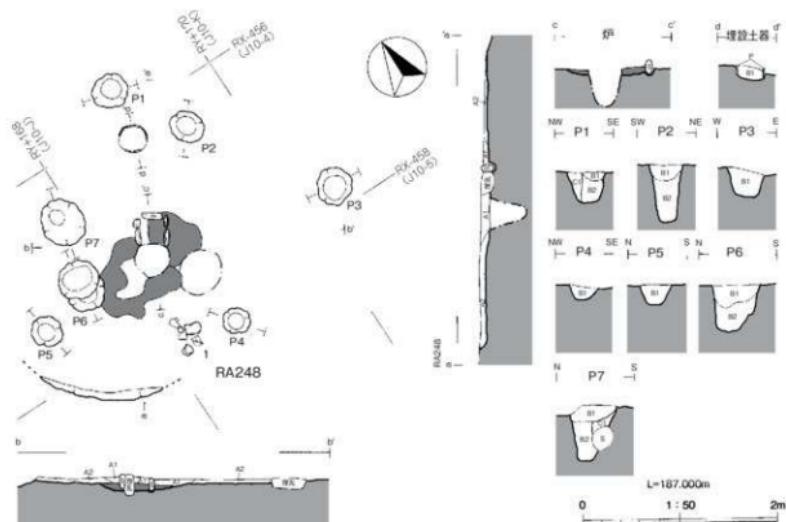
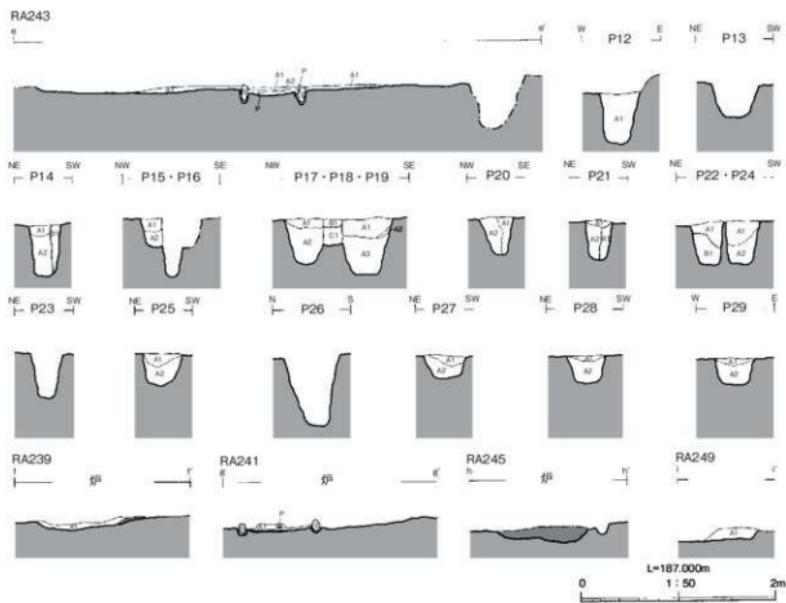


第15図 RA236・263 竪穴住居跡（2）

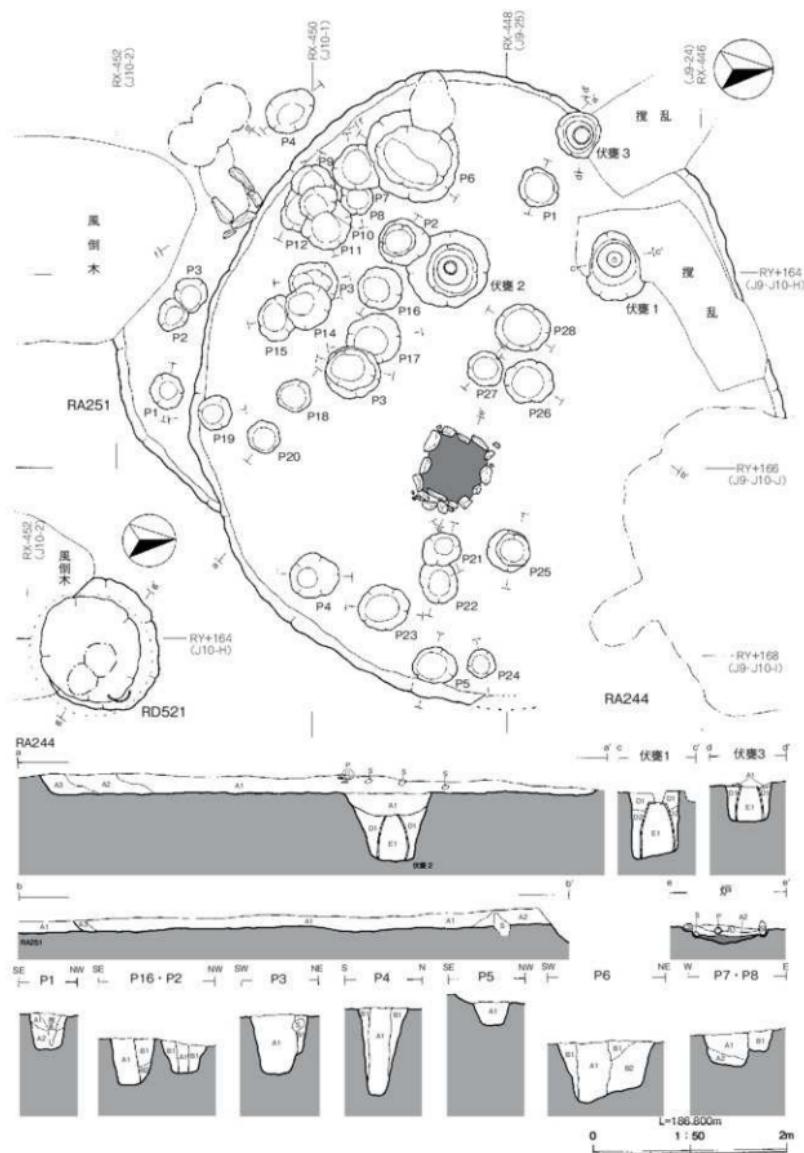


第16図 RA237 竪穴住居跡、RA267・272・282 炉跡

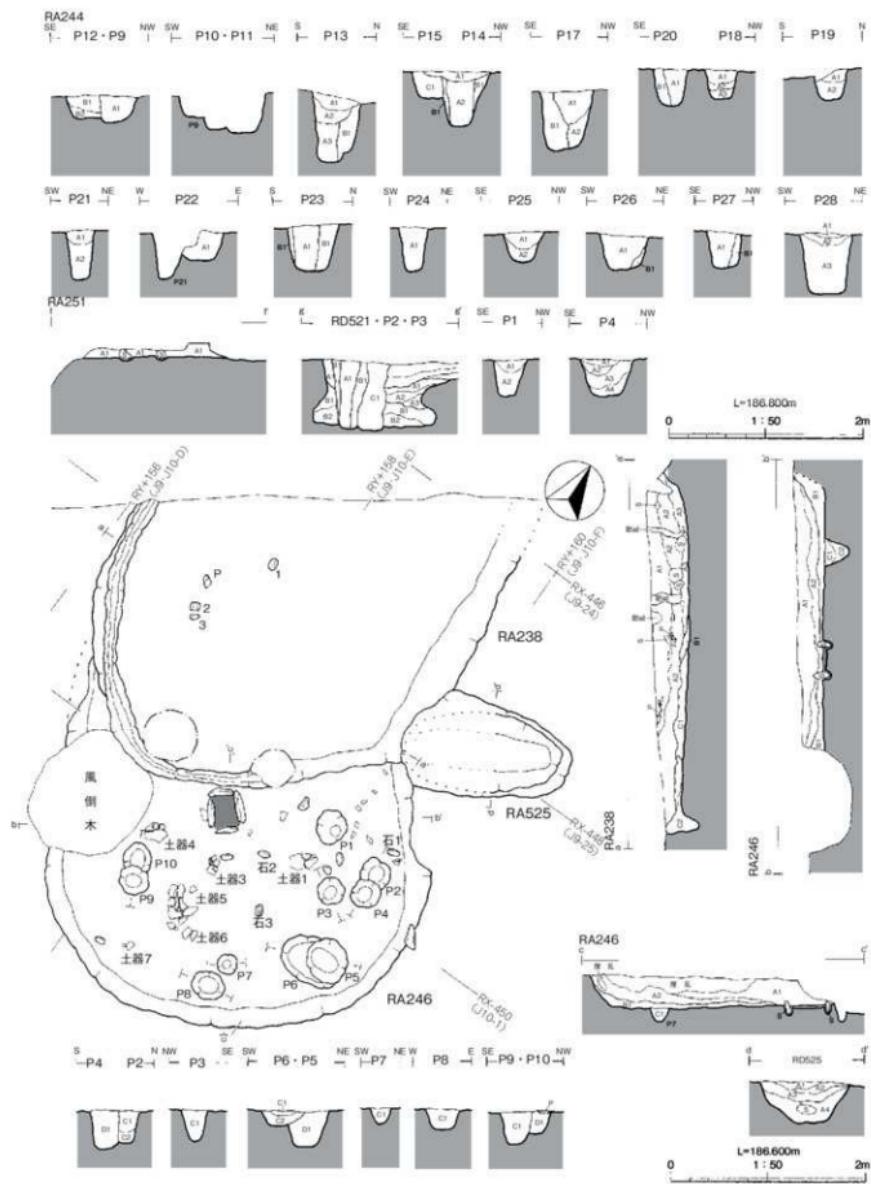




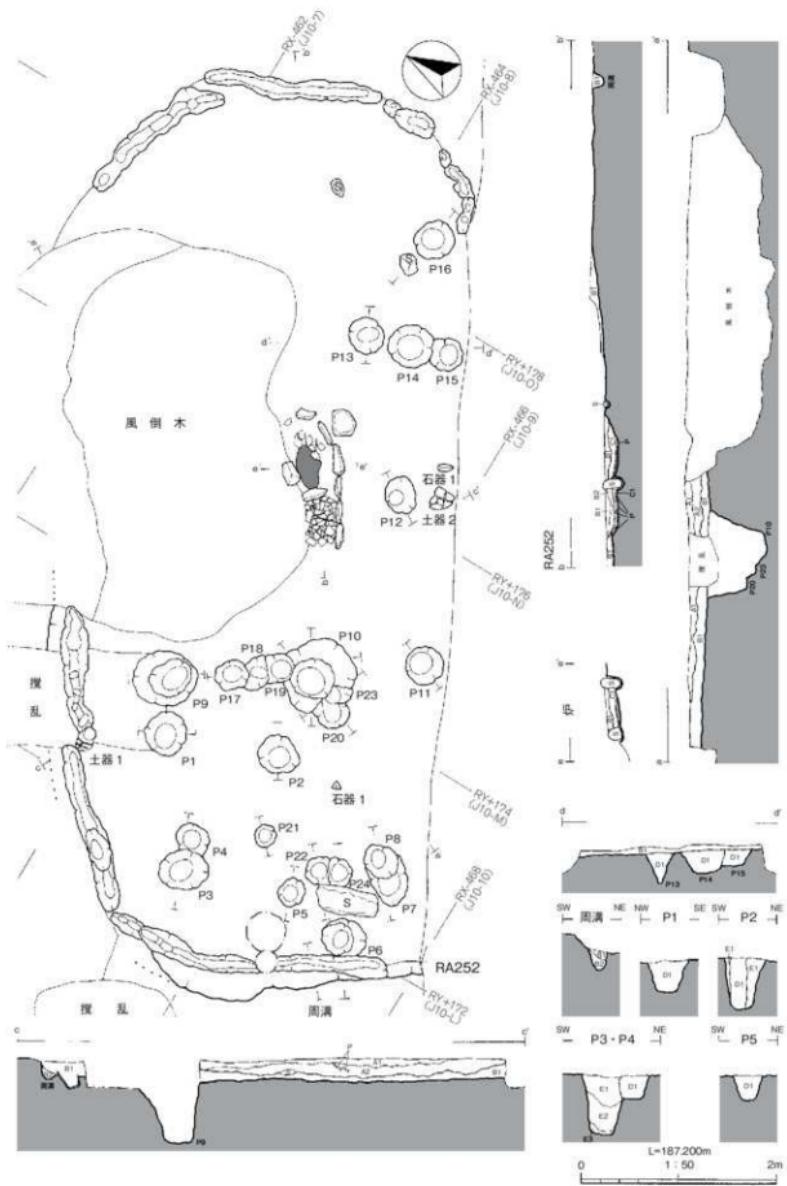
第18図 RA243 (2) · 248 · 249 (2) 窟穴住居跡、RA239 · 241 · 245 炉跡 (2)



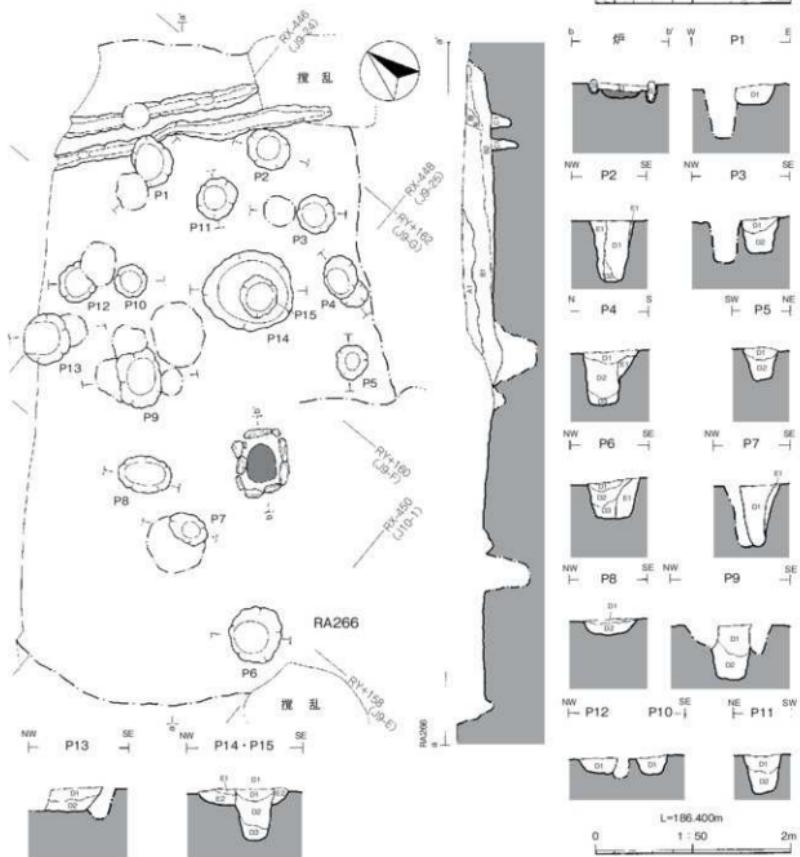
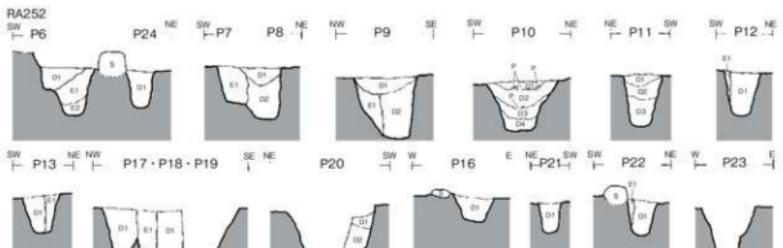
第19図 RA244・251 竪穴住居跡、RD521 土坑 (1)



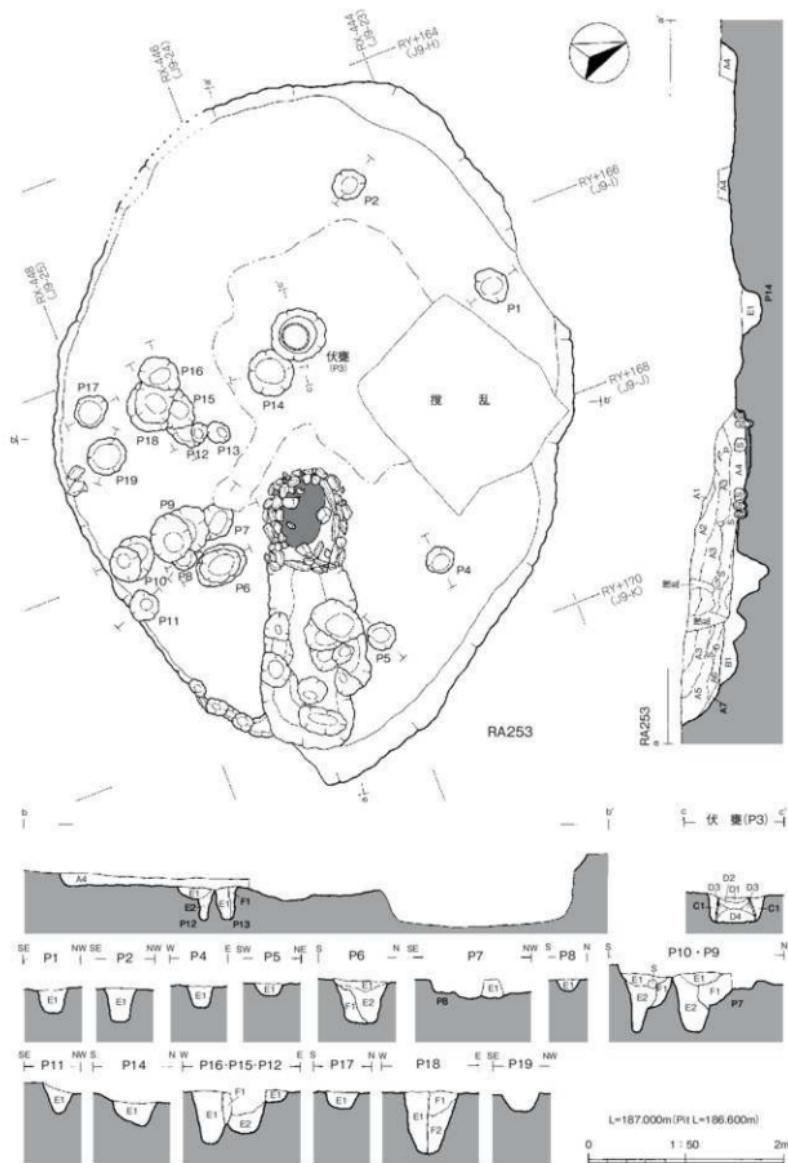
第20図 RA238・244(2)・246・251(2)竪穴住居跡、RD521(2)・525土坑



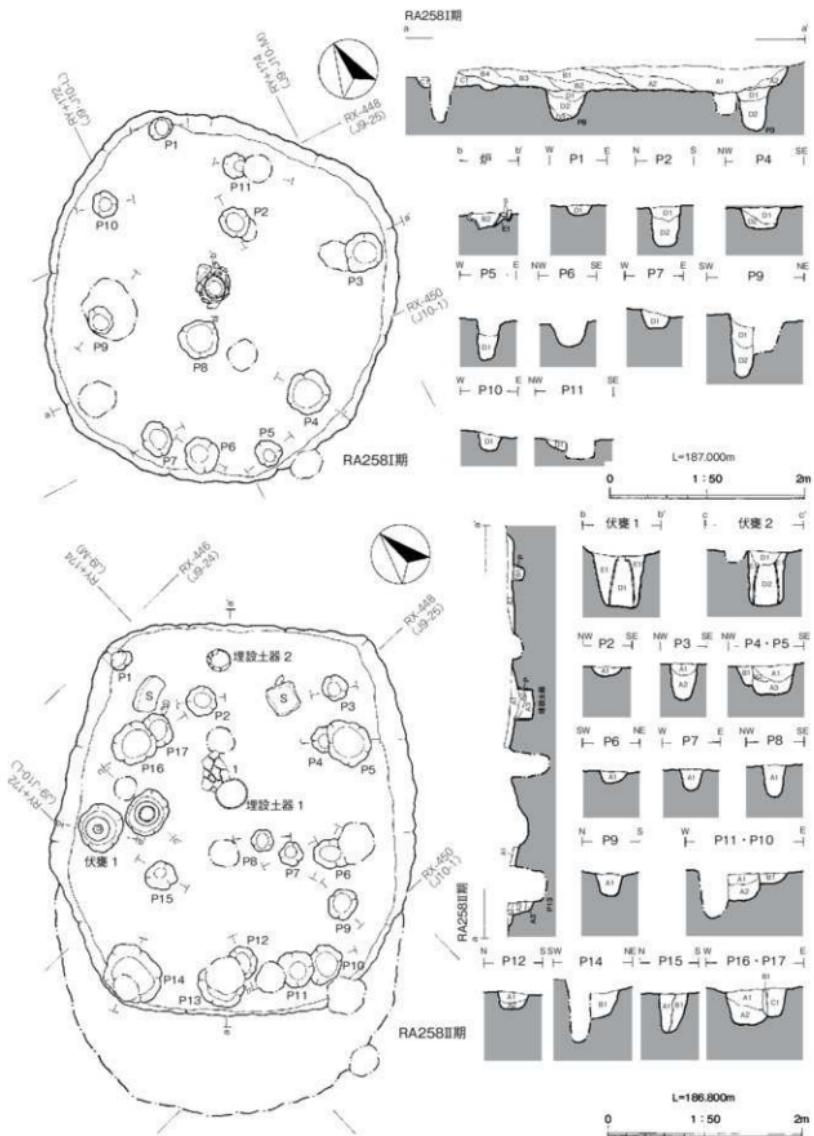
第21図 RA252 竪穴住居跡（1）



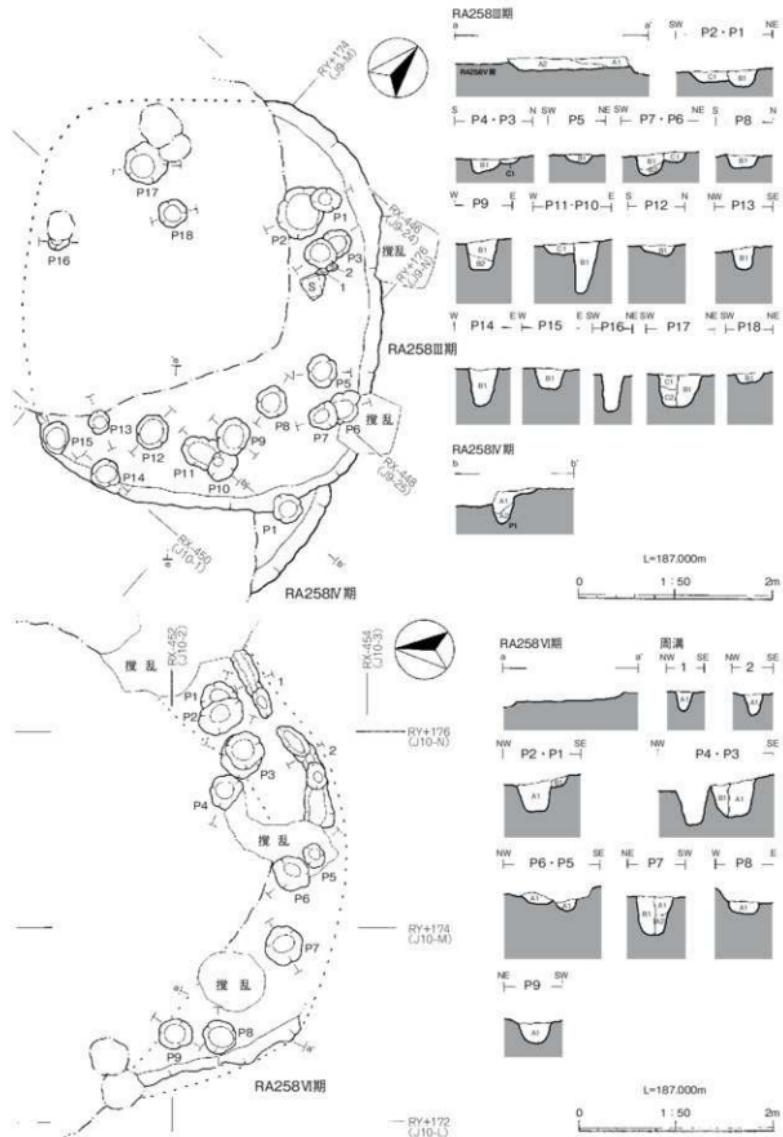
第22図 RA252 (2)・266 積穴住居跡



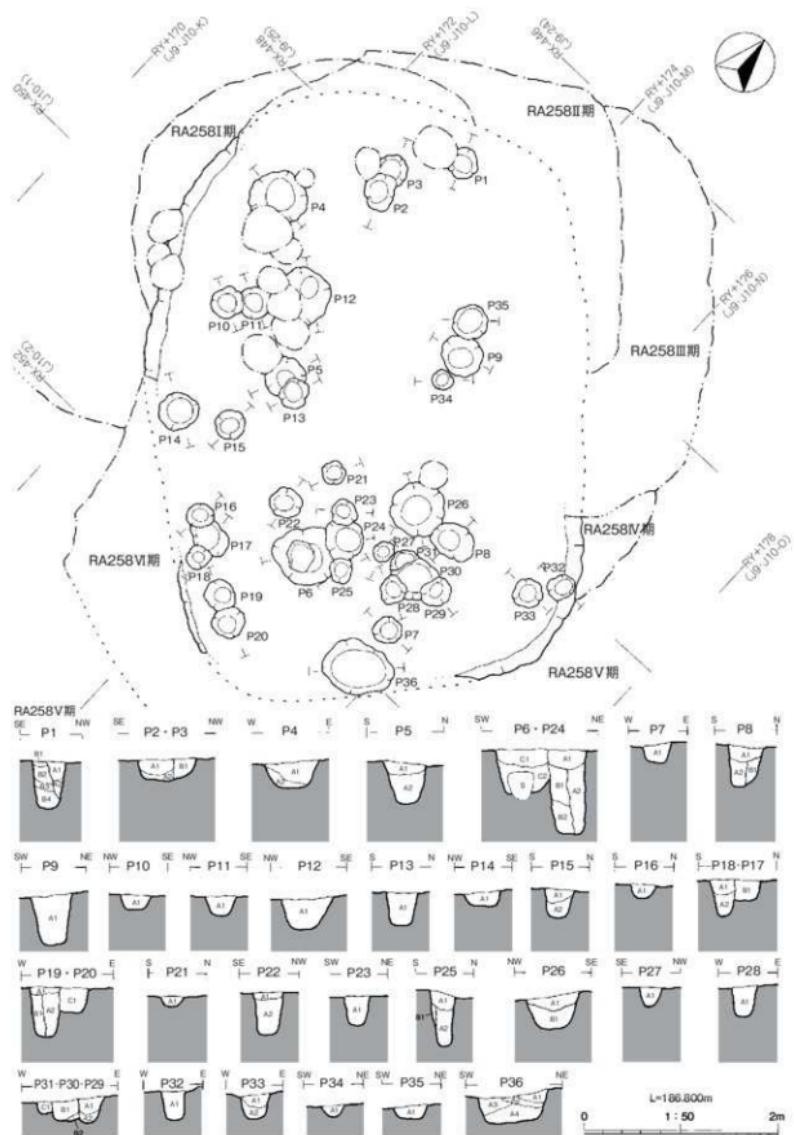
第23図 RA253 壁穴住居跡



第24図 RA258 I期・II期竖穴住居跡



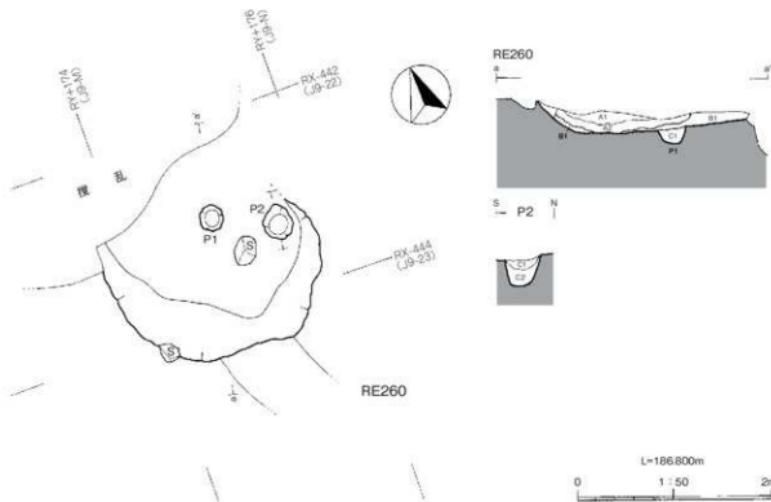
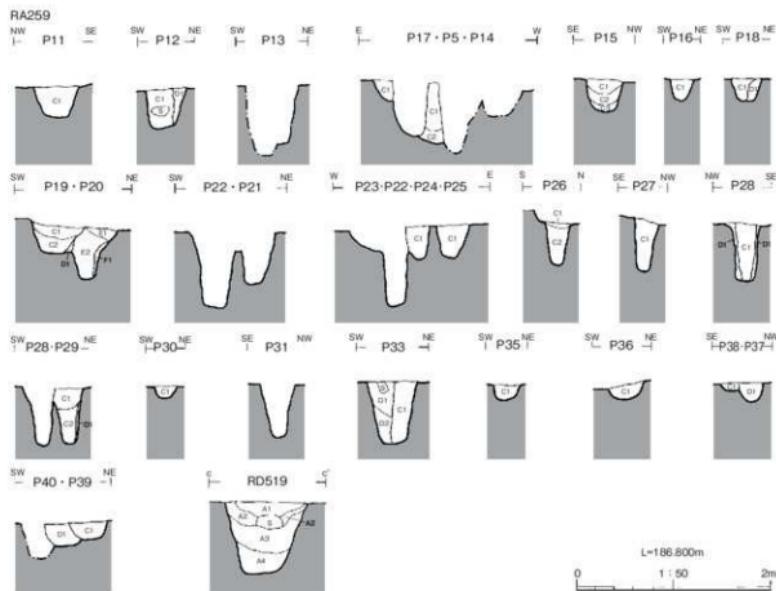
第25図 RA258 III期・IV期・VI期竪穴住跡



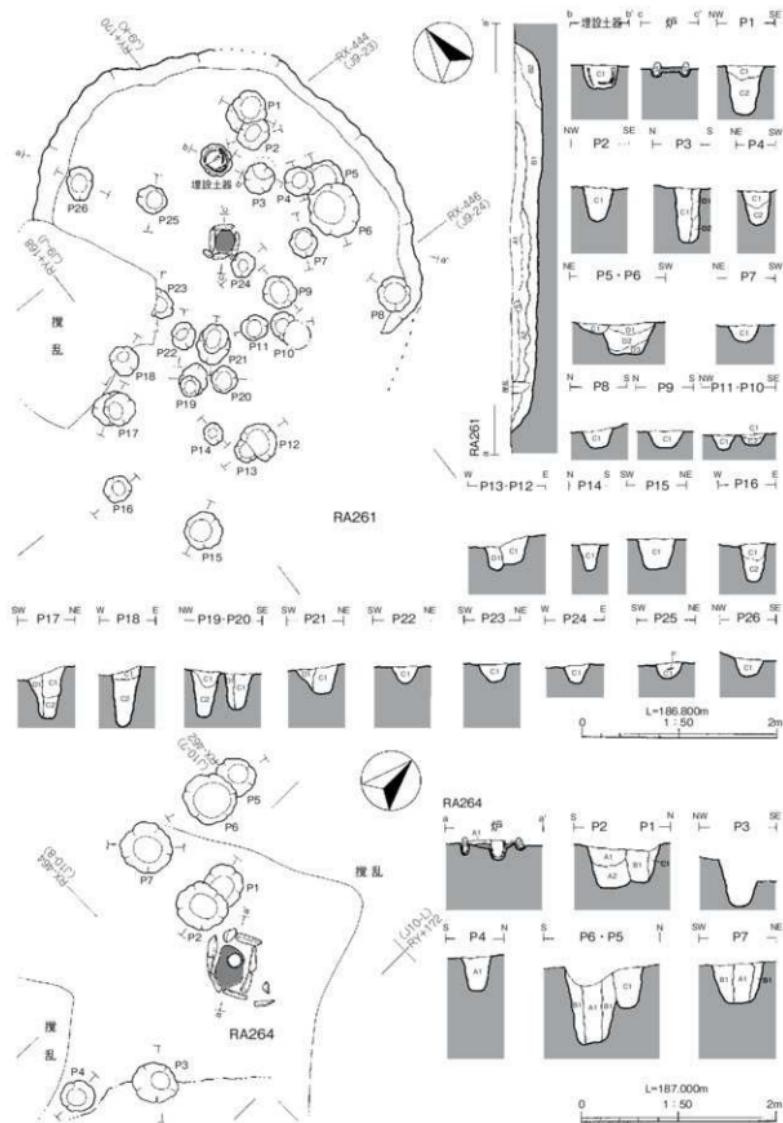
第26図 RA258 V期竪穴住居跡



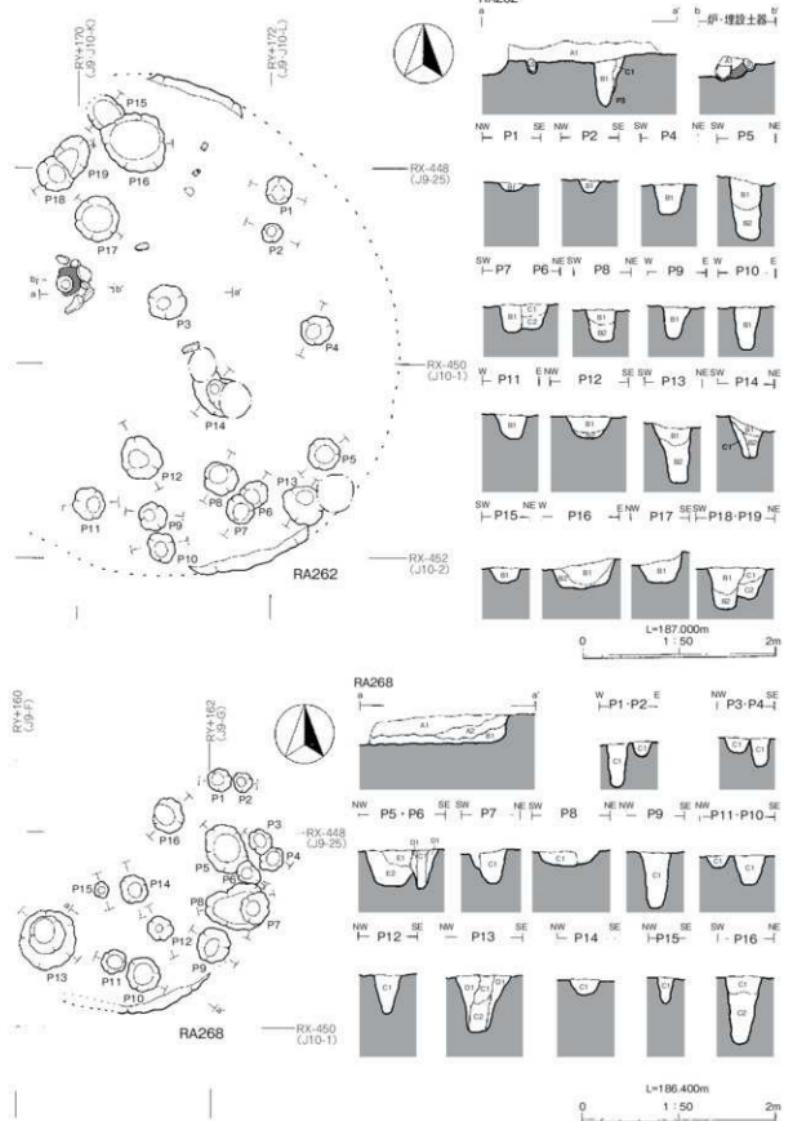
第27図 RA259 竪穴住居跡、RD519 土坑（1）



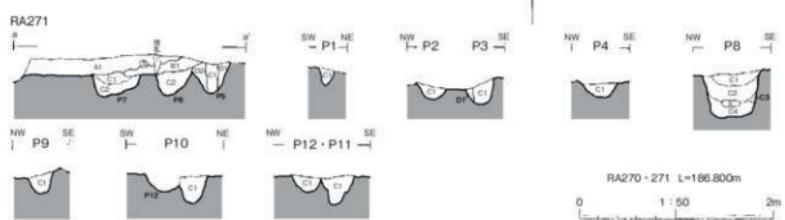
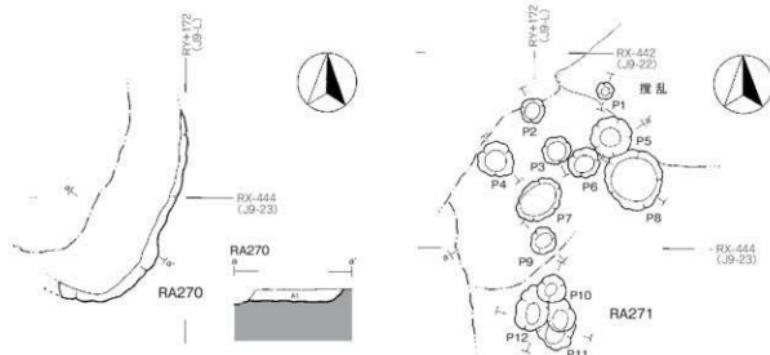
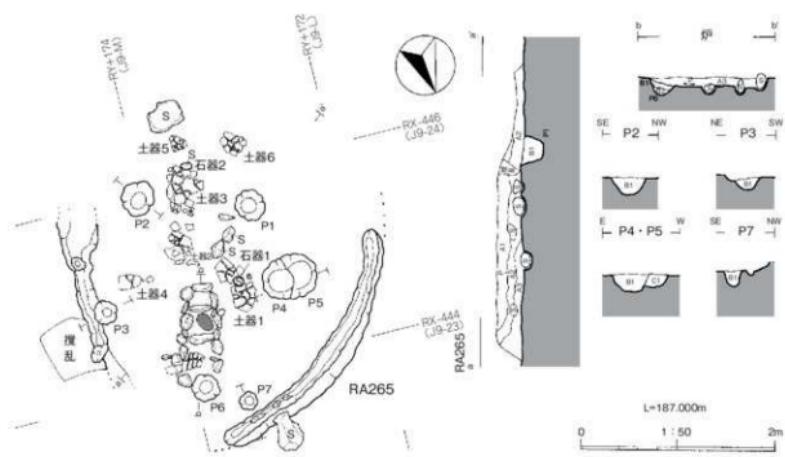
第28図 RA259 積穴住居跡、RD519 土坑（2）、RE260 積穴跡



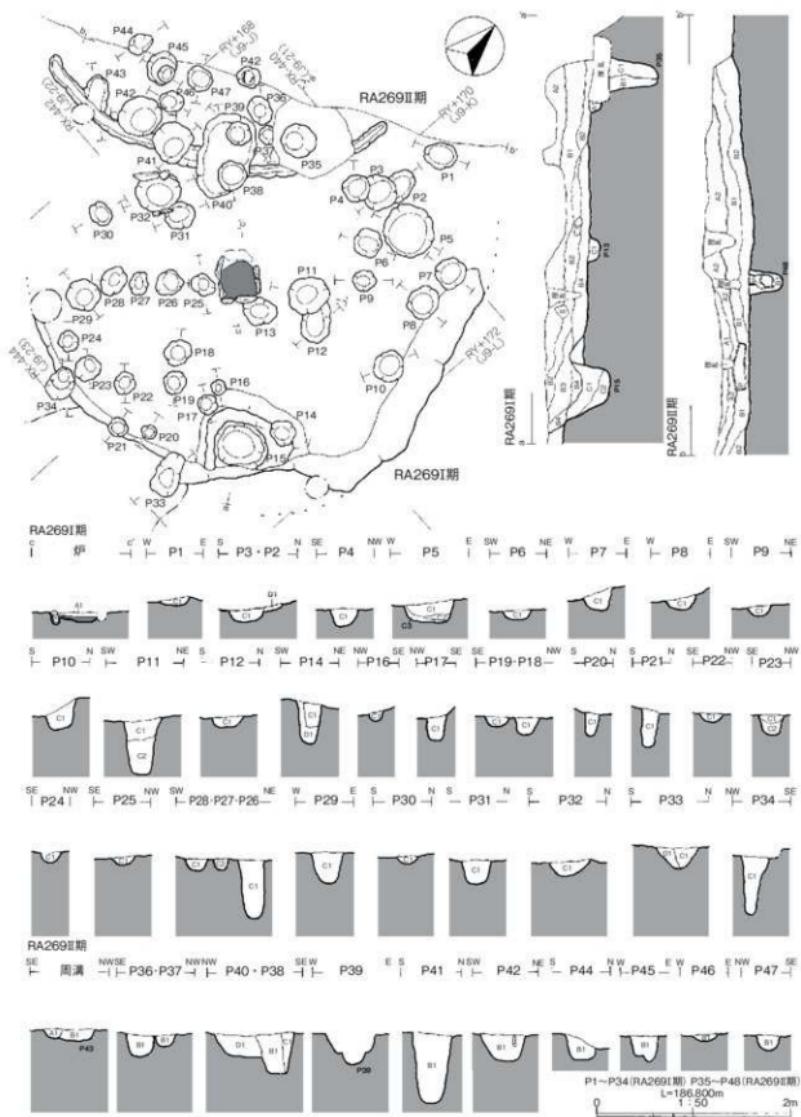
第29図 RA261・264 竪穴住居跡



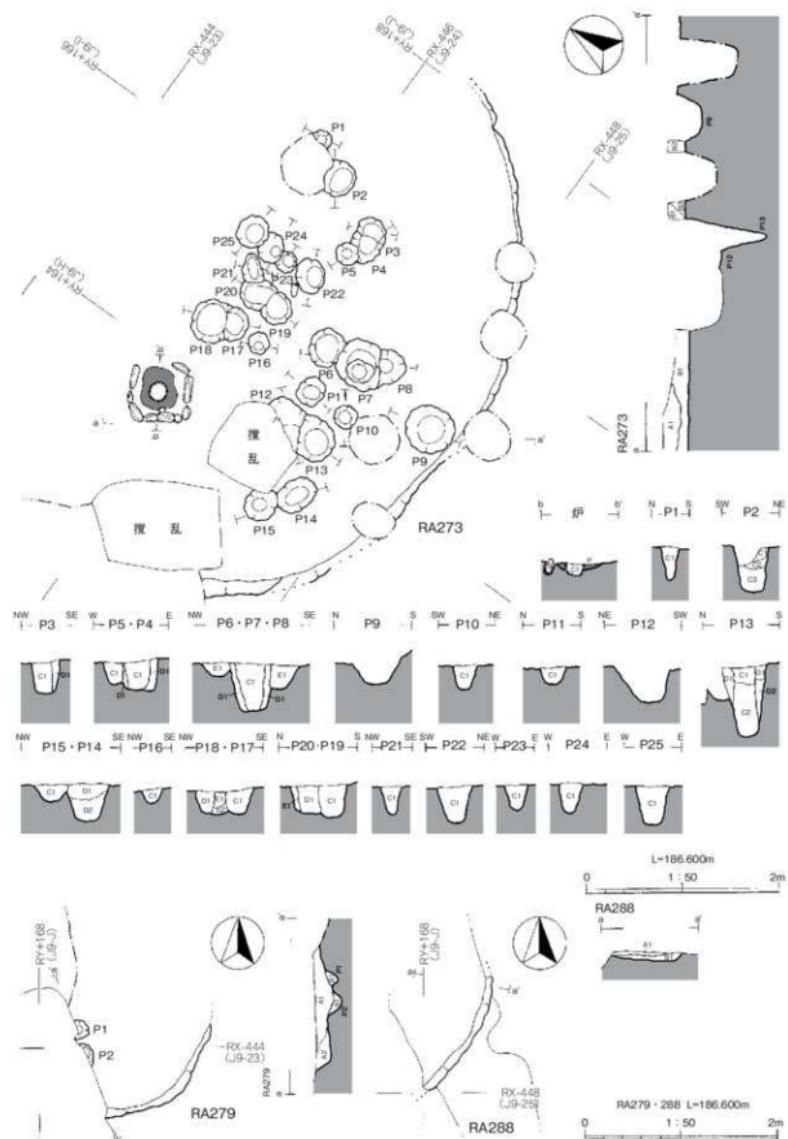
第30図 RA262・268 竪穴住居跡



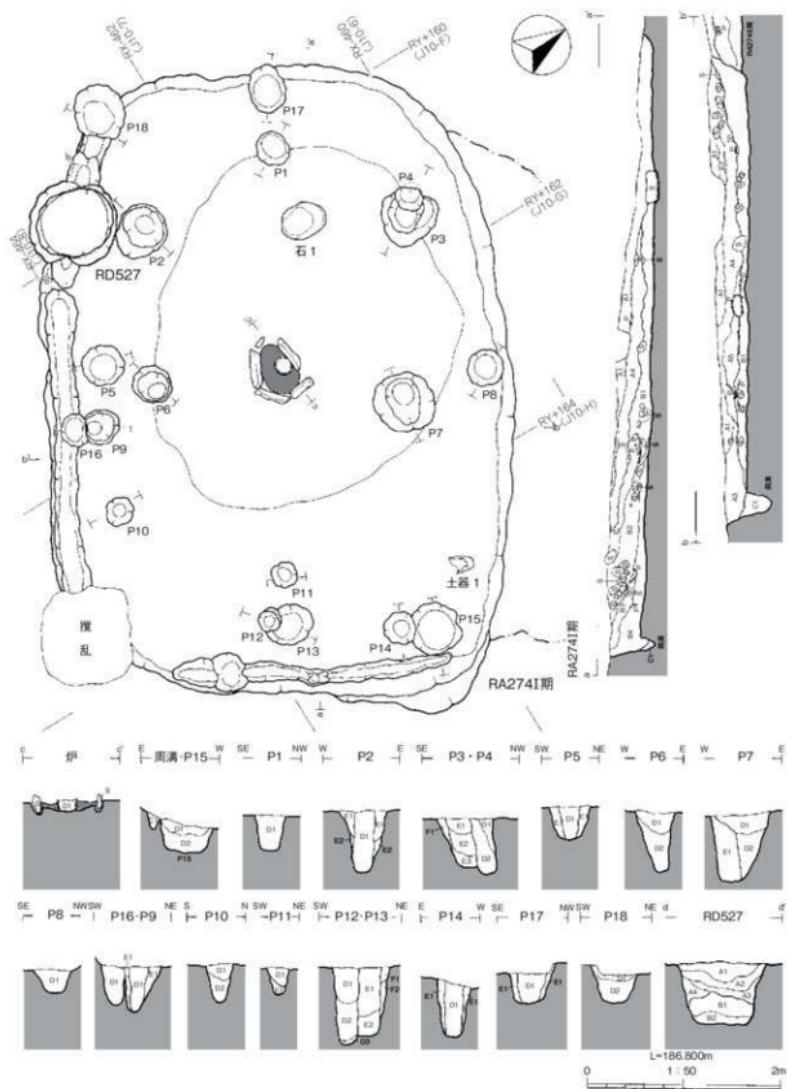
第31図 RA265・270・271竪穴住居跡



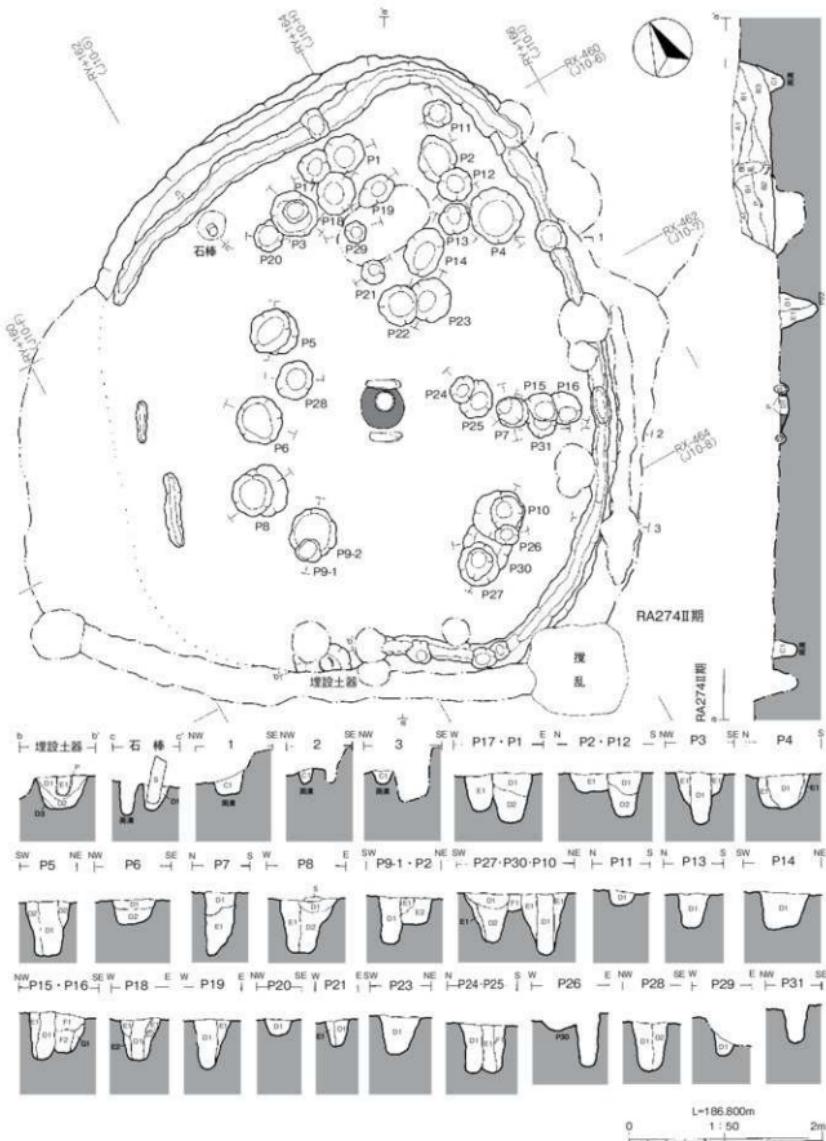
第32図 RA269 I期・II期竪穴住居跡



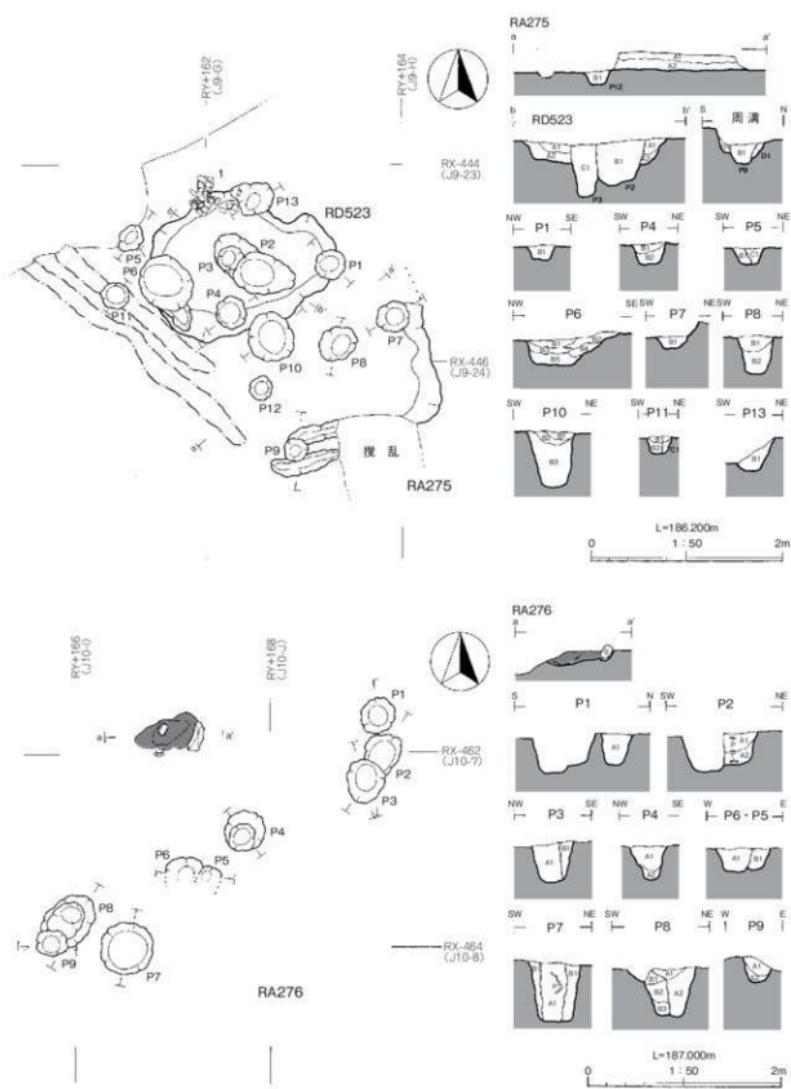
第33図 RA273・279・288 穫穴住居跡



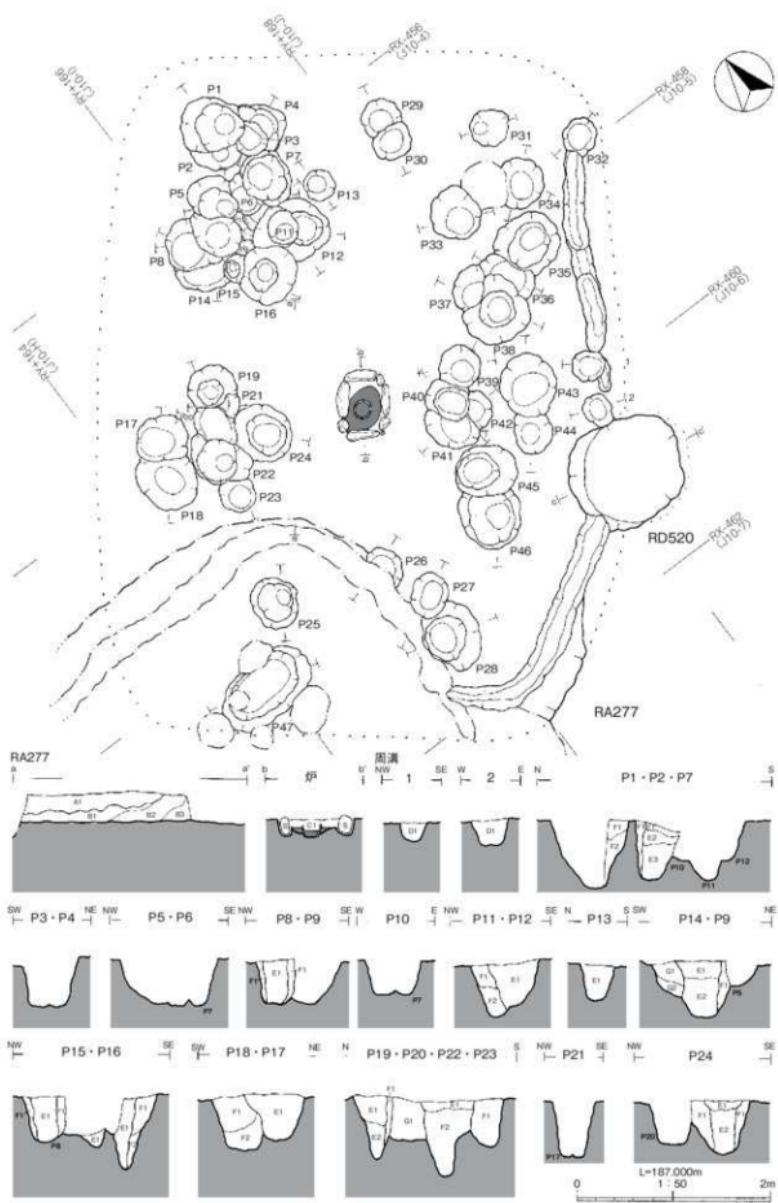
第34図 RA274 I期竪穴住居跡、RD527土坑



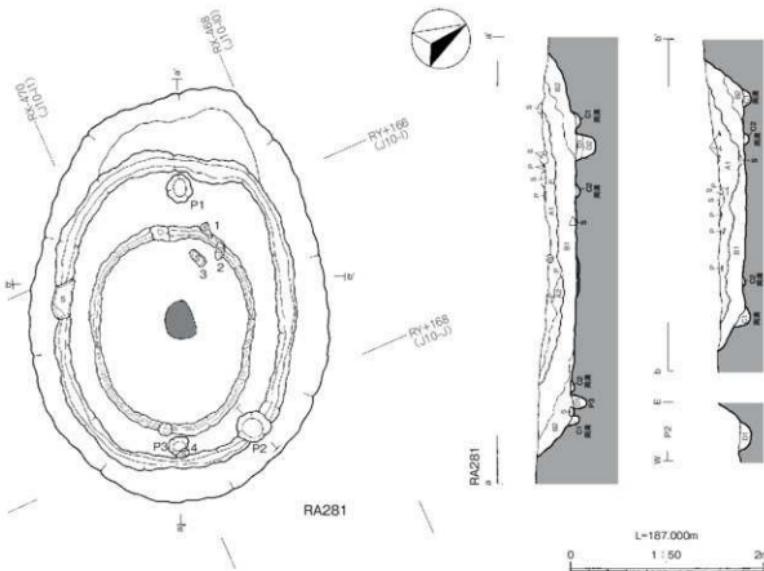
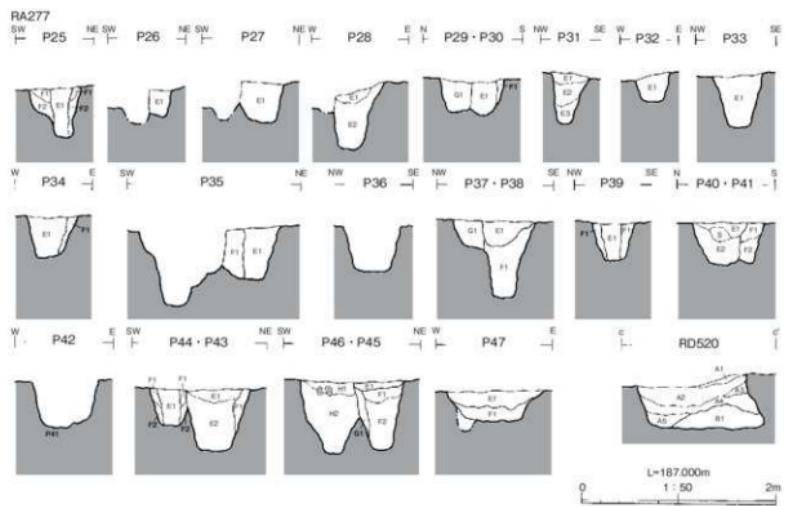
第35図 RA274 II期竪穴住居跡



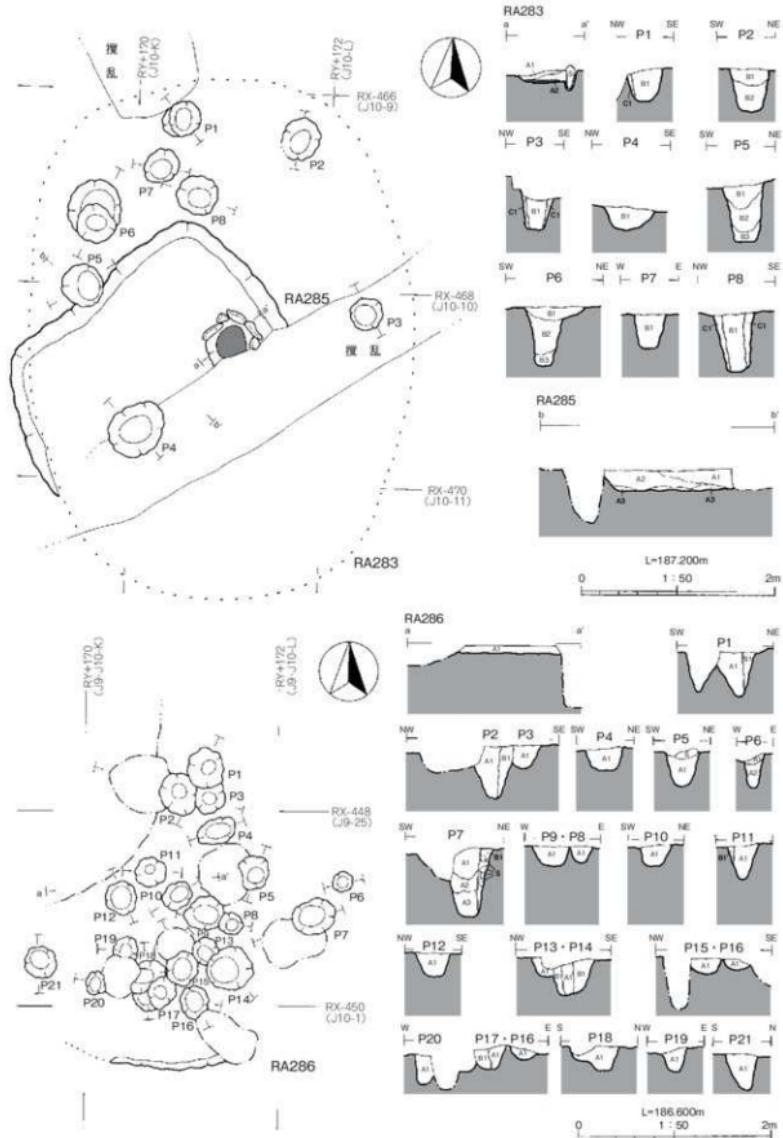
第36図 RA275・276竪穴住居跡、RD523土坑



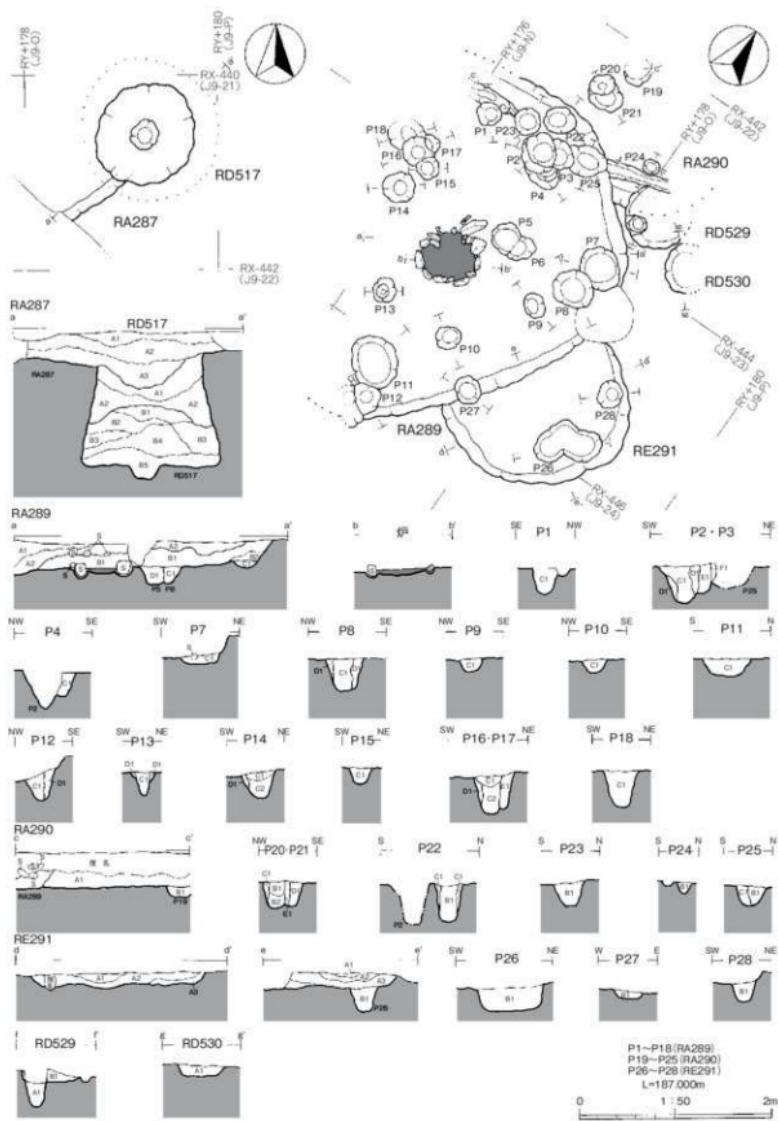
第37図 RA277 壁穴住居跡、RD520 土坑 (1)



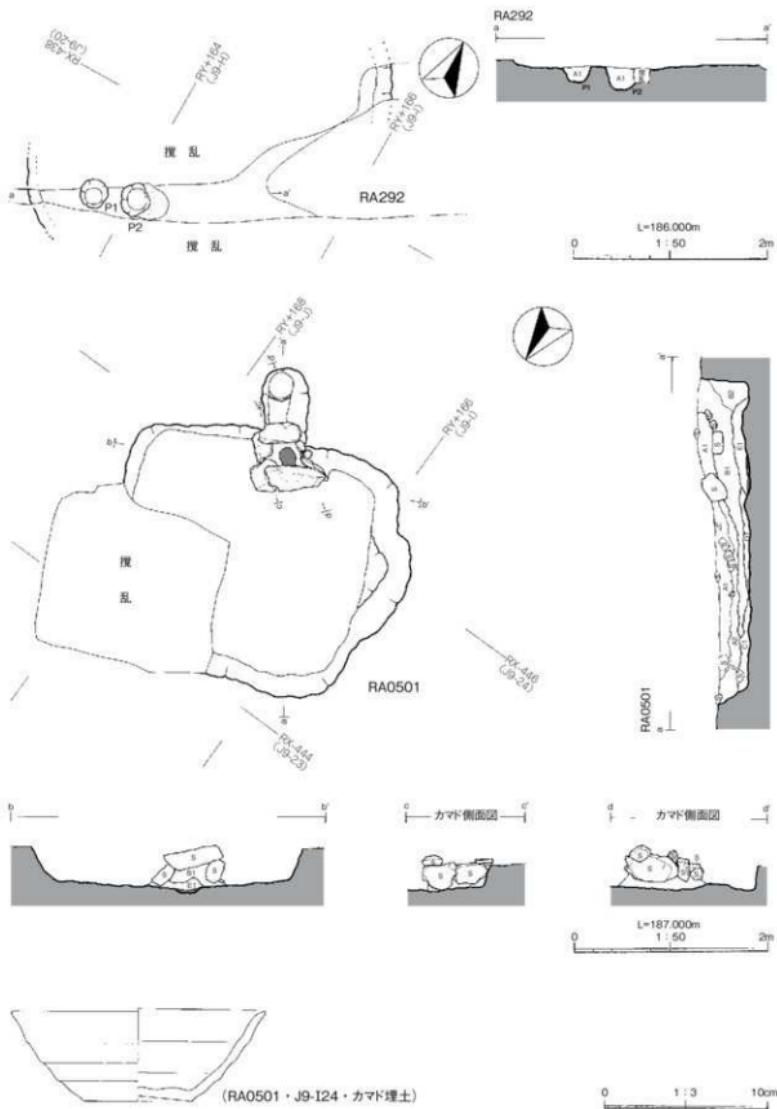
第38図 RA277(2)・281竪穴住居跡、RD520土坑(2)



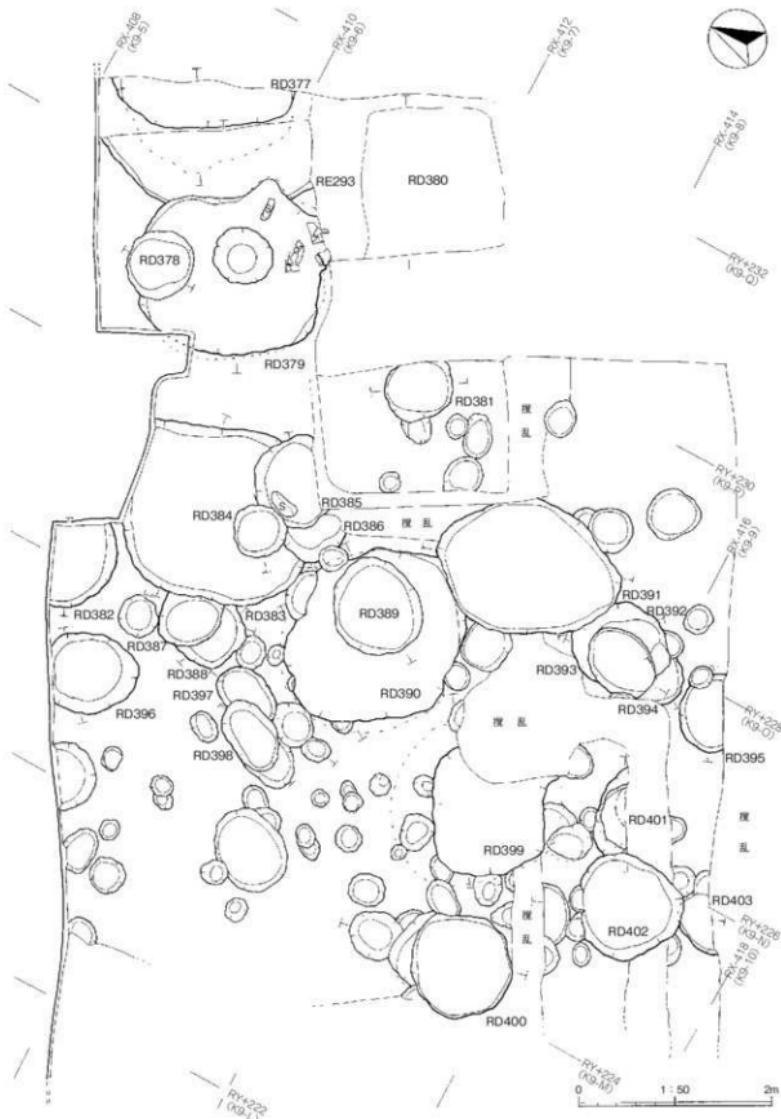
第39図 RA283・285・286 穫穴住居跡



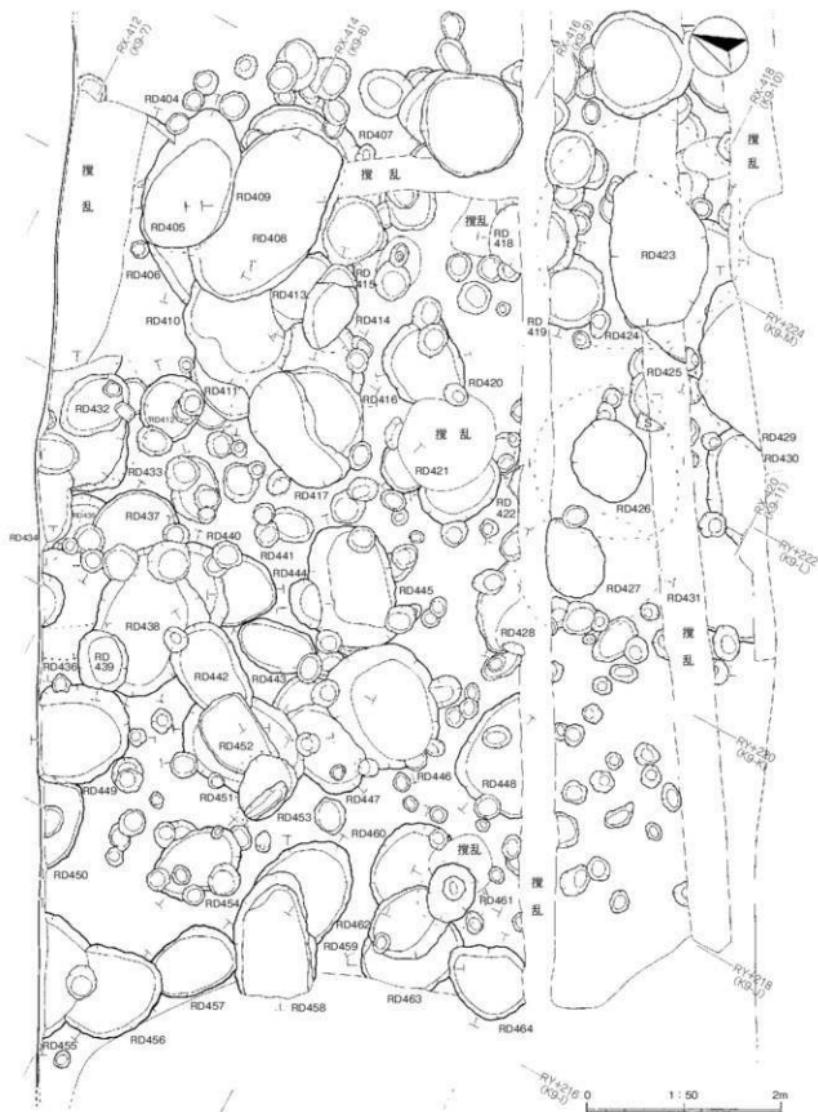
第40図 RA287・289・290竪穴住居跡、RE291竪穴跡、RD517・529・530土坑



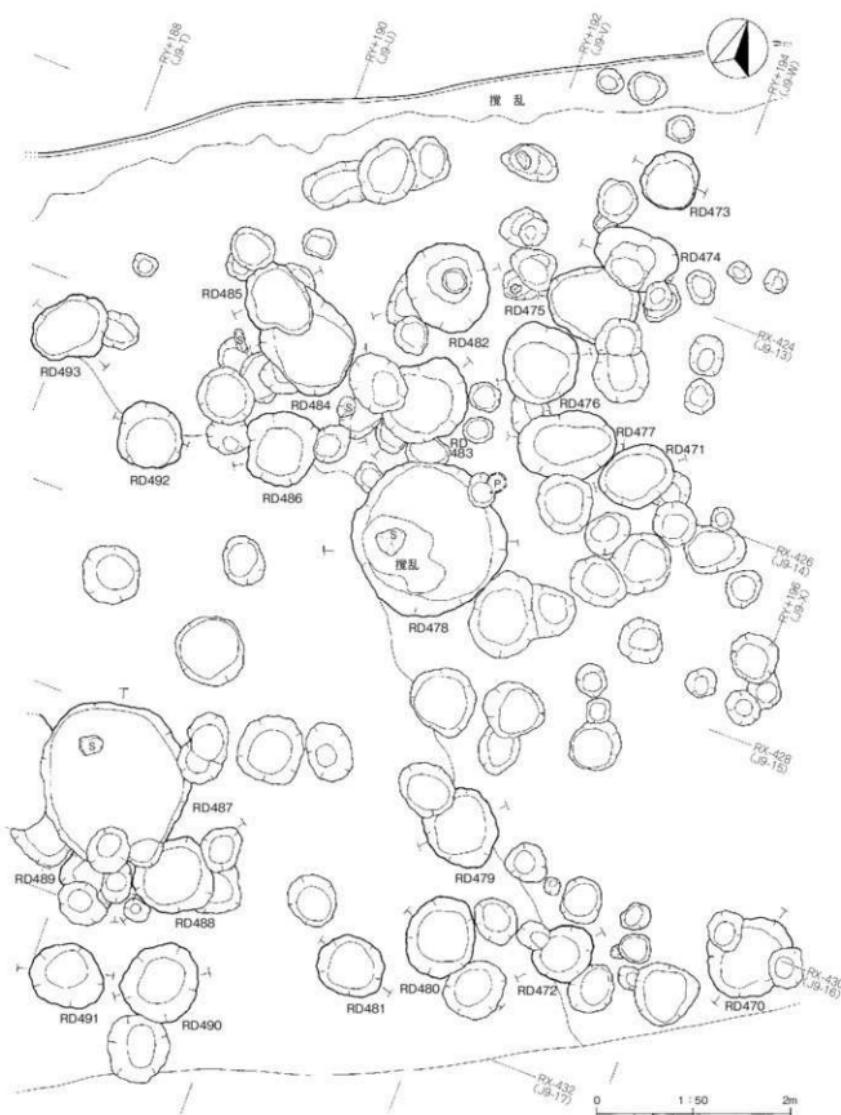
第41図 RA292・0501竪穴住居跡、RA0501竪穴住居跡出土遺物



第42図 RE293 竪穴跡、RD377～403 土坑



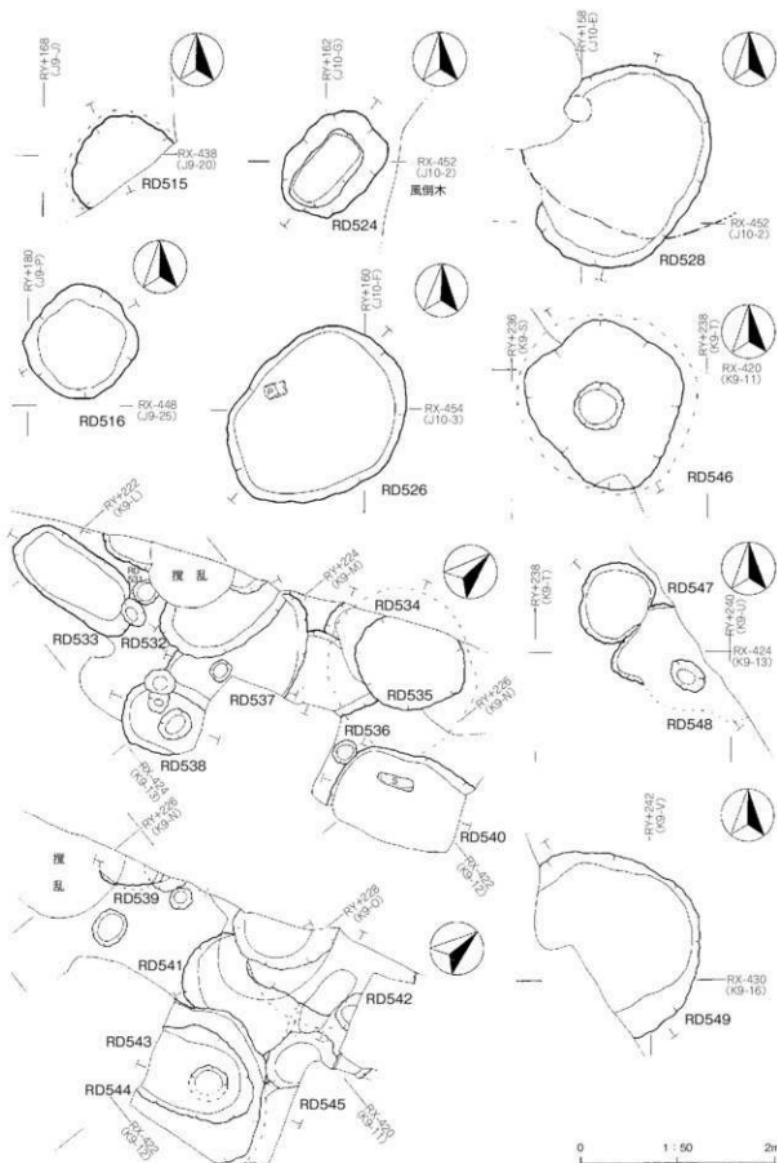
第43図 RD404～464 土坑



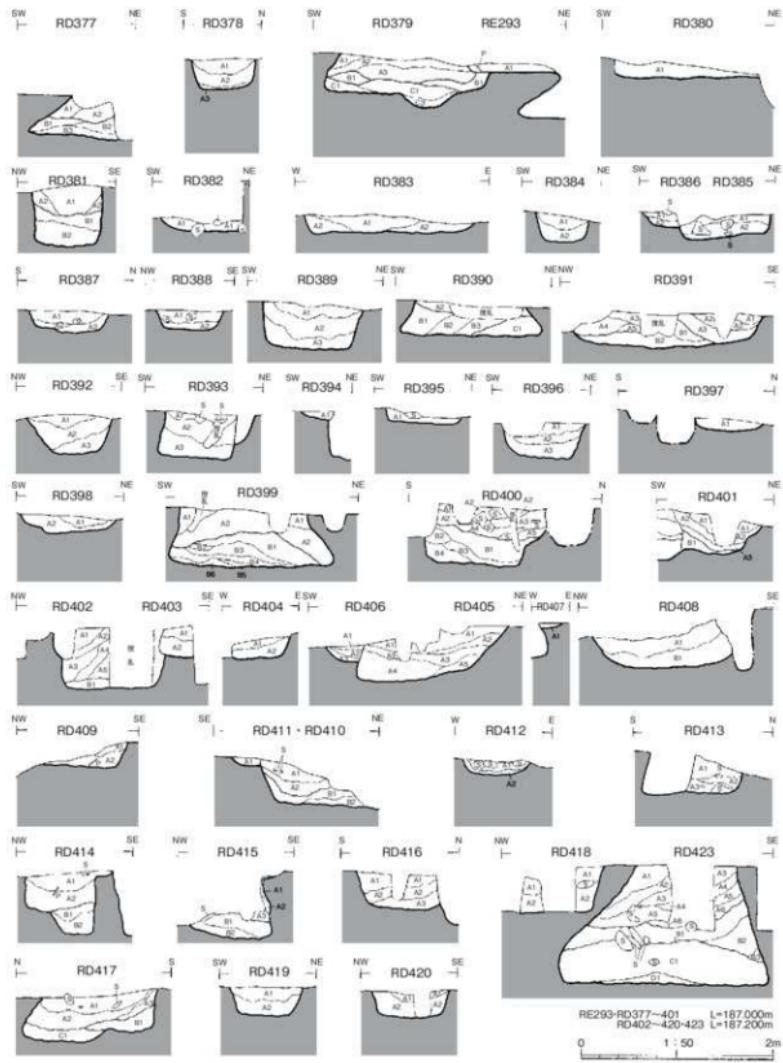
第44図 RD470～493土坑



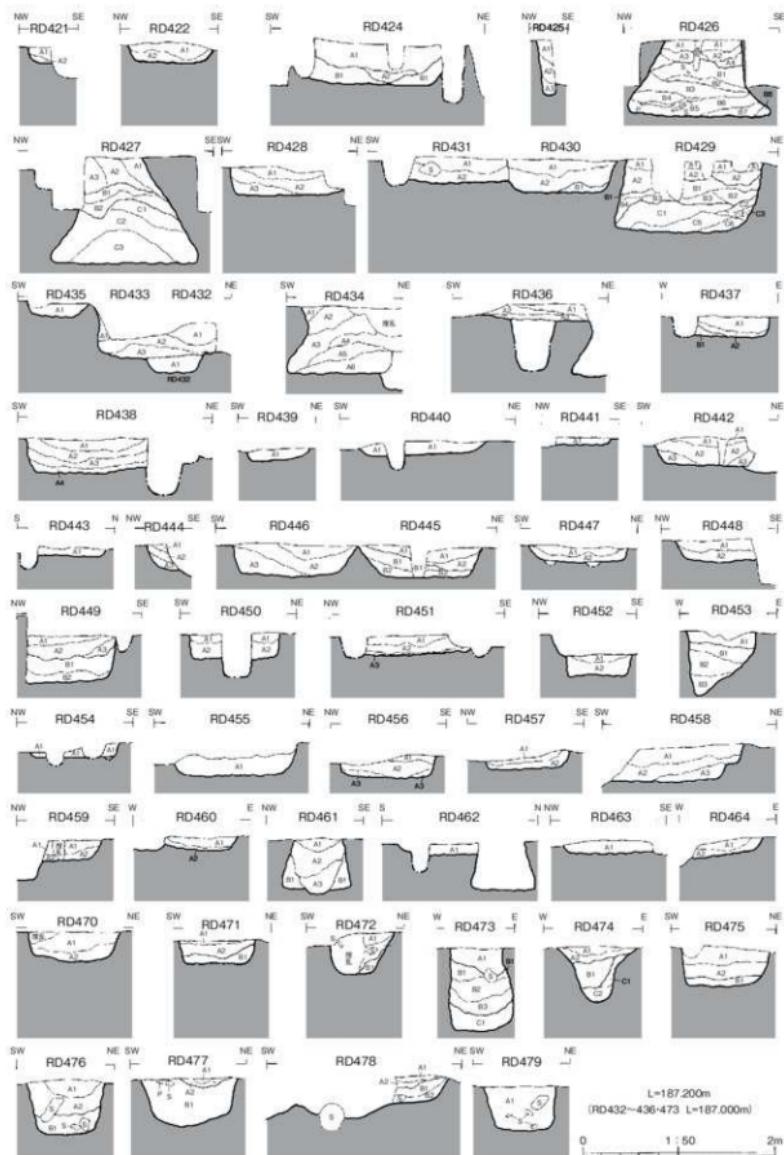
第45図 RD494～503・506・508土坑



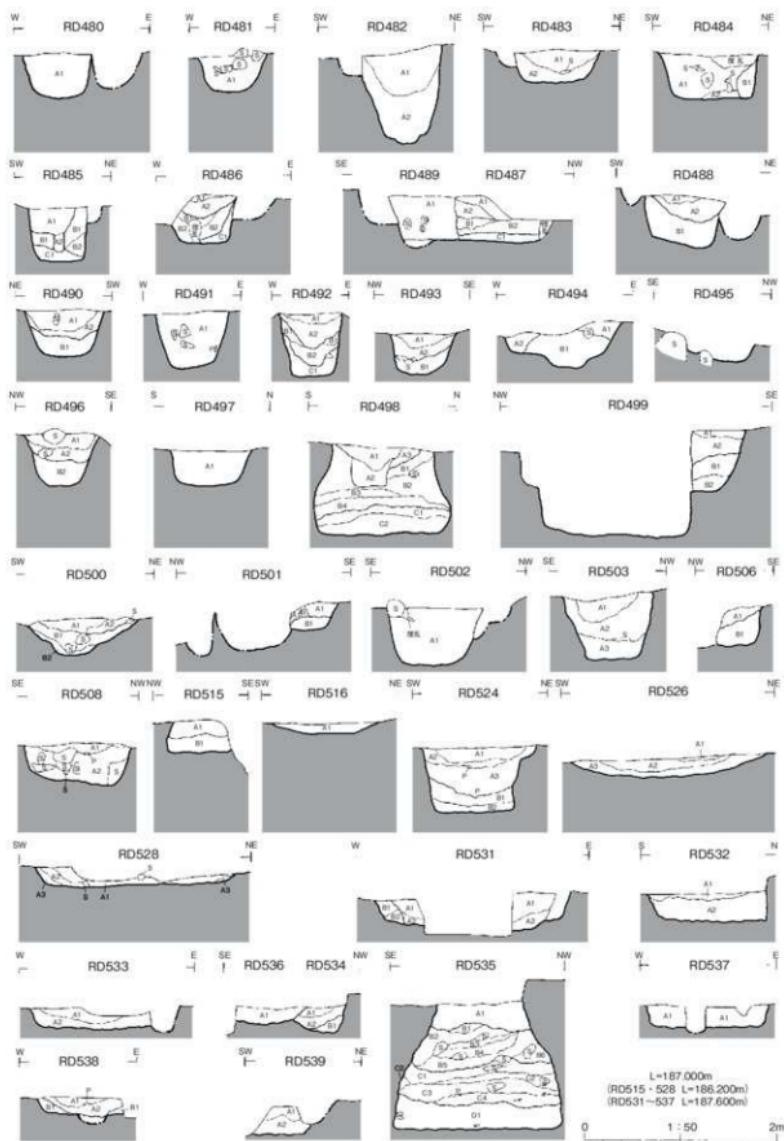
第46図 RD515・516・524・526・528・531～549土坑



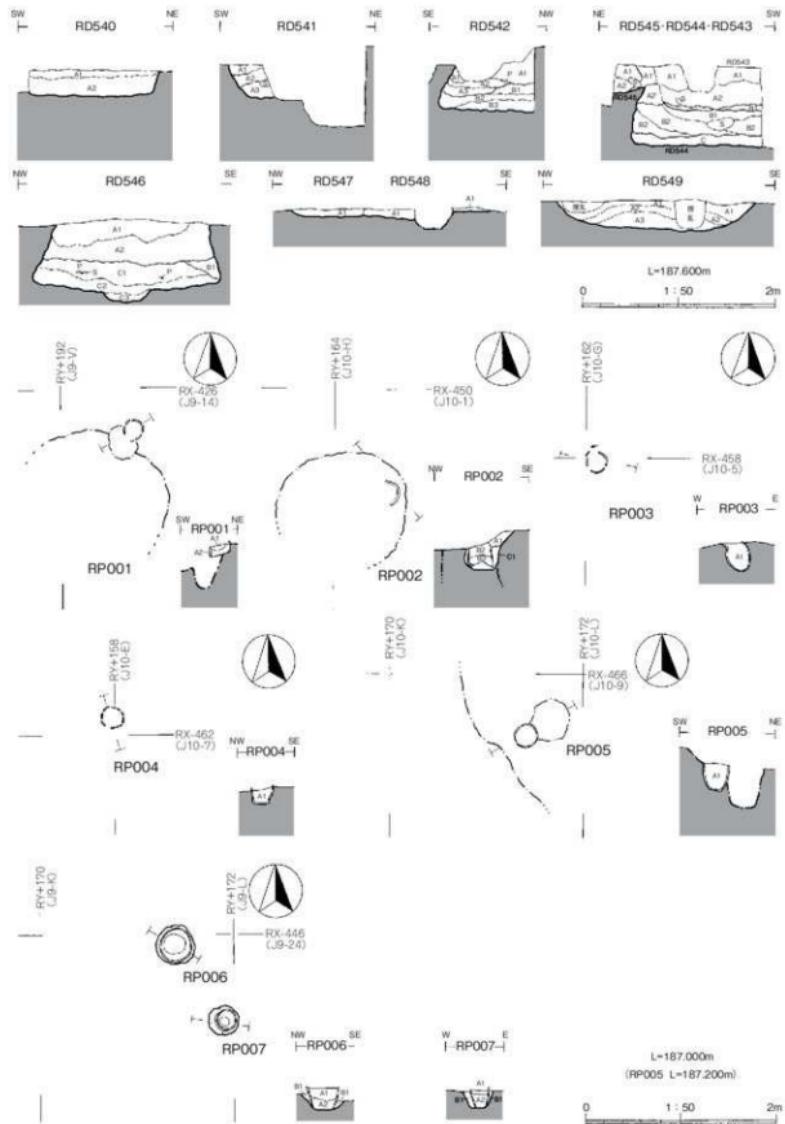
第47図 RE293 竪穴跡、RD377 ~ 420・423 土坑断面



第48図 RD421・422・424～464・470～479 土坑断面



第49図 RD480～503・506・508・515・516・524・526・528・531～539 土坑断面

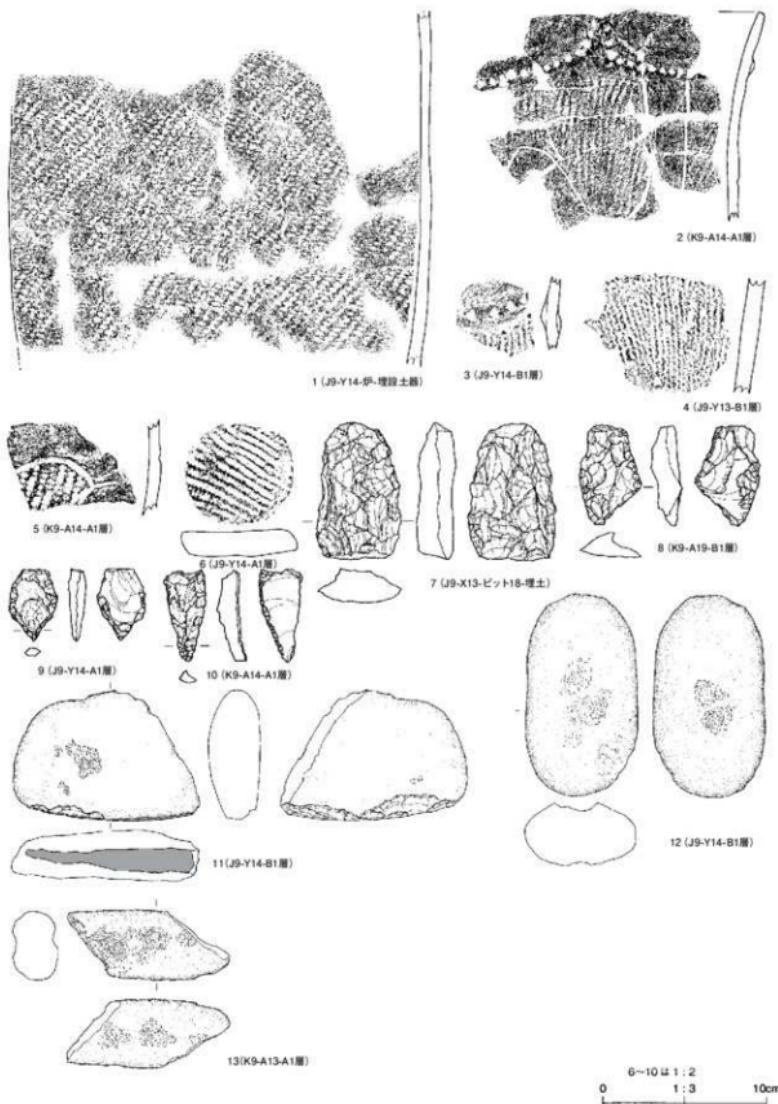


第50図 RD540～549土坑断面、RP001～007埋設土器

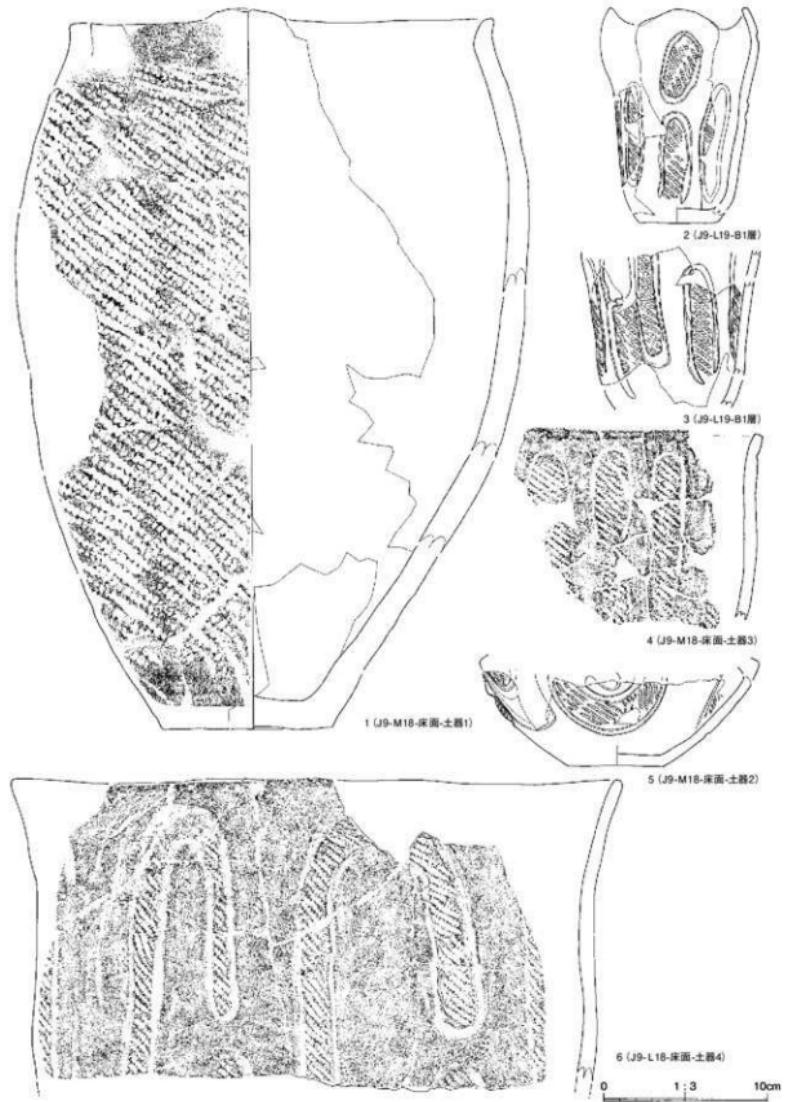


遺 物 図 版

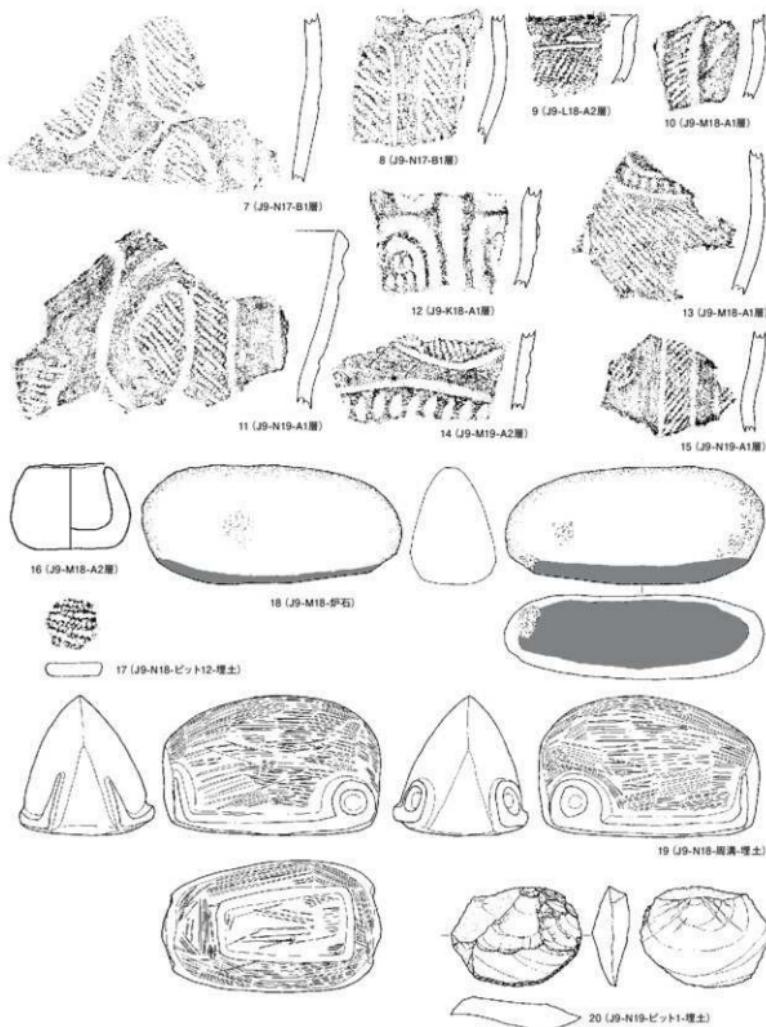




第51図 RA221 壺穴住居跡出土遺物

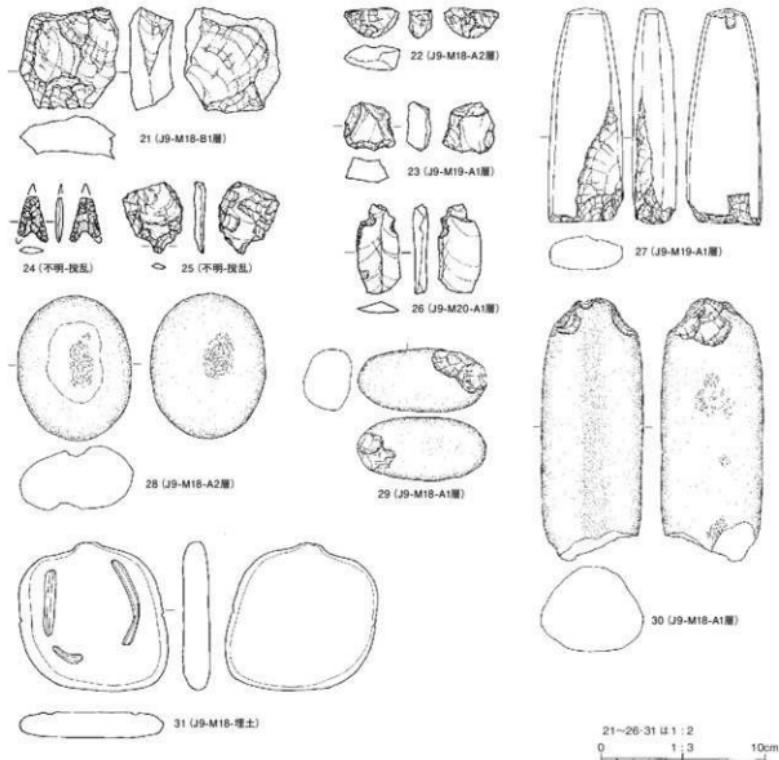


第52図 RA222 竪穴住居跡出土遺物（1）

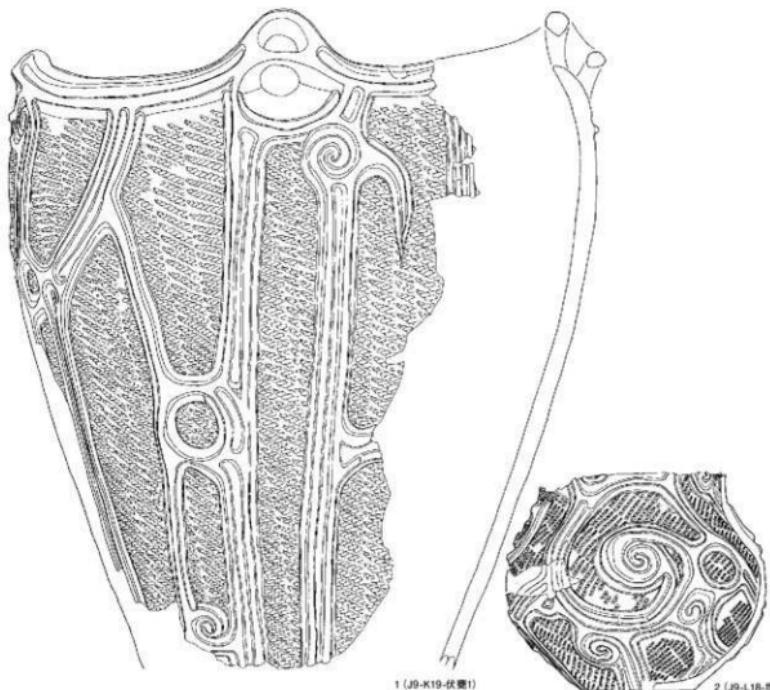


16・17・19・20は1:2  
0 1:3 10cm

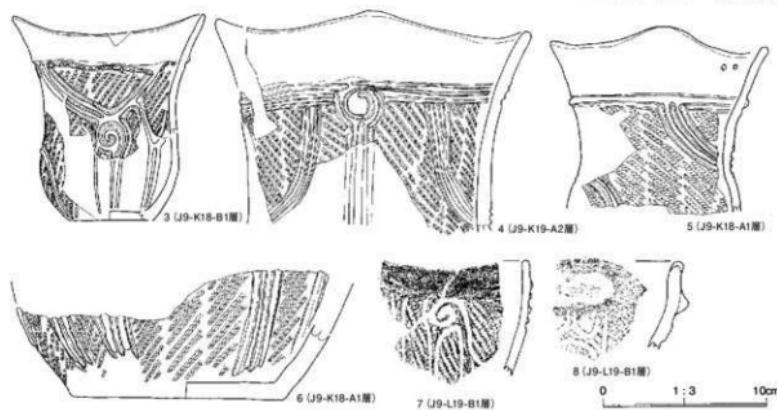
第53図 RA222 竪穴住居跡出土遺物（2）



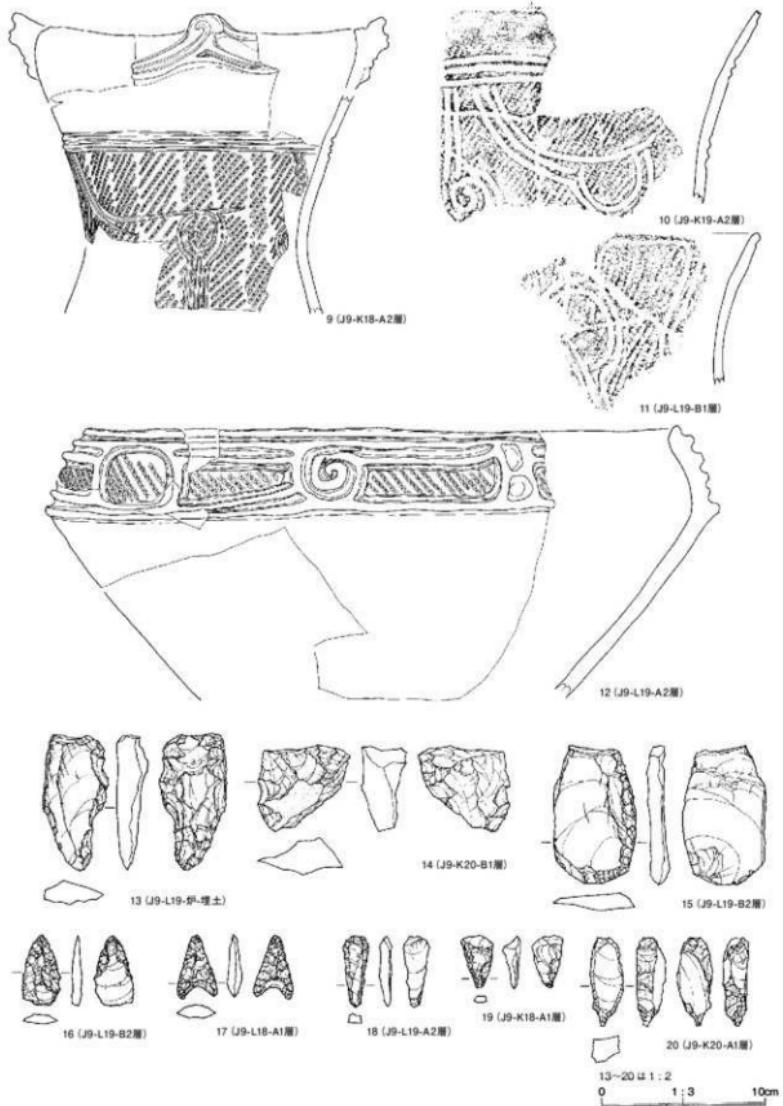
第54図 RA222 積穴住跡出土遺物（3）



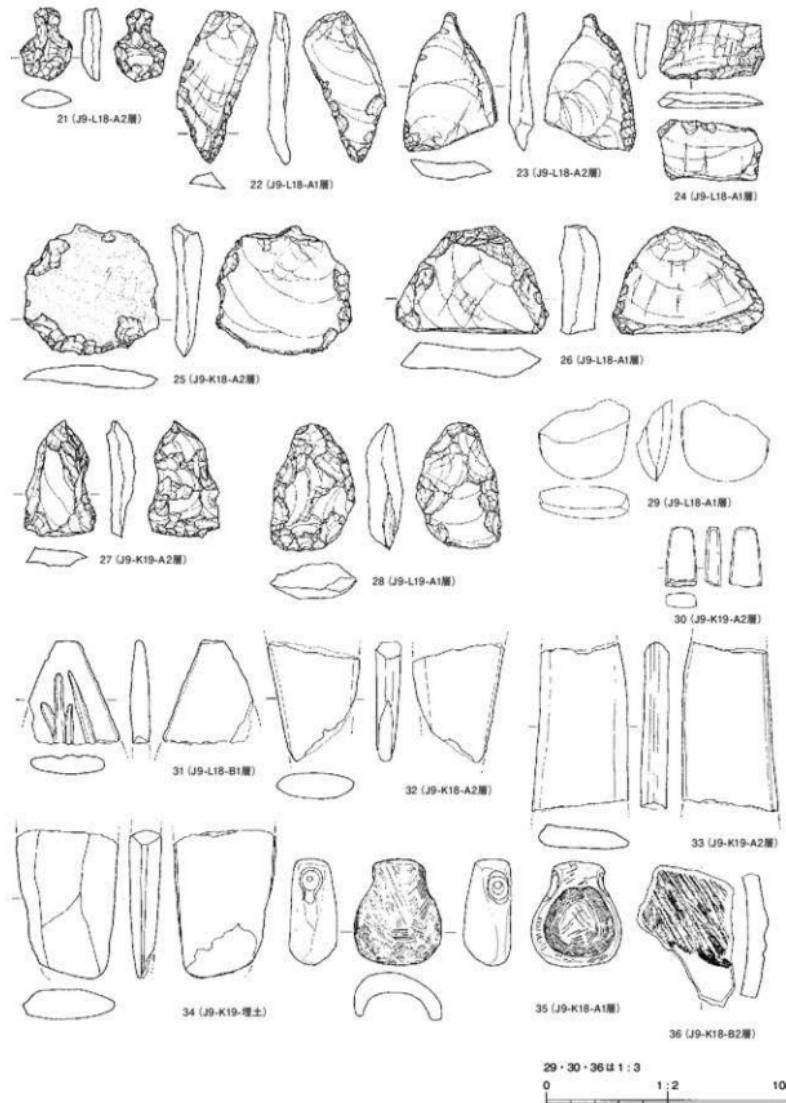
1 (J9-K19-伏甕1)  
2 (J9-L18-埋設土器)



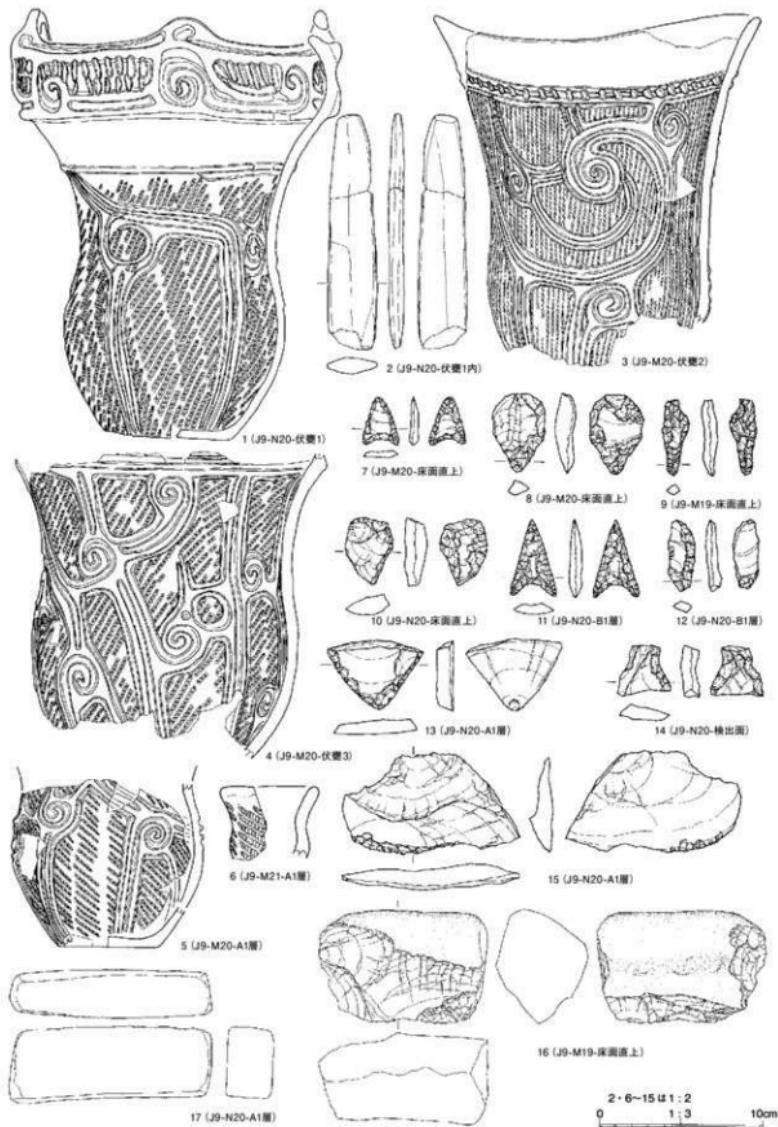
第 55 図 RA223 竪穴住居跡出土遺物 (1)



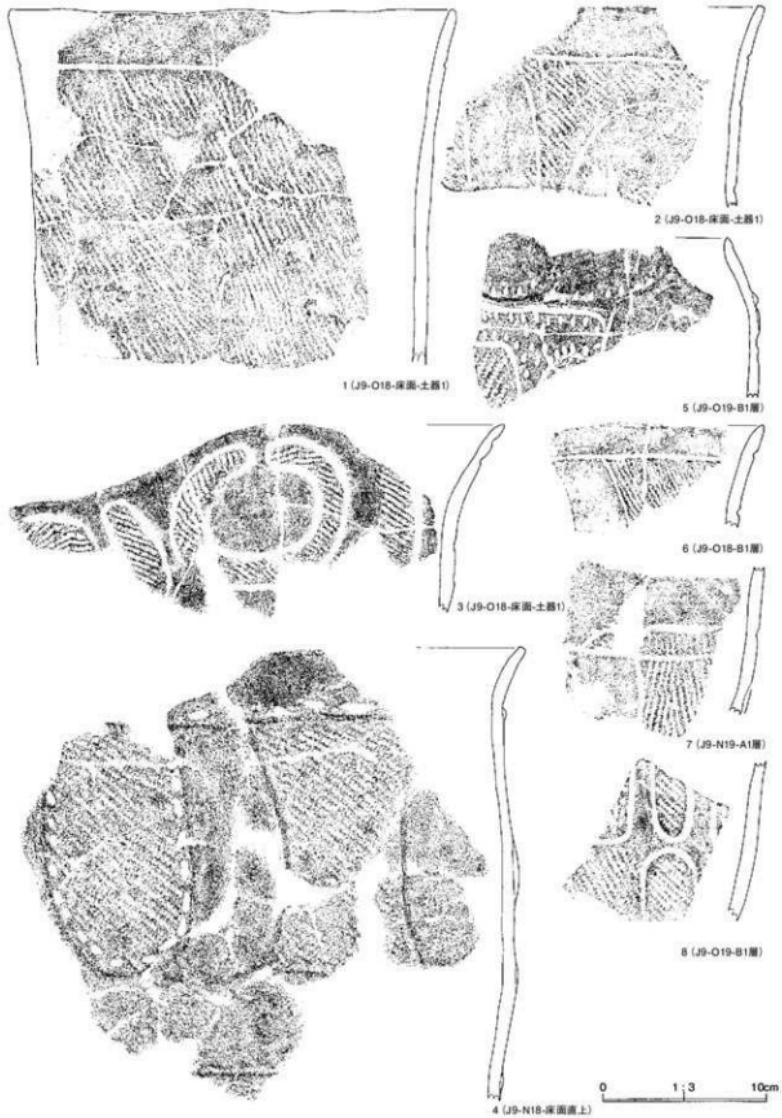
第56図 RA223 竪穴住居跡出土遺物（2）



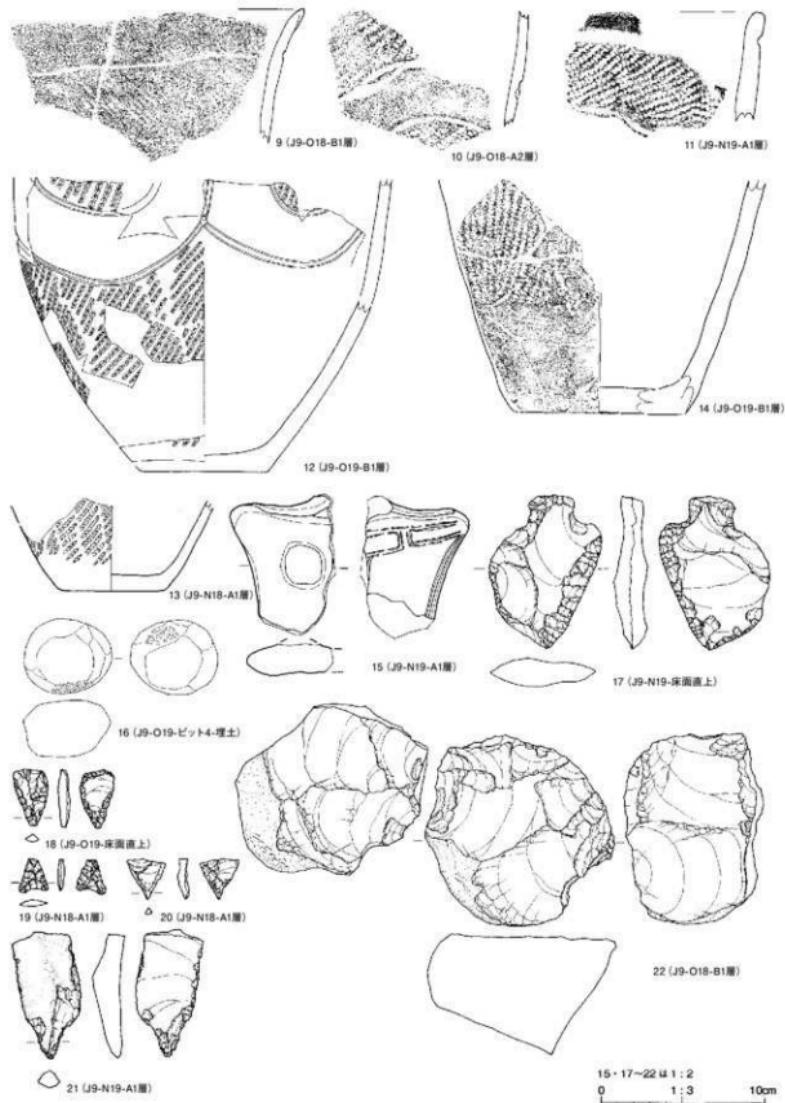
第57図 RA223 竪穴住居跡出土遺物（3）



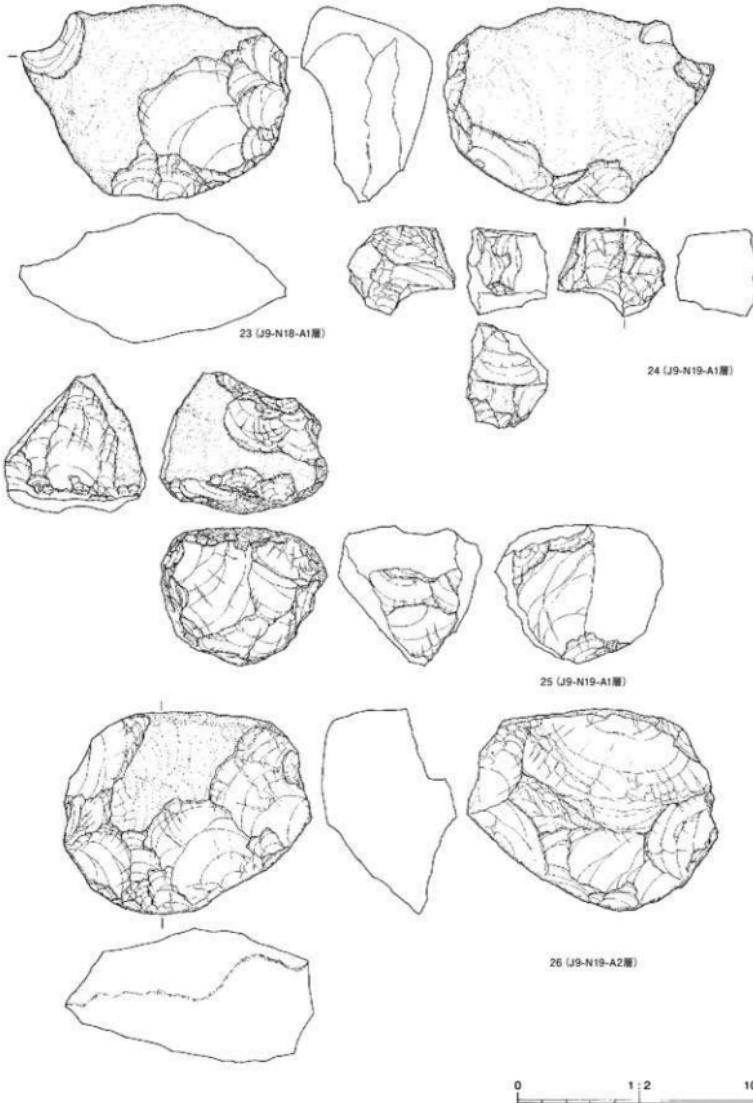
第58図 RA224 竪穴住居跡出土遺物



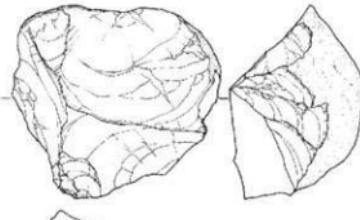
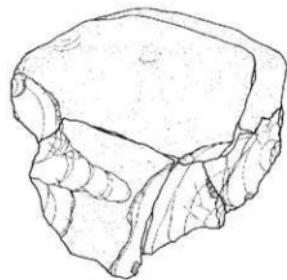
第59図 RA225 竪穴住居跡出土遺物（1）



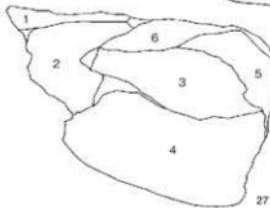
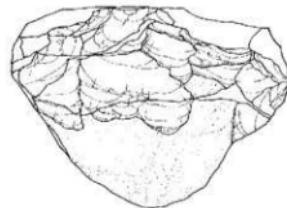
第60図 RA225 竪穴住居跡出土遺物（2）



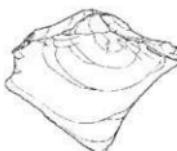
第 61 図 RA225 竪穴住居跡出土遺物（3）



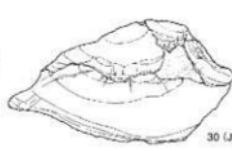
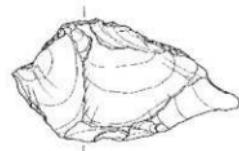
28 (J9-N19-A1層-4)



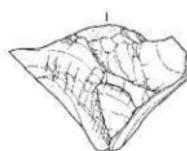
27 (J9-N19-A1層-母岩・剥片接合関係)



29 (J9-N19-A1層-1)



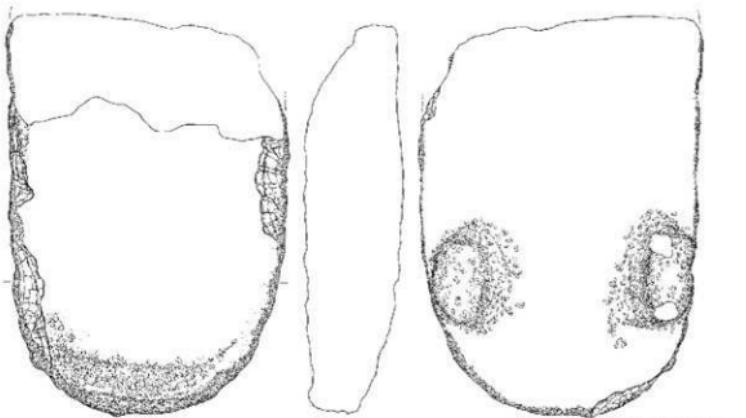
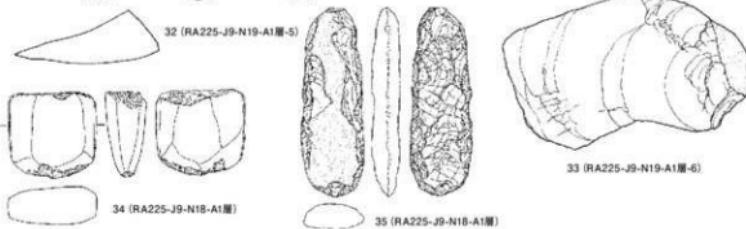
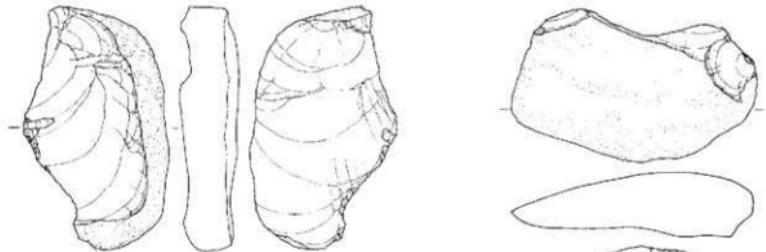
30 (J9-N19-A1層-2)



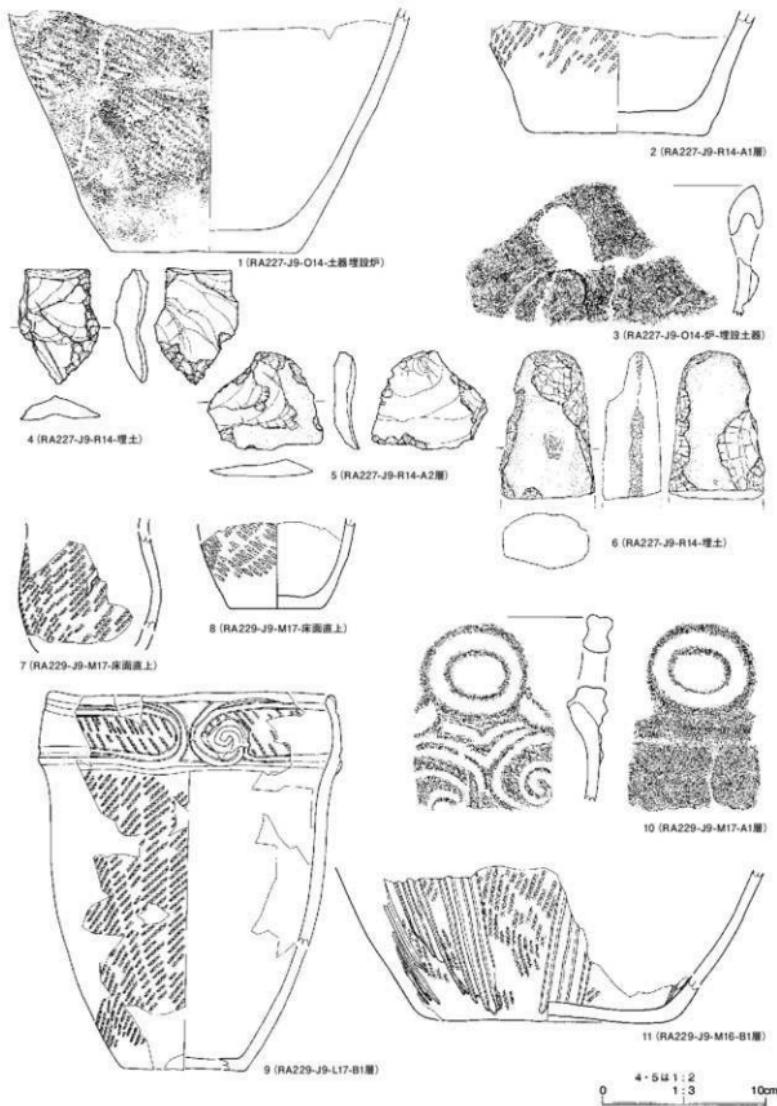
31 (J9-N19-A1層-3)



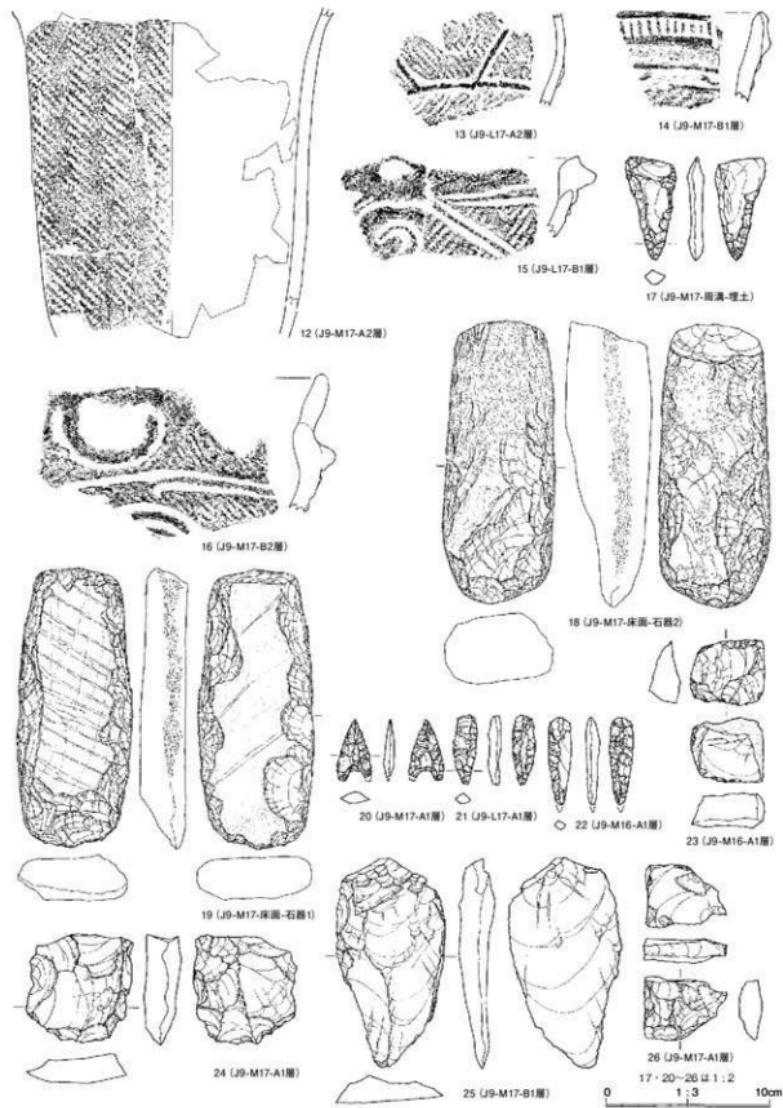
第 62 図 RA225 竪穴住居跡出土遺物 (4)



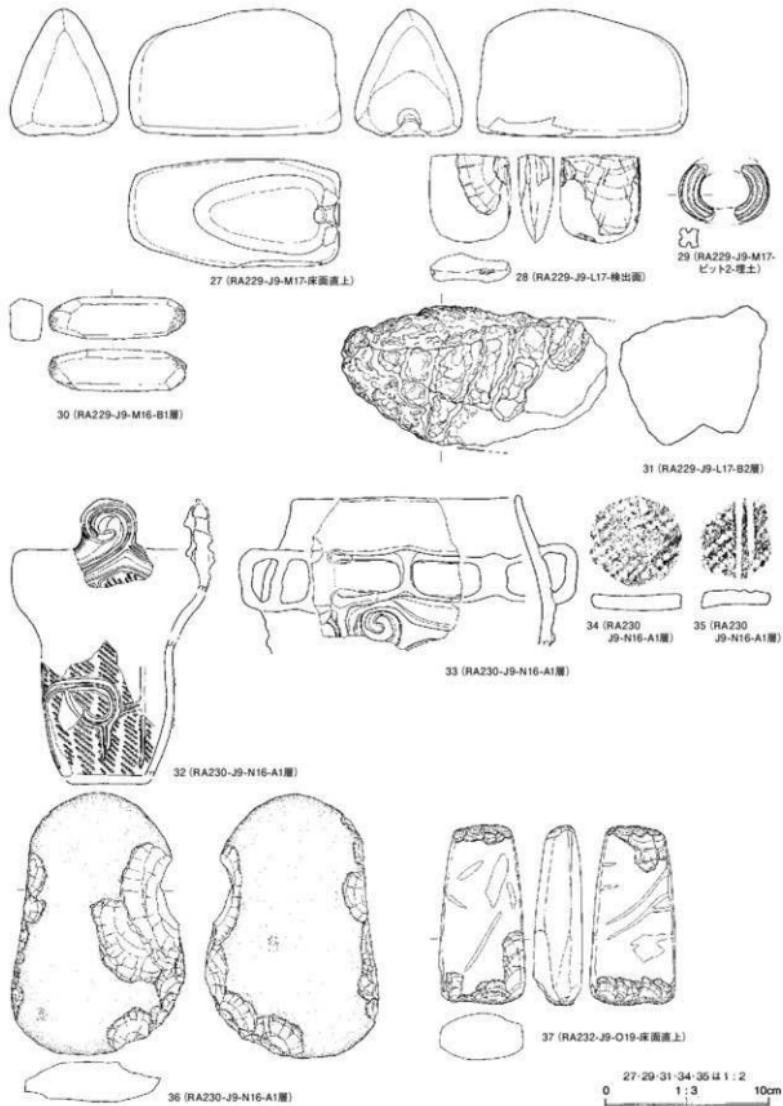
第63図 RA225(5)・226 竪穴住居跡出土遺物



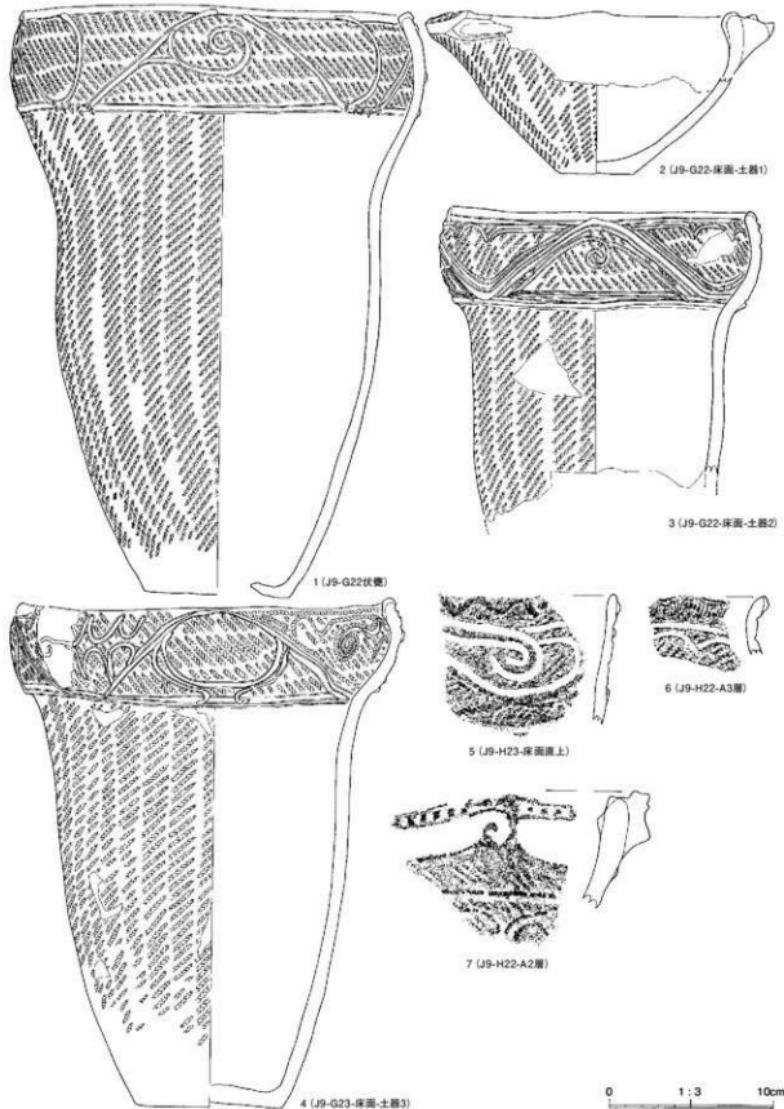
第64図 RA227・229(1) 積穴住居跡出土遺物



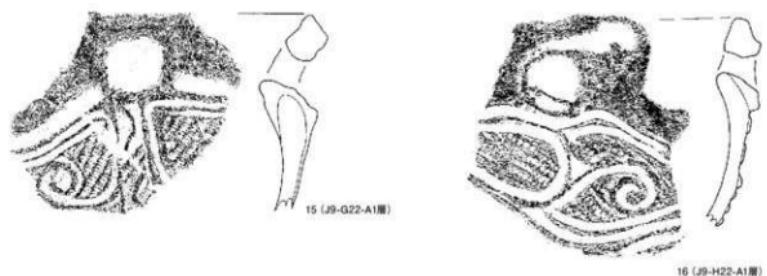
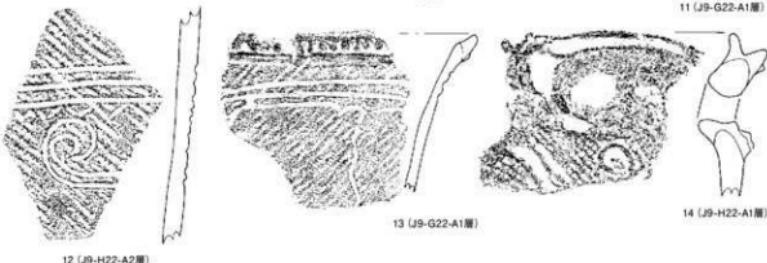
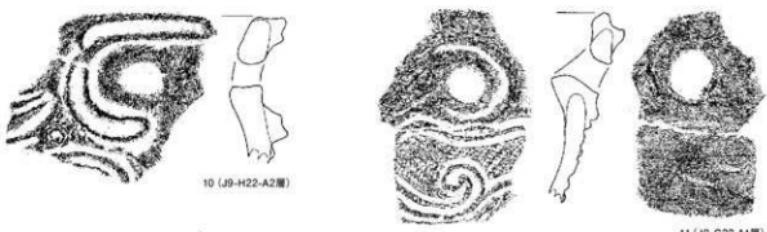
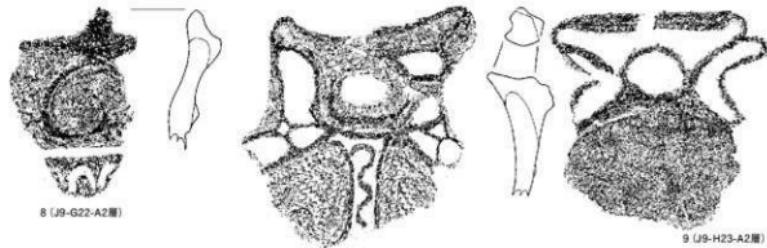
第65図 RA229 竪穴住居跡出土遺物（2）



第 66 図 RA229 (3)・230・232 積穴住居跡出土遺物

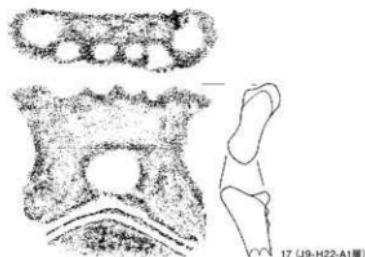


第67図 RA233 I期竪穴住居跡出土遺物（1）

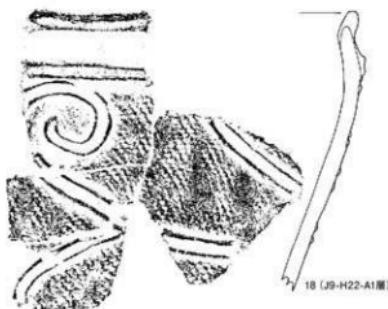


0 1:3 10cm

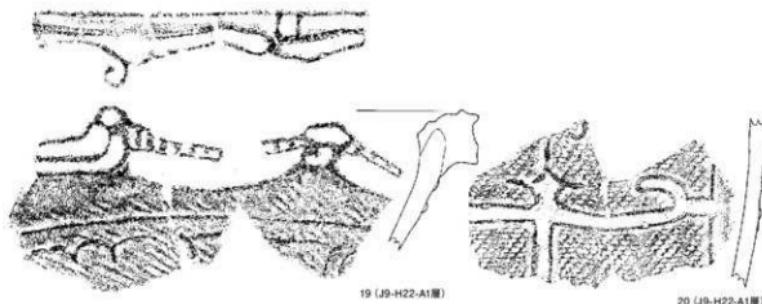
第68図 RA233 I期竖穴住居跡出土遺物 (2)



17 (J9-H22-A1層)



18 (J9-H22-A1層)



19 (J9-H22-A1層)

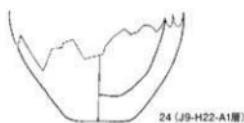
20 (J9-H22-A1層)



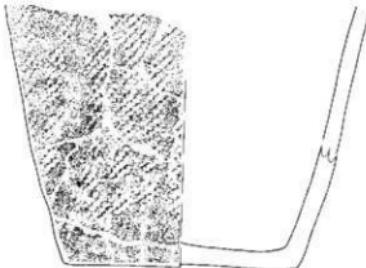
21 (J9-H22-A1層)



22 (J9-G22-A1層)



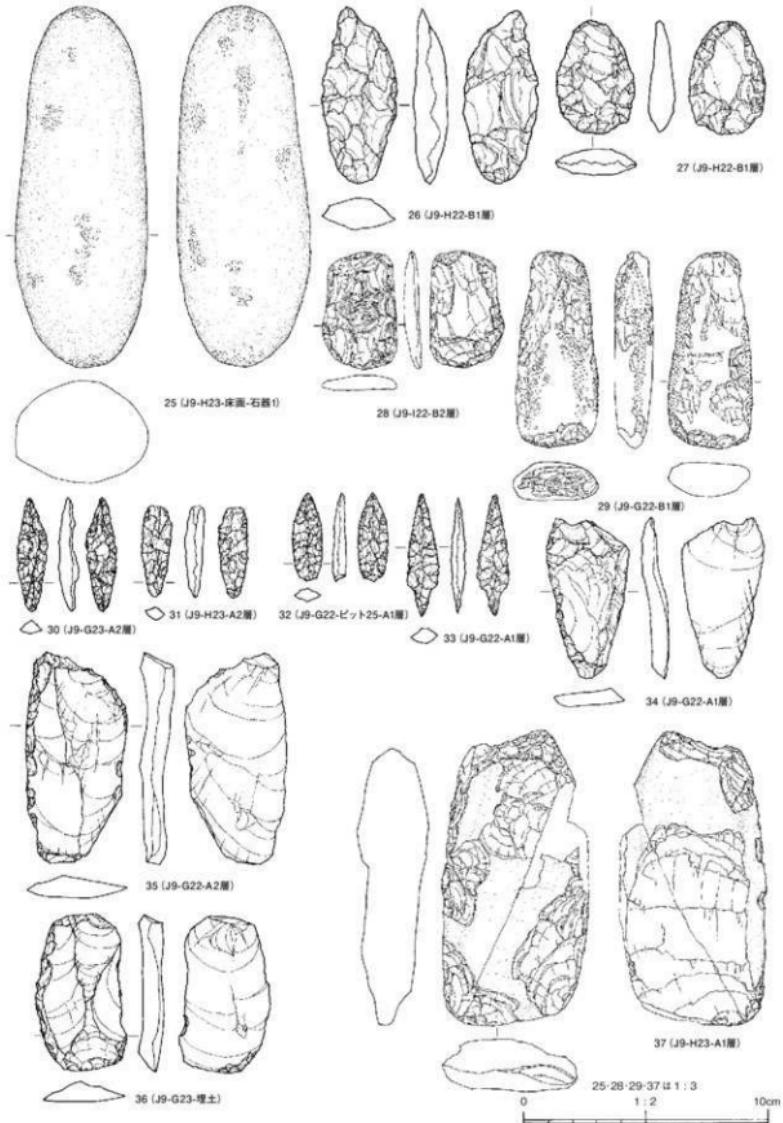
24 (J9-H22-A1層)



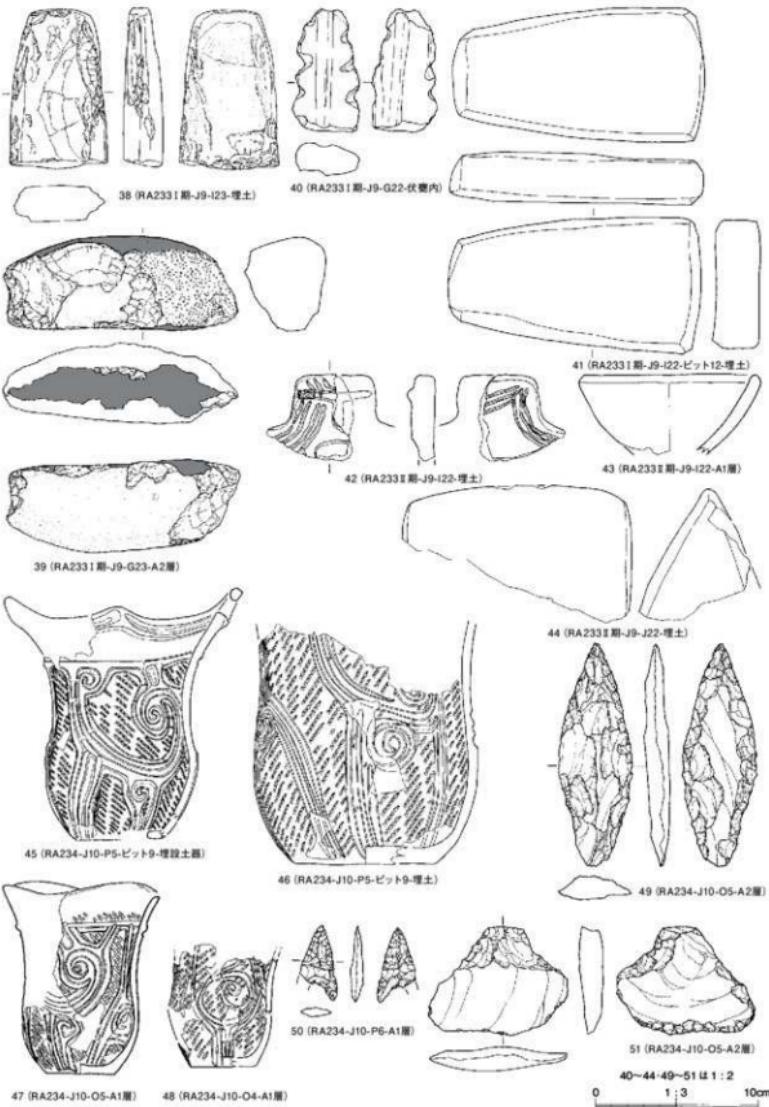
23 (J9-G22-B1層)

24は1:2  
0 1:3 10cm

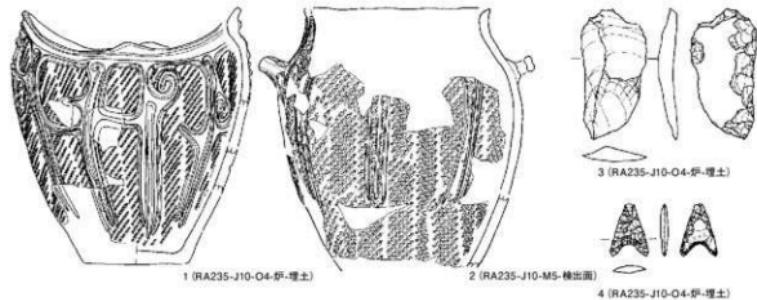
第69図 RA233 I期竪穴住居跡出土遺物（3）



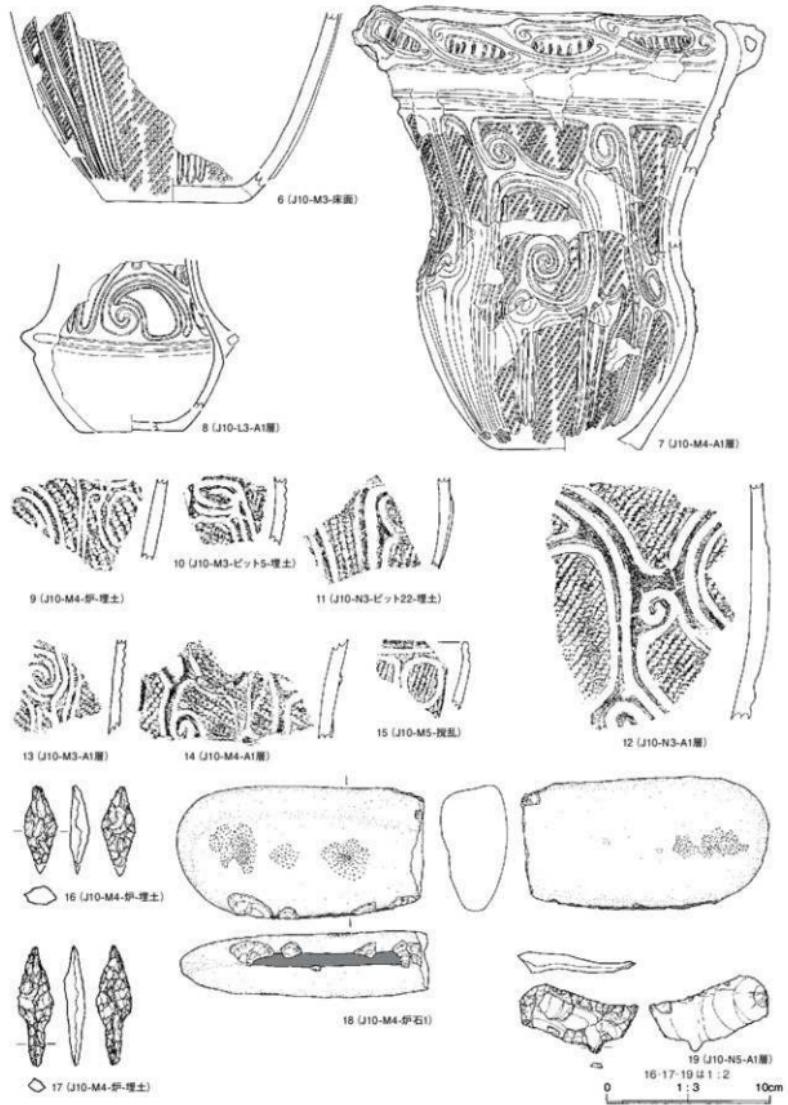
第70図 RA233 I期竖穴住居跡出土遺物（4）



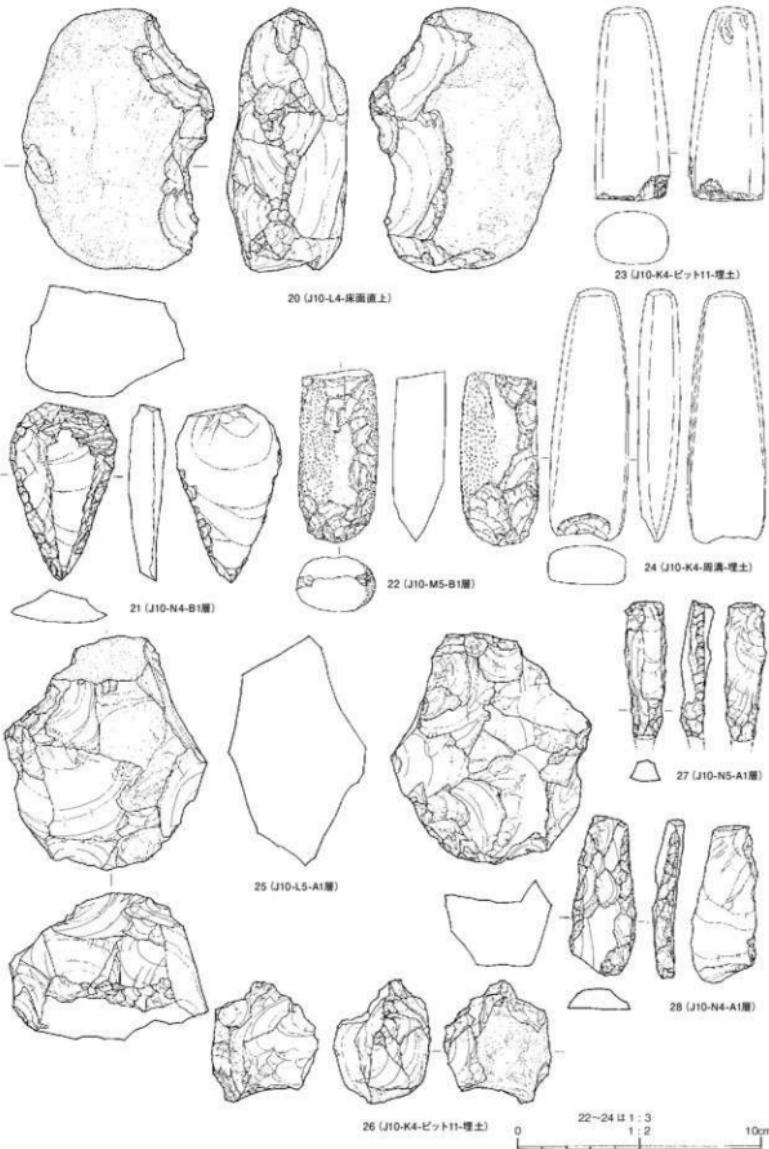
第71図 RA233 I期(5)・233 II期・234 竪穴住居跡出土遺物



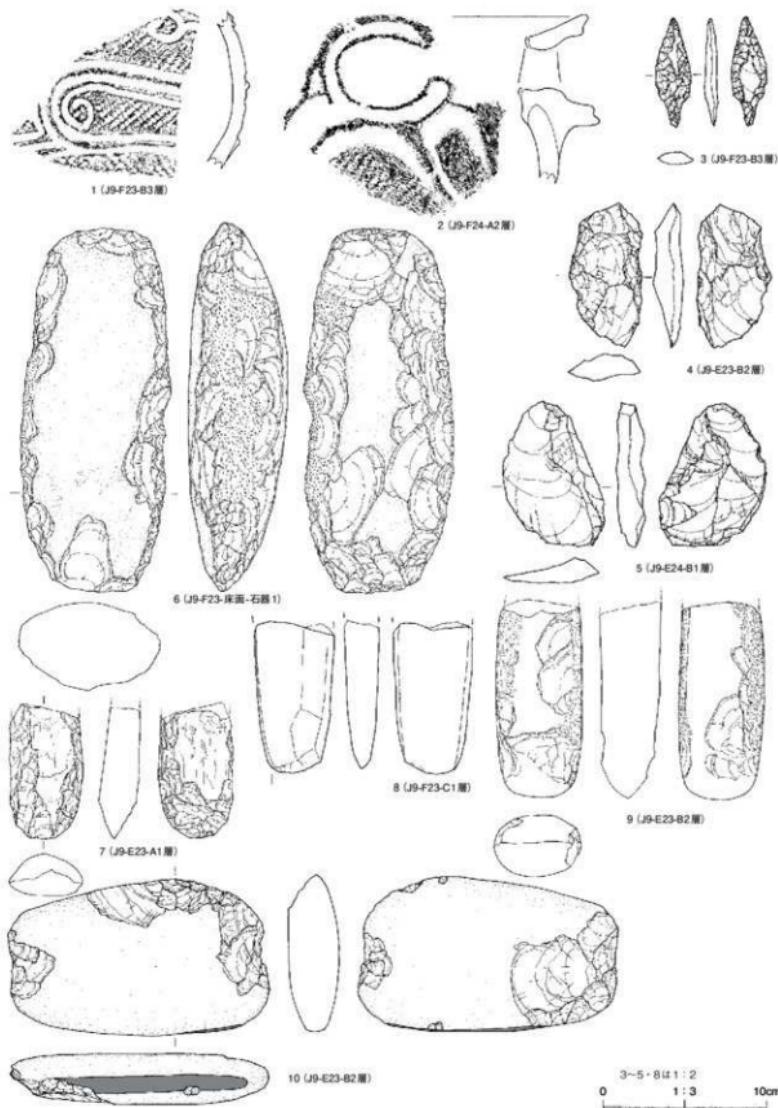
第72図 RA235・236(1) 積穴住居跡出土遺物



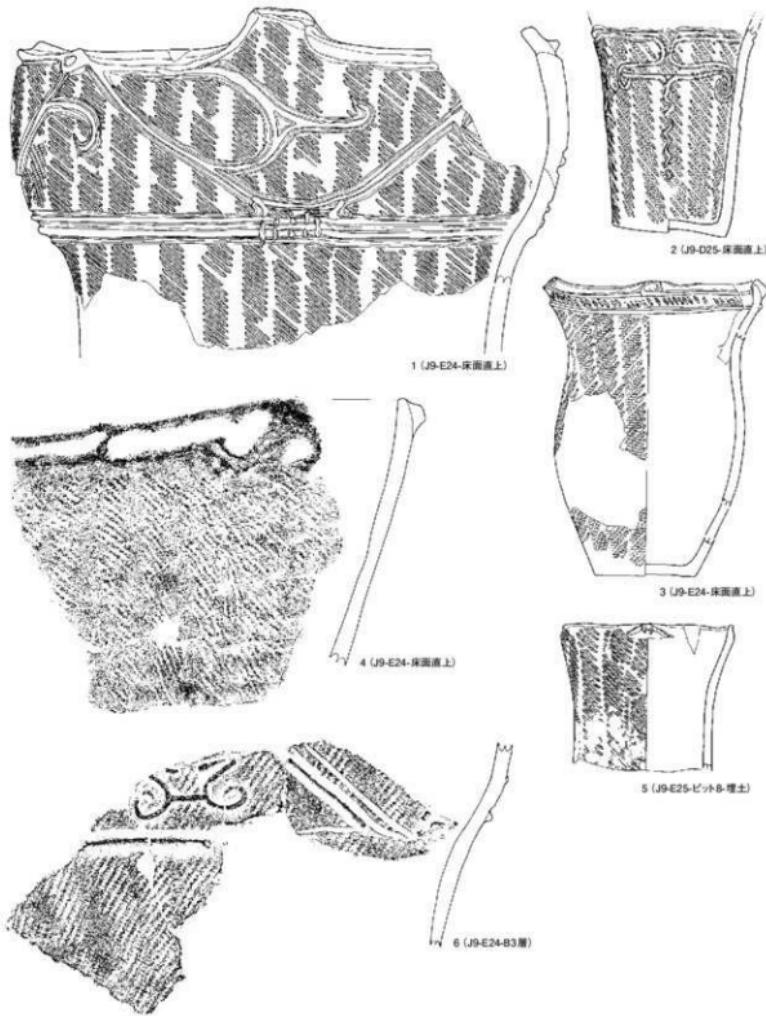
第73図 RA236 竪穴住居跡出土遺物（2）



第74図 RA236 竪穴住居跡出土遺物（3）

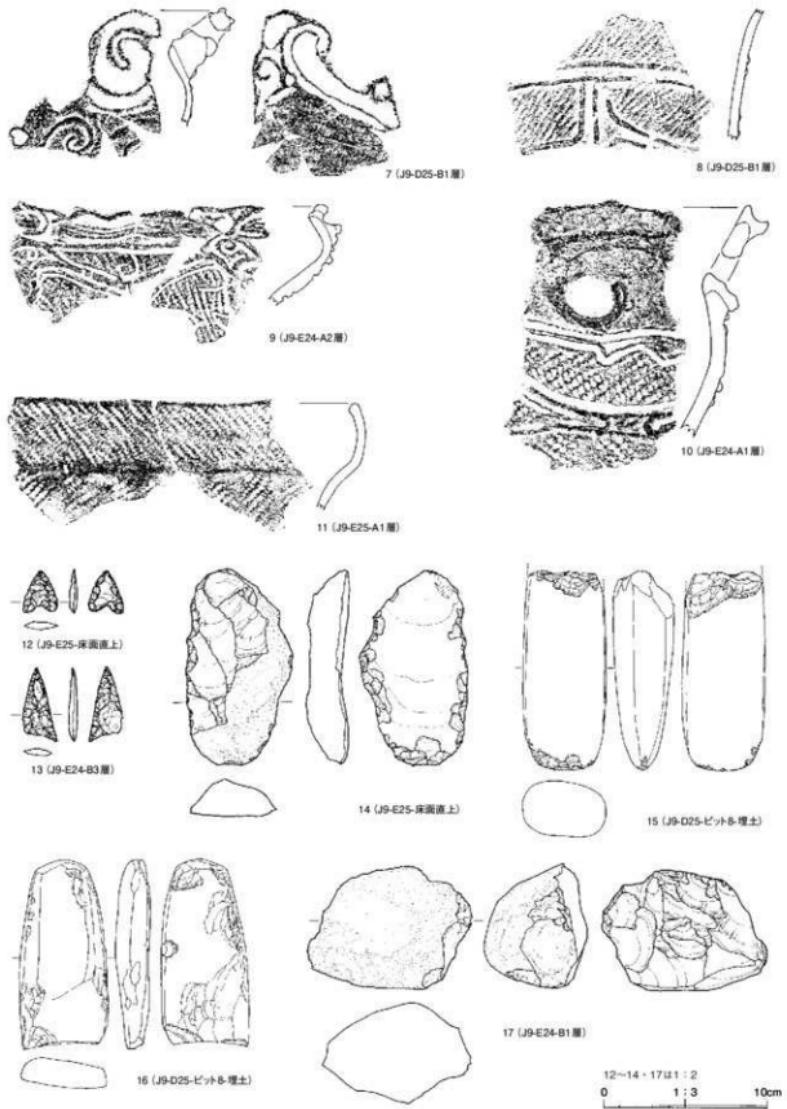


第75図 RA237 壁穴住居跡出土遺物

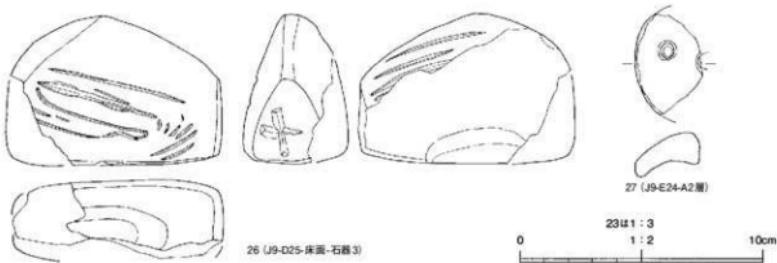
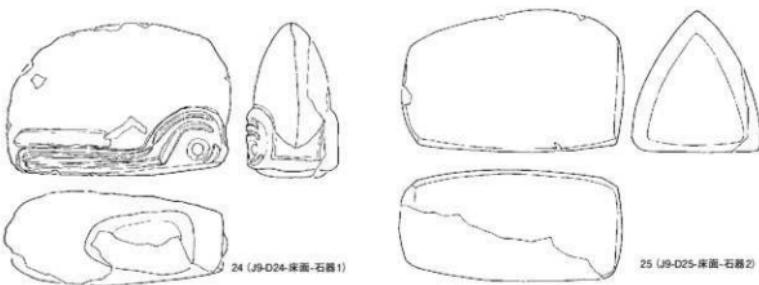
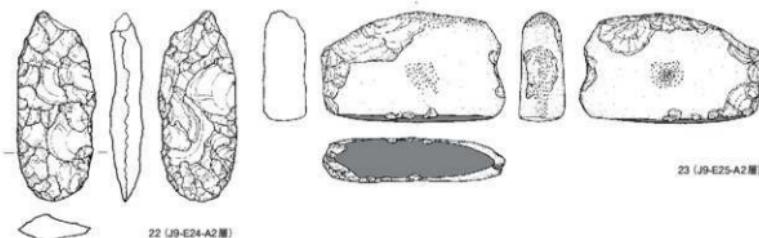
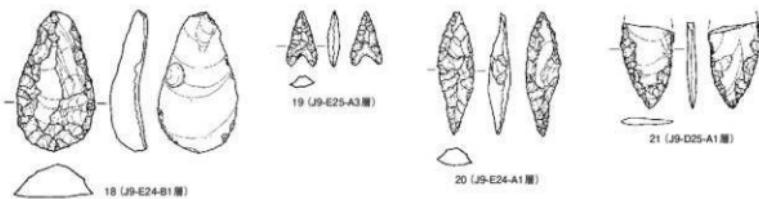


0 1:3 10cm

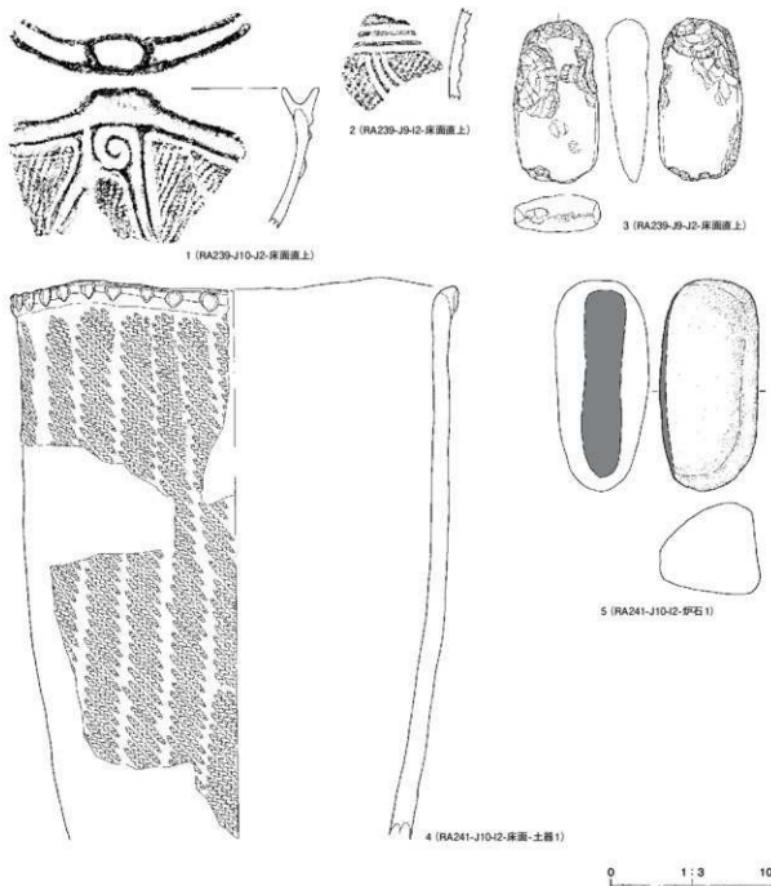
第 76 図 RA238 竪穴住居跡出土遺物（1）



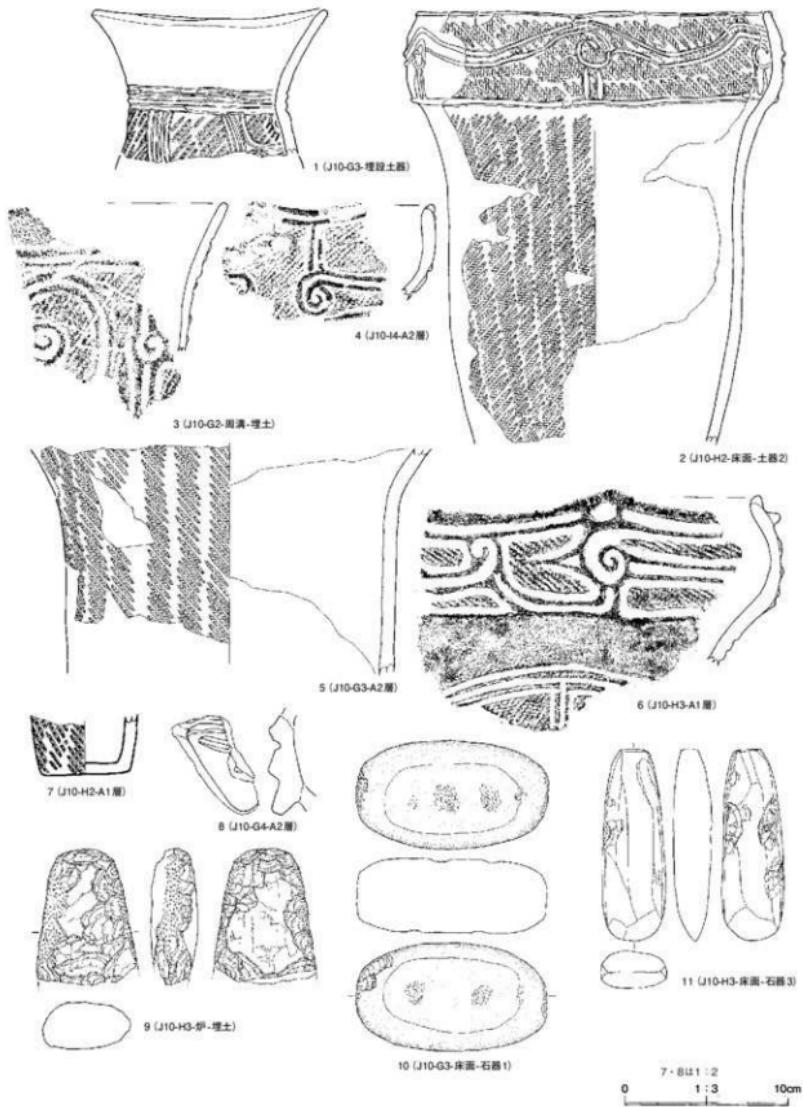
第77図 RA238 竪穴住居跡出土遺物（2）



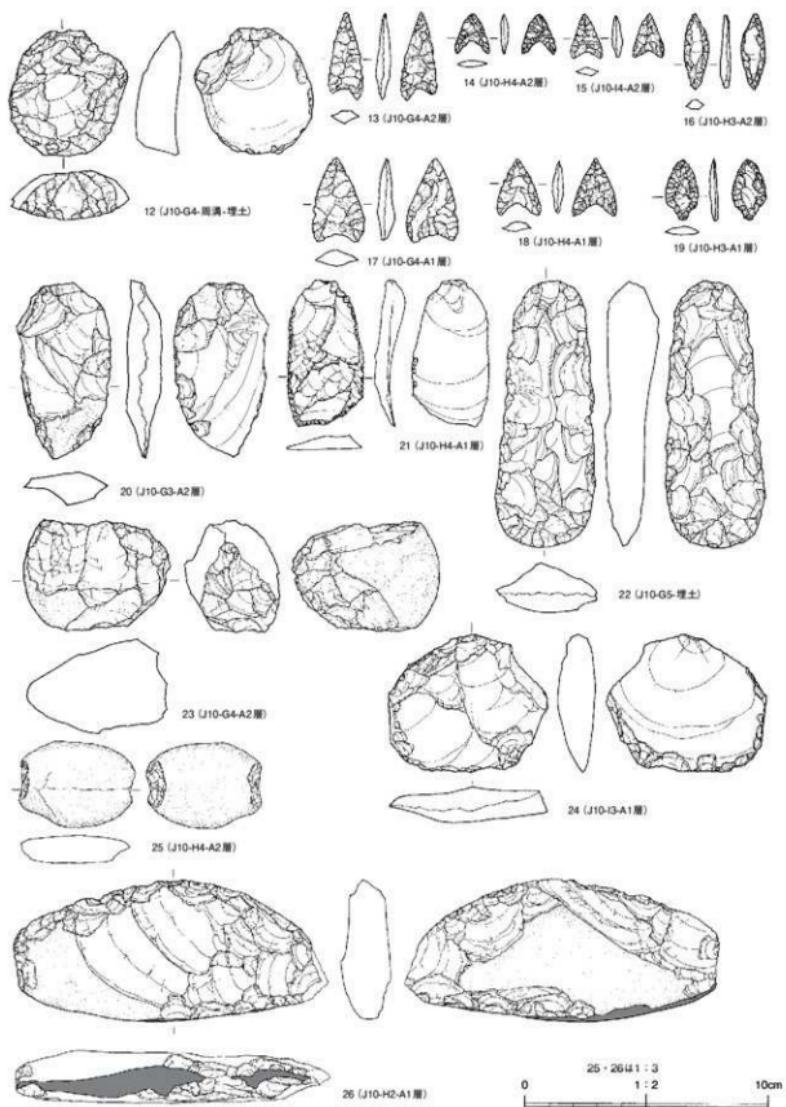
第78図 RA238 竪穴住居跡出土遺物（3）



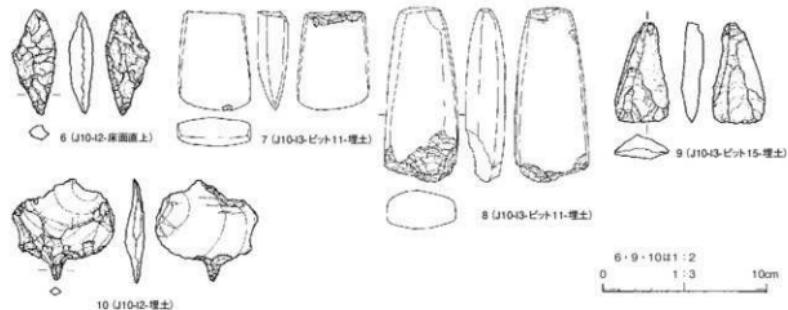
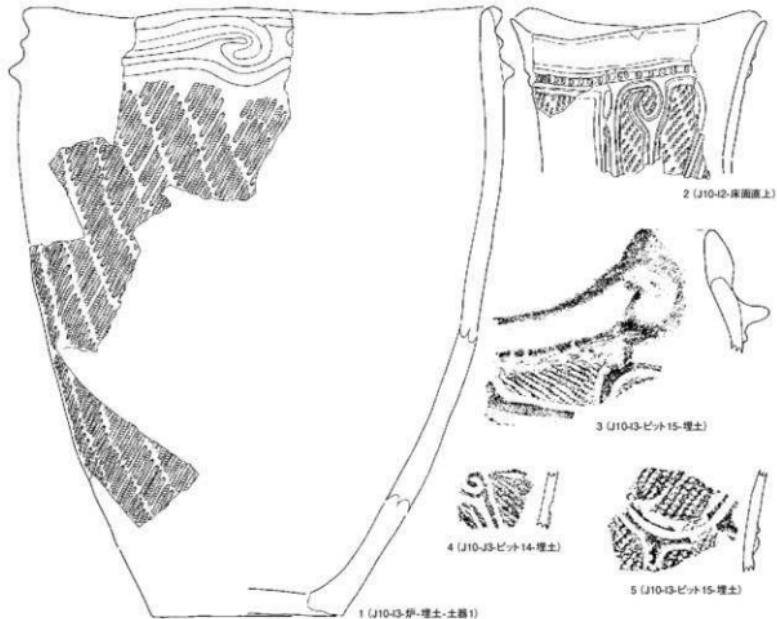
第 79 図 RA239・241 穴居跡出土遺物



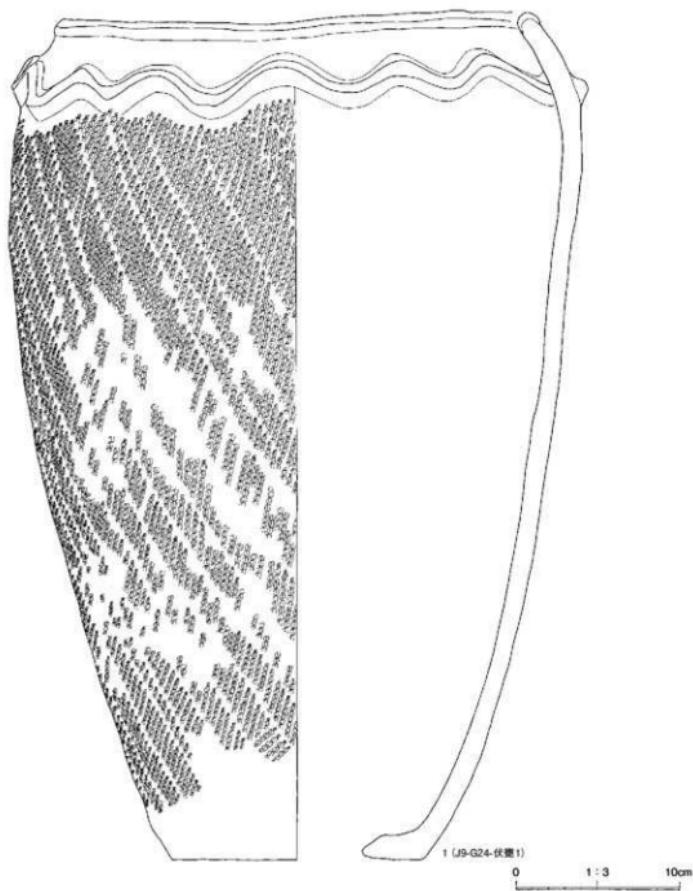
第 80 図 RA242 竪穴住居跡出土遺物（1）



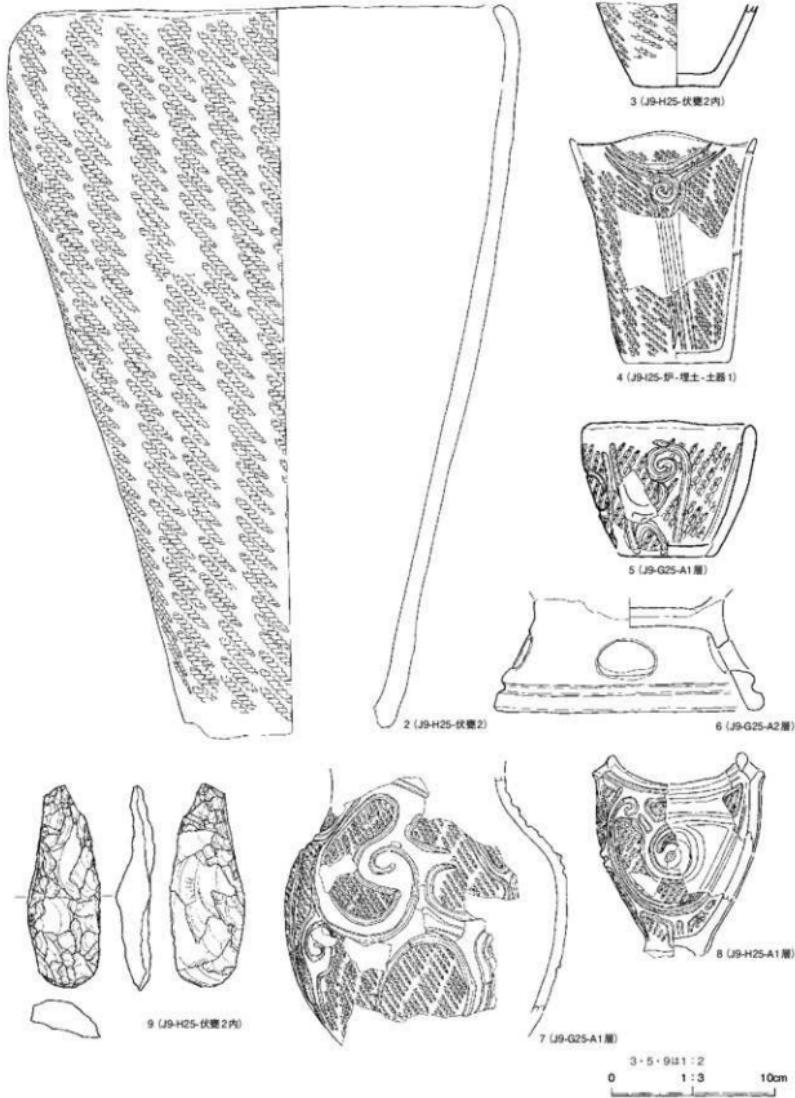
第 81 図 RA242 竪穴住居跡出土遺物（2）



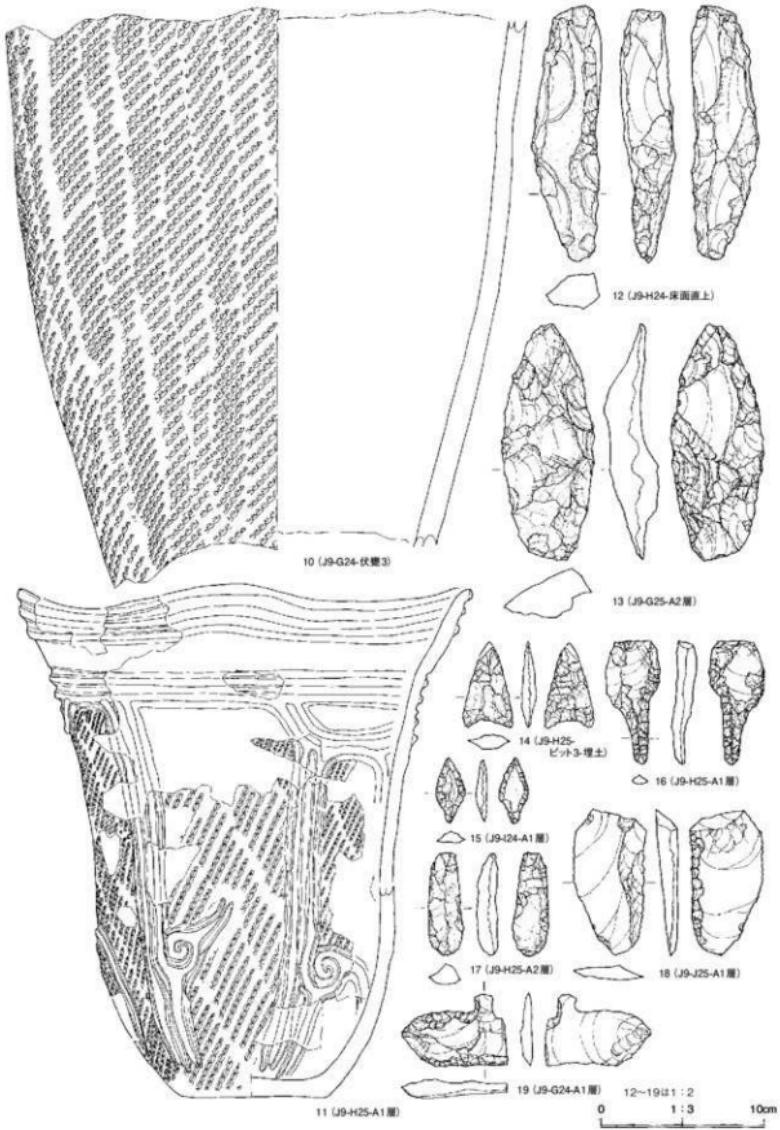
第82図 RA243 竪穴住居跡出土遺物



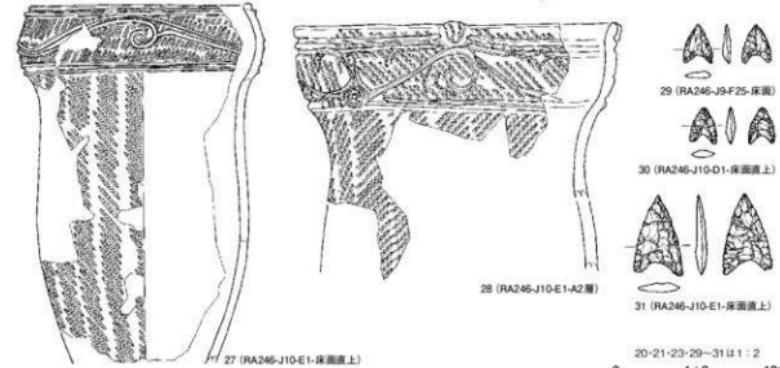
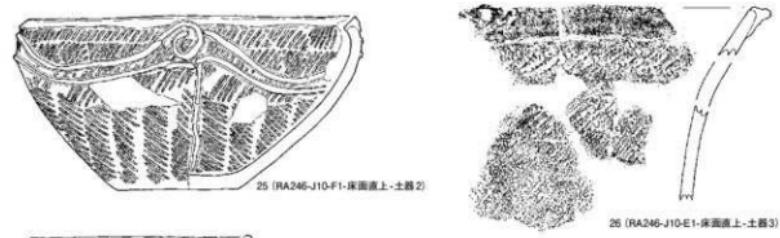
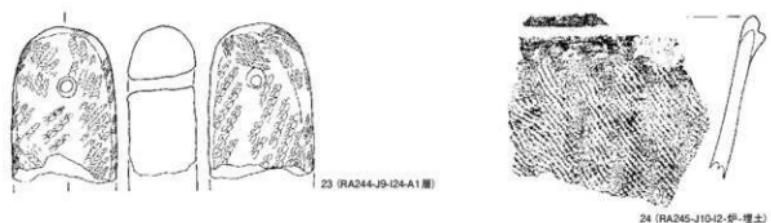
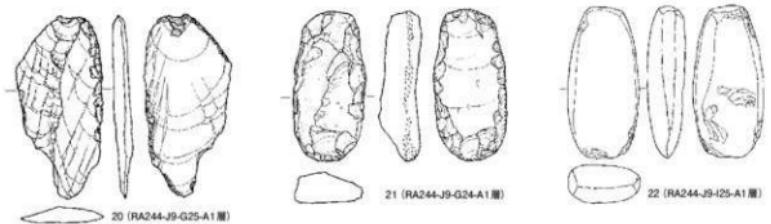
第 83 図 RA244 竪穴住居跡出土遺物（1）



第 84 図 RA244 竪穴住居跡出土遺物（2）

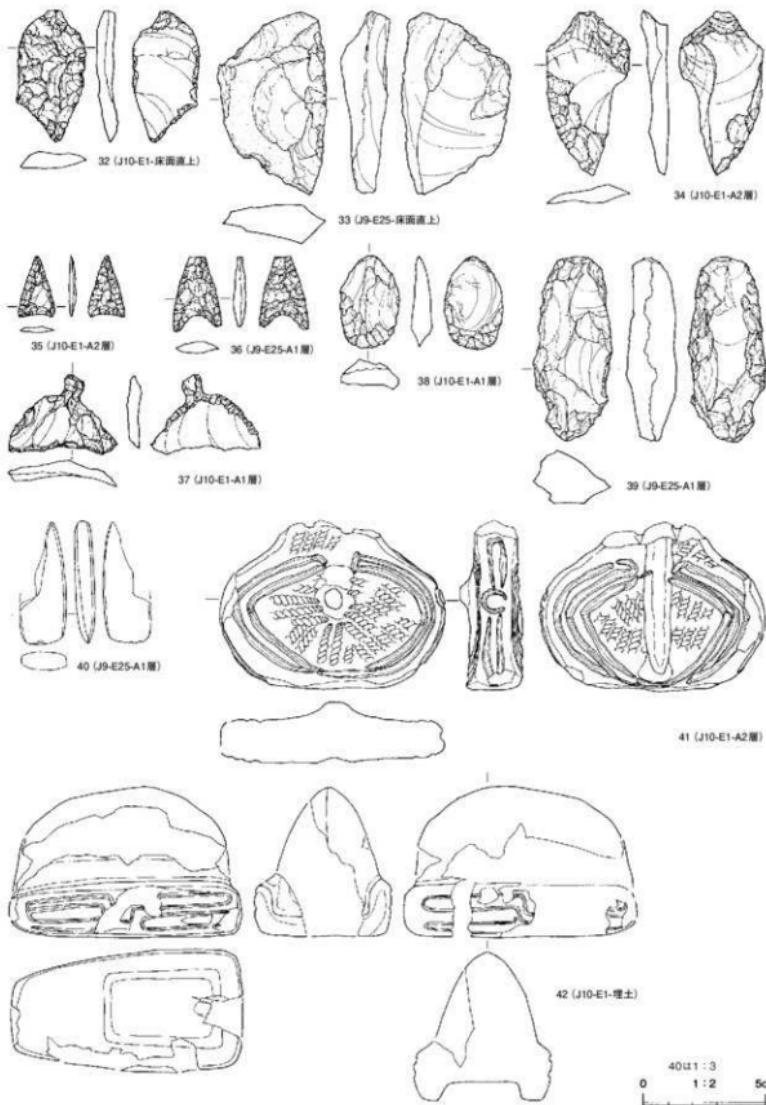


第 85 図 RA244 竪穴住居跡出土遺物（3）

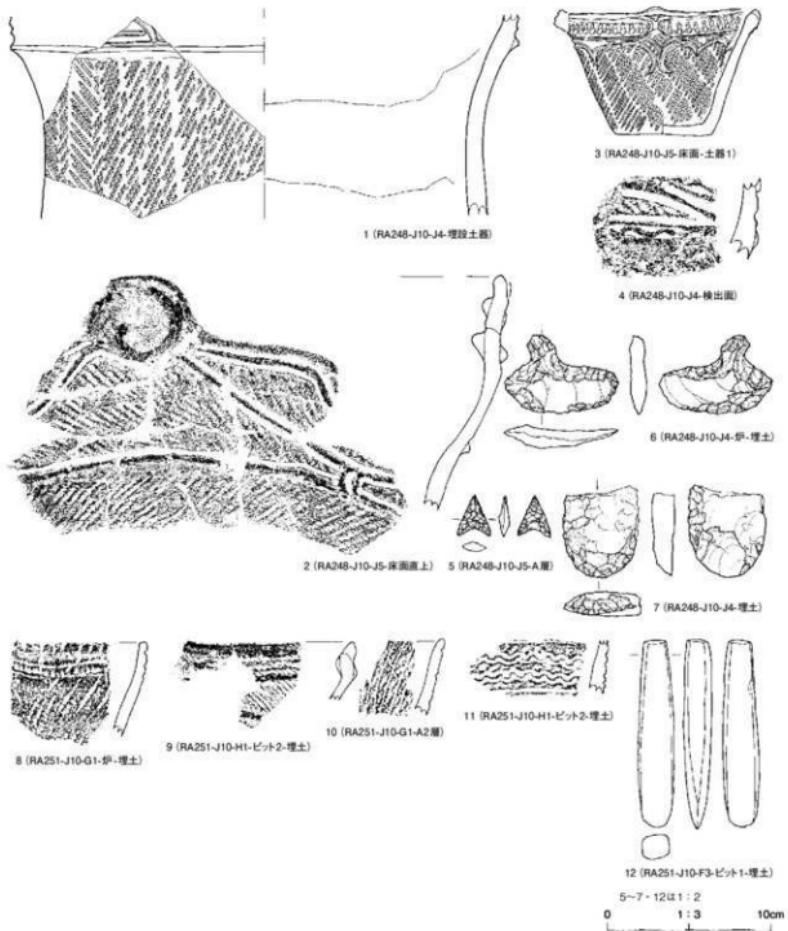


20-21-23-29~31は1:2  
0 1:3 10cm

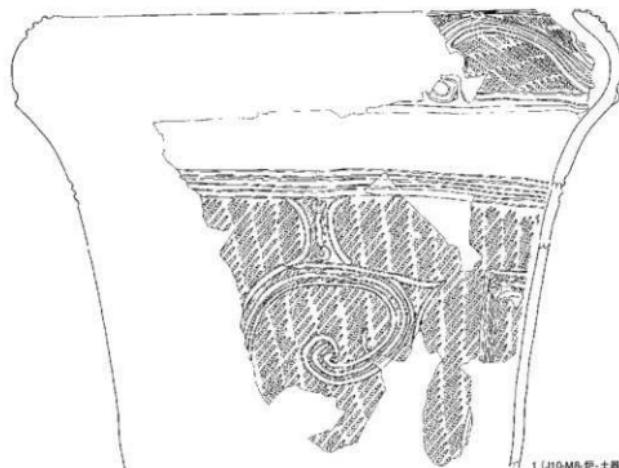
第86図 RA244(4)・245・246(1) 窪穴住居跡出土遺物



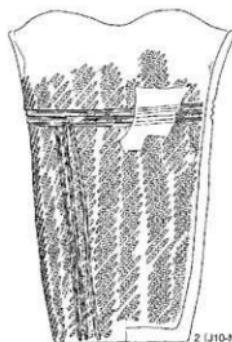
第 87 図 RA246 竪穴住居跡出土遺物（2）



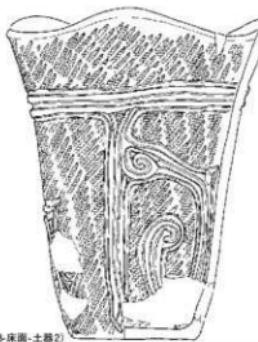
第88図 RA248・251堅穴住居跡出土遺物



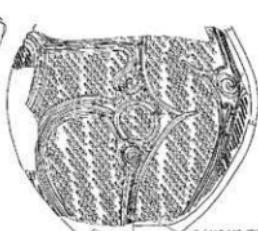
1 (J10-M8-炉-土器部)



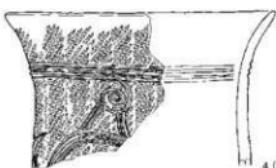
2 (J10-N8-床面-土器2)



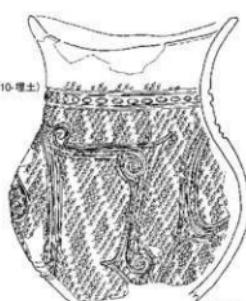
3 (J10-M8-ビット10-埋土)



5 (J10-M8-床面上)



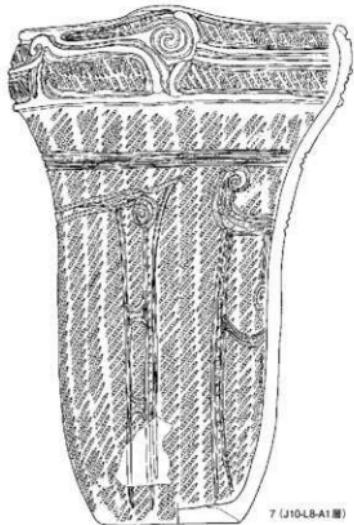
4 (J10-L9-B1屋)



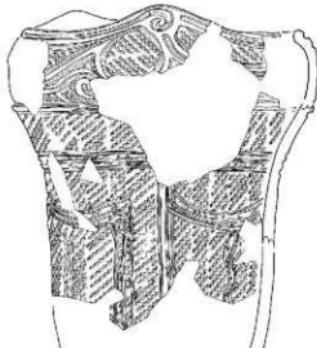
6 (J10-M9-A2屋)

0 1:3 10cm

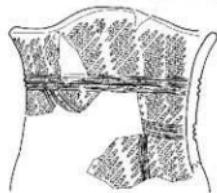
第 89 図 RA252 竪穴住居跡出土遺物 (1)



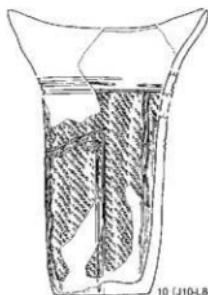
7 (J10-LB-A1層)



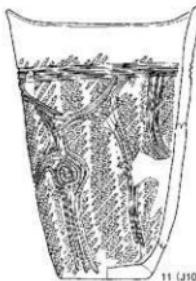
8 (J10-LB-A1層)



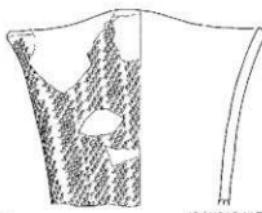
9 (J10-LB-A1層)



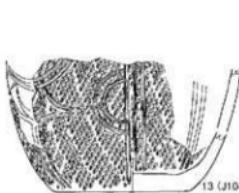
10 (J10-LB-A1層)



11 (J10-KB-A1層)



12 (J10-LB-A1層)



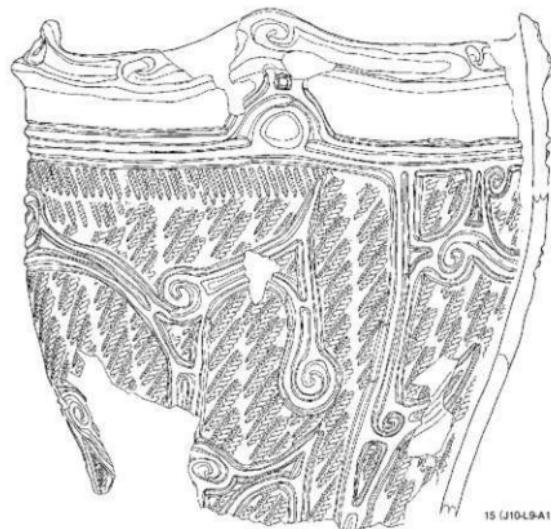
13 (J10-MB-A1層)



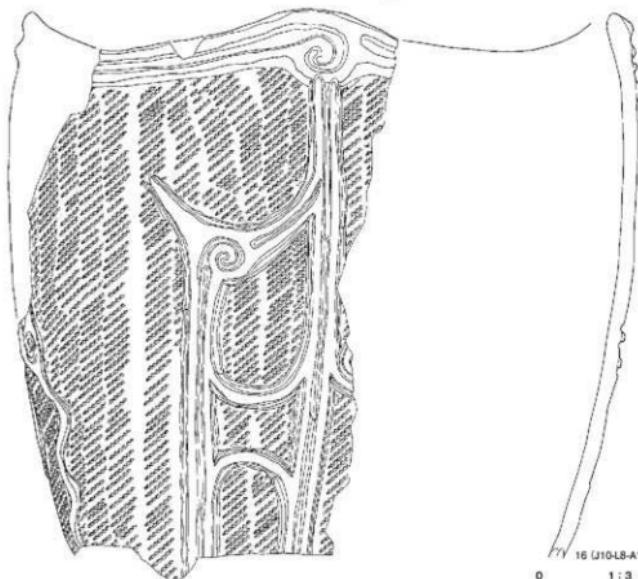
14 (J10-LB-A1層)

0 1 : 3 10cm

第 90 図 RA252 竪穴住居跡出土遺物 (2)



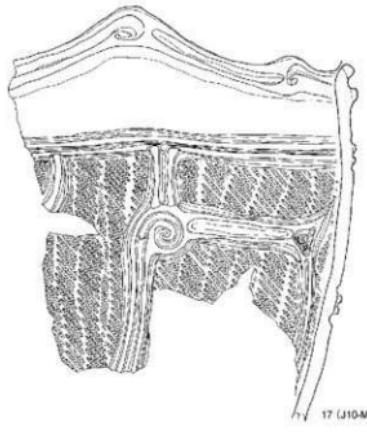
15 (J10-L9-A1層)



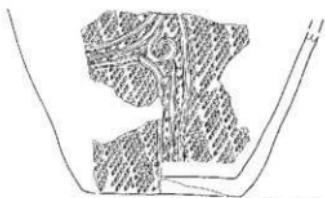
16 (J10-L8-A1層)

0 1 : 3 10cm

第 91 図 RA252 竪穴住居跡出土遺物（3）



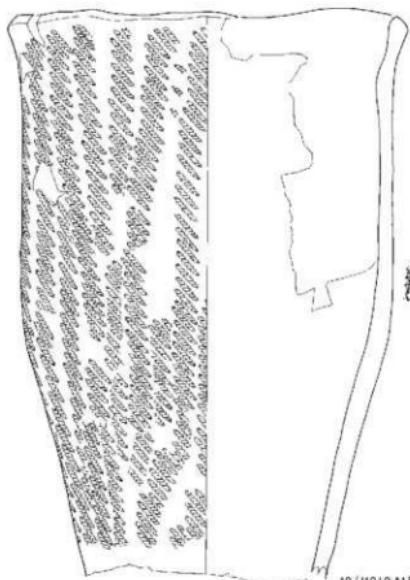
17 (J10-M8-A1層)



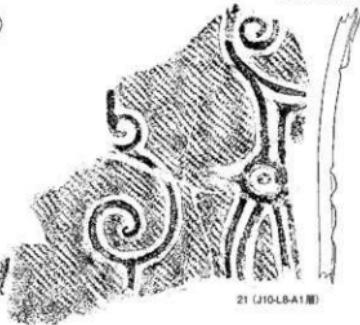
18 (J10-M9-A1層)



20 (J10-LB-A1層)



19 (J10-LS-A1層)



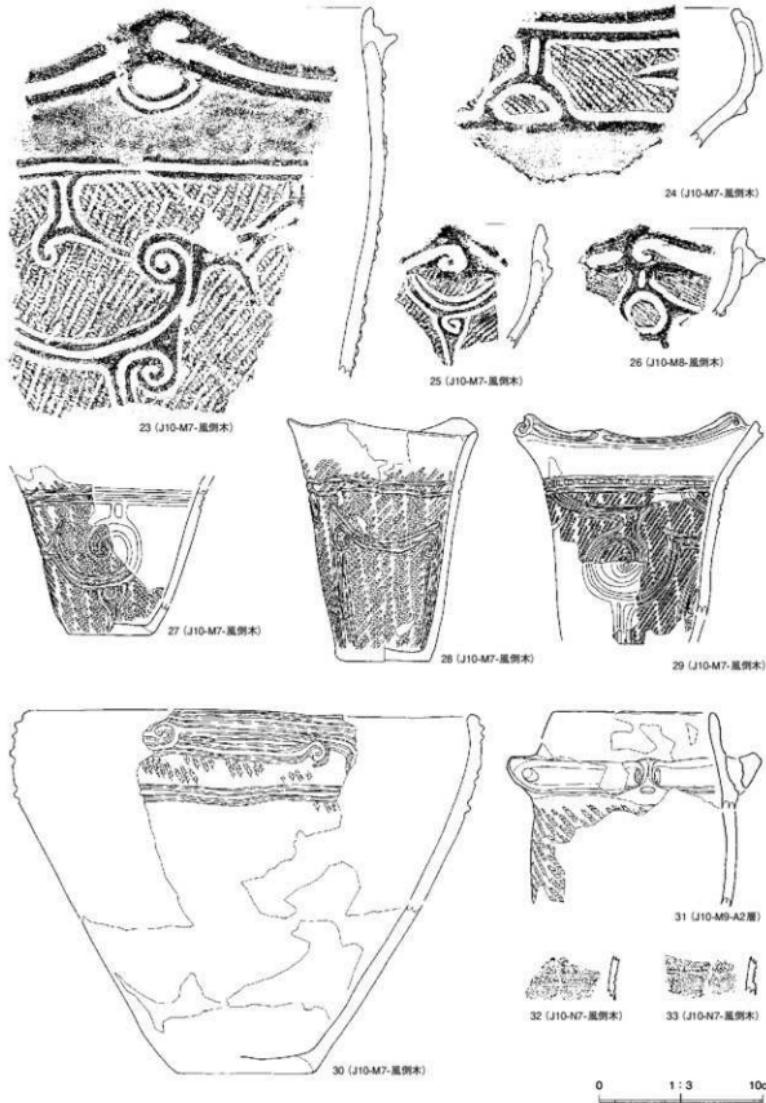
21 (J10-LB-A1層)



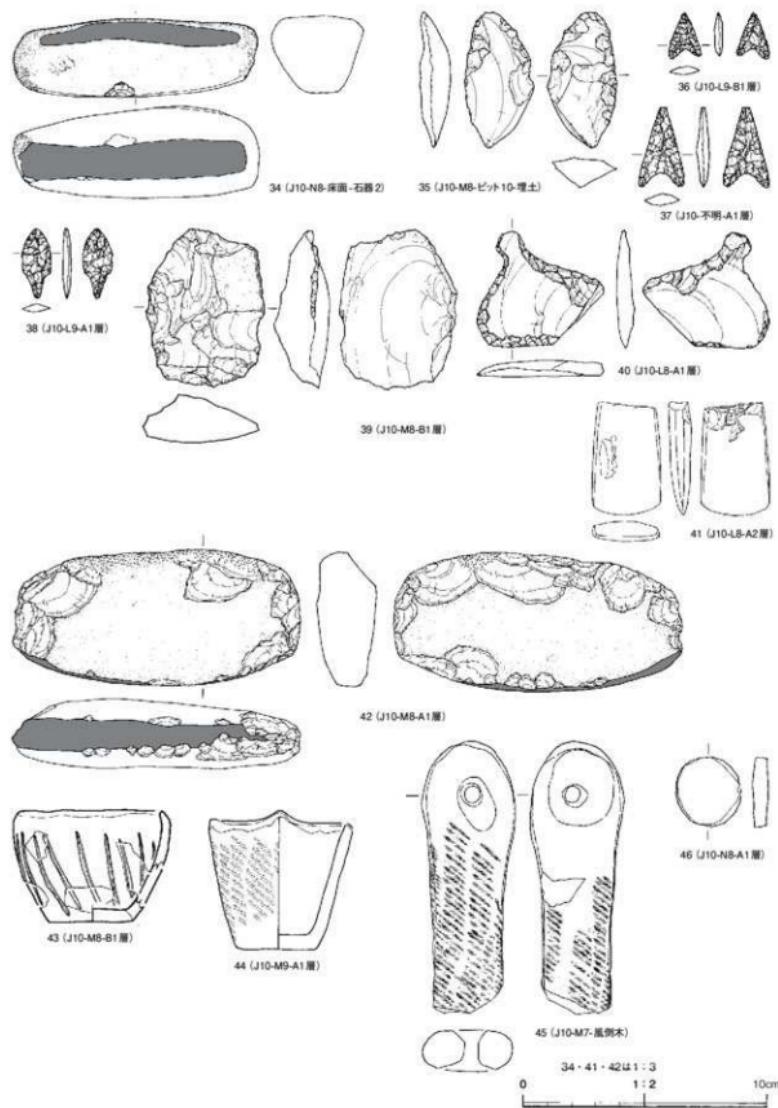
22 (J10-LB-A1層)

0 1:3 10cm

第92図 RA252 竪穴住居跡出土遺物（4）



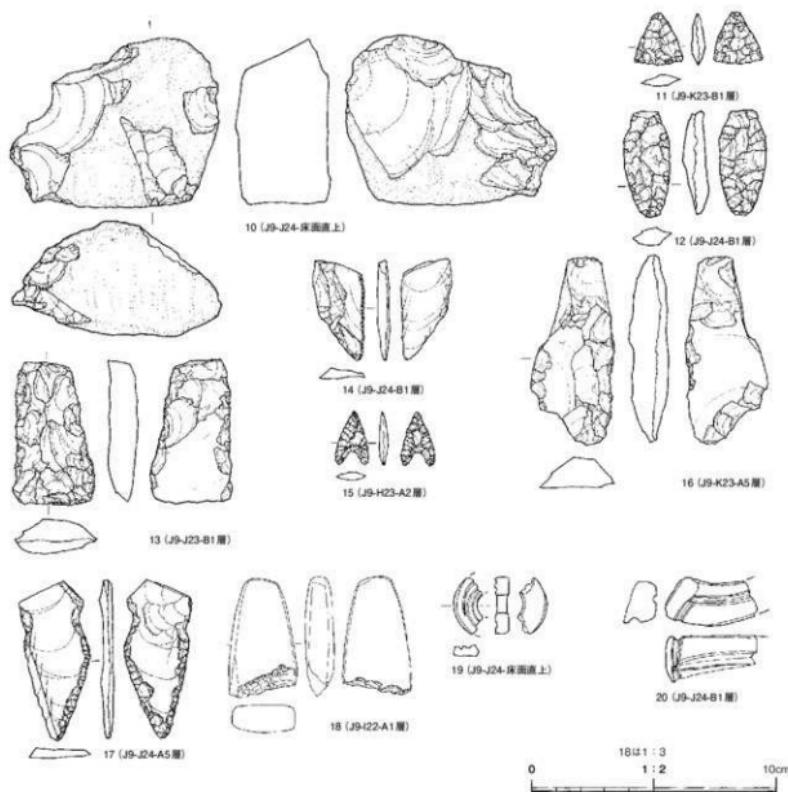
第93図 RA252 竪穴住居跡出土遺物（5）



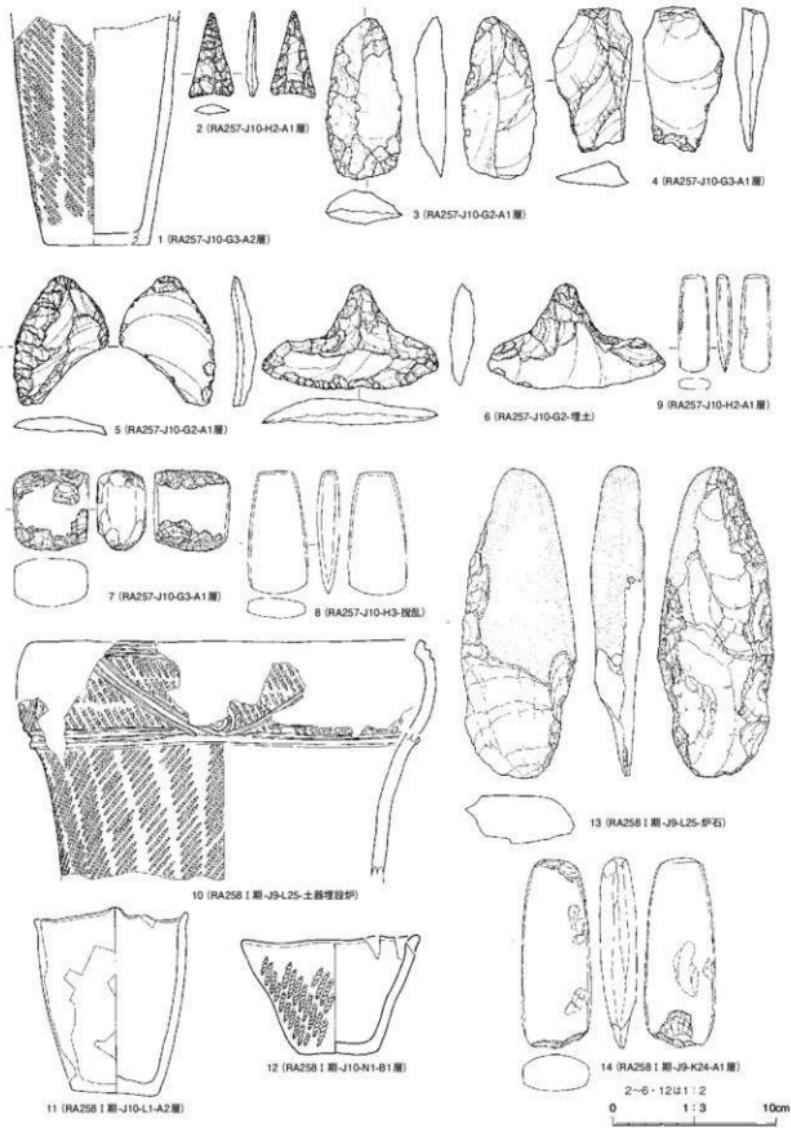
第94図 RA252 竪穴住居跡出土遺物（6）



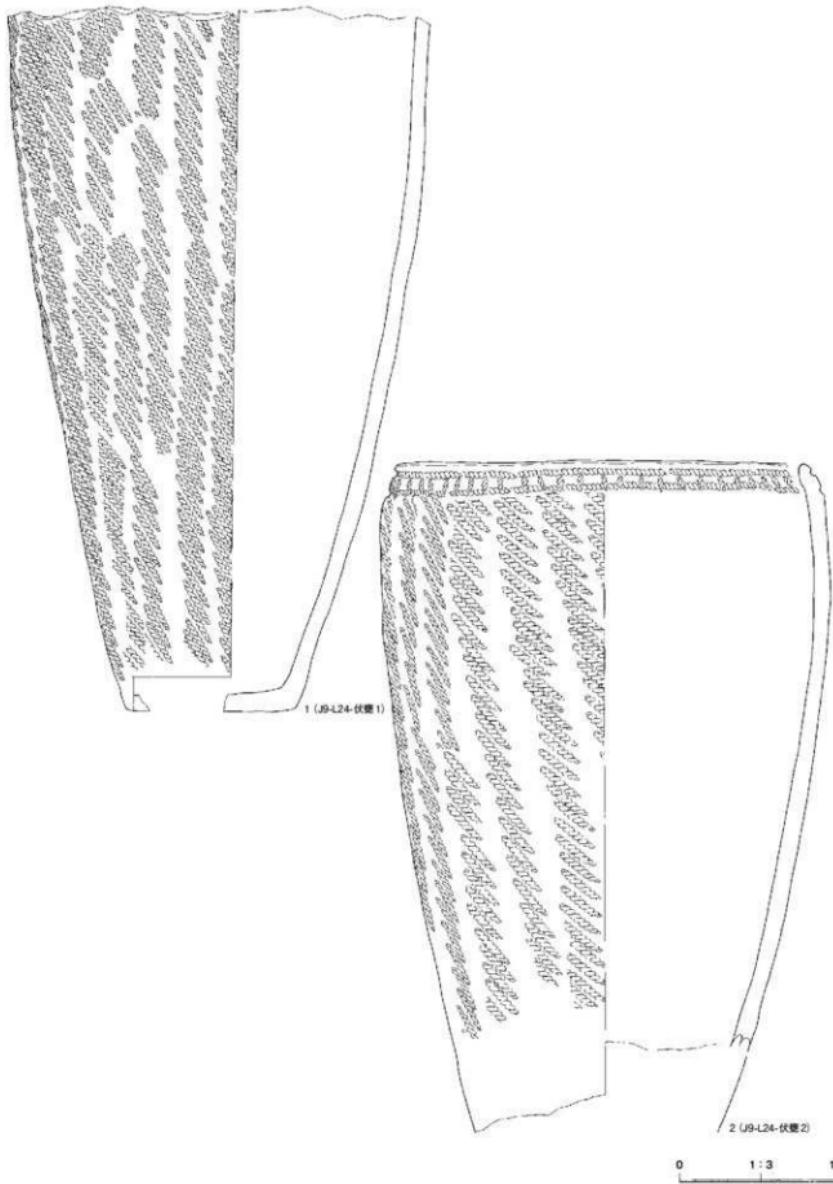
第95図 RA253 竪穴住居跡出土遺物（1）



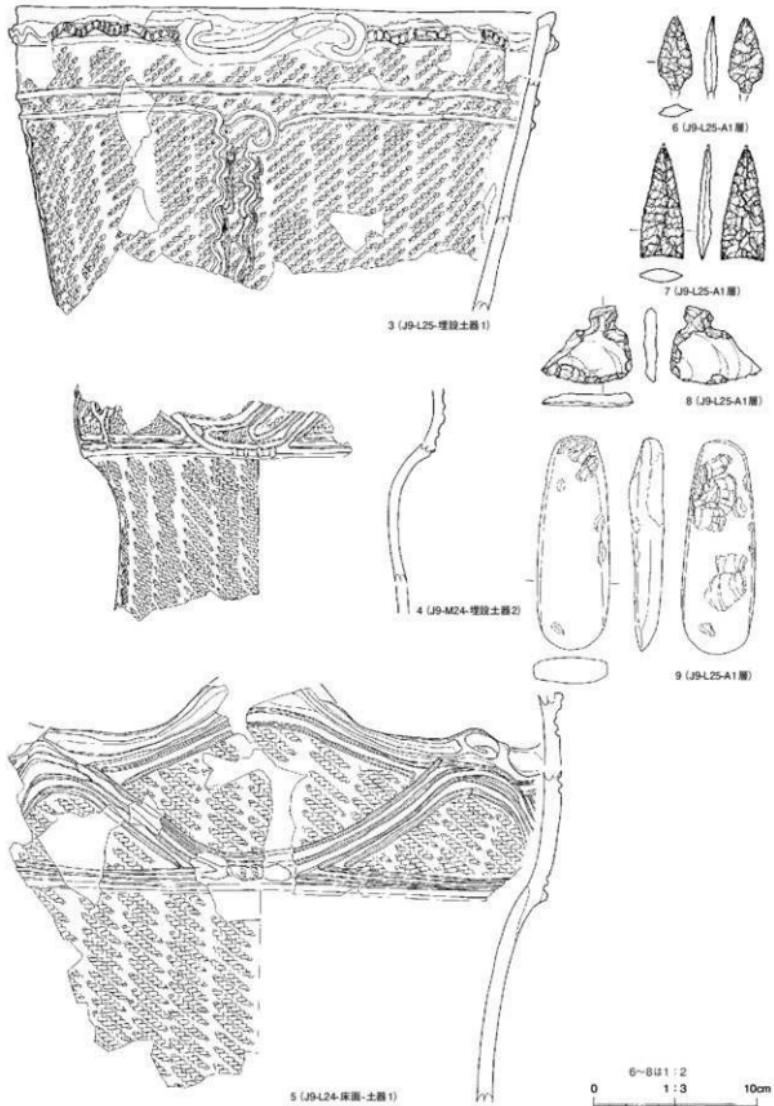
第 96 図 RA253 竪穴住居跡出土遺物（2）



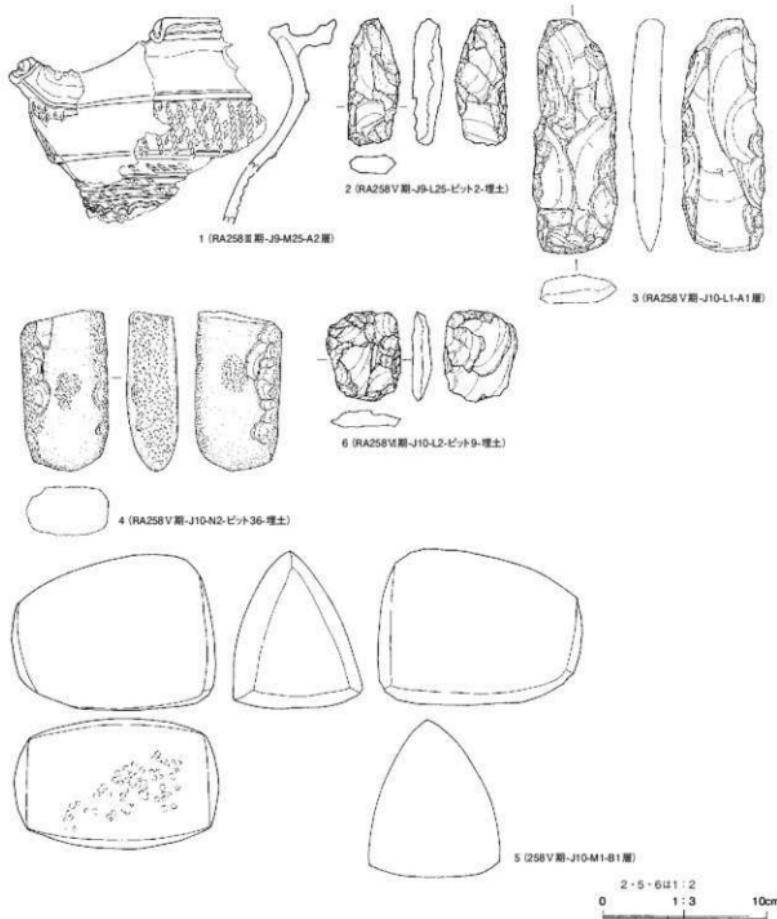
第97図 RA257・258 I期竪穴住居跡出土遺物



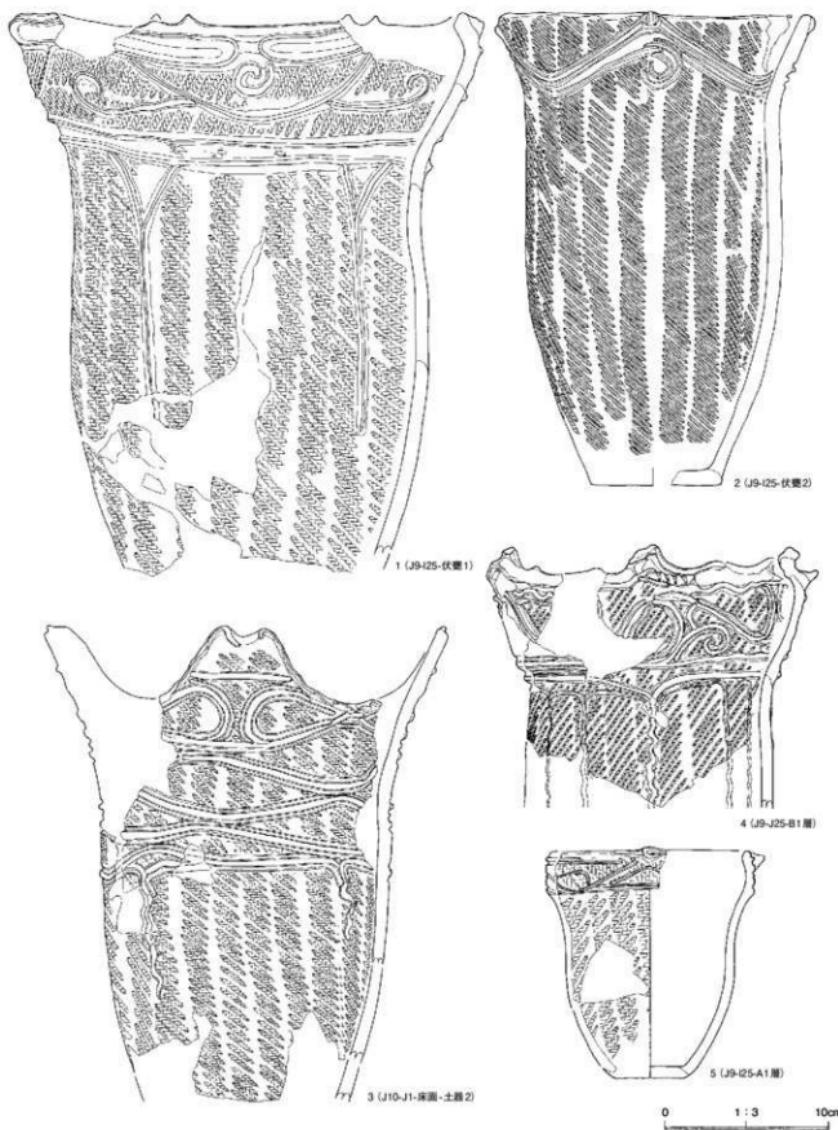
第98図 RA258 II期竪穴住居跡出土遺物（1）



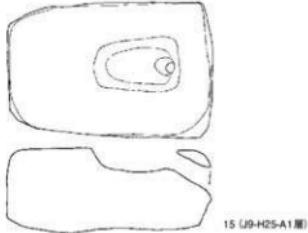
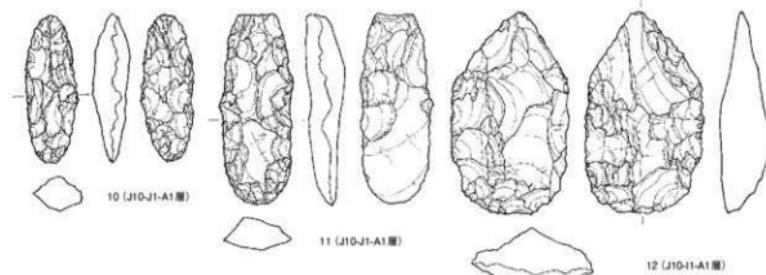
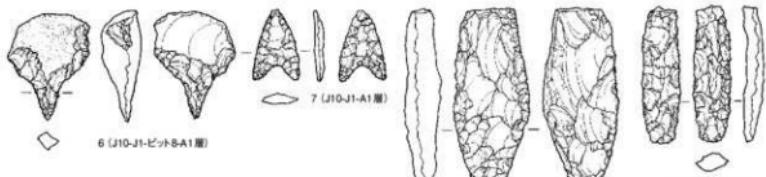
第99図 RA258 II期竪穴住居跡出土物（2）



第100図 RA258 III期・V期・VI期竪穴住居跡出土遺物

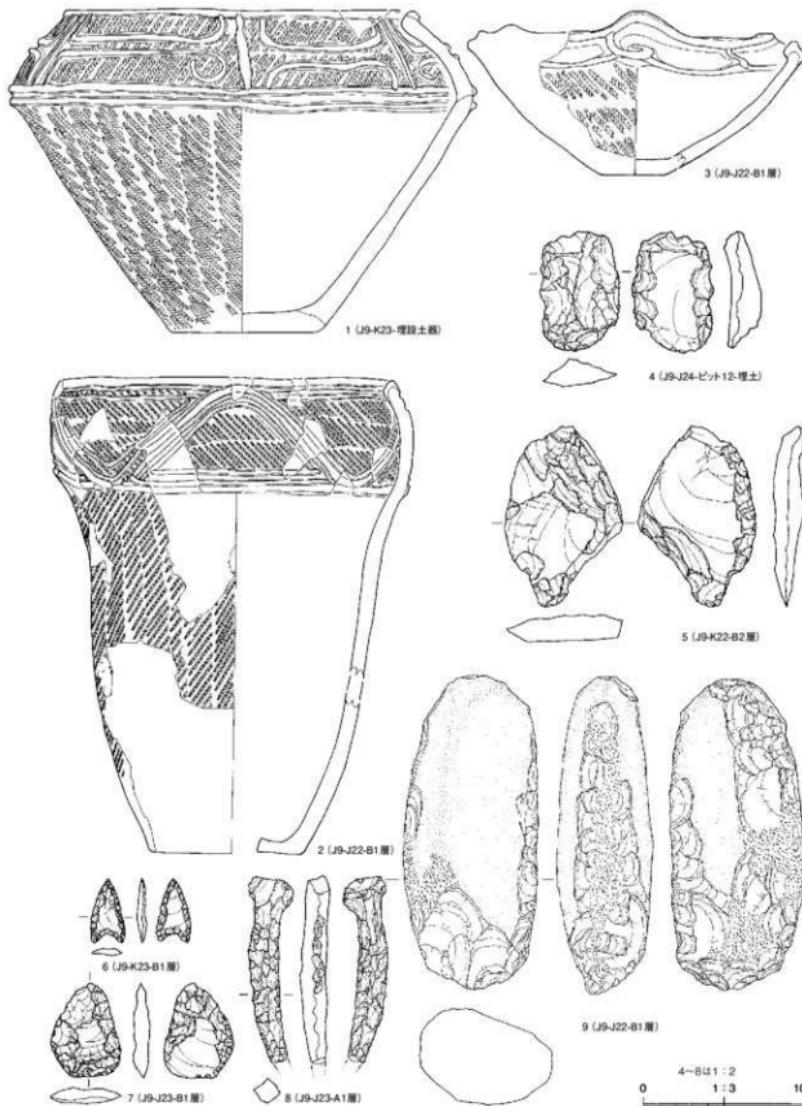


第 101 図 RA259 竪穴住居跡出土遺物 (1)

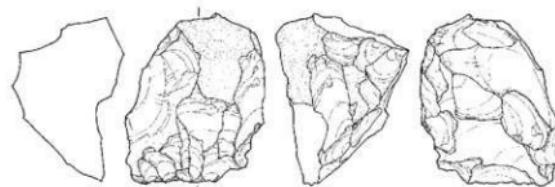


14は1:3  
1:2  
0 10cm

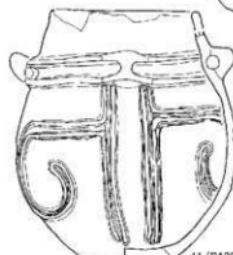
第102図 RA259 竪穴住居跡出土遺物（2）



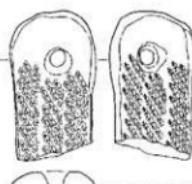
第 103 図 RA261 垂穴住居跡出土遺物（1）



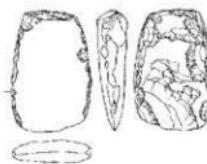
10 (RA261-J9-K22-A2層)



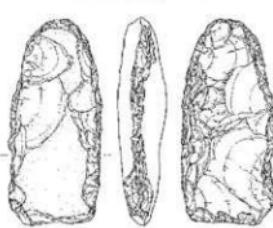
11 (RA262-J9-K25-土器埋設部)



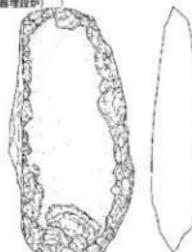
12 (RA262-J9-K25-床面直上)



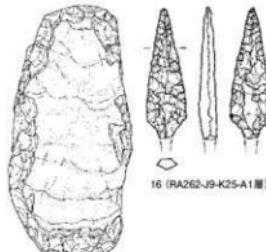
13 (RA262-J9-K25-床面上-石器1)



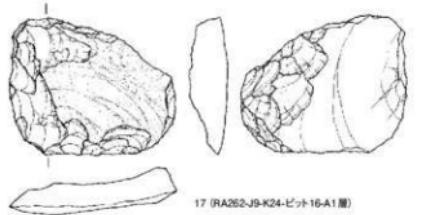
14 (RA262-J9-K25-床面直上-石器2)



15 (RA262-J9-K25-床面直上-石器3)



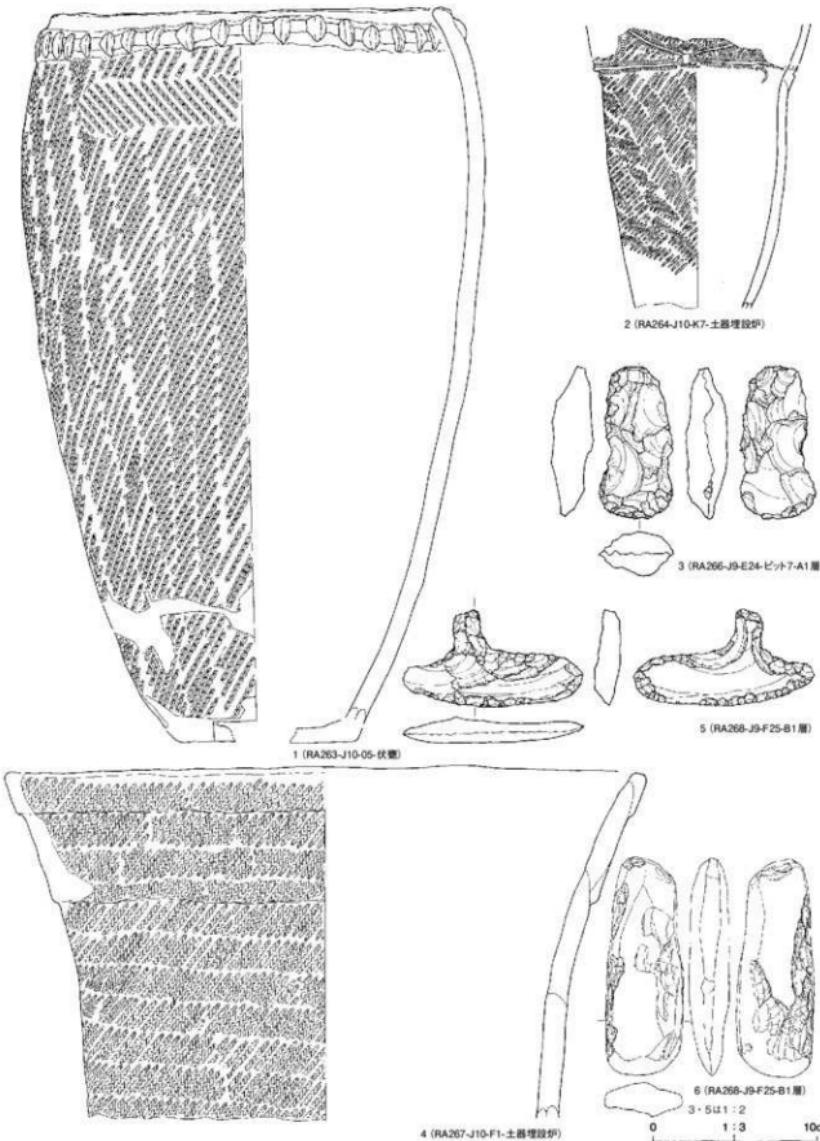
16 (RA262-J9-K25-A1層)



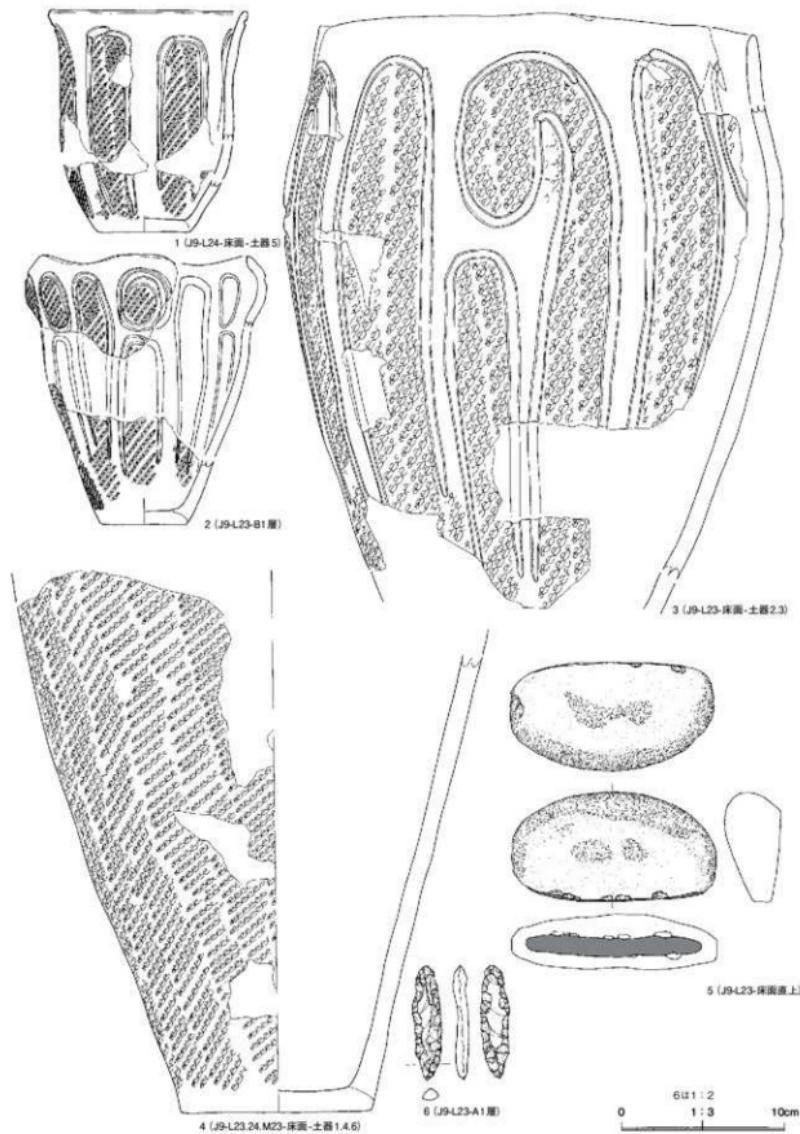
17 (RA262-J9-K24-ピット16-A1層)

10-12-16-17は1:2  
0 1:3 10cm

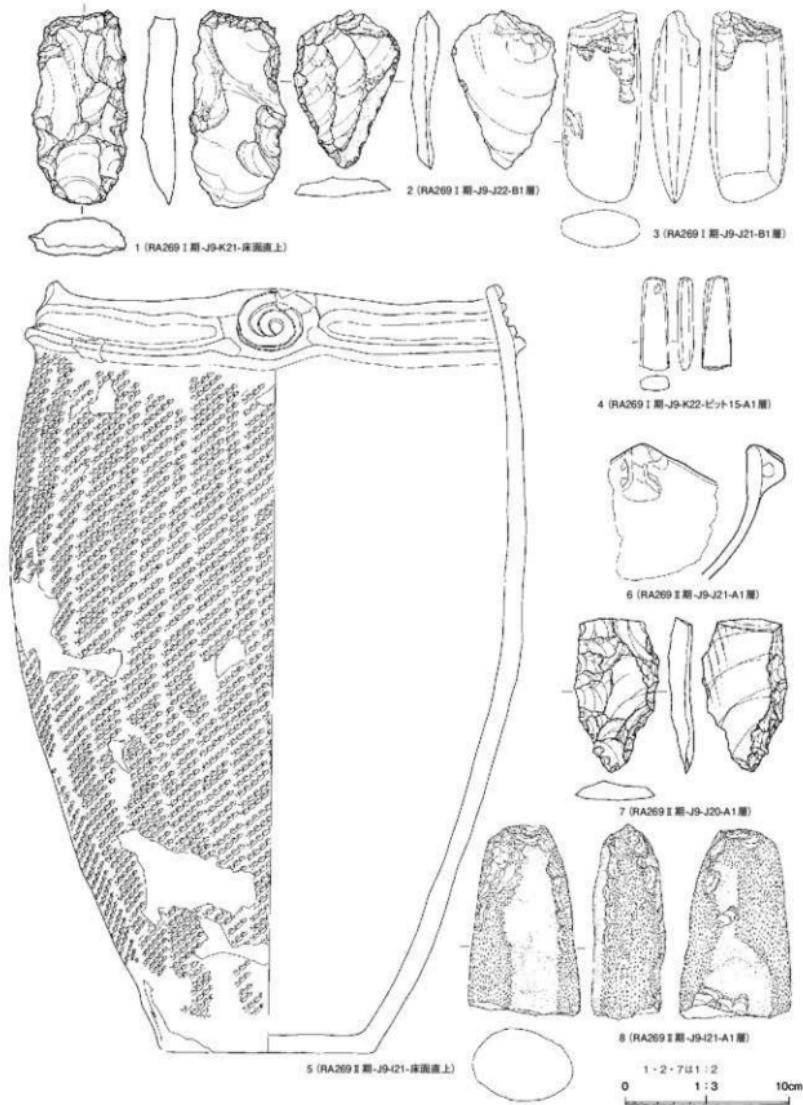
第104図 RA261(2)・262竪穴住居跡出土遺物



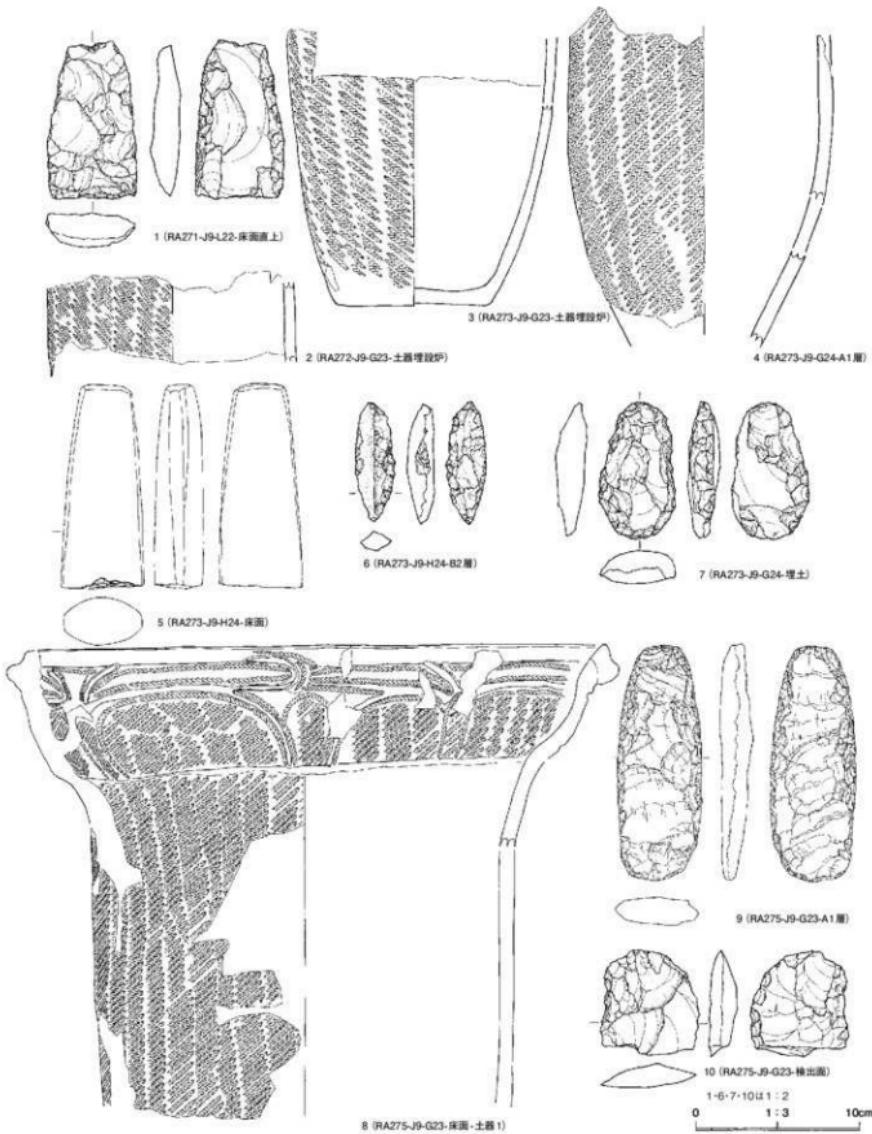
第 105 図 RA263・264・266～268 穂穴住居跡出土遺物



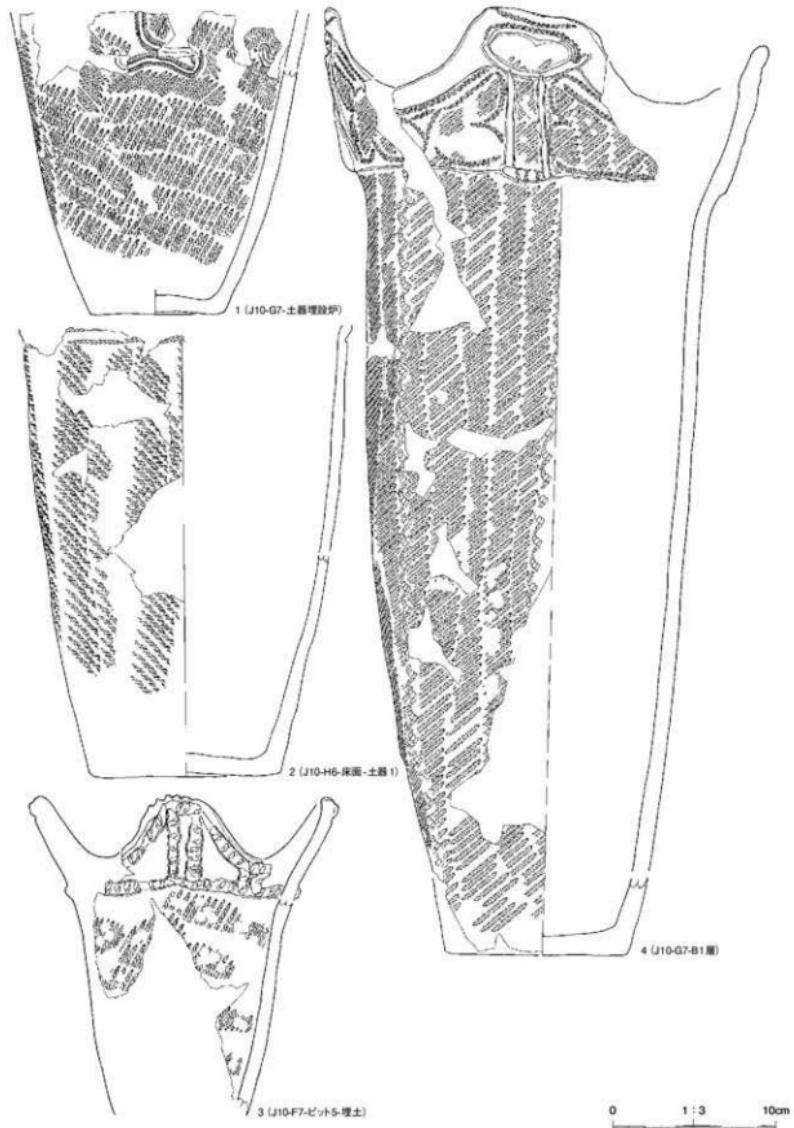
第106図 RA265 積穴住居跡出土遺物



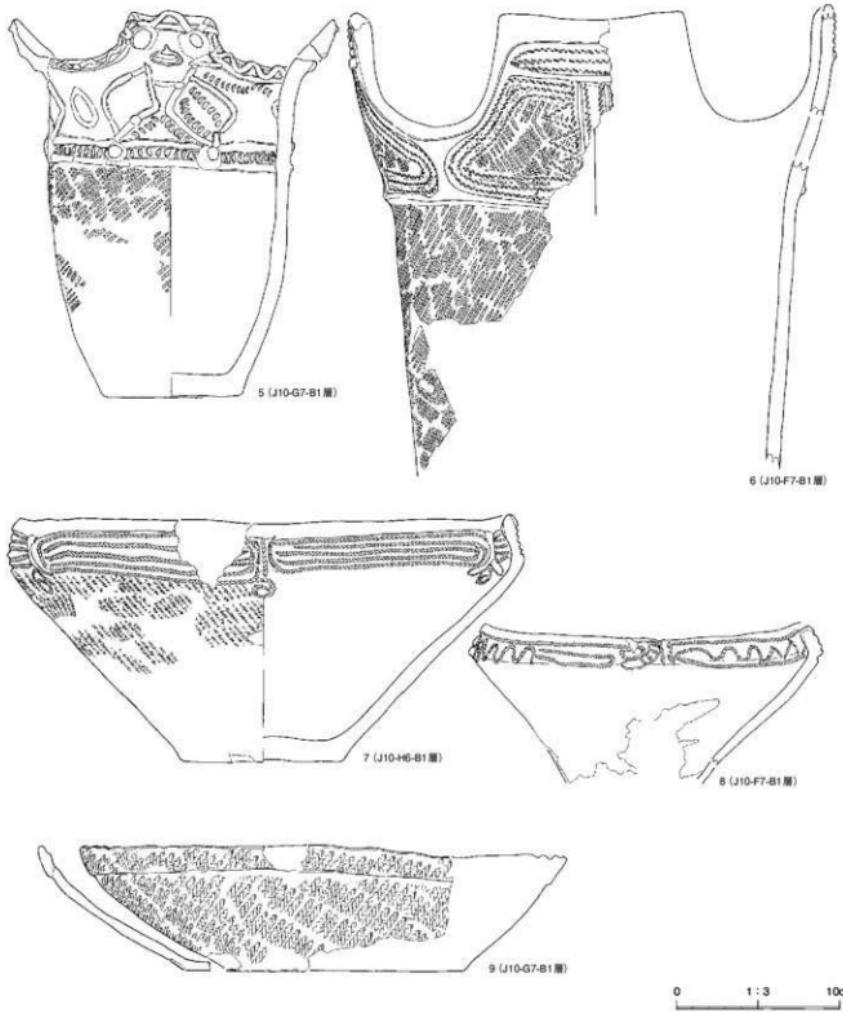
第107図 RA269 I期・II期竪穴住居跡出土遺物



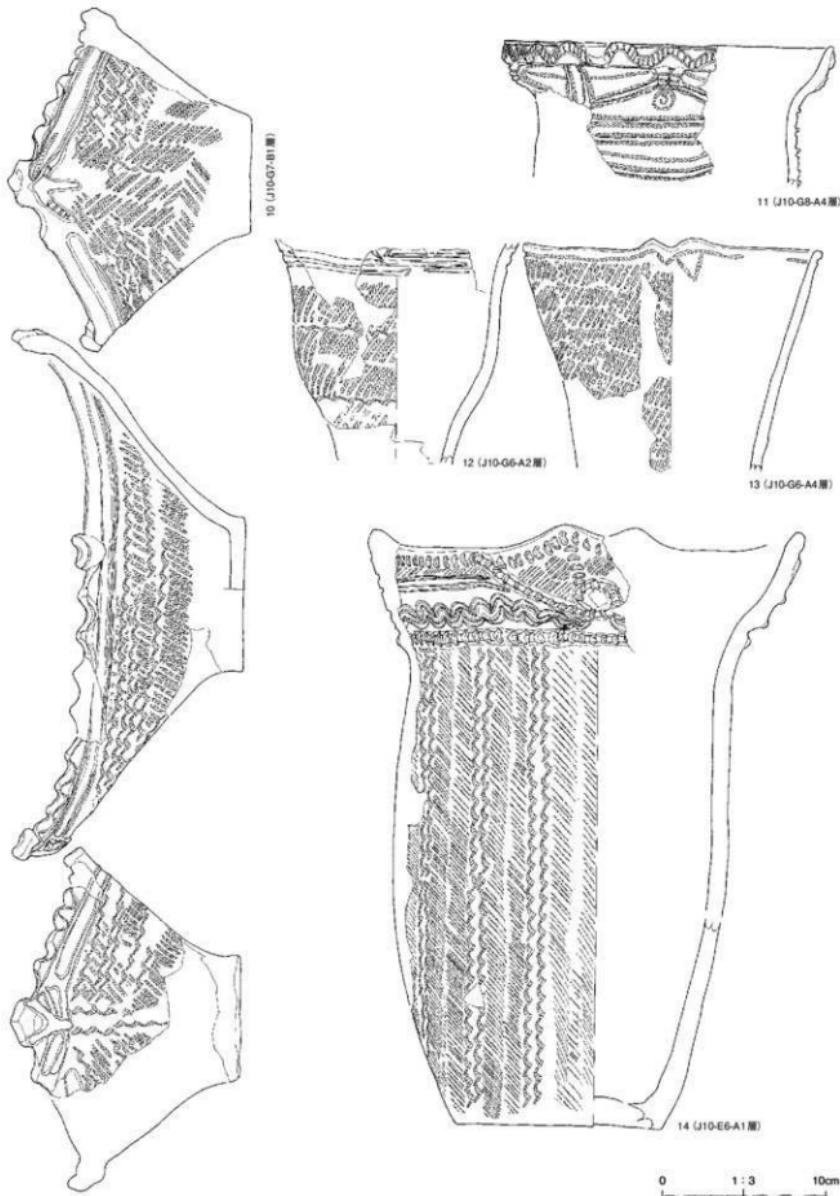
第108図 RA271～273・275 竪穴住居跡出土遺物



第109図 RA274 I期堅穴住居跡出土遺物（1）



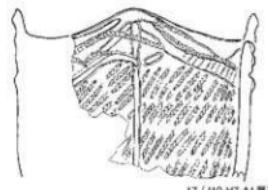
第110図 RA274 I期堅穴住居跡出土遺物（2）



第111図 RA274 I期堅穴住居跡出土遺物（3）



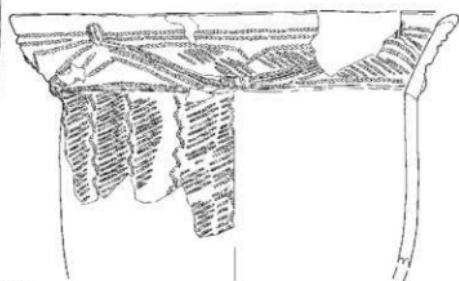
15 (J10-F7-A1層)



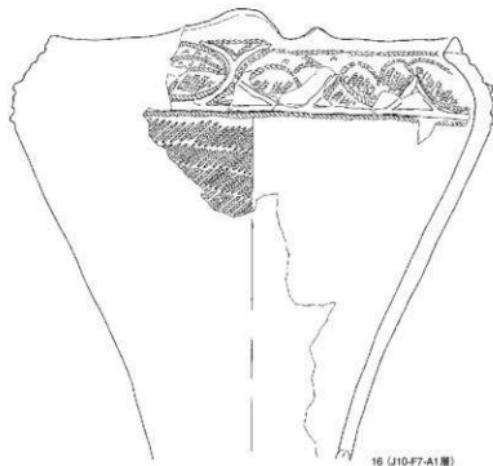
17 (J10-H7-A1層)



18 (J10-H6-A1層)



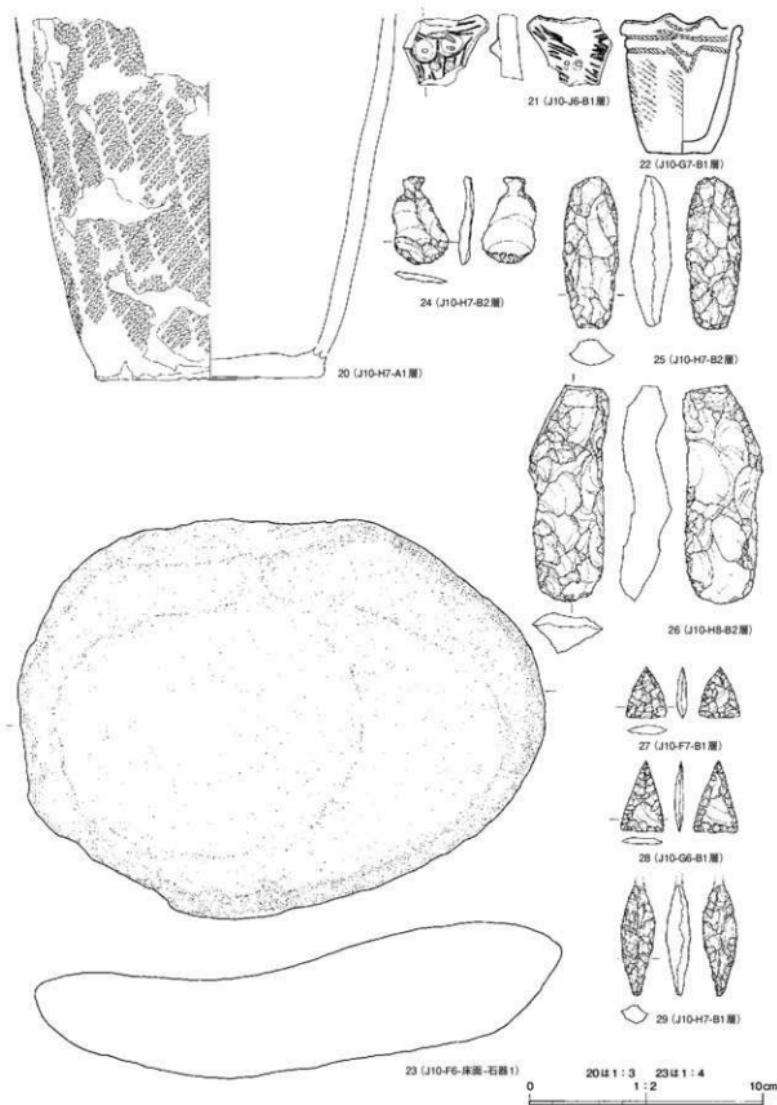
19 (J10-H7-A1層)



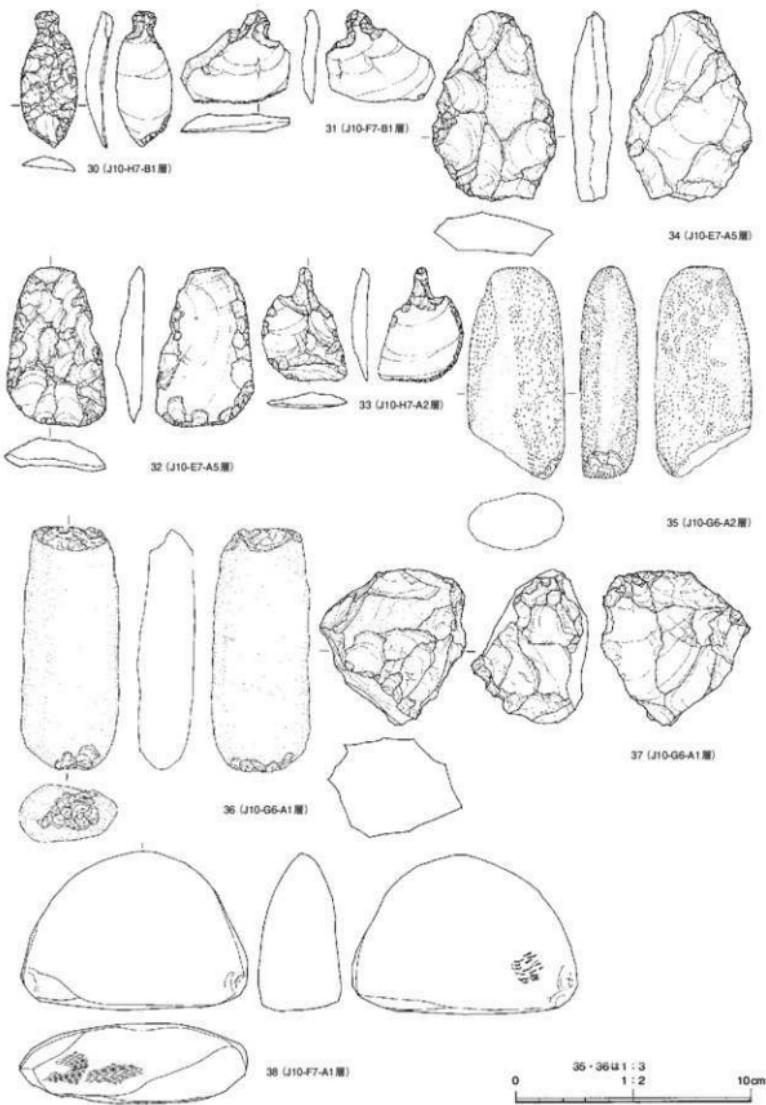
16 (J10-F7-A1層)

0 1:3 10cm

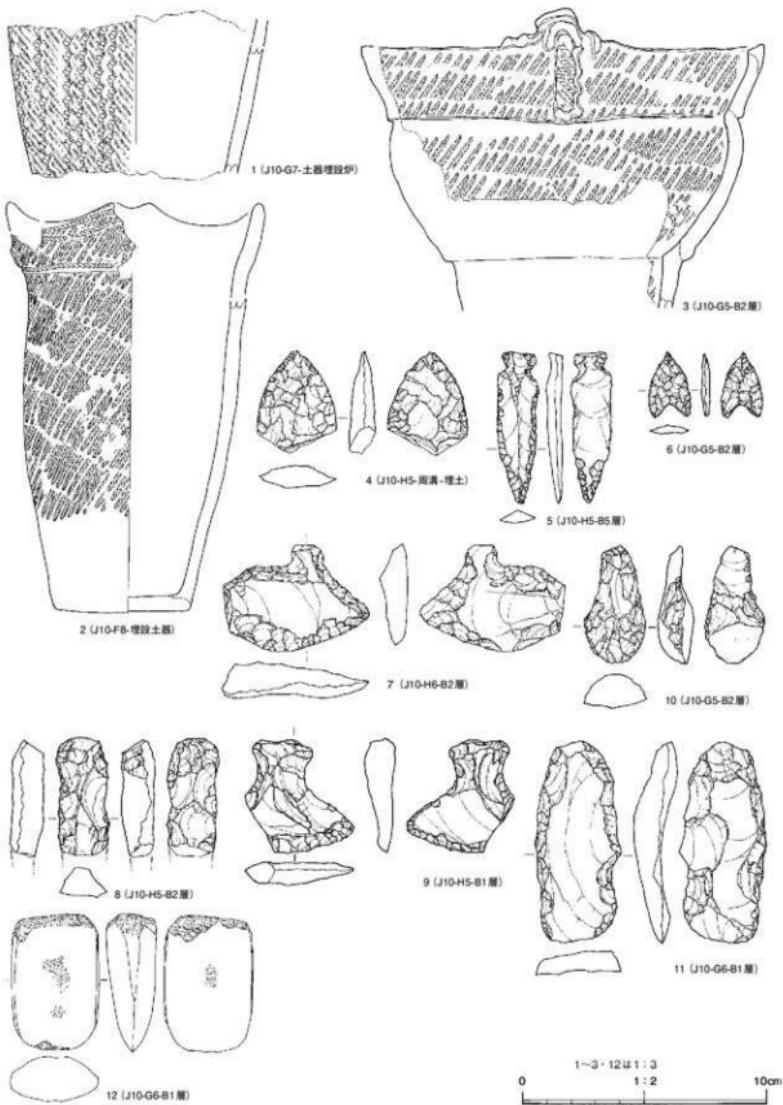
第 112 図 RA274 I 期堅穴住居跡出土遺物 (4)



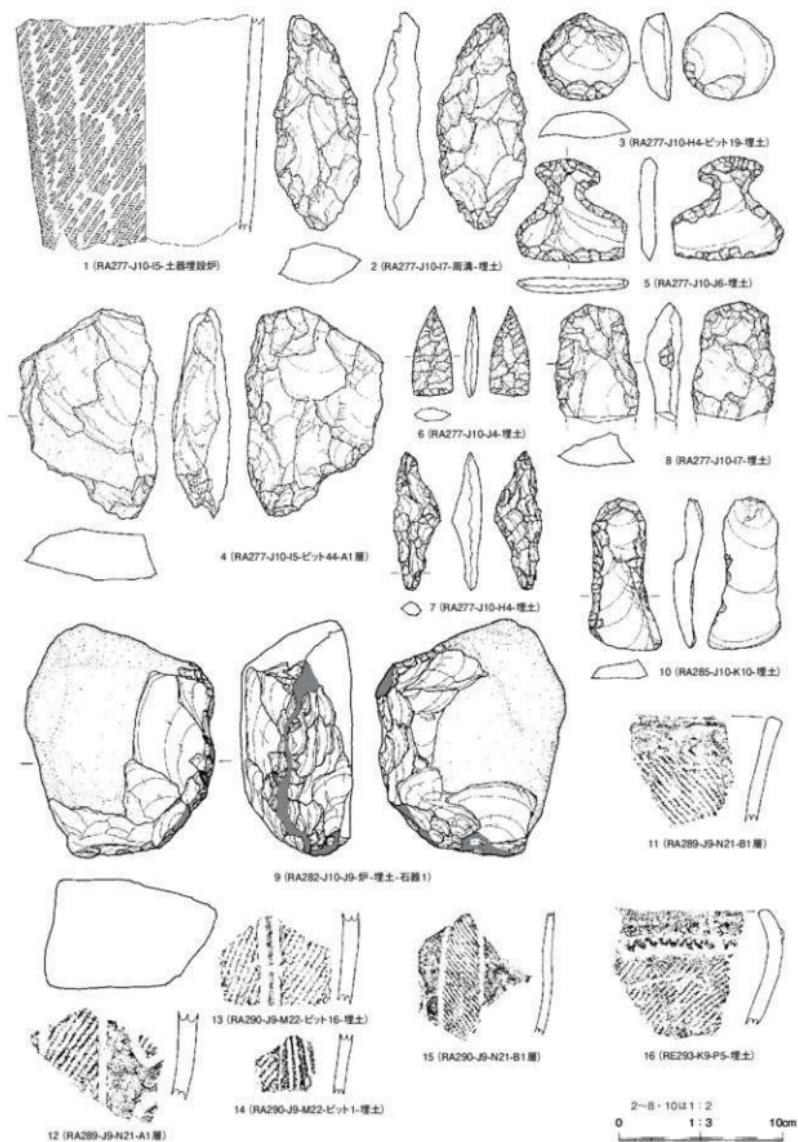
第 113 図 RA274 I 期竪穴住居跡出土遺物 (5)



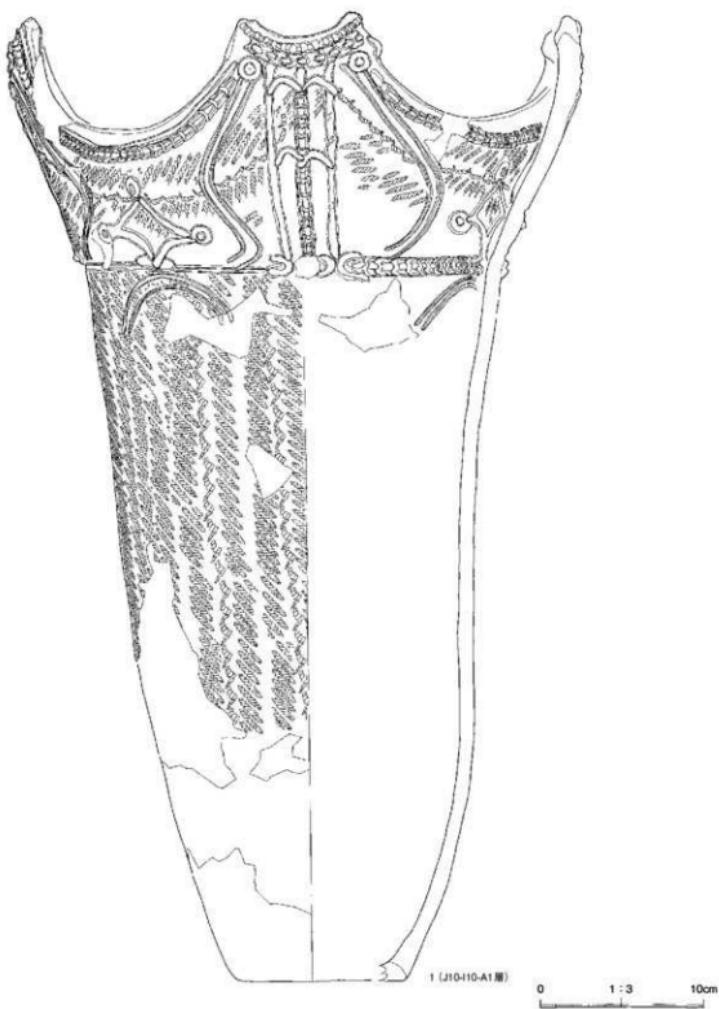
第 114 図 RA274 I 期竪穴住居跡出土遺物 (6)



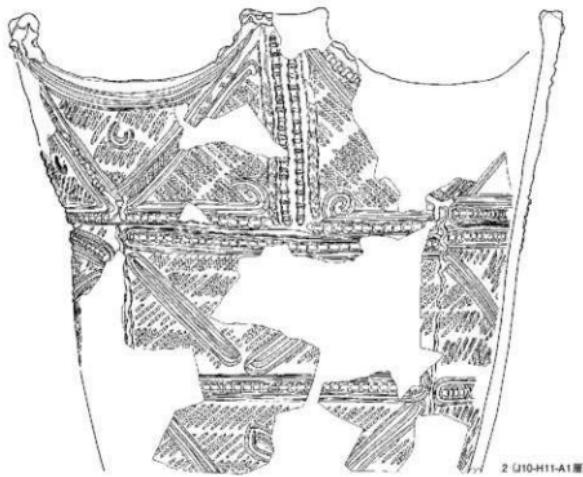
第115図 RA274 II期竪穴住居跡出土遺物



第116図 RA277・282・285・289・290 竪穴住居跡、RE293 竪穴跡出土遺物

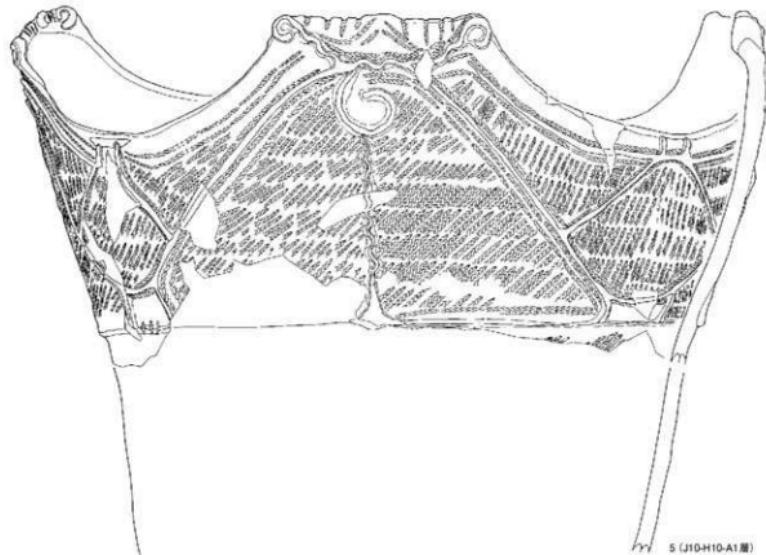


第 117 図 RA281 積穴住居跡出土遺物（1）

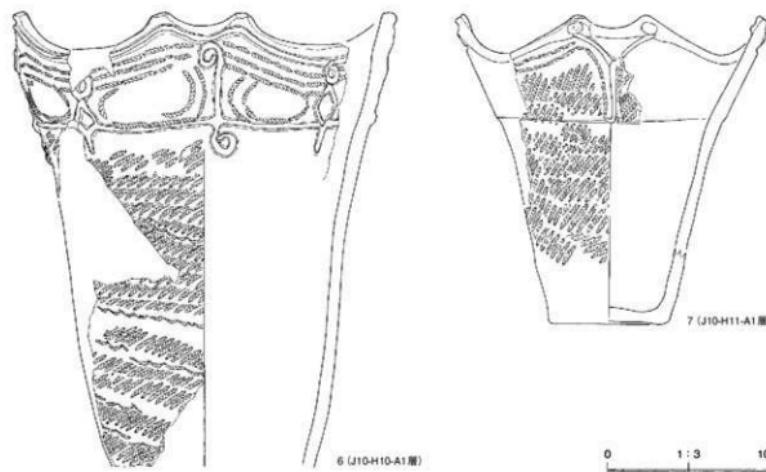


0 1:3 10cm

第 118 図 RA281 竪穴住居跡出土遺物（2）



5 (J10-H10-A1層)

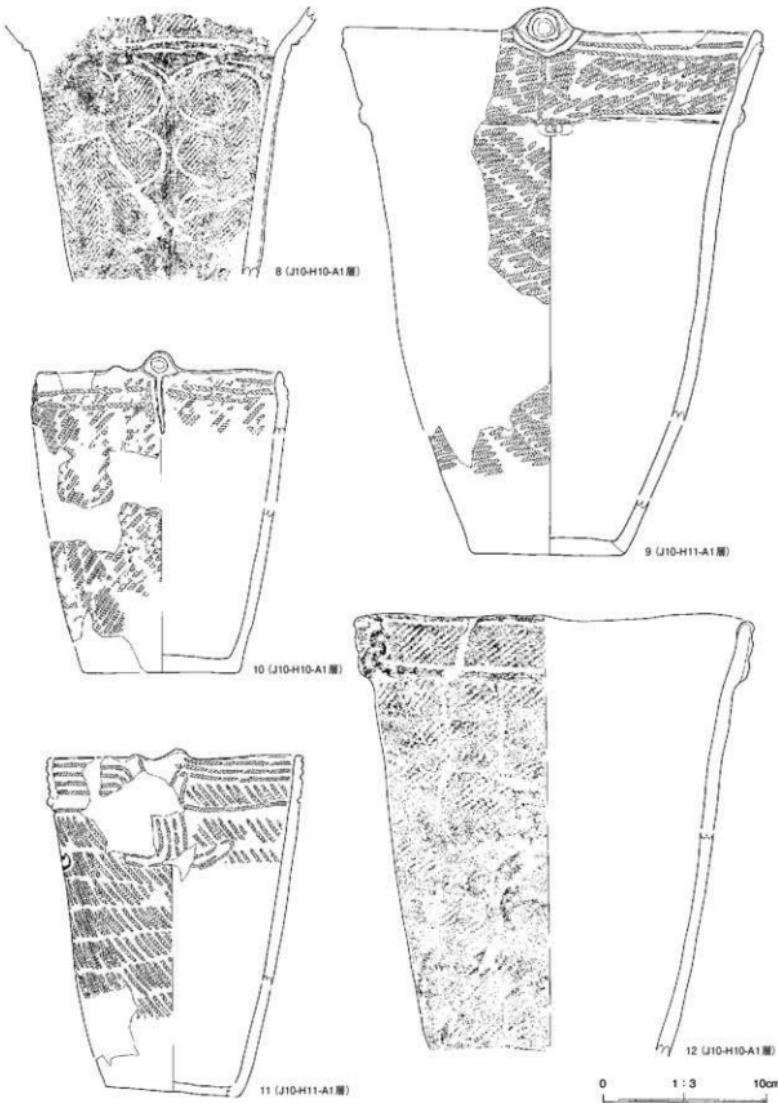


6 (J10-H10-A1層)

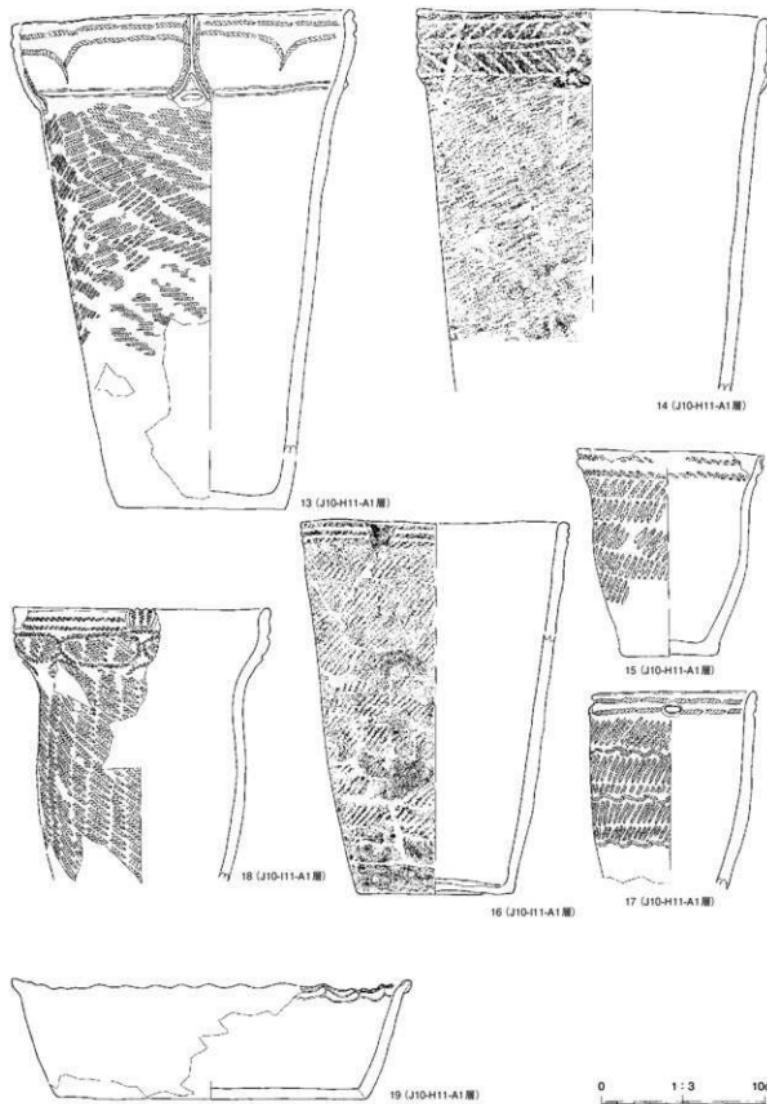
7 (J10-H11-A1層)

0 1:3 10cm

第 119 図 RA281 堪穴住居跡出土遺物 (3)



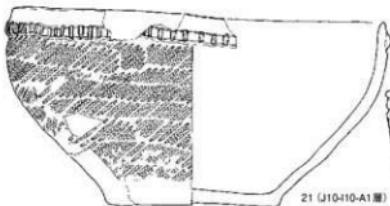
第 120 図 RA281 堅穴住居跡出土遺物 (4)



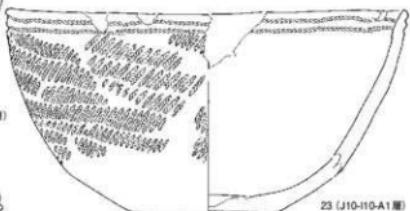
第 121 図 RA281 堅穴住居跡出土遺物 (5)



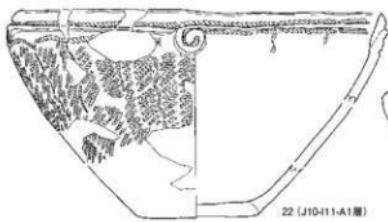
20 (J10-H11-A1層)



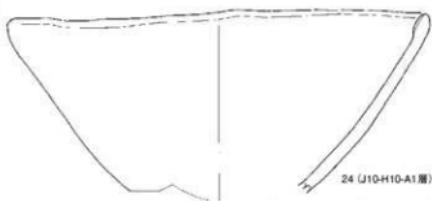
21 (J10-H10-A1層)



23 (J10-H10-A1層)



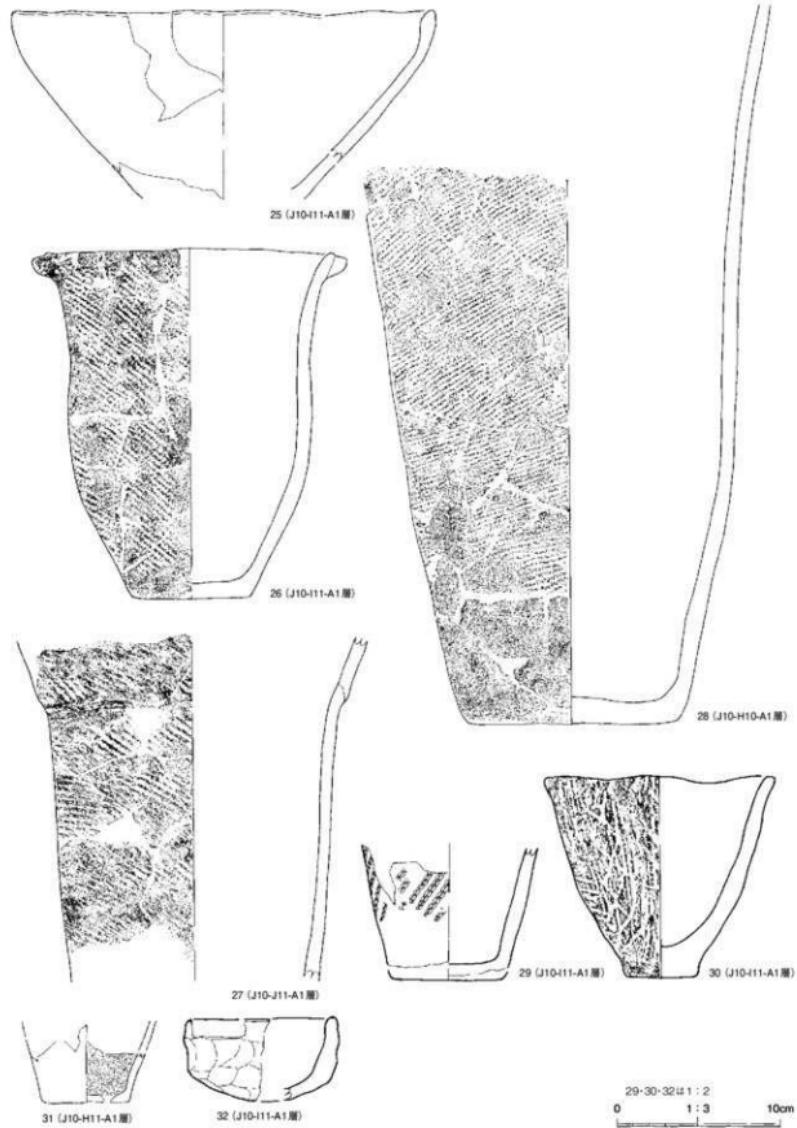
22 (J10-H11-A1層)



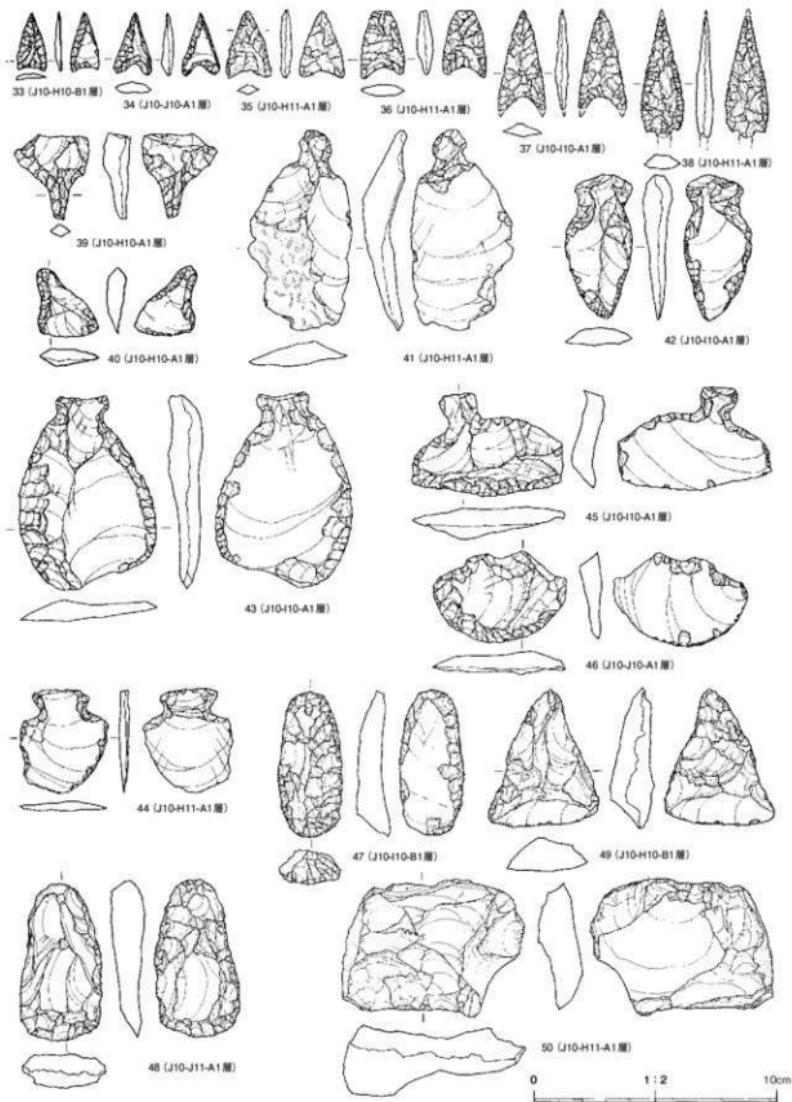
24 (J10-H10-A1層)

0 1:3 10cm

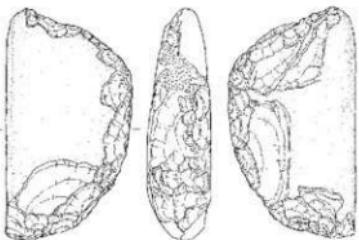
第 122 図 RA281 竪穴住居跡出土遺物 (6)



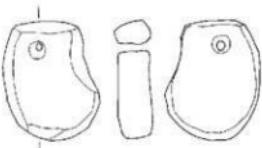
第 123 図 RA281 堅穴住居跡出土遺物 (7)



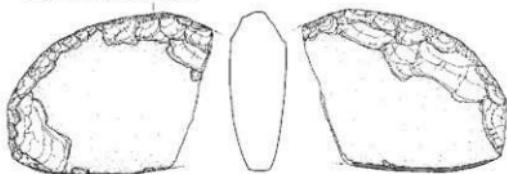
第 124 図 RA281 堅穴住居跡出土遺物 (8)



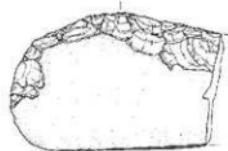
51 (J10-H11-A1)



54 (J10-J10-A1)



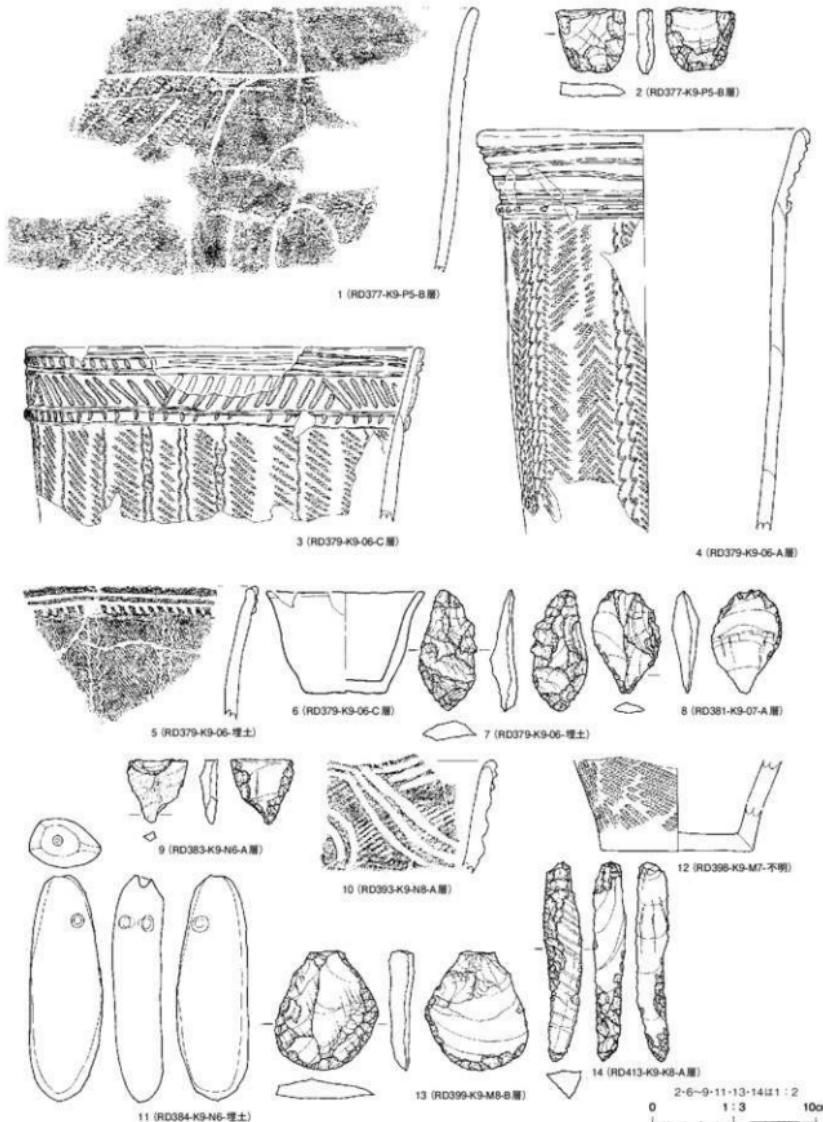
52 (J10-H11-A1)



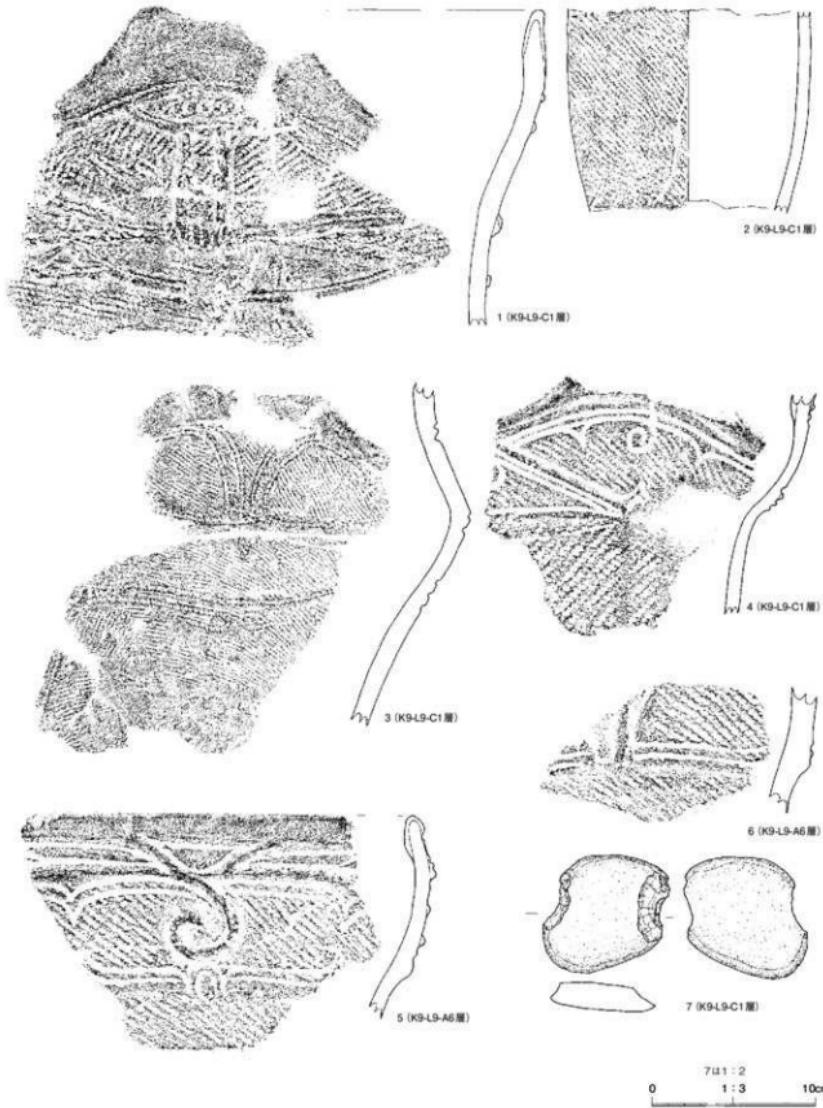
53 (J10-H11-A1)

54 1:2  
0 1:3 10cm

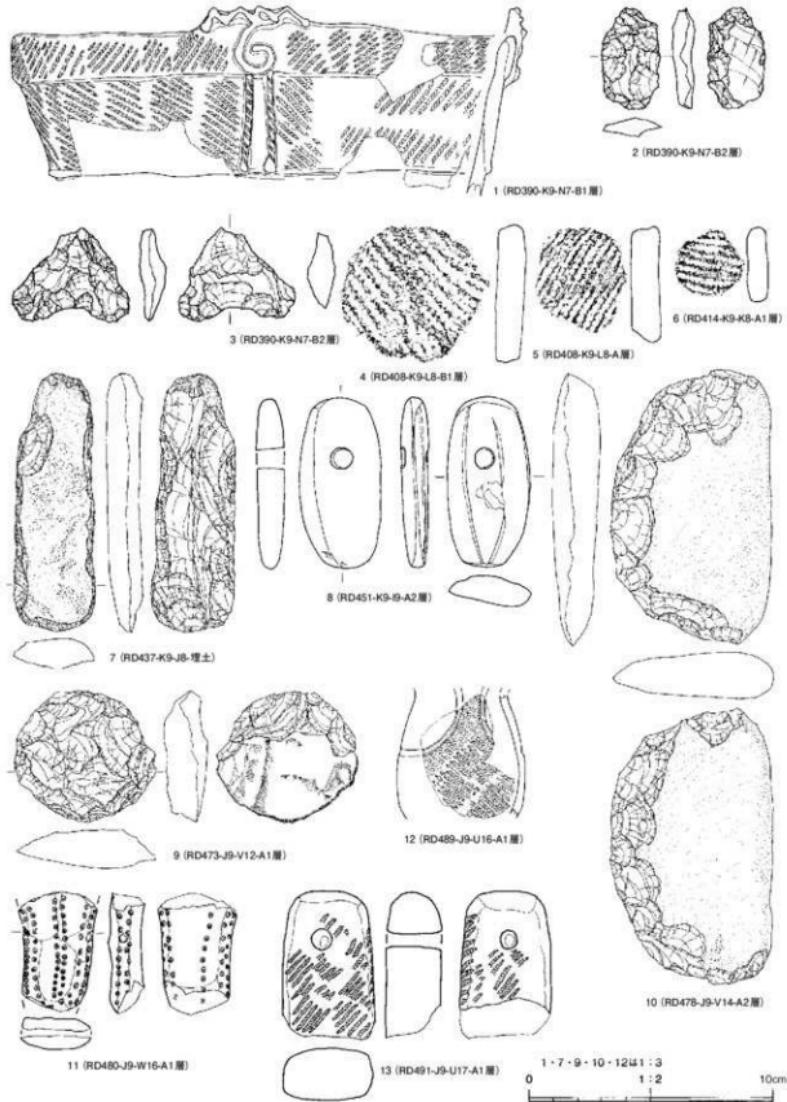
第 125 図 RA281 竪穴住居跡出土遺物 (9)



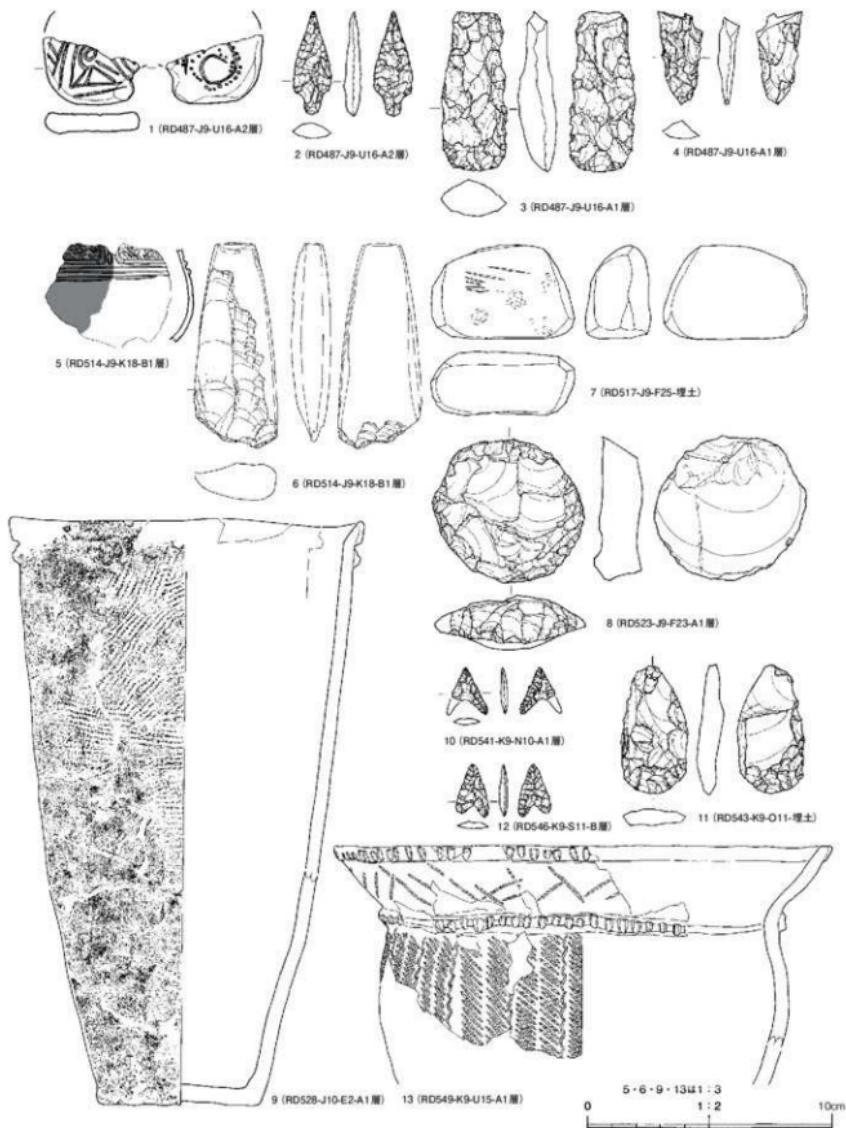
第126図 RD377・379・381・383・384・393・398・399・413土坑出土遺物



第127図 RD423土坑出土遺物



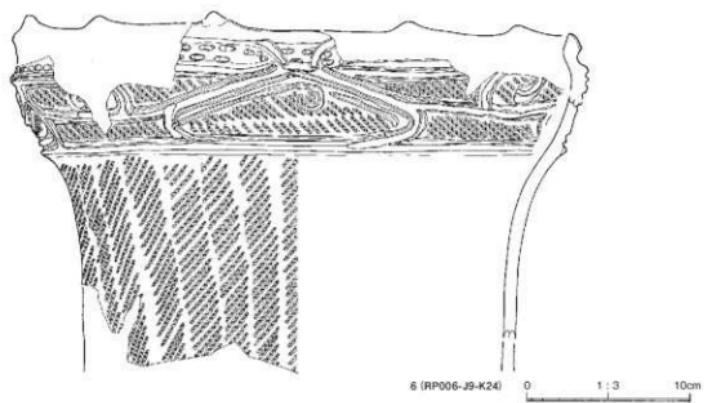
第128図 RD390・408・414・437・451・473・478・480・489・491 土坑出土遺物



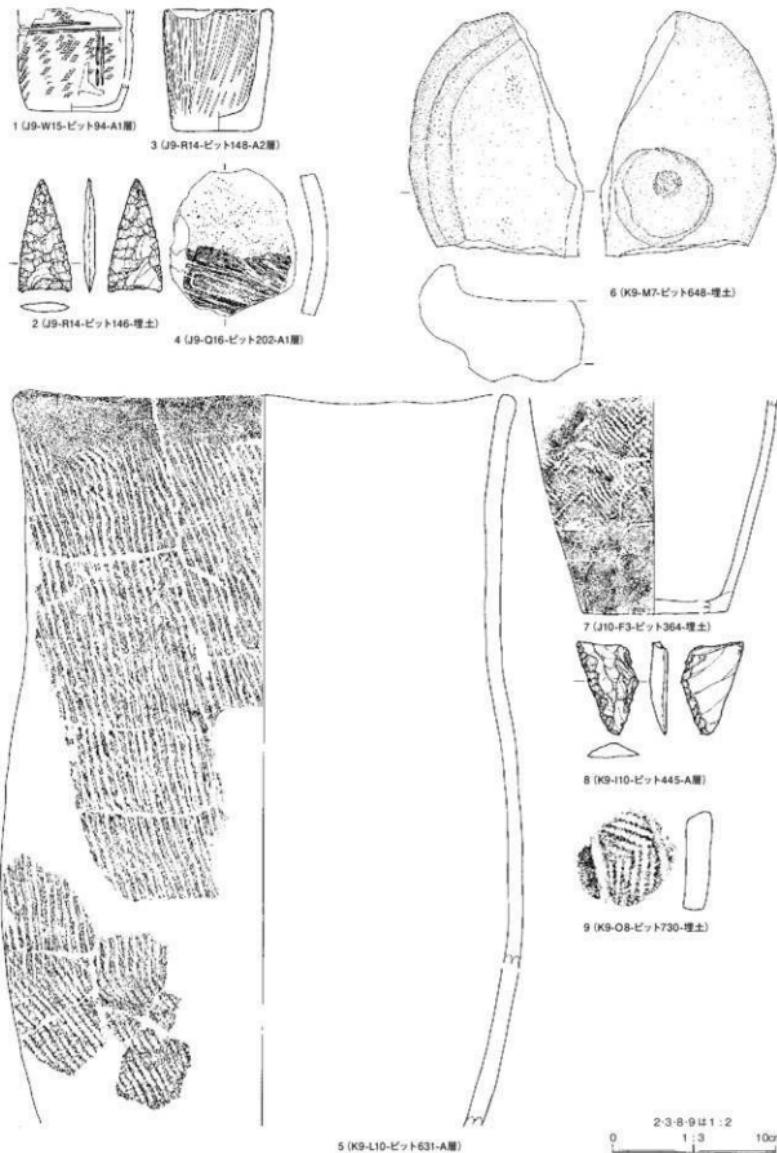
第129図 RD487・514・517・523・528・541・543・546・549土坑出土遺物



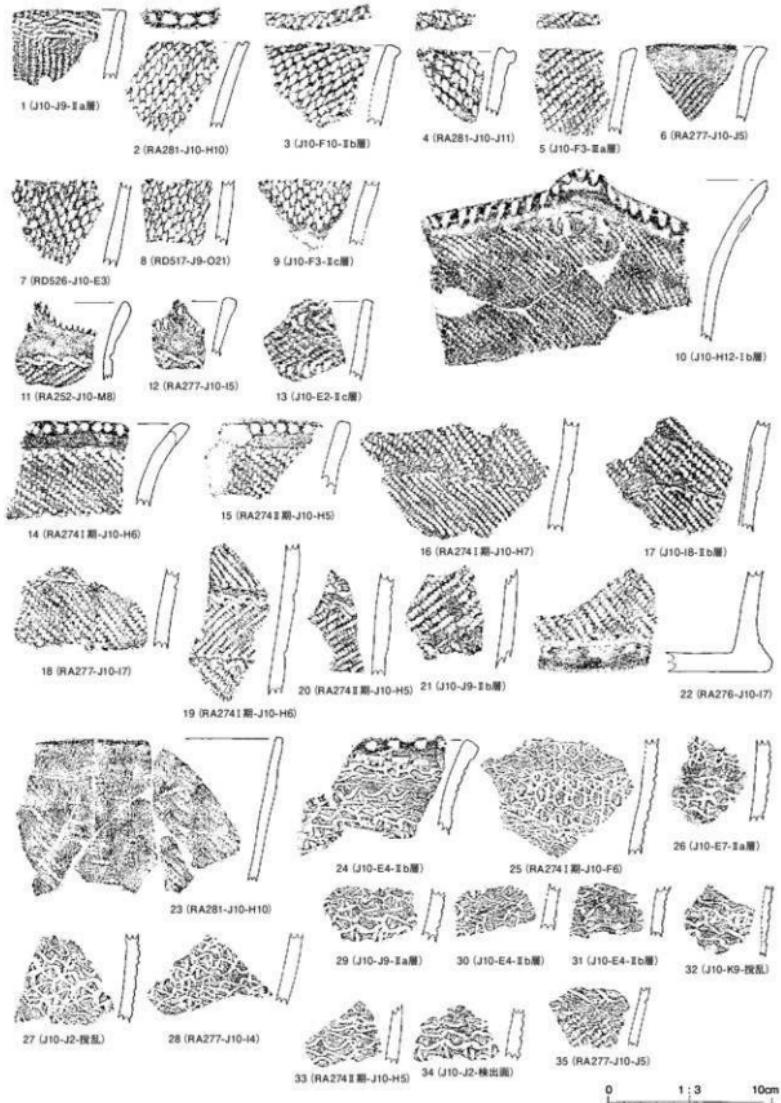
第130図 RP001～004埋設土器



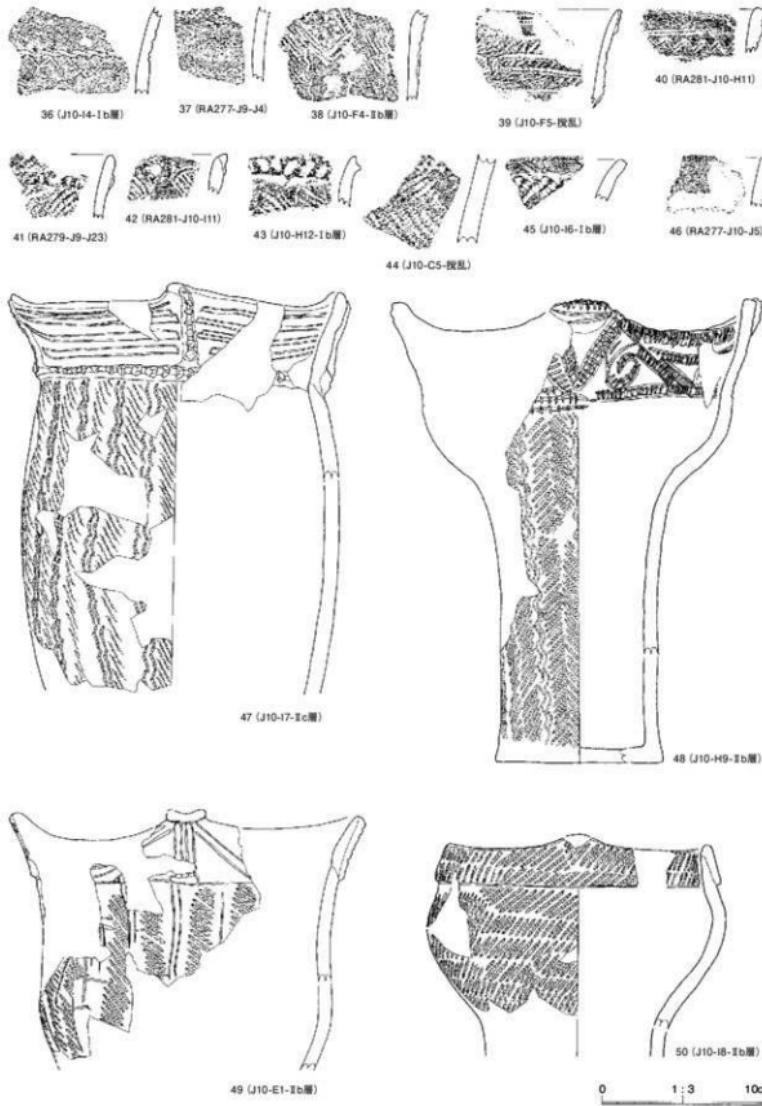
第 131 図 RP005 ~ 007 埋設土器



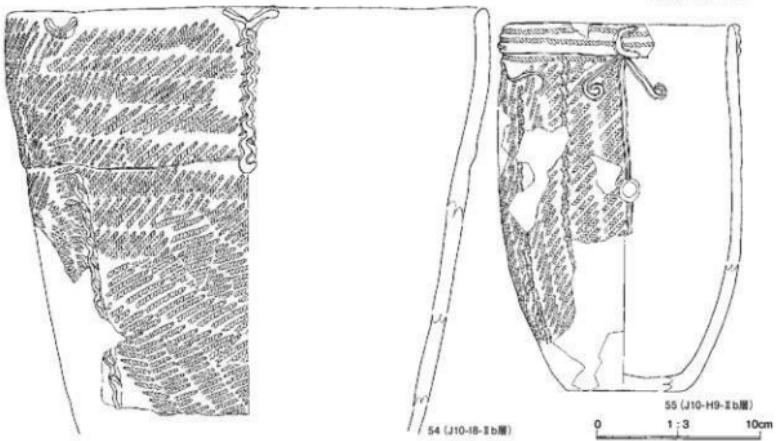
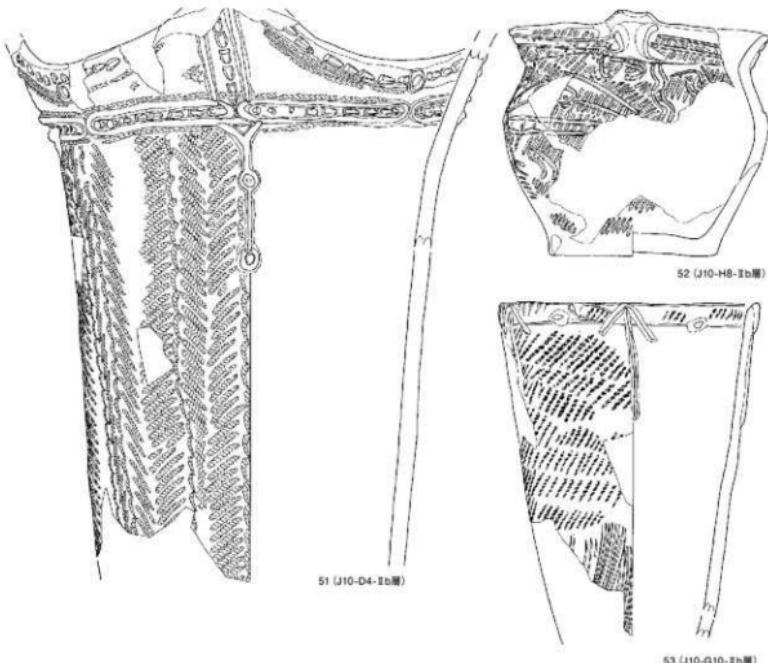
第132図 ピット出土遺物



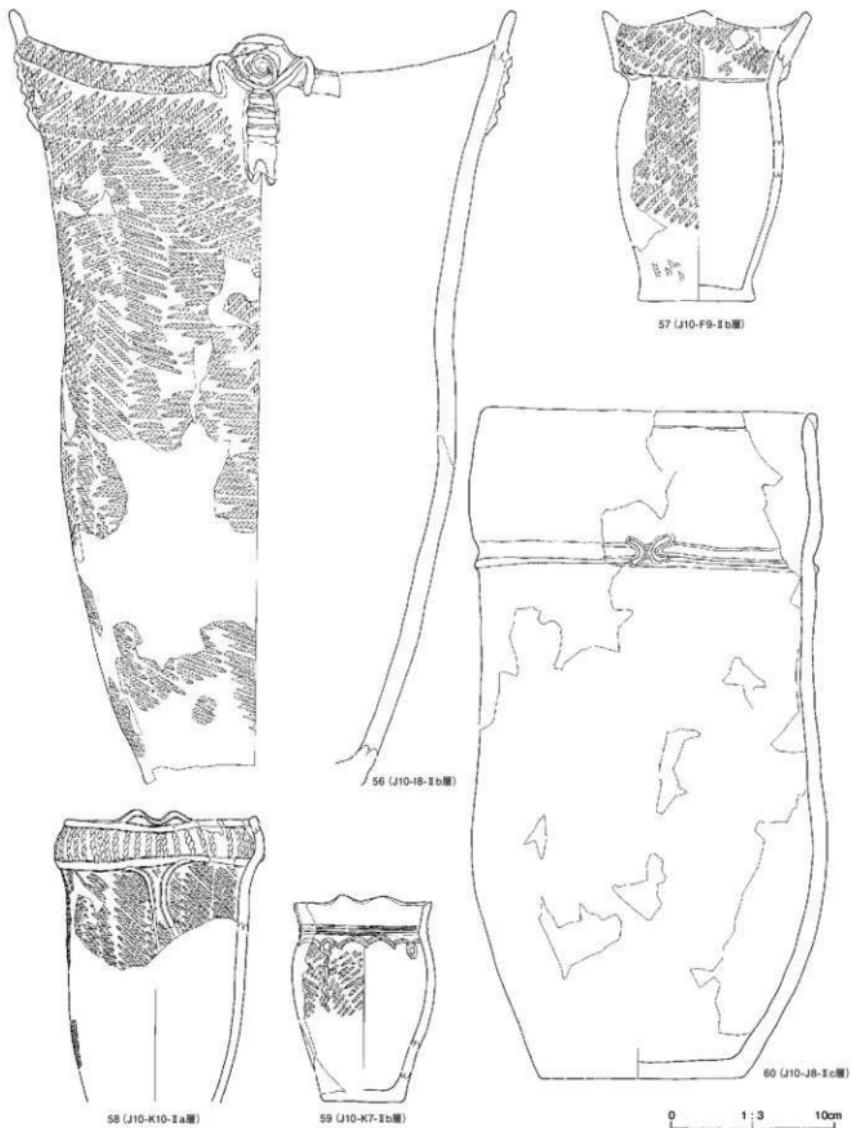
第133図 遺物包含層・遺構外出土遺物（1）



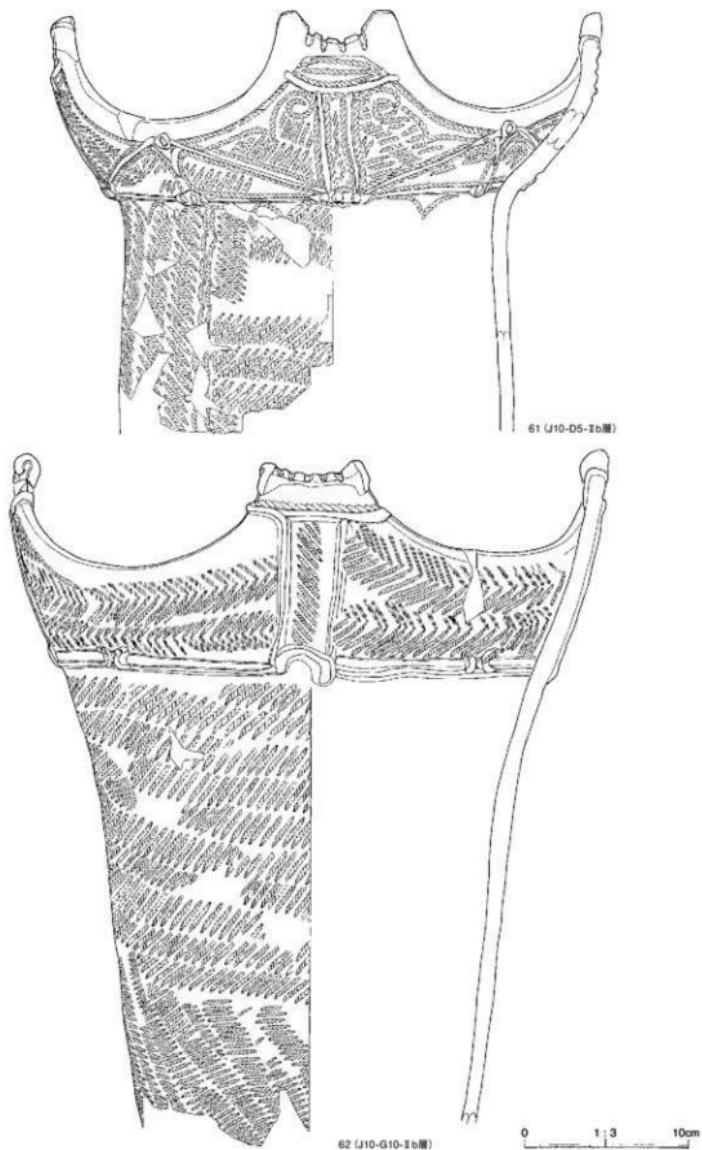
第134図 遺物包含層・遺構外出土遺物（2）



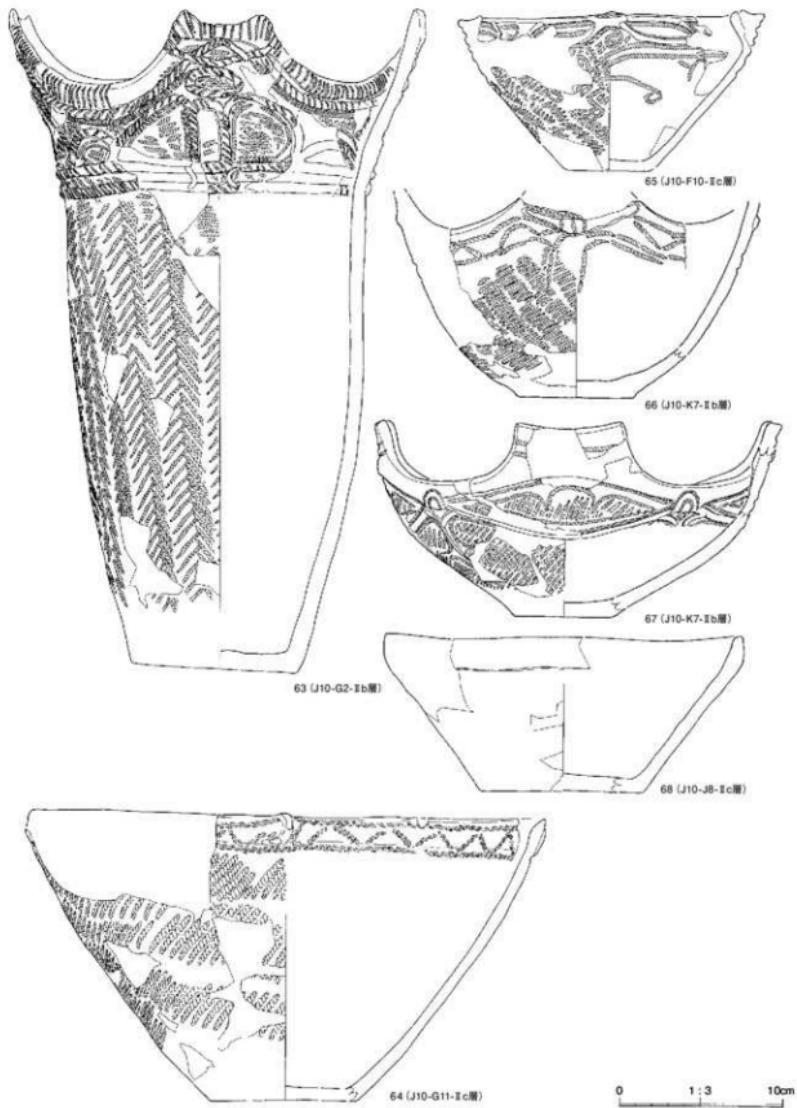
第135図 遺物包含層・遺構外出土遺物（3）



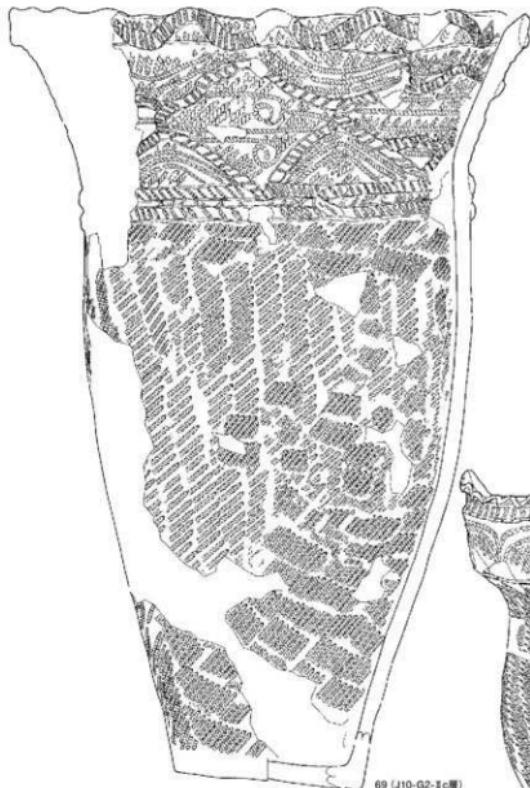
第136図 遺物包含層・遺構外出土遺物（4）



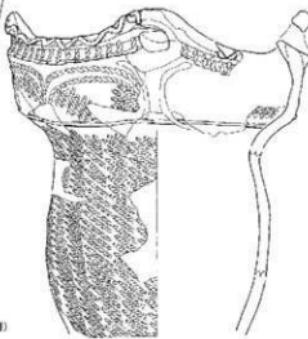
第137図 遺物包含層・遺構外出土遺物（5）



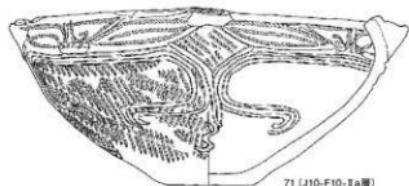
第138図 遺物包含層・遺構外出土遺物（6）



69 (J10-G2-IIc層)



70 (J10-C1-IIa層)



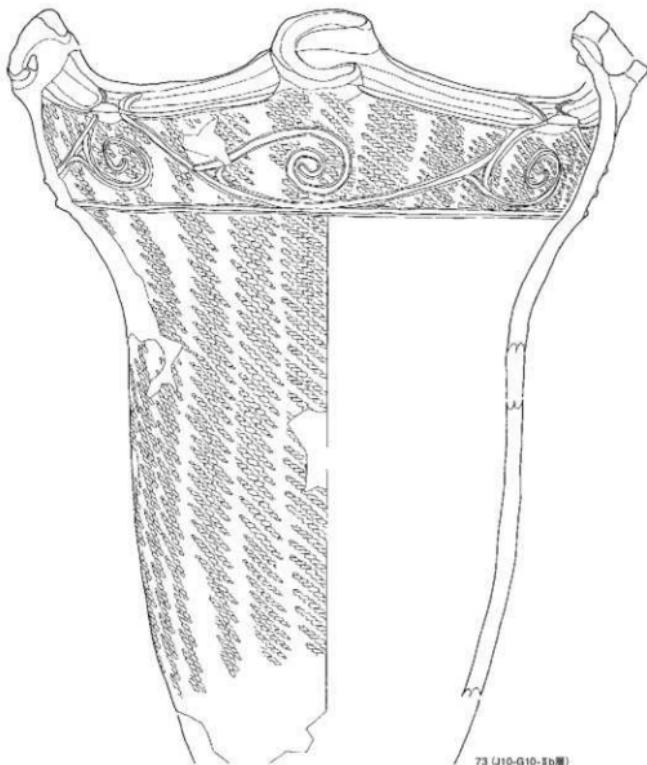
71 (J10-F10-IIa層)



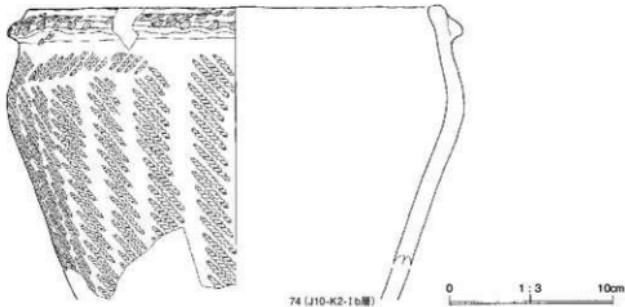
72 (J10-H9-IIb層)

0 1:3 10cm

第139図 遺物包含層・遺構外出土遺物（7）

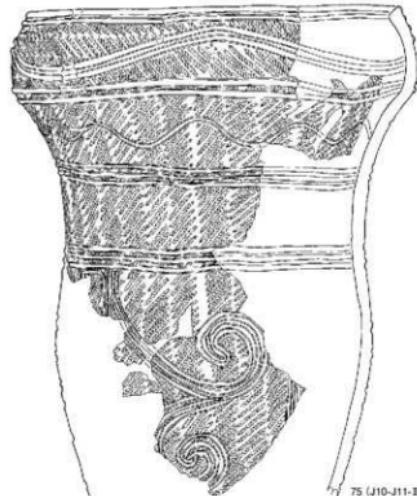


73 (J10-G10-3b面)

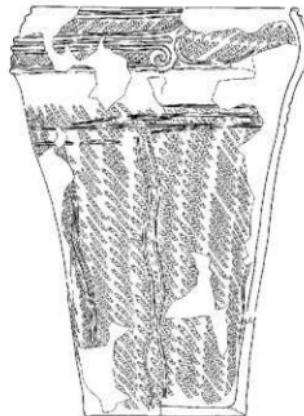


74 (J10-K2-1b面)

第 140 図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (8)



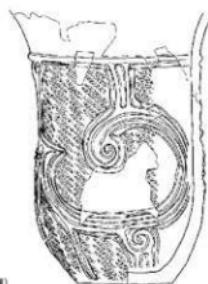
75 (J10-J11-IIa層)



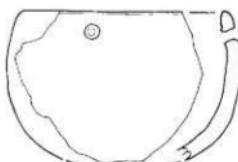
76 (J10-G2-Ib層)



77 (J10-J6-IIa層)



78 (J10-J6-IIb層)



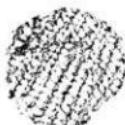
79 (J10-H12-IIb層)



80 (J9-X13-検出品)



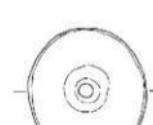
81 (J9-不明-表土)



82 (J10-I11-IIc層)



83 (J9-L21-検出品)



85 (J10-F10-IIa層)



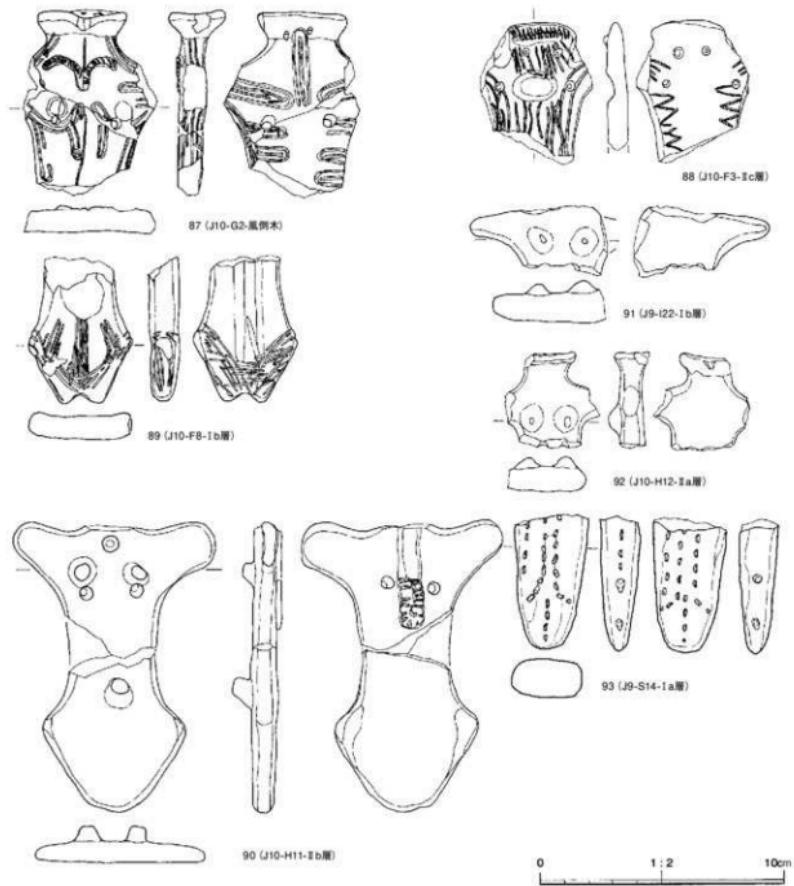
86 (J10-O18-IIa層)



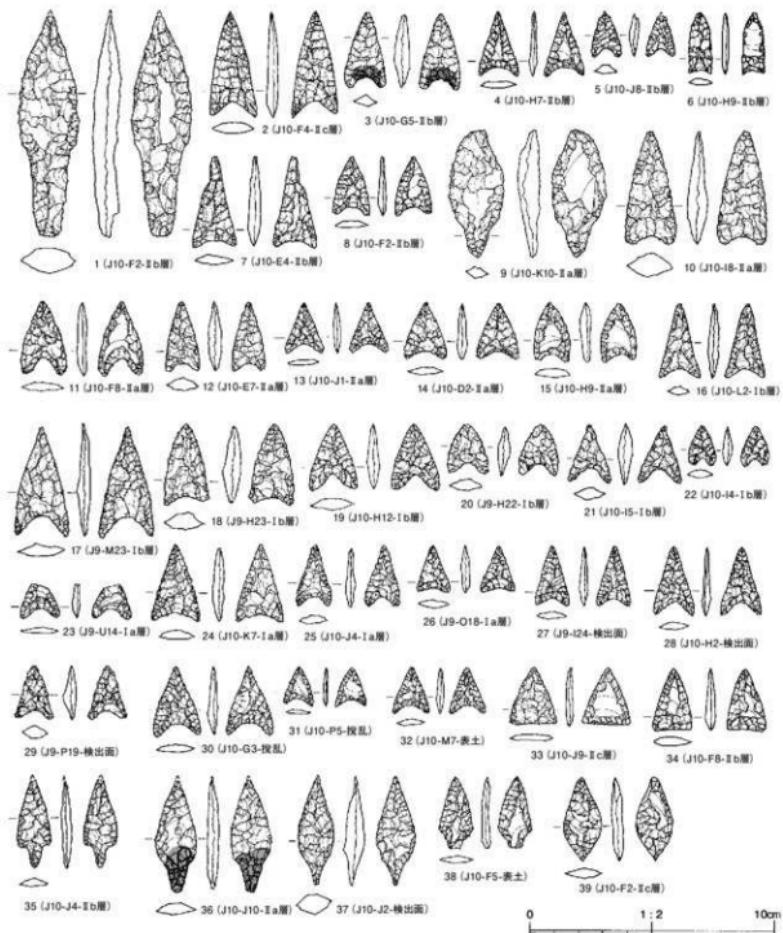
84 (J10-H8-IIb層)

75~78は 1:3  
1:2  
0 10cm

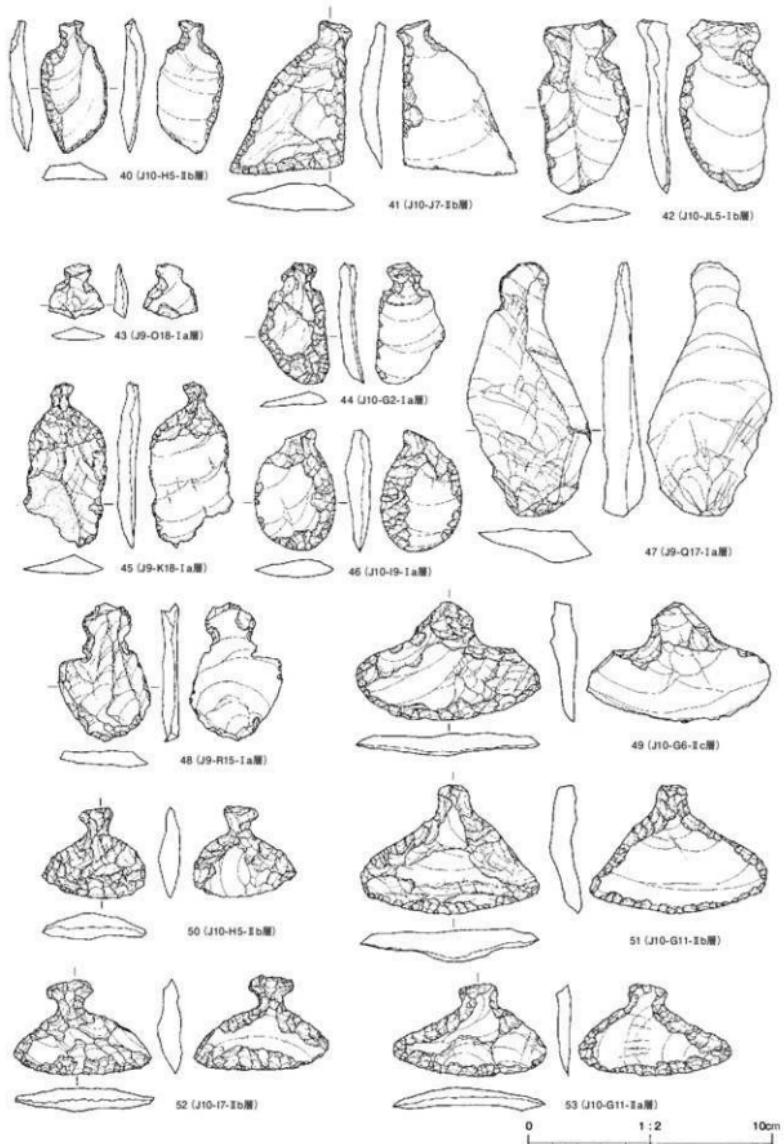
第 141 図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (9)



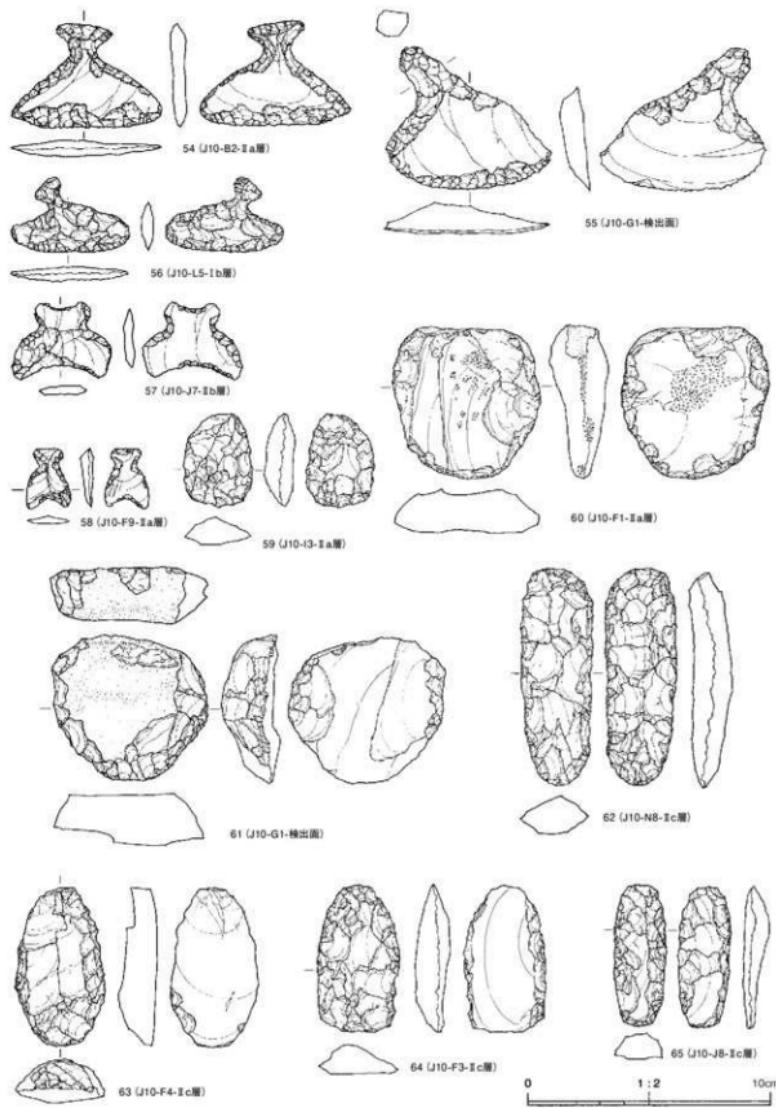
第142図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (10)



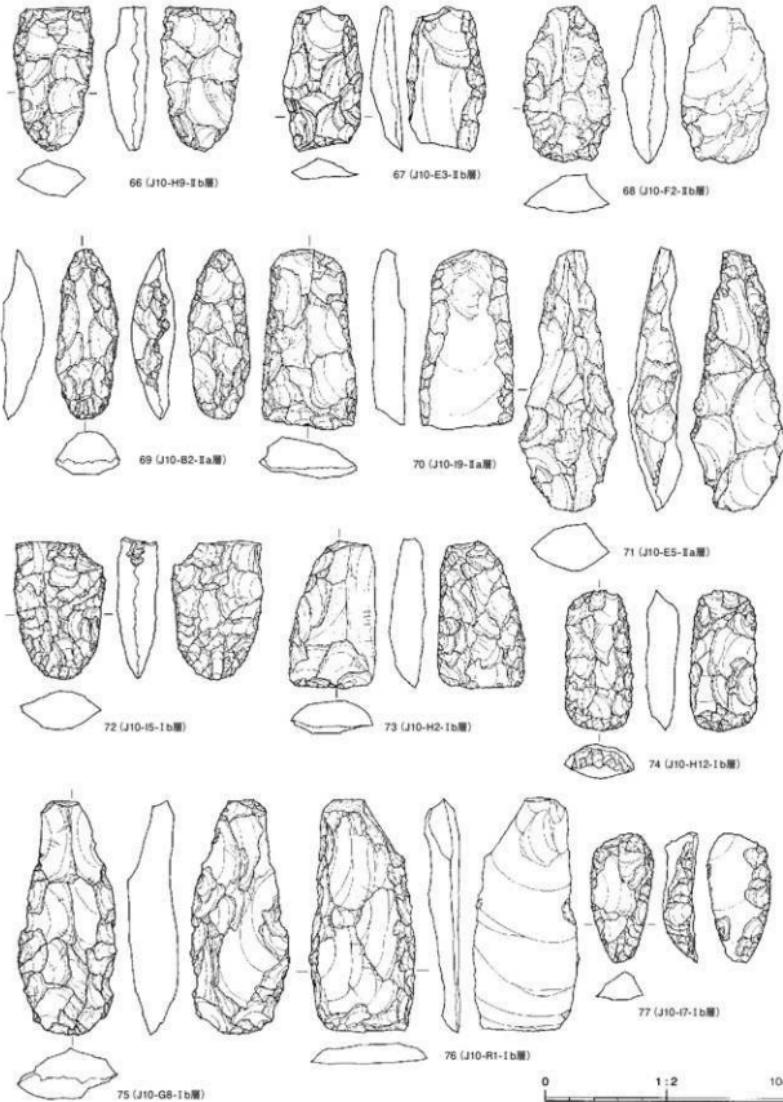
第143図 遺物包含層・遺構外出土遺物(11)



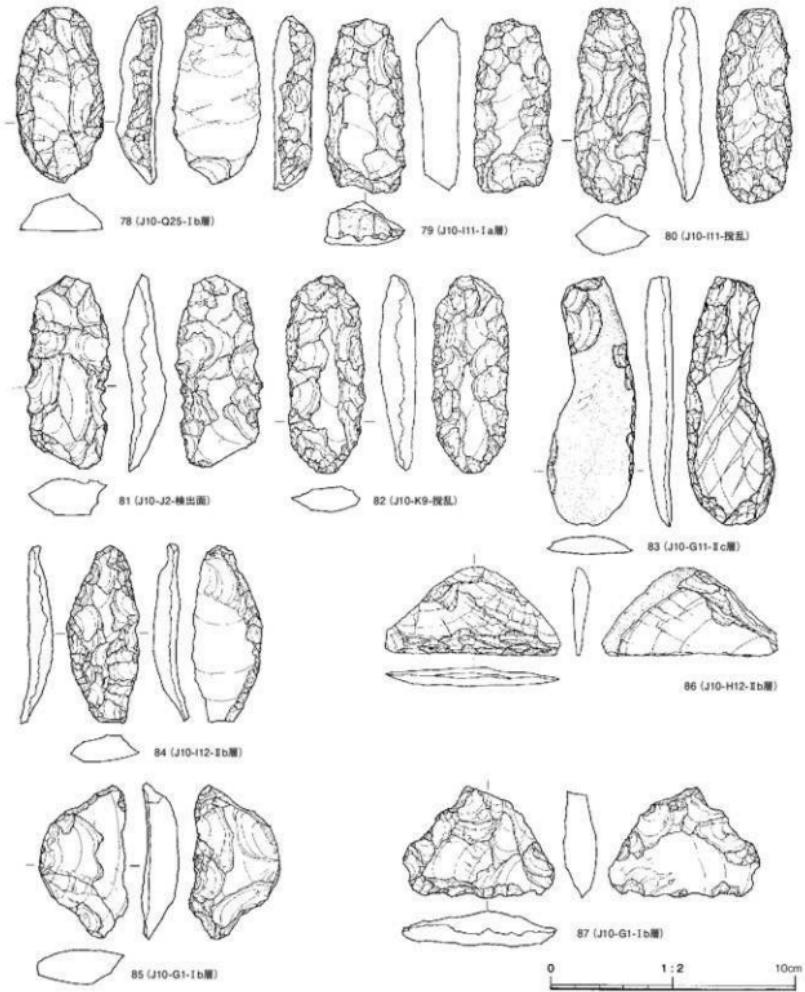
第144図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (12)



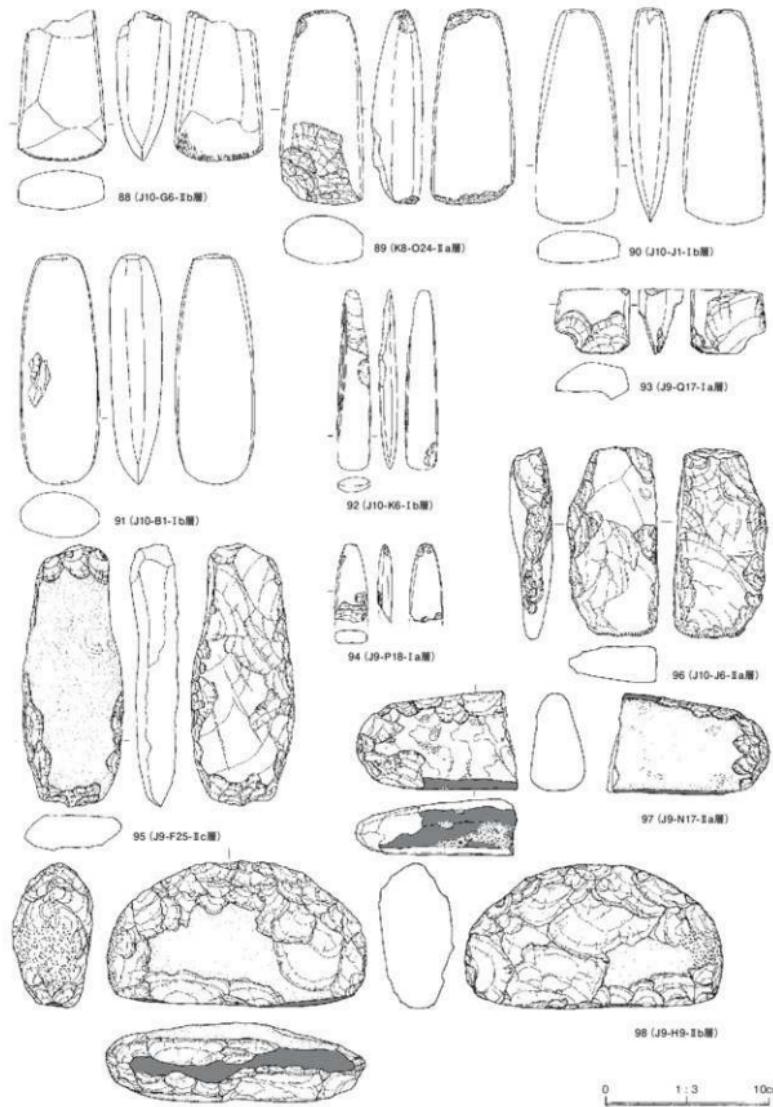
第145図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (13)



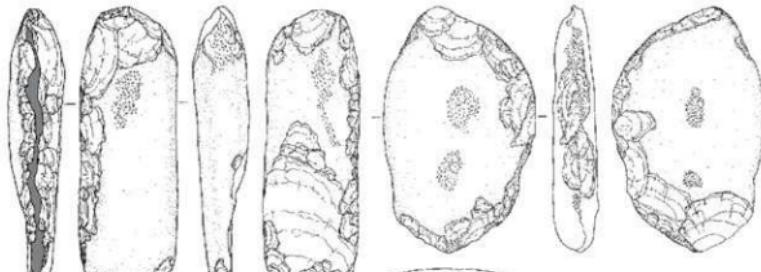
第146図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (14)



第147図 遺物包含層・遺構外出土遺物（15）

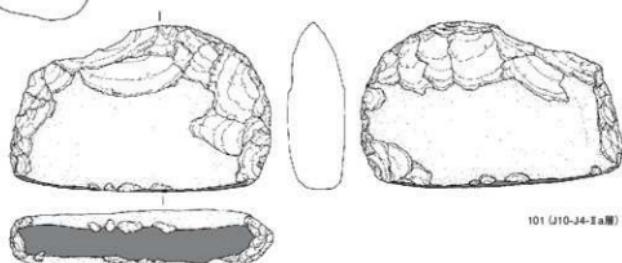


第148図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (16)

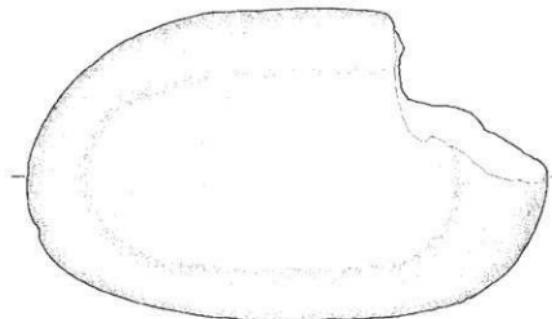


99 (J10-J9-IIb層)

100 (J10-HB-IIb層)



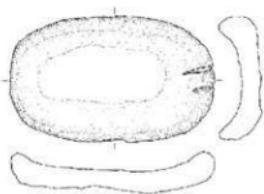
101 (J10-J4-IIa層)



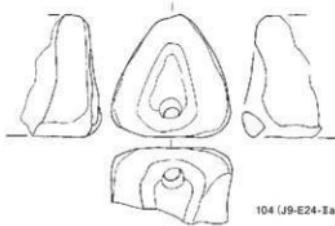
102 (J10-G10-IIb層)

102は1:4  
1:3  
10cm

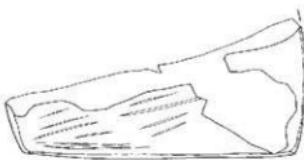
第149図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (17)



103 (J9-O24-Ib層)



104 (J9-E24-IIa層)



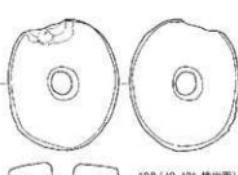
105 (J10-H2-IIa層)



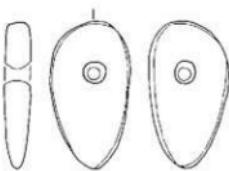
106 (J10-H12-IIb層)



107 (J9-H24-検出面)

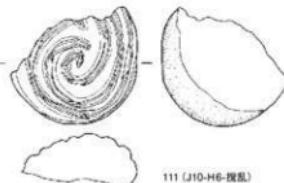


108 (J9-J21-検出面)

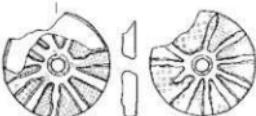


109 (K9-L8-複数)

110 (K9-I12-複数)



111 (J10-H6-複数)



112 (J10-N9-表土)



113 (J9-Q19-複数)

103-113は1:3  
0 1:2 10cm

第150図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (18)

# 写 真 図 版



繫V遺跡遠景（北から）



盛岡市立繫小学校全景（西から）

第2図版



第34次発掘調査区全景（北東から）



第36次発掘調査区遠景（西から）



第36次発掘調査区全景（南西から）



第36次発掘調査区南東部土層堆積状況

第4図版

RA 222 壺穴住居跡全景  
(東から)



RA 224 壺穴住居跡全景  
(東から)



RA 224 壺穴住居跡  
伏妻出土状況



RA 233 I期竪穴住居跡  
(北西から)



RA 233 I期竪穴住居跡  
伏甌出土状況 1



RA 233 I期竪穴住居跡  
伏甌出土状況 2

第6図版



R A 236 壁穴住居跡全景（北東から）



R A 236 壁穴住居跡 伏甌出土状況



R A 238 積穴住居跡（左）  
R A 246 積穴住居跡（右）全景  
(南西から)



R A 238 積穴住居跡検出段階  
遺物出土状況



R A 238 積穴住居跡床面  
石冠出土状況

第8図版



R A 244 積穴住居跡 全景（南東から）



R A 244 積穴住居跡 伏甌 1 出土状況



RA 252 整穴住居跡全景（南西から）



RA 252 整穴住居跡 石圓炉



RA 252 整穴住居跡 A層遺物出土状況

第10図版



R A 253 壁穴住居跡全景（南東から）



R A 253 壁穴住居跡 伏甌出土状況



R A 253 壁穴住居跡 複式炉



R A 259 壁穴住居跡全景（南東から）



R A 259 壁穴住居跡 伏甃出土状況

第12図版

R A 265 壁穴住居跡全景  
(東から)



R A 265 壁穴住居跡  
複式炉



R A 269 I期・II期壁穴住居跡  
全景 (北西から)





RA 274 I期・II期、RA 277 壁穴住居跡全景（北東から）



RA 274 I期・II期壁穴住居跡全景（北西から）

第 14 圖版

RA 274 I 期整穴住居跡  
土層堆積狀況



RA 274 I 期整穴住居跡  
B 層遺物出土狀況



RA 274 II 期整穴住居跡  
石棒埋設狀況





R A 277 壁穴住居跡及び周辺部遺構検出状況（西から）



R A 277 壁穴住居跡全景（北東から）

第 16 図版



R A 281 壺穴住居跡全景（北西から）



R A 281 壺穴住居跡土層堆積状況



R A 281 壺穴住居跡検出状況



R A 281 壺穴住居跡検出段階遺物出土状況



第 17 図版 土器展開写真

RA 235 壁穴住居跡出土伏櫪

RA 236 壁穴住居跡出土伏櫪

第 18 図版



R A 224 竪穴住居跡伏甕 1



R A 233 I 期竪穴住居跡伏甕



R A 224 竪穴住居跡伏甕 2



伏甕底部



R A 224 竪穴住居跡伏甕 3



R A 263 竪穴住居跡伏甕



R A 244 穫穴住居跡伏甕 1



R A 244 穫穴住居跡伏甕 2



伏甕 1 底部



伏甕 2 底部



R A 244 穫穴住居跡伏甕 3

第 20 図版



RA 258 II 期竪穴住居跡伏甕 1



RA 258 II 期竪穴住居跡伏甕 2



伏甕 1 底部



RA 259 竪穴住居跡伏甕 1



RA 259 竪穴住居跡伏甕 2



伏甕 2 底部



RA 223 壺穴住居跡



RA 233 I期 壺穴住居跡



RA 234 壺穴住居跡



RA 235 壺穴住居跡



RA 236 壺穴住居跡



RA 252 壺穴住居跡 (1)



RA 252 壺穴住居跡 (2)



RA 252 壺穴住居跡 (4)



RA 252 壺穴住居跡 (3)



第 22 図版



RA 258 II 期竪穴住居跡



RA 261 竪穴住居跡



RA 262 竪穴住居跡



RA 265 竪穴住居跡



RA 269 II 期竪穴住居跡



RA 274 I 期竪穴住居跡 (1)



RA 274 I 期竪穴住居跡 (2)



RA 281 竪穴住居跡 (1)



RA 281 竪穴住居跡 (2)



RA 281 竪穴住居跡 (3)

第 23 図版



第 36 次発掘調査区出土土偶



第 36 次発掘調査区出土土製品 (1)

第 36 次発掘調査区出土土製品 (2)



第 34 次発掘調査区出土垂飾品

第 36 次発掘調査区出土蛇紋岩製磨製石斧

第24圖版



RA 222 壓穴住居跡



RA 223 壓穴住居跡



RA 233 I期壓穴住居跡伏龜內



RA 238 壓穴住居跡



RA 246 壓穴住居跡



RA 253 壓穴住居跡(1)



RA 253 壓穴住居跡(2)



RA 281 壓穴住居跡



遺物包含層(1)



遺物包含層(2)



遺物包含層(3)



遺物包含層(4)

報告書抄録

ふりがな	つなぎごいせき							
書名	繁V遺跡							
副書名	繁小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	佐々木紀子、神原雄一郎							
編集機関	盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行年月日	2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
繁V遺跡 第29・33・34・ 36・37次	岩手県盛岡市 繁字館市 114 番地 1	0321		39° 40° 16°	141° 01° 19°	第29次 2004.09.07～  第33次 2006.10.02～ 2006.10.31  第34次 2007.09.18～ 2007.11.30  第36次 2008.10.01～ 2009.12.24  第37次 2010.07.05～ 2010.07.13	3,896 m <sup>2</sup>	学校増改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
繁V遺跡	集落遺跡	繩文時代中期	堅穴住居跡	70棟	繩文時代中期の 土器・石器ほか	伏堀 16個体出土		
			堅穴跡	3棟				
			土坑	173基				
			ピット	735口				

---

## 繁 V 遺 跡

—繁小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査報告書—

2013年3月29日発行

発行 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館  
〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1  
電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605

印刷 株式会社 橋本印刷  
〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通 15 - 29  
電話 019-652-1354 Fax 019-652-1355

---